

茨城県新治郡

霞ヶ浦町遺跡分布調査報告書

— 遺跡地図編 —

2001

霞ヶ浦町教育委員会

筑波大学考古学研究室

茨城県新治郡

霞ヶ浦町遺跡分布調査報告書

— 遺跡地図編 —



2001

霞ヶ浦町教育委員会

筑波大学考古学研究室

例　　言

1. 本書は、霞ヶ浦町教育委員会の委託を受けた町遺跡調査会が筑波大学考古学研究室に調査依頼し1998・1999年度に実施した遺跡分布調査報告書－遺跡地図編－である。
2. 遺跡分布調査は1998年7月から2000年3月にかけて7次にわたり実施し、整理作業及び報告書作成は引き続き2001年3月まで行なった。
3. 調査・報告の対象としたのは、先土器時代から近世までの遺跡である。
4. 調査で探集した遺物は、遺跡分布調査報告書－遺物編－刊行後に霞ヶ浦町郷土資料館が保管する。
5. 本書の執筆は、筑波大学歴史・人類学系教授川西宏幸の指導のもと以下の分担で行なった。第1部 桃崎祐輔、第2部 桃崎祐輔、第3部Ⅰ 川口武彦、Ⅱ 川口武彦、Ⅲ 赤坂亨・齊藤瑞穂、Ⅳ 日高慎、V 清野陽一、VI 桃崎祐輔、VII 桃崎祐輔、第5部 霧美賢吾。
6. 第4部遺跡地図は1:10000都市計画図、付図は1:25000霞ヶ浦町全図を使用した。
7. 調査にあたり、下記の方々・諸機関に御協力・御助言を頂いた。記して、謝意を表する次第である(五十音順、敬称略)。

有村誠、飯田定直、飯田幹男、伊藤宏之、福生嘉穂、今宮邦、圓城寺正道、大嶋美和子、大森隆志、川鶴栄、窪田恵一、黒沢春彦、小玉秀成、坂勝、椎名晃一郎、須賀博子、鈴木安之、関口満、関根孝夫、高田邦松、田中新史、田中裕、中島文雄、中田和夫、西野元、長谷川敦章、蘿井聰、本田信之、松沢喜昭、峰村篤、茂木雅博、前田修、宮本武、矢野紗智子、山本隆志、吉澤悟、霞ヶ浦町の皆さん、霞ヶ浦町農村環境改善センター、呆泰寺、松学寺、宝蔵寺、常陽リビング社
8. 整理作業に際しては、次頁に掲げた霞ヶ浦町遺跡分布調査原票を用いた。
9. 町遺跡調査会の組織および参加者一覧は巻末に示した。

霞ヶ浦町遺跡分布調査原票	
1. 名 称	
2. 所 在 地	茨城県新治郡霞ヶ浦町 小字 南地
3. 種 別	
4. 形 状 標	
5. 保 存 状 況	完存。一部破壊。半壊。既び破壊。消滅
6. 立 地	丘陵(平野部、台地)、急斜面、森林带、河岸地、低湿地 その他()・標高 ~ m
7. 土地利用状況	山林、農地、林、水田、宅地、工場、公園、学校、寺社、その他()
8. 掘出遺構	
9. 掘出遺物 土器型式	
10. 時代・時期	

11. 調 査 要 求	調査時期	調査目的	調査者	備 考
12. 文 獻				
13. 保管者名	保管者			
14. 指定状況	国指定、県指定、町指定、区分(), 未指定 指定年月日			
15. 障害所見				
16. 地 標 者 住 所				
17. 地 区 都市計画図 扶助団				
18. 備 考				
調査年月日	調査者名			

(地図)

(遺跡所見)

(遺跡所見・写真説明)

(写真)

目 次

例言

第1部 町域概観	1
第2部 調査の経緯と遺跡の概観	8
第3部 時代別遺跡概観	15
I. 先土器時代	16
II. 縄文時代	20
III. 弥生時代	38
IV. 古墳時代	46
V. 奈良・平安時代	60
VI. 中世(平安時代末～安土・桃山時代)	71
VII. 近世(江戸時代)	85
第4部 遺跡一覧表	99
第5部 遺跡地図	114
霞ヶ浦町調査組織	
参加者一覧	

挿図目次

第1図 霞ヶ浦町の位置	1
第2図 霞ヶ浦沿岸の地形	2
第3図 合併前の旧6ヶ村	4
第4図 先土器時代の遺跡と水源	17
第5図 縄文時代の遺跡	22
第6図 縄文時代早期の遺跡	22
第7図 縄文時代前期の遺跡	24
第8図 縄文時代中期の遺跡	24
第9図 縄文時代後期の遺跡	26
第10図 縄文時代晚期の遺跡	26
第11図 弥生時代の遺跡	38
第12図 弥生時代中期の遺跡	40
第13図 弥生時代後期の遺跡	40
第14図 古墳時代の遺跡	47
第15図 古墳時代前期の遺跡	48
第16図 古墳時代中期の遺跡	48

第17図 古墳時代後期の遺跡	50
第18図 古墳時代の首長支配領域	52
第19図 奈良・平安時代の遺跡	61
第20図 施釉陶器と墨書・刻書き土器と陶硯の採集された遺跡	62
第21図 奈良・平安時代の領域想定図	65
第22図 中世の遺跡	72
第23図 出島半島周辺の埋蔵鉄●と『常陸国富賀入等注文』(1435)の比定地△	81
第24図 近世の遺跡	86
第25図 出島半島周辺における霞ヶ浦四十八津抜書記載の津△	88

表 目 次

第1表 霞ヶ浦町域沿革	1
第2表 霞ヶ浦町域における登録遺跡数の推移	11
第3表 先土器時代遺跡の立地と方位の相関	16
第4表 先土器時代遺跡一覧	18
第5表 縄文時代遺跡数の変遷	28
第6表 縄文時代中・後期における貝塚遺跡と隣接包蔵地の時期的関係	29
第7表 縄文時代遺跡一覧	33
第8表 弥生時代遺跡一覧	44
第9表 主要古墳一覧	51
第10表 首長墓と大規模遺跡の消長	53
第11表 古墳時代遺跡一覧	57
第12表 奈良・平安時代遺跡一覧	68
第13表 中世遺跡一覧(包蔵地・集落跡)	83
第14表 中世遺跡一覧(塚ほか)	84
第15表 中世遺跡一覧(城館跡・居館跡)	84
第16表 中世遺跡一覧(寺院・寺院跡)	84
第17表 中世遺跡一覧(土塁・堀)	84
第18表 近世遺跡一覧(包蔵地・集落跡)	94
第19表 近世遺跡一覧(塚ほか)	97
第20表 近世遺跡一覧(シシ七手)	97
第21表 近世遺跡一覧(寺院・寺院跡)	98
第22表 近世遺跡一覧(居館跡・土塁・堀)	98

第1部 町域概観

I. 地理的環境

1. 露ヶ浦の概要

露ヶ浦町の町名ともなっている露ヶ浦は、茨城県南部から千葉県北部にまたがる広大な湖で、露ヶ浦(以下の露ヶ浦は西浦を指す)、北浦および外浪逆浦からなるが、古くは印旛沼や手賀沼なども包括する巨大な内海であった。現在の面積は167.6km²、砂利採取域を除く最大水深7.3m、平均水深3.4m、周囲長138kmで、列島第2位の広さを誇る。北浦と外浪逆浦も浅い淡水湖で、面積はそれぞれ35.2km²、および5.9km²である。平均湖水面標高はT.P. 0.16m、茨城県南を主要な流域(1426km²)としている。流入河川は少なくとも26を数え、主なものは、園部川、恋瀬川、天の川、桜川、清明川、小野川、花室川などで、露ヶ浦町では菱木川、一ノ瀬川、川尻川の3河川が代表である。

これらの湖沼は、利根川の逆流を防止して洪水時の水位の低下をはかるとともに、湯水時の塩水進入を阻止するために、昭和38年に調柵・利根川を結ぶ常陸利根川の河口に水門が設けられ、外洋水塊は完全に遮断されている。なお湖域の済入部は、高浜入、土浦入、江戸崎入(大山入)などと呼ばれ、露ヶ浦町の位置する出島半島は、北の高浜入と南の土浦入に挟まれた要衝である。

2. 露ヶ浦町の位置(図1)と地形(図2)

新治郡露ヶ浦町は、露ヶ浦の西北部に突出する出島半島に位置し、面積110.80km²、人口18983人(2001調)。旧村名である通称「出島」は三方が露ヶ浦の水面に囲まれていることに由来し、概して気候は温湿であり、中央台地の一部を除けば湧水にも恵まれている。こうした環境にあって、古くから農業・漁業を中心とした生業が営まれてきた。

この半島は、行政区画からすると露ヶ浦町が約8割を占め、北が石岡市、西が新治郡千代田町・土浦市と接し4市町村で構成される。地形的にはほぼ東流して露ヶ浦に注ぐ、菱木川・一ノ瀬川の2河川によって形成される沖積低地が新治台地の東端を3条に分割するかたちとなっている。これら台地は、いずれも標高25~27mで高低の差が少なく平坦で畑・果樹園・山林として利用されているが、辺縁部には無数の小浸食谷があり組み、いわば樹枝状ともいえる複雑な地形を呈し、谷奥に湧水点を抱える懐の深い谷津が独特の景観を作り出している。半島の東・南・北岸は露ヶ浦に面する広大な低地であり水田となっているほか、土浦入りである南岸地帯は全国でも有数の蓮根の産地として知られている。また、地質は東西において若干の違いはあるものの、洪積層は下位

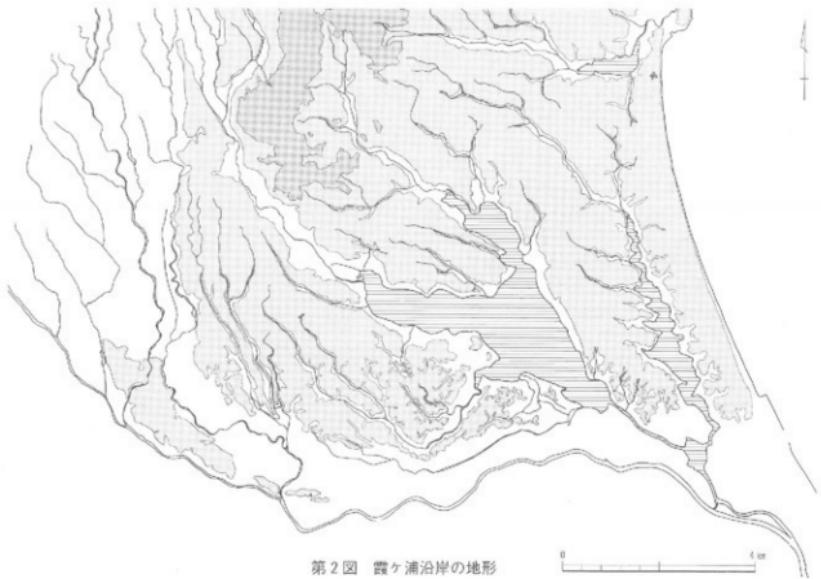


第1図 露ヶ浦町の位置

より鉢田層、成田層、龍ヶ崎砂礫層、常締粘土層、関東ローム層、表土が順次堆積している。基盤となる鉢田層は、裸まじりの砂および貝殻まじりの砂質シルトまたはシルトが主体をなす。成田層は、青灰色を呈するシルトと細・中砂粒からなり、その上に古東京湾海退砂質である龍ヶ崎砂礫層(赤褐色の砂・礫及び粘土)となる。常締粘土層は、灰色あるいは灰白色の凝灰質の粘土層であり、柏崎・田伏・深谷などに露頭があり、古くから須恵器や瓦、荒物や土鍾などの窯業原料として用いられてきた。関東ローム層は下部の武藏野ロームと上部の立川ロームからなる風成堆積層で赤褐色を呈する。

北部の台地は、南は菱木川と流域の低地帯に接し、北は露ヶ浦の高浜入(古くは高浜の海)を沿岸としている。台地上には穴倉・安食の地区があり、集落が県道「石岡・田伏・土浦線」に沿って広がっているこの台地の先端にある富士見坂古墳群第1号墳の後円墳頭は露ヶ浦町の中で最高点で標高35mを測り、眺望もよく対岸の玉里・行方地内を望むことができる。水上交通の面では、高浜入(高浜の海)、行方の海、西浦(佐我の流海)の接点を望む位置にあり、中世には「柏崎の津」があった。

中部の台地は、菱木川南岸の低地から一ノ瀬川岸の低地に挟まれた範囲で、上轟郷・下轟郷・西成井と呼ばれる地域である。南を画す一ノ瀬川流域は町域内でも最も広い沖積地を形成し、その多くは水田化されている。



第2図 霞ヶ浦沿岸の地形

また一ノ瀬川本流と支流に挟まれた深谷の地域は、現在町の行政・商業の一中心となっているが、地形的には低地中に孤立した島状の台地をなしている。

半島の先端にある東部、川尻川河口と一ノ瀬川河口に挟まれた坂・田伏地区は更に細長い谷底で幾つかに分かれているが、台地の大部分を占める霞ヶ浦出島ゴルフ場によって旧況は失われている。歩崎周辺は台地の先端が湖岸に臨む砂質の急崖をなし、行方・稻敷の台地や広大な霞ヶ浦への眺望が開けている。

南部の台地は、一ノ瀬川支流域南岸の台地を北縁とし、土浦入沿岸を南縁とする。土浦市域の田村・沖宿から戸崎地区までが一連の台地で、川尻川の低地帯をかかえこむようにして東の加茂・牛渡地区に及び、台地上の幹線道路に沿って集落が展開する。平坦な台地を無数の谷津が縦取り、内陸部の眺望は閉塞しているが、南岸に面した高台からは土浦入を挟んで種穀城の台地をはっきり視認することができる。一ノ瀬川支流域の台地縁や微高地は果樹園や畠地、低地は水田となっているのに対し、土浦入沿岸の低地は、水田の多くが運田に転換されている。現在小さな漁港として運田の中に残る十余の舟入りは、中近世における津の名残りをわざわざとどめている。

3. 霞ヶ浦町域の沿革

霞ヶ浦町域は、古代においては、常陸國の中枢を担った茨城郡の領域に属し、『和(倭)名類聚抄』に見える安

鶴郷(石岡市域の石川・井関・天神・金川・宍倉・安食、上絆郷、下絆郷、成井・柏崎に比定)、佐賀郡(岩坪・田伏・坂・有河・大和田・男神・中台・牛渡に比定)、大津郷(土浦市域の菅谷・田村・沖宿・上大堤・下大堤・三ツ木・南根本・深谷・加茂・戸崎に比定)の三郷(以上の比定は『新編常陸国誌』に基づく)に及んでいる。『常陸國風土記』には「佐我の流海」として霞ヶ浦が見えることから、出島と玉造に挟まれた水城は、国府への水路として古くから重視されていたと考えられる。

古代末から中世にかけては、桜川北岸の筑波山麓から出島半島の全域が南野牧の領域となり、常陸平氏の勢力下にあったと考えられるが、小田氏とその家臣團の勢力下に入った鎌倉・室町にかけては南野庄と呼ばれるようになった。16世紀後半には小田氏の後退の中で佐竹氏の勢力が及ぶようになり、文禄四年(1596)の中務大輔當知行目録によれば、志・倉・おかミ・大わた・かし崎・あんぢき・いわつは・さか・田ふせなど町域の大部分が佐竹一族の東義久の知行地となっている(佐竹義秀文書)。桃山時代には豊臣秀吉による検地が全国的に実施され、庄・保・郷が廢止されて現在の大字が断たな村として設定された。その結果出島には二十余の村が成立した。佐竹氏の転封(1602)後は、北半(宍倉・上絆郷・安食・柏崎・田伏・三ツ木)が水戸藩領に、南半(深谷・成井・下絆郷・坂・岩坪・加茂・戸崎)が土浦藩領に分割され、その他は天領や旗本領となり、男神村・新岩坪村が幕府

第1表 露ヶ浦町域沿革

領、上大堤村・大和田村・牛渡村が旗本知行地、下大堤村・根本村が惣奉行と旗本の相給で支配体制の異なる村落が複雑に入り組むこととなった。

「天保郷帳」に見える当村域の村々は、加茂・戸崎・深谷・上大堤・下大堤・三ツ木・根本(南根本)・人和田・男神・中合・半渡・有河・穴倉・成井・上難部・田伏・坂・安食・柏崎・岩坪・下難部の21ヶ村を数え、明治22年まで存続することとなった。

慶応四年(1868)幕府の大政奉還と明治維新に続き、明治2年(1869)に版籍奉還が行われた。旧天領・旧旗本領が常陸県知事の管轄を経て明治2年若森県となった。3年には支配地の遠近統廃合により当村町は土浦藩領と水戸藩領となる。明治4年7月に鹿島藩置県が実施され、土浦藩・水戸藩はそれぞれ土浦県・水戸県となり、町域は3県にまたがることとなつたが別例11月岡山は新治県に統合され、明治8年の統合によって茨城県となつた。

また明治22年の町村制施行によって町域は新治郡下大津・美並・牛渡・佐賀・安飾・志上庫の旧六ヶ村となった。土浦藩では郷農希望者に荒地を授け、産業資金の貸付を受ける黒社樹芸社が設立され、南野から岩峰にかけての台地が開拓された。明治初年頃から蚕業が盛んとなり、製糸業を営む者が現れた。醸造業も江戸時代以来各地で盛んに行われた。戦後は、市立から岩峰に至る台地に開拓者が入植し、山林、原野であった台地一帯は畠地となり、その後山高用水の開通によって陸田となった。

昭和28年9月、町村合併促進法が施行され、10月、下大津・美並・牛波・佐賀・安飾・志士康の旧六ヶ村に、上大津・閑川・三村を加えた九ヶ村で、「町村規模適正化研究会」が結成された。しかし、その後上大津が土浦市に、閑川と三村が石岡市にそれぞれ編入合併する傾向

を明らかにしたので、昭和29年7～12月、旧六ヶ村で「出島六ヶ村合併促進協議会」を設置し、昭和30年2月1日を期して合併、「出島村」として誕生した。水田や蓮田の整備が本格化したのはこの前後からで、半成9年には町制施行をとり、現在の「霞ヶ浦町」に改称され今日に至っている。

4. 各地区の概観

以下では更に今回の分布調査の踏査単位とした旧六ヶ村について概観しておきたい。下大津村は大字加茂、戸崎の二ヶ村、美並村が深谷、上大堤、下大堤、三ツ木、南根本、大和田、男神、中台の八ヶ村、牛渡村が牛渡、有河の二ヶ村、志士庫村が宍余、西成井、上軒部の三ヶ村、佐賀町が田伏、坂の二ヶ村、安飾村が安食、柏崎、岩岸、下鶴部の四ヶ村によりなる。各人字の概要は以下のようになる(瀬谷 1982、佐久間・宮本 1983参照)。

(1)志士庫 ししこ

宍戸(ししくら)町の北西端。北は石岡市、西は千代田村、南東は土浦市に接する。奥本川上流域に位置し、中央部を同川が東流する。南部は水田地帯、西部には山林、畠地が広がり、特に果樹園が多い。昭和38年に志々木庫同芸組合により造成された集落宋園がある。集落は東部・南部、中央部、北西部にあり、商店、住宅・公共施設が混在する。南部を出島用水路が流れる。県道牛渡馬場山土浦線が東西をほぼ南北に、北西部を東西に通り、これを重用しながら県道石岡田伏上前線が東西に通る。志士地区第1公民館、志士庫郵便局、新治地方広域市務組合消防出島分署、志士庄小学校、宍倉小学校、淨土宗最勝寺(1555創建)、曹洞宗崇泰寺(1503創建)、施烏神社、種荷神社がある。

主要な遺跡には、繩文時代の小原1遺跡、荻平遺跡、風返古墳群などがある。

中世は南野庄に属し、文亀年間(1501-1504)には小田の家臣舟谷氏が宍倉城に拠り、天正期には佐竹氏の支配下に降った。のち佐竹一族の東義久の知行地となり、文禄四年(1595)の中務大輔當知行目録に「志々倉・はきしま」とある。佐竹移封後は水戸藩領となり、寛永十二年(1635)の水戸領郷高帳先高に村高896.23石、新田204石余と記され、同十八年の常陸国新治郡宍倉村府検地帳には上新田・金川新田村を含めて村高1222石余である。元禄郷帳に宍倉村1262石余、上新田村172石余、金川新田村62石余とあるが、幕末までに両新田を合併し、幕末は水戸藩領分1758石余、果泰寺朱印地30石、下輕部村長福守朱印地8石余となる。「新編常陸國誌」によれば、天保十三年(1842)の田畠は209町余(分米1704石余)で、「水府志料」の戸数185。藩政期には当村を親村として三ツ木・下輕部・安食など付近の水戸藩領を併せて宍倉郡と称していた。

西成井(にしなるい) 町の中央部。上輕部を挟んで東西2地区からなる。東部は山林、西部には果樹園が多い。南北部に集落がある。北縁の一帯を菱木川が東流する。南西部を県道牛渡馬場山土浦線がほぼ東西に通る。志士庫地区第2公民館・稻荷神社・八坂神社などがある。

江戸初期に水戸藩領となり、寛永十二年(1635)の水戸領郷高帳先高に村高1409.32石とある。正保三年(1646)領地替で水戸藩領を離れ、正徳期(1711-16)に上浦藩領となり、弘化元年(1844)の戸数102、人口238。元禄郷帳の村高は1338石余で、天保郷帳では1838石に増加するが、幕末には土浦藩領分1338石余となる。

天保十年(1839)の成井村年貢割付帳に「上塙七町四反捨五歩 内式反式穀拾八歩 未分山根猪喰荒 畑三割引 当一年引」とあるように、猪鹿の害がひどく、元文元年(1736)には土手706間、猪落し穴32をつくるため助人足を加えて2393人を使役して猪鹿土手を構築している。また村内では年2回(7月・12月)に生活用品や農具・魚介を扱う市が開かれ、土浦や府中(現石岡市)から商人が集まり、通りには馬糞場も設けられていた。明治12年(1879)に西成井村に改称。

上輕部(かみかるべ) 町の中央部。西成井の中央部を占める。台地上の山林地帯。北東部に集落がある。北部を菱木川が東流する。鹿島神社がある。

江戸時代は水戸藩領で、元禄郷帳の村高は314石余、幕末は水戸藩領分252石余。「新編常陸國誌」によれば、天保十三年(1842)の田畠は26町6反歩(分米251石余)で「水府志料」の戸数はおよそ16。

(2) 安飴 あんじょく

安食(あんじき) 町の北東部。北・東は霞ヶ浦に臨む。湖岸沿いの低地に水田・畑が広がる。中央部の台地上には商店・住宅・公共施設が混在する。南部を菱木川が東流する。中央部を県道石岡田伏土浦線が東西に通る。



第3図 合併前の旧6ヶ村

安飴地区公民館・安食郵便局・安飴小学校・安食養蚕協業組合事務所がある。主要遺跡には繩文時代の安食平貝塚、県指定史跡の太子古墳などがある。安食館内に位置する大宮神社は806年の創建を伝える。

古代は「和名抄」記載の安鷹郷の本郷の地に比定される。鎌倉～室町期には小田一族の安食氏が安食館に拠って支配し、応永十年(1403)銘の大宮神社跡碑に「南野庄安食郷」とある。天正期に佐竹氏の支配下に入り、のち佐竹一族の東義久の知行地となり、文禄四年(1595)の中務大輔當知行目録に「あんぢき」とある。

佐竹移封後は水戸藩領となり、寛永十二年(1635)の水戸領郷高帳先高に村高1722.4石、新田44石余と「柏崎・岩屋共二」の註記がある。元禄郷帳の村高は1432石余、天保十三年(1842)の田畠は154町9反歩(分米1334石余)とある。「水府志料」の戸数はおよそ159。

柏崎(かしわざき) 町の東端。北・東・南・は霞ヶ浦に臨む。菱木川下流域。霞ヶ浦に突出した地形で、北部の溝岸沿いと南部を東流する菱木川流域には水田が広がる。南部に集落が発達している。中央部を主要地方道土浦大洋線がほぼ東西に通り、西・南を県道石岡田伏土浦線が北西から南東に通る。富士見塚古墳公園および展示館、柏崎津の背後に素盞嗚神社がある。重要な遺跡には富士見塚古墳群・古墳～奈良時代の柏崎窯跡群・中・近世の瓦窓・清水遺跡がある。

応安年間(1368-75)の海夫注文に「かしわさきの津 小田兵部少輔入道知行分」とあり、中世には小田氏一族の支配下にあったが、天正期に佐竹氏の支配下に入り、のち佐竹氏一族の東義久の知行地となり、文禄四年(1595)の中務大輔當知行目録に「かしは崎」とある。

慶長七年(1602)佐竹氏移封後は一時天領となり、慶長十一年の年貢割付状(田制考証)に「宍倉之内柏崎町牛年可納御年貢糀付之事 一高百九拾三石巻斗升此取米六拾五石六斗六升鬯合 此わけ 米四拾壺石巻斗升五合 水栗四貫九百文 右之米錢糀月廿日を切、可有告借、如此相定於無沙汰、謹實を以可申付者也、仍如件(慶長十一年)午 九月廿八日 伊奈備前守(印判花押)名主百姓中」とある。その後水戸藩領となり、寛永十二年(1635)の水戸領郷高帳先高に「柏崎・岩屋共二」と註記される。元禄郷帳の村高は359石余で、天保十三年(1842)

の田畠は52町3反歩(分米413石余)、新田六町四反余(分米41石余)となる。

江戸期の当地域は霞ヶ浦の舟運の要路で、高瀬舟は高浜から三ツ谷・小津を通って柏崎を過ぎ、二又沖を下って牛堀にて横利根川を経て佐原(千葉県)に至った。小津・柏崎などは、風雨の折の難難の地でもあり、特に柏崎は交通の要地で風待ち港として知られ、宿通りには宿屋・湯屋・商店が並んでいた。

柏崎河岸は元禄三年(1690)四月に幕府が江戸への年貢米輸送の運賃を定めた関八州伊豆駿河国越米津出浦湊々河岸之道法并運賃書付(徳川禁令考)には「柏崎河岸 江戸江川通六拾里 運賃米百石ニ付五石」とある。「水府志料」には「口凡九十…船渡場 浜村へ渡す。湖上三十六町」とあり、対岸の浜村(現玉造町)への渡船場もあつたが廃止された。

岩坪(いわづは) 町の東部。霞ヶ浦沿いの台地に位置する。周辺を山林がとりまき、その中に水田が点在する。中央部と南部に集落がある。北部を菱木川が東流する。中央部を主要地方道土浦大洋線がほぼ東西に通る。昭和37年竣工のスチローホーム工場、鹿島神社がある。

主要遺跡に縄文時代の岩坪平貝塚、古代のマケシ遺跡がある。

天正期に佐竹氏の支配下に入り、のち佐竹氏一族の東義久の知行地となり、文禄四年(1595)の中務大輔當知行日録に「いはつほ」とある。佐竹氏移封後は水戸藩領となり、寛永十二年(1635)の水戸領郷高帳先高に村高1722.4石、新田44石余とあり「柏崎・岩坪共ニ」の註記がある。正保二年(1645)穴戸藩秋田氏の軒封に伴う領地替で水戸藩領を離れ正徳期(1711-16)に上浦藩領となり、弘化四年(1844)の戸数33、人數180。元禄郷帳の村高は771石余、幕末は岩坪村・土浦藩領分526石余、新岩坪村天領247石余。新岩坪村は岩坪村の西にあり、「新編常陸國誌」には「蓋元祿以後新聞ノ地ナリ」とある。明治20年(1887)に岩坪村と合併。

下駄部(しもかるべ) 町の中央部。畑作地帯。北部に集落がある。北緯付近を菱木川が東流する。北中学校・鹿島神社などがある。

江戸初期は水戸藩領で、正保二年(1646)領地替で水戸藩領を離れ正徳期(1711-16)に土浦藩領となり、弘化四年(1844)の戸数45、人數170。

(3) 佐賀 さが

田伏(たぶせ) 町の東端。北・東・南は霞ヶ浦に臨む。霞ヶ浦に突出した台地上に位置する。東部は水田地帯、西部は山林。東部湖水沿いに堺道石岡田伏土浦線がほぼ南北に通り、沿線に集落が散在する。霞ヶ浦大橋の開通で対岸の玉造町と往来が可能になった。出伏郵便局・関東鉄道伏谷営業所・曹洞宗実伝寺・真言宗鷦鷯派東福寺・鹿島神社・田伏城がある。

中世には南野庄に属し、小田氏の家臣出伏氏が田伏城に拠って支配した。出伏氏はその後佐竹氏に滅ぼされ、

当地は一時人猿氏の支配下に入る(『常陸大掾幕下録』)。のち佐竹氏一族の東義久の知行地となり、文禄四年(1595)の中務大輔當知行日録に「田ふせ」378石3斗とある。江戸時代は水戸藩領で、寛永十二年(1635)の水戸領郷高帳先高に村高1722.4石余、幕末は水戸藩領分1468石余。『新編常陸國誌』によれば、天保十三年(1842)の田畠は152町5反歩(分米1388石余)で『水府志料』の戸数はおよそ16。四十八津連判記載の田伏の津がある。

坂(さか) 町の東部。南東は霞ヶ浦に臨む。北部には山林および果樹園や桑畠などの畑地が広がる。南部は水田地帯。南東端に志戸崎漁港があり、霞ヶ浦で漁業も営む。集落は漁港周辺と中央部に立地する。南縁の一部を一ノ瀬川が南東流する。南・東部を県道石岡田伏土浦線がほぼ南北に通る。霞ヶ浦町農村環境改善センター・佐賀地区公民館・佐賀小学校・出島自記水位観測所・種荷神社・八幡神社・鹿島神社がある。主要な遺跡に西方貝塚、坂詰荷山古墳・折越十日塚古墳・要害跡跡・坂寄山崩跡などがある。また坂薙郷堂には10世紀に通る如米形像、12世紀の天部形像があり、皋土屏指の古仏として注目される。

南東端の歩崎は県名勝に指定されている景勝地で、付近には霞ヶ浦町郷土資料館・霞ヶ浦町水族館・民家園・あゆみ庵・森林公園などがある。歩崎の先端にある長禅寺は通称藍見崎(歩崎)觀音と称される。断崖の上の觀音堂には十一面觀音が祀られている。古代は「和名抄」記載の佐賀郷の本郷に比定され、中世は南野庄に属したが、天正期に佐竹氏の支配下に入り、のち佐竹氏一族の東義久の知行地となり、文禄四年(1595)の中務大輔當知行日録に「さかもりさく」とある。佐竹氏移封後は水戸藩領となり、寛永十二年(1635)の水戸領郷高帳先高に村高1358.05石、新田18石余とある。正保二年(1646)領地替で水戸藩領をはなれ、正徳期(1711-16)に土浦藩領となり、弘化元年(1844)の戸数は114、人數939。四十八津連判記載の志戸崎の津がある。

(4) 美並 みなみ

深谷(ふかや) 町の西部。西は土浦市に接する。農業地帯。水田・畑が広がる。中央部を主要地方道土浦大洋線が東西に通る。あじさい館・公民館・多目的運動広場・出島郵便局・美並小学校・南中学校・真言宗豈山派法藏寺(1406創建)・鹿島神社・八坂神社などがある。主要な遺跡に富士塚山古墳・古代の八千代台遺跡・中世の真珠院などがある。江戸初期に土浦藩領となる。元禄郷帳の村高は1058石余、天保郷帳では1519石余に増加する。江戸中期の土浦藩領新治郡深谷村絵図によれば、村中央を土浦に至る道が通り、その両側は畠地で、上池から流れる川沿いに水田が広がる。

上大堤(かみのおづみ) 町の西部。南西は土浦市に接する。南縁付近を一ノ瀬川が南東流する。台地上に位置する農業地域。南部に水田がみられるほかはほとんど

が畠と果樹園。菟神社がある。古代は下大堤村とともに「和名抄」記載の大津郷の本郷に比定されている(『新編常陸國誌』)。中世は南野庄に属し、江戸初期に一時土浦藩領となるが、のち旗本領となる。元禄郷帳の村高は93石余、幕末は旗本羽太氏領78石余、板倉氏領14石余。弘化二年(1846)の戸数は8戸、人数44人。

下大堤(しもおおづみ)町の中央部。東流する一ノ瀬川中流左岸に分散する。畑作地帯。南部に集落がある。鹿島神社(1271創建)などがある。古代は下大堤村とともに「和名抄」記載の大津郷の本郷に比定されている(『新編常陸國誌』)。中世は南野庄に属し、江戸初期に一時土浦藩領となるが、のち天領・旗本領となる。元禄郷帳の村高は373石余、幕末は天領120石余、旗本沢・松平氏領各124石余。

三ツ木(みつぎ)町の中央・西部。西の一部は土浦市に接する。南根本を挟んで東西2地区に分かれる。農業地帯。ほぼ果樹園と畑地。南東部に集落が点在する。南縁を一の瀬川が南東流する。曹洞宗法源寺・吉田神社(1699改修)などがある。「水府志料」に「此村坪々地墳はなればなれにして、中間に別村有り」と記される。

天文正期に佐竹氏の支配下に入り、のち一族の東義久の知行地となり、文禄四年(1595)の中務大輔当知行目録に129石7斗7升とある。江戸時代は水戸藩領で、寛永十二年(1635)の水戸領郷高帳先高に村高148.42石、ほかに新田3石余とある。元禄郷帳の村高は353石余、幕末は水戸藩領282石余。宝曆十三年(1763)の戸数25、人数104人。

南根本(みなみねもと)

町の中央部。東・西は三ツ木に接する。農業地帯。ほぼ果樹園と畑地。集落が南西部にある。南縁を一の瀬川が南東流する。宇白藤に稻荷神社(1765石祠設置、のち社社)がある。

主要な遺跡には繩文中期の南根本遺跡がある。

もと根本村を称した。江戸初期に一時上浦藩領であったが、のち天領・旗本領となる。元禄郷帳の村高は251石余、幕末は南根本村に改称され、天領81石余。旗本松平氏領84石余、沢氏領48石余。文久二年(1863)の水戸街道稻吉宿(現千代田町)への助郷勤高は170石、勤人足8人五分、勤馬5疋一分で全額金納している。

大和田(おおわだ)町の中央部。南東流する一ノ瀬川中流左岸の台地上に位置し、北部は山林・畑作地帯、南部には住宅が集中する。南部を主要地方道土浦大洋線がほぼ東西に通り、南・東部を県道牛渡駒場山土浦線が南北に通る。段ヶ浦町役場・真言宗豊山派龍円寺・八坂神社などがある。

主要な遺跡には繩文晩期～弥生時代中期の和田台遺跡、中世の大和田城などがある。

天文正期に佐竹氏の支配下に入り、のち一族の東義久の知行地となり、文禄四年(1595)の中務大輔当知行目録に「おかミ・太わた」246石3斗3升とある。江戸時代は水戸藩領で、寛永十二年(1635)の水戸領郷高帳先高に小神

大和田として村高202.34石とある。元禄郷帳の村高は34石余、幕末は旗本堀氏領360石余。

男神(おがみ)町の中央部。南東流する一ノ瀬川中流左岸の台地上に位置する。ほとんどが山林・畑作地帯。南部に集落がある。宇竜通に鹿島神社(伝1457創建)があり、付近は绳文時代の男神貝塚である。

沿革は小和田と同様。『新編常陸國誌』には、「旧ハ小神ニ作ル・正保元禄ノ間、今字ニ改ム」と記す。正保三年(1646)に領地昔では水戸藩領を離れ、のち天領となる。元禄郷帳の村高は117石余、享保十三年(1728)の戸数44、宝曆九年(1759)の戸数14、人数63、文久三年(1863)の水戸街道稻吉宿(現千代田町)への助郷勤高は74石、勤人足3人七分、勤馬2疋二分三厘で全額金納している。

中台(なかだい)町の東部。東流する一ノ瀬川下流左岸に位置する。ほぼ山林。南部に集落が点在する。真言宗豊山派方藏院・宇宮前に鹿島神社(1648創建、1679本殿再建)がある。元禄郷帳の村高は190石余、幕末は土浦藩領186石余、文久三年(1863)の水戸街道稻吉宿への助郷勤高は110石、勤人足6人、勤馬3疋六分を全額金納している。

(5)下大津 しもおおつ

上崎(ときぎ)町の南西端。南は霞ヶ浦に臨み、西は土浦市に接する。南部は水田地帯、北部は山林。中央部に集落が広がる。南部を県道石岡田伏土浦線がほぼ東側に通る。曹洞宗松学寺(1504創建)・八幡神社・八坂神社がある。

主要遺跡には繩文時代の柳沢遺跡、中世の戸崎城がある。

中世は南野庄に属し、小田氏の家臣戸崎氏が城を築いて支配した。戦国末には佐竹氏領となり、江戸初期には下総開宿藩領(寛文朱印留)、貞享四年(1687)以降土浦藩領となる。元禄郷帳の村高は934石余、幕末は土浦藩領分948石余、松学寺領10石。

加茂(かも)町の南西部。南は霞ヶ浦に臨む。農業地帯。湖岸沿いには水田。そのほかの地域は果樹園・桑畠・畑地が広がる。南部をほぼ東西に通る県道石岡田伏土浦線と中央部をほぼ南北に通る県道戸崎上船吉線が集落が立地する。加茂工業団地には昭和39年に誘致された日東・東洋工業がある。下大津地区公民館・半川簡易郵便局・下大津小学校・真言宗豊山派圓円寺(1394創建)・八坂神社・加茂香取神社などがある。

主要遺跡には繩文時代の加茂八幡貝塚・弥生時代の籠山遺跡・古墳時代の鶴平遺跡・七曲遺跡・赤坂古墳群・車塚古墳・古代の松本遺跡・中世の嚴持院廃寺などがある。

地内の椎名町住宅は差鶴居のホゾの紀年銘から延宝二年(1674)の建立と知られ、国重文に指定されている。江戸初期には下総開宿藩領(寛文朱印留)、貞享四年(1687)以降土浦藩領となる。元禄郷帳の村高は2235石余、幕末は土浦藩領分2227石余、南円寺領10石。

四十八津連判記載の津のうち川尻・平川・輪浜・田畠・

赤塚があり、水運の要衝でもあった。

(6)牛渡 うしわた

牛渡(うしわた) 町の南端。南は霞ヶ浦に臨む。南東流する一ノ瀬川下流右岸に位置する。南部は湖岸沿いの水田地帯、北部には山林・果樹園が広がり、水田や畠も点在している。南端に牛渡漁港があり霞ヶ浦での漁業も営まれる。商店・住宅・公共施設が南郊を東西に通る県道石岡田伏土浦線沿いに集中する。牛渡地区公民館・牛渡郵便局・牛渡小学校・真言宗叢山派金剛寺・八坂神社・宛鳥神社(伝806創建)・八田地蔵堂などがある。

主要遺跡に绳文時代の平三坊貝塚、貝ヶ崎貝塚、古墳時代の鏡子塚古墳・牛塚古墳などがあり、特に牛塚古墳は牛渡の地名起源伝説を残す。

中世は南庄に属し、小田氏一族が居住したと伝え、八田館跡は小田氏八代孝朝隠極後の居館といわれ、付近からは埋蔵鏡も見つかっている。宝昌寺には孝朝の供養塔と伝える九重塔がある。江戸初期に下總関宿藩領となるが、のち旗本領となる。四十八津連判記載の津のうち房中・八出がある。元禄郷帳の村高は1830石余で、幕末は旗本佐橋氏領227石余、新庄氏領628石余、篠山氏領337石余、堀氏領313石余、竹本氏領337石余。文久三年

(1863)の水戸街道積荷宿の勘定額高は1800石、勤入足90人、勤馬54疋で、人足と馬8疋は実際に勤めている。

有河(あるが) 町の南東部、一ノ瀬川の河口に位置する。南は霞ヶ浦に臨む。牛渡の東部に2地区に分かれる。北の有河は山林地域。南の有河は中央部を東西に通る県道石岡田伏土浦線沿線に商店・住宅が混在する。北部を一の瀬川は南東流する。

元禄郷帳の村高27石余の小村で、正徳期(1711~16)以降土浦藩領となる。弘化元年(1844)の戸数22、人数109。四十八津連判記載の津のひとつであったが、のちに村内には霞ヶ浦の入海表魚漁運上場が設けられた。

(桃崎祐樹)

引用文献

- 井内義郎・高瀬文紀 1993 「海津町の歴史-3 5 霞ヶ浦」『アーバンガゼット』32 クボタ
吉野登志雄 1984 「第1章 霞ヶ浦の形態」『霞ヶ浦-自然・歴史・社会-』茨城大学地域社会研究所・古今書院
佐久間灯雄・宮本尚紀 1983 「出島村」「茨城県」角川日本地名大辞典 8 竹内理三編 角川書店
奥谷義彦監修 1986 「茨城県の地名」 日本歴史地名大辞典第八卷 平凡社
磐崎卓彌著 1971 「川島村史」

第2部 分布調査

I. 調査に至る経緯と経過

1. 過去の調査

霞ヶ浦町は貝塚と古墳の集中地として古くから知られており、平成12年までに発掘調査の行われた町域内の遺跡としては、安倍安食平貝塚（慶應義塾高等学校歴史研究会：1957）、田伏神明台貝塚・牛渡貝ヶ崎貝塚（慶應義塾高等学校歴史研究会：1959）、風返古墳群（平沢・竹石：1974）、為都南遺跡（伊東：1989a,b）、富士見冢古墳（山口：1992)、八千代台遺跡、柳沢遺跡（小川ほか：1996)、坂遺跡・船戸内遺跡・小原遺跡（茂木：1999)、ヒヘ田遺跡（霞ヶ浦町教育委員会：1997)、下ノ原遺跡等を数える。それらのうちには風返稻荷山古墳のように先頃ようやく正式報告書が刊行されたもの（霞ヶ浦町遺跡調査会：2000）もあるが、多くは整理途上や概報の刊行にとどまっている状態で、遺跡の性格、規模、内容等が十分に把握されているとは言い難いのが実情である。

また、特定の貝塚や古墳を抽出した調査が多く、町域全体の遺跡分布の通時的な整理は、大正大学考古学研究会による遺跡分布調査報告（大正大：1985）においてさえ、十分に果たされてはいなかった。

2. 霞ヶ浦町遺跡分布調査

こうした中で平成11年7月16日に公布された「地方分権の推進を図るための関係法律の整備等に関する法律」（平成11年法律第87号）及び平成12年2月6日に公布された「地方分権の推進を図るための関係法律の整備等に関する法律の施行に伴う文部省関係政令の整備等に関する政令」（平成12年政令第42号）により、文化財保護法（昭和25年法律第214号）及び文化財保護法施行令（昭和50年政令第267号）の一部改正が行なわれ、平成12年4月1日から施行されることが文化庁文化財保護部記念物課埋蔵文化財部門より通知された。この改正は地方分権推進計画（平成10年5月29日閣議決定）に基づいたものであり、国と地方公共団体との役割分担の在り方の見直しや、機関委任事務の廃止、地方公共団体に対する関与の見直しを主な内容としており、文化財保護行政に関するものは最大の眼目として、埋蔵文化財であるかどうかの鑑査等の事務を都道府県又は指定都市若しくは中核市のお委員会が行なうこととした（法第60条から62条まで）。この決定をうけて平成12年5月、茨城県教育厅文化課は「埋蔵文化財に関する諸手続き」を作成し、法改正に伴う手続手続の変更点を通知した。

しかしこの移管に伴う措置は、遅って平成8年度にその実施が事前に予告されていた。「地方公共団体が文化財保護法第98条の第2項に基づく発掘調査を行う際の

文化庁長官への通知について」（平成8年9月5日府保記第123号文化庁次長通知）、「埋蔵文化財の鑑査等の事務の委任について」（平成8年9月2日府保記第9-8号文化庁次長通達）によって文化財の管理は文化庁から都道府県教育委員会文化課へと移管されることが決定されていた。茨城県では従来より、文化財保護法第4条第2項の規定に基づき数次にわたり『茨城県遺跡地図』の改訂を行なってきたが、法改正に伴い基本資料として第一に県域内に所在する遺跡の正確な実態把握が必要となつた。このため茨城県教育委員会は平成9年10月1日付で、各自治体に『茨城県遺跡地図』改定事業の名目で予算措置を含めた遺跡分布調査の実施を指示した。これをうけて茨城県下の各市町村では、原則として詳細な分布調査が実施されることとなった。

霞ヶ浦町教育委員会においても、町域内で各種開発行為が活発化するのにに対応して、埋蔵文化財保護行政を強化するための基本資料として遺跡分布地図を作成することが急がれていた。こうした両面の状況から、平成9年の会議において、平成10年度に町内遺跡の分布調査を実施することが決定された。そうした事情のもとで、筑波大学考古学研究室は霞ヶ浦町から遺跡分布調査依頼の打診を受けた。筑波大学考古学研究室では、地域史研究に重点を置き、特に茨城県南部を中心とする古代地域史の研究を開學以来継続して進めてきた（増田・岩崎ほか：1981, 岩崎・滝沢ほか：1991）。このような研究の一環として、霞ヶ浦町域については、過去に貝塚の測量調査と表面採集（前田ほか：1991 筑波大学貝塚調査チーム）や古墳の測量調査（田中・日高：1996, 田中：1999）を実施した経験もあり、調査をお引き受けすることとした。こうして霞ヶ浦町教育委員会生涯学習課が委託した町遺跡調査会から筑波大学考古学研究室に霞ヶ浦町内の遺跡分布調査を担当することが正式に依頼された。

両者の協議の結果、筑波大学の考古学実習の一環として分布調査を行うことを決定し、町教委ではこれに対応して予算措置をこうじることとなった。以後、教育委員会では次年度に向けて予算化作業を進めるとともに、筑波大学考古学研究室との間で、これまでの成果、調査目的、課題等について調査方法、組織、期間、経費、方法等具体的な打ち合わせを重ねた。

計画では、調査企体に平成10～12年の3年間を充て、現地で行う分布調査は、平成10～11年度内に6期に分けで実施し、調査成果の取りまとめ、分布調査報告書の刊行は平成12年度に行うこととした。

調査の実施段階では、調査は1998年の夏から2000年の3月まで7期に及び、512個所の遺跡について所在を確認した。その後2000年度中に茨城県へ調査の成果を提出

した。そして町へは分布調査報告書の提出をもって正式報告することとなったが、本編はあくまでも『遺跡地図編』に限定したものであり、跡中に採集・確認した多数の遺物については、後日『遺物編』の刊行をもって正式に報告する予定である。

3. 調査組織

今回の遺跡分布調査は、茨城県教育委員会文化課の指示をうけた霞ヶ浦町教育委員会が調査を町遺跡調査会に委託し同調査会が筑波大学考古学研究室に調査依頼したもので、調査会は霞ヶ浦町教育委員会生涯学習課に事務局を置き、霞ヶ浦町郷土資料館の協力を受けた。霞ヶ浦遺跡調査会は、平成10年7月1日に発足し、同年10月5日に事業計画会議、同年3月24日に平成10年度事業報告及び11年度事業計画会議、平成11年11月4日に事業中間報告会議、平成12年4月21日に平成11年度事業報告会議、同年5月12日に事業完了報告会議を行った。現地調査、資料整理、報告書作成等には筑波大学歴史・人類学系考古学研究室の川内宏幸・常木晃・三宅裕・桃崎祐輔ら担当教官、日本学术振興会特別研究員の日高慎、大学院博士課程の川口武彦らの指導のもと筑波大学先史学・考古学コースの大学生を中心に聖徳大学・茨城大学・早稲田大学・大正大学など各大学からの参加者を迎えて行った(参加者は第5部参照)。

II. 分布調査の概要

1. 調査計画

本格的現地踏査の詳細計画を決定するため、平成9年に川西・桃崎・日高と霞ヶ浦町教育委員会生涯学習課職員により度数の打ち合わせを実施した。

霞ヶ浦町全域を中心とする出島半島については、大正大学考古学研究会による詳細な遺跡調査が実施されており(大正大 1985)、この成果を参考に町域の主要遺跡を踏査・確認し、遺跡の立地、現況、分布傾向等について大要を把握するとともに、調査対象とする範囲、調査期間等について検討した。その結果、調査範囲は水田・蓮田等低湿地を除いた台地・微高地部分を対象とし、調査期間は、霞ヶ浦町を構成する旧6ヶ村の各々の調査にのべ各1カ月を要し、筑波大学の授業の関係から7月、11月、3月の休暇期間中にそれぞれ10日ずつ3シーズンを踏査にあてれば、3班編成で2年間6カ村の調査を完了できるとの試算結果をもとに、旧村の範囲を単位として調査を進めることとした。

2. 現地調査日誌抄

(1) 第1期調査(平成10年7月2日～9日)

記録的な猛暑で晴天が続き、8日間のうち実質踏査は7日間で、教官4名を含む合計23名が参加した。町域の西端にあたり土浦市と境を接する下大津地区でも川尻川

より西方の大字戸崎(西端)、石岡市と境を接する志士麻地区でも菱木川の両岸にまたがる大字穴倉(西端)、南に霞ヶ浦をのぞむ牛渡地区的牛渡の3地区を4班に分かれ、各水系、支谷を通るようにして町域の北西部・西部・南部を調査した。今期は季節の関係から、山林部への立ち入りが困難であり、畠地を中心に調査を行った。そのため、散布地の調査が多くなる結果となつた。また、町内の遺物保管状況についても調査し、借用可能な資料については実測等を行つた。第1期の調査で所在を確認した遺跡数は66(穴倉24、戸崎17、牛渡28)であった。

(2) 第2期調査(平成10年11月26日～12月5日)

10日間のうち実質踏査は6日間で、教官4名を含む合計24名が参加した。

菱木川北岸を中心とした穴倉地区、一ノ瀬川南岸の牛渡地区台地、川尻川東岸の加茂地区台地等の3地区を4班に分かれ、町域の北部・西南部・南東部を中心に調査を行つた。また、前期と同様町内に保管されている資料について調査を行つた。第2期の調査で所在を確認した遺跡数は68(穴倉23、加茂19、牛渡26)であった。

(3) 第3期調査(平成11年3月6日～15日)

雨天が多く気温も非常に低かったため10日間のうち実質4.5～5.5日間しか踏査できなかつた。教官4名を含む合計22名が参加した。

菱木川中流の北岸の安食地区西半、菱木川下流北岸の柏崎地区のほぼ全域、戸崎および加茂地区の北縁、一ノ瀬川南岸の牛渡地区北西部の4地区を4班に分かれ、町域の北部・西部・南部を中心に調査を行つた。第3期の調査で所在を確認した遺跡数は79(穴倉18、安食22、戸崎・加茂22、大和田5、牛渡12)であった。

(4) 第4期調査(平成11年7月1日～10日)

晴天にめぐまれ10日間のうち実質7.5日間の踏査が実施できた。教官4名を含む合計46名が参加した。

菱木川中流の南北両岸の安食地区東半、菱木川下流南岸の岩坪・下輕部地区、一ノ瀬川中流北岸の美並北半の大和田地区、霞ヶ浦を南に望む田宿・赤塚地区の4地区を4班に分かれ、町域の北部・中央部・東部・南部を中心して調査を行つた。第4期の調査で所在を確認した遺跡数は90(穴倉13、安食17、下輕部・岩坪19、大和田・男神31、加茂10)であった。

(5) 第5期調査(平成11年11月26日～12月5日)

晴天にめぐまれ10日間のうち実質7.0日間の踏査が実施できた。教官4名を含む合計45名が参加した。

菱木川中流南岸の西成井地区、菱木川下流南岸の岩坪・下軽部地区、一ノ瀬川上流の南北両岸にわたる深谷地区の北西部、一ノ瀬川下流北岸の坂地区の4地区を4班に分かれ、町域の西部・中央部・東部を中心に調査を行つた。第5期の調査で所在を確認した遺跡数は89(西成井30、下軽部2、岩坪9、坂9、上大堤・三ツ木・南根本14、大和田2、深谷23)であった。

(6)第6期調査(平成12年1月8日～1月17日)
10日間のうち実質6.0日間の踏査が実施できた。教官3名を含む合計32名が参加した。

菱木川南岸の上輕部、半島の先端部にあたる伏坂地区、深谷地区東半の合計3個所を4班にわけて踏査した。第6期の調査で所在を確認した遺跡数は110(上軽部10、岩坪2、坂7、南根本2、深谷25)であった。

(7)第7期調査(平成12年3月8日～3月18日)

11日間の期間中、6期までに完了しなかった深谷地区的残余の部分を3日間ほど踏査したほかは、出土遺物の整理・地籍の確認作業、写真撮影等、前回までの調査成果を整理し、県および町に提出するカードの作成作業を行った。教官4名を含む合計34名が参加した。第7期の調査で所在を確認した遺跡数は深谷7であった。

3.まとめ

以上参加者は教官5名を含む合計99名に達し、全期間を通じての調査日数は合計69日間、整理作業をのぞき実質的に踏査に費やしたのは42日間であった。この間に確認し得た遺跡は第1期69、第2期68、第3期79、第4期90、第5期89、第6期110、第7期7、合計512箇所に達した。調査終了後は、県提出用および町提出用の遺跡調査カードの作成、遺物の注記、採折や災害、遺跡・観察の作成ならびに分布調査報告書の編集を行なうかたわら、遺跡の現況の追加確認等を随時行なった。

III. 霞ヶ浦町遺跡分布調査の意義

分布調査は、先行する調査、研究成果の検証に始まり、それに新たな成果に基づく追加、訂正が行なわれてより実態に近い遺跡の分布状況を把握することができる。本事では、これまでに行なわれた分布調査の成果を概説し、その中で今回の調査の占める位置について述べる。

1. 従前の成果の概観

現在の霞ヶ浦町域に所在する遺跡について、近代における優れた地誌の一つとして著名な『新編常陸国誌』(中山1901)の記述はさておき、最も早く記載が見られる地名表は、明治33(1900)年東京帝国大学による『古墳横穴及同時代遺物発見地名表』である。岡田穂三郎(岡田1894)、小室龍之助(小室1895)、大野延太郎(大野1896)等の記事に基づき、牛渡村の古墳、安食の古墳(太子古墳)、宍倉村の小古墳3ヶ所、崎浜横穴群などが取り上げられた。

縦文時代の遺跡は早くから人々の注意を引き、日本における地名表の嚆矢と言われる『日本石器時代民人遺物発見地名表』(第1版)が、東京帝国大学から明治30(1897)年に刊行された。町域内の遺跡としては安藤村大字岩坪字木ノ下貝塚、字平貝塚、字寄居貝塚、宇天神貝塚、佐賀村字貝塚、印伏村字馬宮貝塚(二ヶ所)の6ヶ所が挙げられている。その後同書の最終版となる昭和3(1928)年の第5版には上記に下大津村加茂八幡、戸崎(打石斧)、美並村(石器)、志戸崎(石棒)の4ヶ所が追加され10ヶ所の遺跡が載せられている。

第二次世界大戦後最も早く作成された地名表は、昭和34(1959)年に刊行された茨城県による『茨城県古墳總観』である。昭和30・31(1955・1956)年の調査で確認された全県下3464基の古墳のうち、霞ヶ浦町域内では前方後円墳22基を含む131基が報告され、県下有数の古墳集中地域として紹介された。

2.『茨城県遺跡地名表』と『茨城県遺跡地図』

昭和30年代後半に入ると、急激に進む開発から遺跡を保護することが大きな課題となってきた。この対策の資料とするため、文化財保護委員会は昭和35年度から37年度にかけて全国的に遺跡の分布調査を実施した。茨城県では県教育委員会が37年度に轄在を買って遺跡台帳を作成した(文化財保護委員会 1965)。その後も46年から全国的に再調査が行なわれ、台帳の追加が行なわれた。

この成果は県教育委員会により『茨城県遺跡地名表』として昭和39・45・50年の3回、『茨城県遺跡地図』として52年にそれぞれ刊行されたほか、『全国遺跡地図 茨城県』として10年に文化財保護委員会から、55年に文化庁分文化財保護部から刊行された。

これらの地名表、地図に載せられた霞ヶ浦町域の遺跡は、昭和39年の『茨城県遺跡地名表』、40年の『全国遺跡地図』がともに70ヶ所、50・52年の『茨城県遺跡地名表』と『茨城県遺跡地図』がともに112ヶ所、55年の『全国遺跡地図』が94ヶ所である。前二者の対応関係について鈴木素行氏が「の台帳に基づいて作成されたであろうことを指摘しておられるが(古河市史編さん委員会 1984)、後二者についても同じことが言える。

昭和39年と50年の『茨城県遺跡地名表』とを較べると、県下遺跡数では2594が3622へ、市内の遺跡数では70から112へと増加し、10年間の追加調査の成果が見られる。ところで、この間に刊行された地名表の例言には、「遺跡の種別は、無土器時代から古墳時代までを中心に入別したが、特殊な遺跡は中期まで及んでいるものもある。」と記されているところから、奈良・平安期以降の遺跡にはさほどの配慮がなされなかったことが窺える。

このことは、遺跡の種別欄に城跡跡、一里塚等と記されている少数の遺跡を除くと、散布地の場合は遺跡欄に須恵器、土器類と記されるのみという記載方法に表されており、古墳時代以降は時代を知り得る手掛かりを全く欠いている。

一方、『茨城県遺跡地図』の後半部をなす地名表には、遺跡欄に代わって時代欄が設けられている。地名表中の古墳時代以降の散布地をこの遺跡地図について見ると、発掘調査等で内容が明らかになった遺跡以外は多くを古墳時代として記載しているので、奈良・平安期以降の遺

跡が著しく少ない結果となっている。また、遺跡地名表・地図を通じて遺跡の時期細分が示されていないため、市町村史の編纂をはじめとする地域史研究や、遺跡に基づいた様々な研究を行なうには不十分な資料である。

これらの遺跡地名表・地図が作られた時期は、埋蔵文化財の破壊を防ぐために遺跡の周知が早急な課題でありながら、そのための基礎的調査を行なうには市町村教育委員会の体制が整備されていなかった段階であった。

3. 「重要遺跡調査報告書」と「茨城県遺跡地図」

昭和53年度から58年度にかけて、県教育委員会では新たな調査を開始した。内容は、「重要遺跡整備計画策定事業」に基づいて特定の遺跡を重要遺跡として選定し、詳細調査を行なったものであった。その成果は『重要遺跡調査報告書Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』として、県教育委員会から昭和57・58・61年にそれぞれ刊行された。同書Ⅰ・Ⅱは、城館跡以外の散布地、貝塚、古墳等各種遺跡の調査成果を各冊に300件ずつ、Ⅲは城館跡の調査成果250件を收めている。霞ヶ浦町域の遺跡では、Ⅰに男神貝塚、安食平貝塚、岩坪平貝塚、鏡ヶ塚古墳(報告書では牛渡鏡ヶ塚古墳)、坂船荷山古墳群、富士見塚古墳(富士見塚古墳群)の計6ヶ所、Ⅱに安食館跡、坂寄山館跡、田伏城跡、宍倉城跡、戸崎城跡の計5ヶ所、Ⅲに平三坊貝塚、風返古墳群(准現塚古墳群)、先浜横穴古墳群、折越十塚古墳の計5ヶ所が載せられている。

遺跡1件毎にⅠ・Ⅲは1頁を、Ⅱは2頁をあて、遺跡名、所在地、概要等のほか地図か実測図、地図等に遺跡が記入されていて、分布調査を譲る一部分とも言える体裁をなしている。従前の地名表等に較べれば内容的に充実している点もあり、特に地図等の図は確認のための踏査には有効である。しかし、遺跡整備計画の資料という目的から、遺跡の現況についての記述が中心で、遺物の種類、時期等の記述は極めて簡略であり、遺跡の内容を把握するには十分ではない。

昭和62年に茨城県教育委員会から刊行された『茨城県遺跡地図』は、A-2版と大型の休裁で、二万五千分一地図86葉、地名表56頁他から成る。凡例には「埋蔵文化財包蔵地は、茨城県教育委員会及び市町村教育委員会が行なってきた分布調査等により、昭和61年度までに把握しているもの」とあり、6254件の遺跡が見られる。遺跡数全体が増加しているが、中でも城館跡を中心とした中世以降の遺跡数の増加が注目される。霞ヶ浦町域の遺跡数は113で、1970年の『茨城県遺跡地名表』より1ヶ所増加しているにとどまっている。この遺跡地図には、遺跡件数のごとく前回の遺跡地図刊行から10年を経過した間の調査成果が現れている面もある。しかし、霞ヶ浦町域については大正大学考古学研究会による分布調査報告書が既に市町村教育委員会に提出されていた筈であるにも拘らず、その成果が全く反映されていないことは、当時の編集体制に対し不備の篤りを免れ得ないであろう。また

地図の遺跡記号は極めて簡略で、貝塚と散布地との区分、古墳(群)と横穴(群)の区分、窪跡と製鉄跡等との区分は無く、古墳の墳形、古墳群に含まれる古墳の構成も表示されていない。地名表も遺跡名称の変遷を中心に補訂がなされているが、表記は従前の形式を踏襲し、時期細分、出土遺物、古墳群の構成等については示されていないので、遺跡の内容を把握することはできない。

『茨城県遺跡地図』については、凡例にもある通り市町村による分布調査の成果が現れることにも触れておかねばならない。地名表部分を見ると、遺跡数全体や奈良・平安時代以降の遺跡数が著しく増加している市町村が見られる。これは昭和60年代の後半から市町村教育委員会または市町村史編纂に伴う遺跡の詳細な分布調査が行われるようになった結果である。

市町村教育委員会では埋蔵文化財調査票を整備するとともに、昭和52年に『出島村の文化財』を作成し、昭和56年の改訂を経て昭和63年の再改訂版ではA5版30ページのパンフレットに国指定文化財1件、県指定文化財11件、村指定文化財14件、その他の文化財2件が収録され、国指定文化財に椎名家住宅(本報告の椎名家屋敷)、県指定史跡に人子古墳(人子のカロウド)、村指定史跡に宍倉城本丸、戸崎城本丸、牛渡鏡子塚古墳、折越十塚古墳、坂船荷山古墳、富士見塚古墳、風返大日山古墳、風返浅間山古墳、牛渡牛塚古墳、指定外の風返稻荷山古墳、崎浜横穴群の解説が付されているほか、巻末の島山村遺跡地名表には史跡を含めて遺跡88ヶ所(貢坂13、古墳・古墳群・横穴22、製鉄跡4、窪跡1、経塚4、城館9、包蔵地5ヶ所)が掲載されている。

町制施行後に市町指定文化財を町指定に変更するのに伴い、内容を補整してB5版32ページに改定したのが『霞ヶ浦町の文化財』(霞ヶ浦町教育委員会 2000)で、『出島村の文化財』再改定後に町指定考古資料に富士見塚古墳出土品1括が追加されたほかは、遺跡88ヶ所およびその内訳の表示は変化していない。ただし、これらの地図は文化財の周知を図るために所在を示す目的で作られたので、周知遺跡の一部に限って示したものである。

4. 「茨城県資料 考古資料編」

以上の他『茨城県史料 考古資料編』3冊にも各時代毎に地名表が付されている。凡例によれば、それぞれが編纂された時点までに刊行された上述の各種の遺跡地図・地名表とその他の文献、調査資料に基づいて作成されたとのことである。

第2表 霞ヶ浦町域における登録遺跡数の推移

番 号	刊行年	遺跡数
『茨城県遺跡地名表』	1964	70
『茨城県遺跡地名表』	1970	71
『茨城県遺跡地名表』	1975	112
『茨城県遺跡地図』	1977	112
『茨城県遺跡地図』	1980	94
『桃山古墳』(1号)	1985	330
『茨城県遺跡地図』	1987	123
『茨城県遺跡地図』	1990	123

IV. 調査の目的と方法

1. 調査の目的

今回の分布調査は、町域内の埋蔵文化財行政の基本資料とすることを目的として実施したものである。

前章で述べたように町内の遺跡分布調査はこれまでにも幾度か行われ、特に有志の団体である大正大学考古学研究会による調査は緻密なもので、本調査でもその成果に負うところが大きかった。ここでは地域史の構築を図ろうとする観点から、出島半島全体の遺跡の集成、遺跡の性格、時期等の具体的な内容にも踏み込んでいるが、遺跡の時代別概観等は行われておらず、字の調査による遺跡名称の決定を欠くことは、行政体による埋蔵文化財の保護管理台帳として用いるにはやはり不便の懸があり、また『鶴台考古』が一考古同人誌として存在が周知されていないため、内容の高さに比して引用される機会が少なく、郡遺跡地図にもその成果は全く反映されていない。調査着手から20年を経た今日にあっては、開発の進展による遺跡の埋滅も当然予想されるため、現状確認の意味からも改めて詳細な調査を行うことが必要であった。

一方、地域の発展に伴って各種の基盤整備事業や開発が進むとともに、埋蔵文化財を保護するための資料として基礎的地形・台帳の整備が急がれてきた。文化財行政の資料作成も調査目的の一つであった。今回の調査で作成した地図、調査表、諸記録等は、事業完成後は教育委員会に移管され資料として活用される予定である。

内容の整備された分布調査報告は、遺跡立地・分布をはじめとする考古学研究を行う上で重要な資料となり、文化財に対する理解を深めることにもつながる。本報告書が文化財保護行政の資料として、また研究資料としてそれぞれの分野に貢献できることを願っている。

2. 基本的事項の検討

次項の調査の方法にも関連するが、それに先立って、今回の調査に当たって検討した基本事項について述べる。

(1) 使用した地図

今回の調査目的は遺跡の内容を詳細に把握し記録することにあり、そのためには、できるだけ大縮尺の地図を使用することが望ましい。霞ヶ浦町で整備されている地図は、一万分の一『霞ヶ浦町都市計画図』と二千五百分の一『霞ヶ浦町地籍図』の三種で、このうち後者は新規の道路等に未記入等があるものの、分布調査ではこの地図の実大コピー地図を使用した。地図はフィールドワーク時の携行に便利なよう折り畳み、まずあらかじめ水田や低湿地を色鉛筆で黄緑色に彩色して踏査可能な範囲と地形を把握し、更に大正大学の登録遺跡を水色で書き込みその確認を進めながら、踏査中に得られた遺跡の範囲に関する情報については赤鉛筆で漸次書き込んでいく方法をとった。

(2) 調査票

例言裏ページに使用した調査票を示した。調査票の作成に当たっては、各地教育委員会で使用された調査票の実例、およびこれまでに刊行された各地の遺跡地図・地名表の項目を参考にするとともに、埋蔵文化財を保護するための遺跡台帳としての性格を考慮して項目・体裁を検討した。調査票は、上質紙B-4版両面に印刷し、完成後の調査票は原本、ファイルいざれでも使用できるようにした。

3. 調査項目

調査票の項目のうち主なものについて触れておく。

(1) 名称

遺跡の命名については、遺跡の名称は土地の名、それもなるべく位置を限定できる名によることが望ましい。こうした点から、日本の考古学研究においては遺跡名称として小字名を用いることが行われてきた。本報告書でも小字名を用いることを原則とした。そのため、かなりの遺跡で名称が従来と異なる結果となった。本来、遺跡は無原則に命名されるべきではないのであり、市内の遺跡に見られる名称と所在地との不統一を解消するため、今回の調査を機に原則による名称に改めることにした。

以下に命名の方法を記す。

- ① 遺跡の名称は、遺跡が所在する土地の小字名によって命名することを原則とした。
- ② ひとつの小字に複数の遺跡が在る場合は、柳沢1遺跡のように名称に数字を付した。
- ③ 異なった地区に同一小字の遺跡名が生じる場合、小字の前に大字名を冠した。
- ④ 城郭跡の名称は、文献や伝承に基づくものが多かったので従来の呼称を優先した。
- ⑤ 名称を変更した遺跡については、遺跡地名表に従前の通称を併記した。
- ⑥ 遺跡カードには霞ヶ浦町役場の『出島村小字一覧』によりふりがなを付した。

(2) 遺跡所在地

遺跡の所在地は踏査により地図に記載された位置に基づいて、霞ヶ浦町役場の地図と対比して地区(大字)名、小字名、地番を記入した。幾つもの地番にわたる遺跡の場合、地名表には中心となる地番を代表として記載し、他は「外」として省略した。

(3) 遺跡番号

遺跡地名表・地図においては、遺跡に番号を付して順番に配列し、相互に対照するのが便利である。本報告書では、町域の北部から河川流域に沿って帶状に西から東へと番号をふった。この配列は踏査地区的単位となる旧村の範囲とおむね一致しているが、地区的入り組み等で煩雑になるため地区ごとに分ける方はとらなかった。

また過去の「県番号」と対比を行なったほか、大正大学による調査は収録遺跡の数、採集遺物の量からも本調

査と対比すべきものであるため、表中に『鶴台考古』記載の踏査遺跡番号を併記した。

(4) 遺跡の時代・時期

遺跡の時代は、先土器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世に区分した。さらにはこれらの各時代の概観では、採集された遺物の年代幅から遺跡の存続期間がわかるように工夫し、極力細分にまとめた。縄文時代は草創・早・前・中・後・晚期に、弥生時代は前中期・後期に、古墳時代は前・中・後期に、中世は平安末～鎌倉初・鎌倉・室町・戦国に、近世は17・18・19世紀に区分した。

4. 調査の方法

(1) 踏査

調査は踏査により表面観察・採集を行う方法を探った。踏査は、観察不能な市街地・水田河川等を除いたので、結果としては耕作地が中心となつた。踏査に当たつては、耕作地の区画単位に構造・遺物の散布状況等を観察し、遺跡と認められた場所についてはボーリングステッキによる確認、範囲の記入、写真撮影を行い、2500分の1地図に範囲等を、調査表に所見等を記入した。採集遺物は大字単位ごとに地点番号を合成樹脂袋の遺物採集カードに記入しビニール袋に入れて持ち帰つた。現地で上地所有者や住民の方に会えた場合は地名、遺物発見の有無等を尋ね記録した。

(2) 整理

採集遺物は宿舎帰投後の夕刻から夜、雨天時を利用して直ちに水洗・注記し、その後、種類・時期等により分類し、可能なものは実測・採折を行つて整理した。整理後の遺物は、記録整理後に確定した遺跡名の地點別に、種類・整理区分に従つて袋に収めた。

調査記録は、地図上の位置・遺物散布範囲等を再確認し、所在地名・地番を地図・小字名・範囲で確認して後、遺跡名称を確定し、調査票に抄書した。しかし、明治期の地籍改定で小字の詳細に関する記録が失われてしまつた美業地区の大字深谷地内などについては、地図では小字名を確認しなかつたため、遺跡名は地元のおおまかな通称に基づいて決定するなど変則的にならざるを得なかつた。

(3) 遺跡範囲の把握

以上の作業結果を基に、調査所見・遺物の内容等から遺跡と認められるかどうかを検討した。遺跡と認められた場合には、遺物の散布状況・遺構の形状・立地・周囲の地形等により遺跡と認定される範囲を把握し、地図に記入した。しかし、時代・時期の異なる遺物が散布している遺跡の中において、時期別の範囲を把握するには至らなかつたため、第3部の各章で提示した時代別の遺跡分布図においては、遺跡の範囲ではなくドットで示した。

5. 既発見遺物の調査

割城でこれまでに発見された遺物は、一部が専門雑誌上や大正大学の調査報告に紹介されていたが、今回の調査では、既発見遺物の所在や内容等についても調査し、資料を保管されている個人・機関を訪ねたほか、調査中に住民の方から教えて戴いたことも再三ならずあつた。確認された遺物の中には、これまで町内で知られていないかった遺跡の出土資料や、遺跡の性格を考える上で重要な資料が含まれていた。その内容は第3部の各章および第5部の遺跡一覧で触れている。ただ、今回の調査では時間的な関係から、これら遺物の調査と資料化を完了することができなかつた。よつて実測図・拓本・図版ならびに遺物觀察表の紹介は別稿を期すこととし、今回は遺跡地図編とし概観するにとどめた。

(桃崎祐輔)

引用文献

- 井内長郎・東藤文紀 1993 「湯跡湖の地史－3・5 篠ヶ浦」『アーバンクタグ』32 クボタ
伊豆孟敏 1989a 「出土遺跡から」平成元年新聞 田中遺跡調査会
伊豆孟敏 1989b 「田中遺跡発掘調査の概要」平成元年十二月九日 説明資料
茨城県教育委員会 1982 「重要史跡調査報告書」I
茨城県教育委員会 1985 「重要史跡調査報告書」II
茨城県教育委員会 1986 「重要史跡調査報告書」III
小川和博・大庭康志・石川功 1996 「柳沢遺跡・養老山遺跡・芳行地北遺跡」上巣・出島合司遺跡調査会
大野延太郎 1986 「當附郡西カ瀬沼原跡行説」『東京人権学経緯』1 1-121・123
岡田毅三郎 1994 「霞ヶ浦新治郡牛久村古墳群発掘の概況」『東京人権学経緯』96
霞ヶ浦町教育委員会 1997 「霞ヶ浦遺跡調査報告書」
川口寅吉 1994 「茨城県下の石器遺跡」『人類学雑誌』9-94
清野謙次 1923 「霞ヶ浦沿岸の貝塚過溝式」1回刊行、第2回刊行「社会史研究」9-1
鹿島義高高等学校歴史研究会 1959 「茨城県新治郡出島村伏木山貝塚発掘報告」『Archaeology』25
小堀謙之助 1895 「霞ヶ浦霞浦沿岸附近ニ於ケル古跡」『東京人類学会誌』10-106
大正大学考古学研究会 1954 「霞ヶ浦古跡」4
霞ヶ浦町遺跡調査会 2000 「霞ヶ浦背山古墳」
霞ヶ浦町教育委員会 2000 「霞ヶ浦の文化財」
町田公綱にか 1957 「茨城県新治郡出島村大字安政安政平丘発掘報告」『Archaeology』24 茨城義高高等学校歴史研究会
杉山莊平 1965 「茨城県出島村岩坪平貝塚発掘報告」『紀要』72
早稲田大学史学系会報
鷹谷義彦 1982 「茨城県の地名」日本歴史地名大辞典第八卷 幸丸社
佐久間雄雄・宮本由紀子 1983 「8 茨城県」角川日本地名大辞典
角川書店
田中 韶 1999 「茨城県南・浦町牛込熊子座古墳の測量調査」『筑波大学先史学・考古学研究』10
田中哲・吉澤慎 1996 「茨城県出島村日向入神塚古墳の測量調査」『筑波大学先史学・考古学研究』7
筑波大学貝塚調査チーム 1995 「茨城県出島村八幡貝塚の測量・踏査報告」『筑波大学先史学・考古学研究』6 茨城大学歴史・人類学系
筑波大学貝塚調査チーム 1995 「茨城県出島村八幡貝塚の測量・測定

- 報告『筑波大学先史学・考古学研究』6
出島村教育委員会 1977発行、1981改定、1988再改定 『出島村の文化財』
- 寺門義範ほか 1977 『茨城県出島村男神演舞の研究』『西・道文化』
3 西ヶ浦文化研究会
- 東崎卓監修 1971 『出島村史』出島村教育委員会
- 中山信名修(栗田寛輔) 1901 『新編常陸國誌』(1976年叢書毎刊)
- 勝田満ほか 1991 『古墳・浦跡』沿岸貝塚の研究 昭和63年度
平成2年度文部省特定研究經費による調査研究概要』
筑波大学
- 増田耕一・岩崎卓也 1981 『筑波古代地域史の研究』
- 岩崎卓也・酒井誠 1991 『六塊鏡金銀当番』 次城東部古代地域史
研究一』 筑波大学歴史・人類学系
- 茂木悦男 1999 『・發掘古石碑出伏土浦御道跡改良工事に伴う埋藏
文化財調査報告書 坂道跡・船戸内遺跡・小原遺跡』
茨城県教育府四
- 山口行進 1992 『富士見家古墳群』出島村教育委員会吉田文俊 19
23 「石器時代遺物発見地名表」『東京人類学雑誌』
20:217

第3部 時代別遺跡概観

凡　例

- 1) 第3部では、先土器、繩文、弥生、古墳、奈良・平安、中世、近世と時代別に章を設けて記述することとした。ただし複数の時代に亘るものもあるので、各遺跡が帰属する時代については第5部を参照していただきたい。
- 2) 本文・表の遺跡番号は、第4部の遺跡地図及び第5部の遺跡一覧表に対応する。
- 3) 時代各説では、採集遺物の観察をもとにして、遺跡の時期・規模・性格などに関する若干の考察を加えた。今回把握された遺跡には、従前の分布調査や発掘調査、先行研究などで取上げられているものが含まれる。そこで、当該地の先行研究をまとめ、今回の遺跡分布調査の結果を照合して時代ごとに比較考察を行なった。
- 4) 遺跡調査報告及び引用文献は時代各説の末尾に記した。

I. 先土器時代

1. 出島半島の先土器時代研究史抄

出島半島において最初に確認された先土器時代遺跡は、大正大学考古学研究会によってメノウ製の挂器が1点採集された正直遺跡(240)である(大正大 1976)。

また、大正大学考古学研究会による1976年～1984年の分布調査では下野部の寺前1遺跡(157)から黒曜石製の尖頭器が、坂大平遺跡(281)からはガラス質黒色安山岩製の尖頭器と有舌尖頭器が採集されており、霞ヶ浦町域において先土器時代後半から縄文時代草創期¹⁾の遺跡が存在することが確認されている(大正大 1986)。

その後、1989年から1991年にかけて行われた柏崎の富士見塚古墳群(070)、田伏の為都南遺跡(271)、牛渡の清水遺跡(390)²⁾、戸崎に位置する柳沢1遺跡(451)・八双田南遺跡(453)の発掘調査(小川・大潤・石川 1996)でも先土器時代の石器が数点出土している。

また、1997年に実施された深谷の八千代台1遺跡(358)の発掘調査においても古代の溝状遺構の覆土中から先土器時代の尖頭器、石核、剥片が、埋没谷より縄文時代草創期の石核が出土している。

これらの一帯については拙稿(川口 2000)で公表し、出島半島の先土器時代・縄文時代草創期遺跡を集成するとともに、各遺跡の石器の技術的・形態的特徴を橋本編年(橋本 1995)に照らし合わせて時間軸上に整理した。その結果、以下の如きが新たに加わることとなつた。

最終氷期の人類の居住の痕跡がいつ頃まで遡りうるのかという点については、富士見塚古墳群から出土している高原山産の黒曜石を利用した台形様石器と硬質頁岩製の石刃を素材とする基部調整の中形のナイフ形石器の存在から、少なくとも橋本編年(橋本 1995)Ⅱa期の中段階(2.6万年)から居住活動が営まれていた可能性が高いことを指摘した(川口 前掲)。

また、牛渡に所在する清水遺跡から出土した最終氷期最寒冷期に位置付けられるナイフ形石器群に代表されるように出島半島の南側にはこれまで常緑地域で遺跡数が減少するとてきた橋本編年Ⅱb期の遺跡が多数点在している一方で、Ⅱc期前半の「砂川期」に相当するナイフ形石器群やⅢb期の長者久保・神子柴系石器群は確認されておらず、遺跡の形成にも消長がみられることが予測された。

2. 先土器時代の概観

(1) 採集された石器

拙稿(川口 前掲)で報告したものを含めると、霞ヶ浦町域において現在までに知られている先土器時代の遺跡

は9遺跡を数え、それに今回の分布調査で先土器時代の石器が採集された21遺跡を加えると計30の遺跡³⁾が確認されていることになる(第4図・第4表)。

分布調査で採集された石器のほとんどはガラス質黒色安山岩や頁岩、メノウ製の剥片や石核、両極剥片、両極石核など石器製作の際に生じる副製物であり、石器集中地點がこれらの遺跡のローム層下に眠っていることが予測されるが、細かな時期の推定が可能な資料は少ない。

西ノ人2遺跡(120)から採集された尖頭器の調整剥片、稻荷台遺跡(483)から採集された尖頭器がⅡc段後に属する可能性が考えられようか。

(2) 遺跡の分布と立地

先土器時代の遺跡は菱木川や一ノ瀬川、川尻川などの河川に面する台地縁あるいはこれらの河川により開削された小支谷に面する舌状台地の縁や谷頭などの少し奥まったところに分布しており、霞ヶ浦を直接望む台地縁には少ない(第4図)。

菱木川や一ノ瀬川、川尻川などの河川が近隣にみられない遺跡でも湧水点が近くに点在しており(第4図の青い範囲)、水源の確保が重要なことを物語っているとともにこうした水源に集まる動物の効果的捕獲、例えは待ち伏せ獣なども立地と関わっていたと思われる。

先土器時代遺跡の立地と方位の相関についてみたのが、第3表⁴⁾であるが、遺跡は台地縁に圧倒的に多く、方位も日照条件に恵まれている南向きに集中している。谷頭に立地する遺跡についても南向きが多い傾向がある。

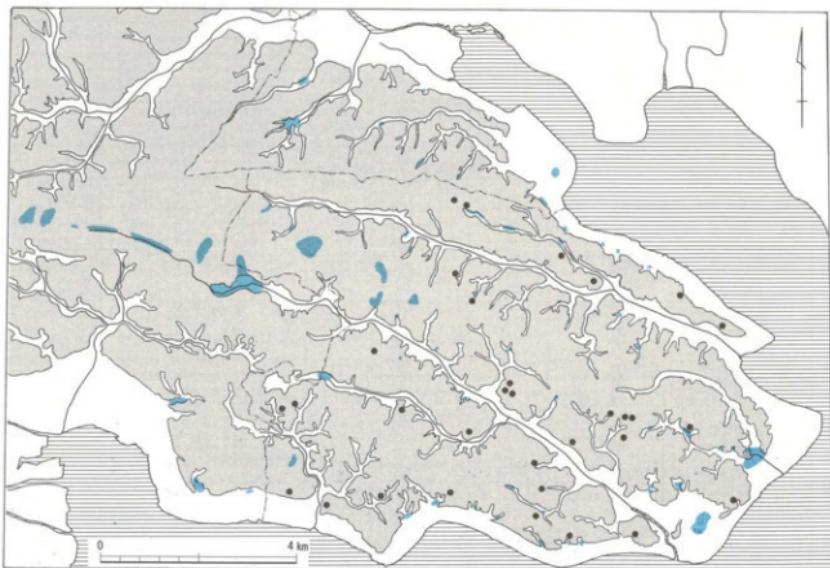
3. 最終氷期最寒冷期前後の環境

では、これらの遺跡が形成された最終氷期の霞ヶ浦町の周辺はどのような環境であったのだろうか。

2.9万年前から2.0万年前にかけては古鬼怒川が現在の桜川筋を流れており、坂の志岡崎付近で赤瀬川と合流し、鹿島灘の方へと流れていったことが知られている(斎藤 1994、鈴木・吉川・遠藤・高野 1993、井内・斎藤 1993)。その河川堆積物として形成されたのが3～5mの厚さのチャート、安山岩類、石英斑岩類から構成される上部標層である。

第3表 先土器時代遺跡の立地と方位の相関

立地	方位				計
	東	西	南	北	
台地縁	1	3	13	5	22
谷頭	0	2	4	1	7
計	1	5	17	6	29



第4図 先土器時代の遺跡と水源

その後2.0万年前後に比定される最終氷期最寒冷期になると古鬼怒川は桜川低地帯から小貝川低地帯へと流路を変更する。当時の海面は現在よりも80mも低く、鹿島灘の沖合まで陸地であった。これに伴い、霞ヶ浦低地帯での河川の下削作用は著しくなり、霞ヶ浦低地に形成されていた土浦礫層は段丘化した(斎藤 前掲、鈴木・吉川・遠藤・高野 前掲、井内・斎藤 前掲)。

霞ヶ浦低地を流れていた古鬼怒川流域の最終氷期最寒冷期前後の植生は鈴木と吉川、遠藤、高野らによって桜川中流低地に堆積している「下大島層」のデータに基づいて復元されている。それによると2.4~2.2万年前にはコナラ亜属を主とする冷温帶落葉広葉樹林が形成されていたのが、2.2万年前頃になるとコナラ亜属が急減し、逆に単維管束亜属が急増する傾向が見られるという(鈴木・吉川・遠藤・高野 前掲)。また、この移行期にはシナノキ属の増加が、AT降灰直後にはトウヒ属の増加がみられ、単維管束亜属とともに主要な森林構成要素になる。2.1万年から1.7万年頃にはコナラ亜属を主とする冷温帶落葉広葉樹林が衰退し、主にマツ属単維管束亜属やトウヒ属からなる冷温帶上部ないし亜寒帯下部の針葉樹林への変化が認められるという(鈴木・吉川・遠藤・高野 前掲)。

同様の傾向は上高津貝塚に隣接する谷部より得られたボーリング・コアの資料No.5のデータからも指摘されている(鈴木・辻本 1994)。

関東平野では台地上には森林的な景観が少なく、谷部から台地の斜面にかけて森林が成立していたことが辻誠一郎により指摘されているが(岡村・松藤・木村・辻・馬場 1998)、霞ヶ浦町域においても先土器時代の遺跡が立地する台地上には草原的な景観が、当時、河川が流れていた谷部から台地の斜面にかけてはうっそうとした森林が広がっていたのであろうか。

以上、先行研究が明らかにしてきた最終氷期最寒冷期前後の古植生のデータについて概観してきたが、ここに提示したデータはあくまでも古鬼怒川の上～中流域のデータであり、下流にはほど近い霞ヶ浦町域の古植生が同様のものであったとは限らない。

今後、一ノ瀬川や菱木川などによって開析された支谷の谷底に眠っている良好な花粉資料に基づいて検討する必要があるだろう。

4. 台地下における居住活動の展開

霞ヶ浦町域においてこれまでに先土器時代の遺物が確認されている地点はすべて台地上に限られているが、礫群構成礫や石器石材の採集活動など最終氷期の人類の居住活動が台地下にも展開していた可能性は極めて高いと思われる。霞ヶ浦町域では現在のところ確認されていないが、柳沢1遺跡(451)、八双田南遺跡(453)と同じ川尻用水系に位置する土浦市の六十塚遺跡では4点の礫から

第4表 先土器時代遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	発掘・採集	石器箇所(地点)	時期	遺物	文献
013	上小原遺跡	採集			ナイフ形石器(1件)	
017	小原1遺跡	採集			剥片(And)	
044	穴庭城	採集			剥片(Sh)	
061	山ノ越・移見御遺跡	採集			延長剥片(Ag)	
070	富士見塚古墳群 免掘(墓上)・履 溝内覆土	—	IIa期, IIc期		ナイフ形石器(Sob), 台形標石器(Obs, Qtz), 矢頭器(Ch), 延長剥片(And, Ag, And, Sh), 剥片(And)	川口2000
108	秋下遺跡	採集			剥片(And)	
120	西ノ入2遺跡	採集		IIc期	尖頭器・剥片(Sh)	
157	寺前1遺跡	採集		IIc期	尖頭器(Obs)	大正大1985, 川口2000
204	内原遺跡	採集			剥片(And)	
205	云敷遺跡	採集			延長剥片(And)	
206	羅道遺跡	採集			剥片(And)	
230	コシケ	採集			剥片(Hsh)	
240	正直遺跡	採集		IIb期?	擦器(Ag)	大正大1976, 川口2000
274	為都南遺跡	免掘(邊槽内覆 土)	—	IIa期?	ナイフ形石器(Sh), 石刃2(Seb., Hsh), 剥片(And, Ch)	川口2000
281	坂大平遺跡	採集		縄文早期	尖頭器(Ch, And), 二次加工石刃(1件)	大正大1976, 川口2000
329	坂遺跡	採集			剥片(Ag)	
336	八坂神社北遺跡	採集			剥片(And)	
358	八丁代台1遺跡	免掘(邊槽内覆 土)	—	IIc期, 縄文早 期	尖頭器(1件), 剥片(Hsh), 石核(1件), 4件(And)	川口2000
370	多戸3遺跡	採集			周邊剥片(And)	
390	清水遺跡	免掘		IIb期	ナイフ形石器(1件), 石刃2(Beb., Hor), 石刃(Hsh), 石核2(Beb., Hor)	川口2000
399	細内遺跡	採集			剥片(And)	
403	小山遺跡	採集			剥片(And)	
420	松原遺跡	採集			剥片(And)	
440	浅岡古遺跡	採集			剥片(And)	
451	柳沢1遺跡	発掘	—	IIb期	切出形石器(Sob), 石核2(Ag)	小川・大瀬・ 石川1996, 川 口2000
453	八反田南	免掘	—	IIc期	尖頭器(Hsh)	小川・大瀬・ 石川1996, 川 口2000
458	花木遺跡	採集			肉桿石核(And)	
483	輪寄古遺跡	採集		IIc期	尖頭器(Ob)	
502	松平遺跡	採集			擦器(And)	
505	七面り遺跡	採集			剥片(And)	

石器略記: Ag: アガベ, And: ガラス質黒色安山岩, Ch: チャート, Hsh: 硬質繊維質, Ob: オルニフェルス, Jas: 露玉, Obs: 加羅石, Qtz: 石灰, Sh: 斧石, Sob: 烧質頁岩, Tr: トロトロ(ガラス質黒色ディオサイト)

構成される極めて小規模な複数群が石器検出されている(小川・大瀬・大瀬、1997)。砾の総重量は15.2kgですべて完形の砾に復元されている。石材には安山岩と石英斑岩が利用されており、古鬼怒川の河原で採集してきたものである可能性が高い。

また、地城は大きく離れるが、最終氷期の人類が台地上へと進出していったことを物語る興味深い事例が確認されている。

神奈川県藤沢市No.211遺跡(大庭城跡)は引地川右岸の河岸段丘の低位面に立地する遺跡であるが、本遺跡から最終氷期の人類が石器石材を採集・選別した可能性のある遺構が報告されている(櫻井・松山・鈴木、2001a、2001b、鈴木、2001)。

2000年度の発掘調査で確認された石器石材採集・選別遺構とされている遺構の内部からは黒曜石裂のナイフ形石器とガラス質黑色安山岩、チャート、硬質繊維質凝灰岩裂の剥片も出土しており、遺構の上に堆積している火山灰層序から19000年前よりも古いものと考えられている。

石器石材採集・選別遺構とされている遺構の形成に人為的な要素が見いだせるか否かは今後の検討により具体

的になってゆくと思われるが、石器がそうした場所から出土していることを確認できたことはこれまで台地上の遺跡に偏っていた視点を転換させる貴重な成果と言える。

これらの事例から、霞ヶ浦沿岸地域において先土器時代の居住活動を考察するにあたっては台地上だけでなく、台地より下った嵩高地上や低地下、かつて「古鬼怒川」が流れていた現在の霞ヶ浦の湖底にも目を向ける必要があることが認識されよう。

5. 今後の課題

本稿では霞ヶ浦町域という極めて狭い現在の行政区分の範囲の中で、先土器時代の遺跡を概観してきたが、最終氷期の人類の居住活動がこのような狭い枠組みの中だけで完結していたとは考えにくい。

常総地域の北・中部は久慈川流域のメノウやトロトロ石(ガラス質黒色ディオサイト)、大洗海岸周辺のガラス質黑色安山岩などの石材原産地として知られているが(柴田・山本・鈴木、1998)、それらの石材を利用した石器が常総地域の南部に隣接する下総台地の遺跡から

出土することが近年、注目されている(橋本・前掲)。これらが人類の手を介して移動したことは確かなのだから、常磐地域北部の石材原産地とさらに南に位置する下総盆地のような消費地との間に位置する霞ヶ浦沿岸地域においてどのような居住活動が展開したのかが問題として浮かび上がってくる。長期的居住あるいは反復的利用により形成された多数の石器製作ブロックと砾群から構成されるような大規模遺跡が多いのだろうか。あるいは居住地(原産地)から原産地(居住地)への移動の過程で形成された道具や割裂物が数点しか出土しないような極めて点的な小規模遺跡が多いのだろうか。

ローム層の内部まで発掘調査された遺跡が少ないため、そうした問い合わせに答えることが可能となるのは当分のことになるだろうが、先土器時代の遺跡形成の背後にある遊動生活がどのようなものであったのかを具体的に解明していくためにもまずはどのような条件の場所に先土器時代の遺跡が形成されるのか、どの時期のどのような石器群が確認されているのかという基礎データを体系的に把握することが必要であろう。

第3表で先土器時代遺跡の立地と方位の相関関係について検討した結果、遺跡は台地縁に圧倒的に多く、方位も日照条件に恵まれている南向きに集中し、谷頭に立地する遺跡についても南向きが多い傾向にあることが明らかとなった。これまで発掘調査や踏査で先土器時代の遺物が確認されていないくとも、そうした条件を満たすような場所から今後、先土器時代の遺物が発見される可能性は十分に予測できる。

近世までを含めた全512遺跡の1割にも満たない先土器時代の遺跡を少しでも増やしてゆくためには今後もこれらの遺跡の周辺において継続的な踏査を行うとともに、これらの遺跡および周辺において発掘調査が実施される機会があればローム層の内部を積極的に調査する姿勢が望まれる。

(川口武彦)

註

- 1) ここでは縄文時代早中期の遺跡を便宜的に先土器時代に含めて概観する。
- 2) 摘編(川口・2000)では牛渡の八幡から採集された石器群として報告したが、その後の調査により1991年に伊東重敏氏が出島村教育委員会より委託を受け、建設分譲地として開発する土地を対象に実施した試掘調査において出土したものであることが判明した。

この場をお借りして訂正させて頂く。

3) 第4区には330の立地がブロック化されていることから先土器時代の遺跡は、見ると33の遺跡が確認されているようにみえるが、片倉城(041)では整れた2箇所の地点から、坂下高瀬路(281)では3箇所の離れた地点から石器が採集されていることから、片倉跡については個々の採集地点を記入した。

4) 先土器時代の遺物が採集されている道路は計30道路あるが、吉井見尾古墳群の出土資料においてはトレンチ内の出土地点、出土層位に関する情報が不明であるうえに、古墳群が造営されている台地が馬の背状の縦の使い形態を呈しており、古墳の頃く方針を決定しづらかったので今回は検討対象から外した。

引用文献

- 井内表郎・薦藤文紀 1993 「海跡の歴史-3・5 犬ヶ浦」『アーバンクイック』32
小川和海・大畠淳志・石川功 1996 「柳沢遺跡、斐老田遺跡、寿行地北遺跡」土浦・山島村合併遺跡調査会
小川和海・大畠淳志・沼田文博 1997 「六十塚遺跡」土浦市教育委員会・土浦市遺跡調査会・田村・津井千恵子監修組合
岡村道雄・松藤和人・木村英明・辻元一郎・馬場悠男 1998 『シンボジウム「日本の考古学」』田中石器時代の考古学』学生社・朝野善序・人冢初電・森浩一監修
川口武彦 2000 「霞ヶ浦内出土先土器時代石器群の検討」『漆良岐考古』22
菊暮登志雄 1984 「第1章 犬ヶ浦の形態」『霞ヶ浦一自然、歴史、社会』—茨城県地盤総合研究所・古今書院
櫻井準也・松山敦一郎・鈴木啓介 2001a 「2. 藤沢山No.211(大底城跡)遺跡」『湘南考古学同好会報』82
櫻井準也・松山敦一郎・鈴木啓介 2001b 「藤沢山No.211遺跡」『第7回石器文化研究交流会 発表要旨』—石器文化研究会・第7回石器文化研究交流会・しづおか実行委員会
柴田 徹・山本 壱・鈴木行郎・高松武次郎 1998 「II 6.武田石高遺跡から出土した石材の石質と石器採集地についての考察」『武田遺跡群から出土したガラス質風色安山岩の石材采掘について』『武田石高遺跡』—日石器・編文・出生時代編(第1分冊)・ひたちなか市教育委員会・財團法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
鈴木公雄・辻本辰夫 1992 「土浦市上高津貝塚周辺の後期更新世より完新世の古墳墓」『土浦市立博物館紀要』4
鈴木啓介 2001 「旧石器時代、石器石材の採集、逐別構造を確認した藤沢山No.211遺跡の概要」『東国歴史考古学研究所報』6 東国歴史考古学研究所
鈴木正幸・吉川昌典・進藤邦彦・萬野司 1998 「茨城県桜川低地における過去32,000年間の環境変遷」『第四紀研究』3 2-4
大正大学考古学研究会 1976 「磐台考古」3
大正大学考古学研究会 1985 「磐台考古」4
橋本裕旗 1995 「茨城の旧石器時代」『茨城県考古学協会誌』7

II. 繩文時代

1. 出島半島における縄文時代研究史抄

霞ヶ浦町(旧出島村)域に数多くの縄文時代貝塚が存在することは古くから知られており、大正時代から踏査や発掘調査が実施されている。既に貝塚遺跡を中心とした調査・研究史については千葉隆司による総括があり(千葉 1996)、屋上屋を重ねることになるが、ここでは千葉論文以降に発表された論考も含めて縄文時代の研究史を振り返っておきたい。

霞ヶ浦町域の縄文時代遺跡が学会にはじめて知られこととなつたのは1894年における川角寅吉による報告であり、踏査成果を記録した地名表の中に岩坪平貝塚の名前が挙げられている(川角 1894)。同じ時期には小笠龍之介や大野延太郎によるによる霞ヶ浦沿岸地域の遺跡の探訪報告がある(小笠 1895、大野 1896)。

1920年代になると清野謙次によって岩坪寄貝塚において小規模な発掘がはじめて実施され、完形の鉢形土器や注口上器、石棒、石劍、磨片・打製石斧、石器の出土が報告されている(清野 1923)。

また、同年には吉田文俊が作成した関東以北における石器時代遺物を出土する遺跡の地名表に新治郡下大津村戸崎と新治郡美並村の名前が見え、打石斧と石器の出土が報じられている(吉田 1923)。

その後1940年代~1950年代前半になると貝塚の貝層の形成時期を明らかにする学術的水準の高い発掘調査が酒詰伸男や廣瀬榮一によって安食平貝塚を対象として行われている(酒詰・廣瀬 1948)。また、2年後には岡田茂弘も加えて岩坪平貝塚の試掘調査も行われている(岡田・酒詰・廣瀬 1950)。

1950年代後半~1960年代になると高校・大学の学術調査が盛んに実施され、慶応義塾高等学校歴史研究会による安食平貝塚、神明台貝塚、貝ヶ崎貝塚の発掘調査が相次いで行われた(慶應義塾高等学校歴史研究会 1957、1959a、1959b、清水 1956、1961a、1961b、1963、1979a、1979b、1979c)。中でも貝ヶ崎貝塚から検出された2体の肩井人骨は霞ヶ浦沿岸地域における縄文時代の墓葬や埋葬形態を考察するための好資料として評価される。

1963年に行われた早稲田大学による岩坪平貝塚の発掘調査の報告では(杉山 1965、1968、1979)、出土した豊富な土器片鱗と魚骨から本貝塚で沿岸漁撈が行われていたことが指摘され、土器片鱗は地曳き網に使用されたと想定された(杉山 1965)。

また、同調査で出土した土器の中から加曾利EⅢ式と称名式との間を埋める土器型式も提唱された(杉山 1965)。

1970年代後半から1980年代前半には大学の考古学研究

会および考古学研究室による遺跡分布調査が行われるようになる。1976年~1983年にかけて大正大学考古学研究会による遺跡分布調査が出島半島全域を対象として行われ、1985年に刊行された調査報告は出島半島の先上器時代から中・近世に至る遺跡研究の基礎を作った遺跡分布調査報告として高く評価される(大正大 1985)。

1979年から1981年には筑波大学考古学専攻有志による霞ヶ浦沿岸地域における貝塚遺跡の分布調査が行われ、加茂平貝塚、加茂八幡貝塚、貝ヶ崎貝塚、平三坊貝塚が踏査されている(中島 1991)。また時を同じくして寺門義範と佐野加代子による男神遺跡の踏査(寺門・佐野 1977)、茨城県立歴史館による学術調査「県内貝塚における動物遺存体の研究」の一環で西方貝塚の踏査も行われ(斎藤 1980)、この時期に発表された茨城県内の貝塚遺跡を集めた論考(斎藤 1981、1982)にも霞ヶ浦町域の貝塚遺跡の名前と時期が掲載されている。

1980年代後半から1990年代前半では1988年から1990年にかけて行われた筑波大学による古霞ヶ浦沿岸貝塚の調査研究成果と能城秀喜の論考が注目される。

前田潮が研究代表者となって推進した古霞ヶ浦沿岸貝塚の調査研究では男神貝塚、神明台貝塚、西方貝塚、平三坊貝塚が対象とされ、貝塚の形態、立地、集落との関係、地理的分布を把握するために踏査、表面採集、測量調査が実施されている(田中 1988、1991a、1991b、中森 1991、前田 1991a、前田編 1991)。

また、1994年にはこの研究の流れを汲んで、加茂八幡貝塚の測量調査・踏査も行われている(筑波大学貝塚調査チーム 1995)。

1987年に斐良岐考古第9号に発表された能城秀喜の論文は岩坪平貝塚から採集された遺物を紹介したものであるが、後半部では岩坪平貝塚と同時期の出島半島における縄文時代中期初頭から晩期までの遺跡分布と遺跡数の変遷について論じており、当地域の大別式レベルでの遺跡分布と遺跡数の変化について初めて言及した論考と評価される(能城 1987)。

1990年代後半から2000年には霞ヶ浦町の貝塚遺跡を対象とした論文が学術雑誌にいくつか発表されている。1996年には茨城県考古学協会誌第8号に霞ヶ浦町(旧出島村)の貝塚遺跡を対象とした3篇の論文が収録され、貝塚研究のあるべき姿を問う提起(鈴木 1996)や貝塚から採集された貝類の分析から貝塚形成時の環境に言及する試み(日暮 1996)、貝塚遺跡を中心とした調査・研究史の総括(千葉・前掛)が提示されている。

1997年に茨城県史研究第78号に発表された常松成人の論文は古鬼怒渦沿岸地域に出現する「製塙遺跡」の成立背景について論じたものであるが、その付録に安食平貝

塚・平三坊貝塚から採集された製塙土器が紹介されており、さらには男神貝塚からも製塙土器が出土していることが述べられている(常松 1997)。

2000年に貝塚研究第5号に発表された佐藤誠の論文は古鬼怒濱の貝塚遺跡の形態を分類し、時期毎の変遷について検討したものであるが、中期～後期にかけて営まれた安食平貝塚、岩坪平貝塚、岩坪新屋敷貝塚、貝ヶ崎貝塚、平三功貝塚、男神貝塚、加茂八幡貝塚、岩坪寄居貝塚、神明台貝塚、西方貝塚、下江野貝塚、田伏中台貝塚、加茂平貝塚が取り上げられている(佐藤 2000)。

以上の研究史の概観から明らかなように霞ヶ浦町域における縄文時代研究は貝塚遺跡を対象として進められてきた。その背景には貝塚遺跡が縄文人の食糧資源や当時の周辺環境を復元する際の重要な材料であるという認識があるからであろう。

しかし、貝塚遺跡を残した縄文人たちが何處に暮らしていたのか、どのような場所で生業活動を展開していたのかといった生業・居住システムに関する問い合わせてゆくためには貝塚遺跡に限らず、貝塚遺跡以外の多くの包蔵地遺跡にも目を向ける必要があるのではないだろうか。

そうした問題がある一方で、これまでみてきた貝塚遺跡を対象としている多くの先行研究の中で看過できないのは、貝塚遺跡を残した縄文人の居住空間が隣接する包蔵地にある可能性を指摘した前田潮の提言である(前田 1991b)。

前田は古霞ヶ浦沿岸の貝塚に関する調査成果を総括する中でつくば市の旭台貝塚、霞ヶ浦町(旧出島村)の男神貝塚、神明台貝塚においてそれぞれ小支谷を介した隣接する台地上から包含地遺跡が発見され、それらが貝塚と時期的にも併行または隣接する関係にあることから、これらの包含地に集落址が存在する可能性を指摘している(前田 前掲)。

このような前田提言に答える近年の調査例として挙げられるのが、つくば市の旭台貝塚に隣接する旭台貝塚東遺跡(中谷津遺跡)の調査報告である(川村 1998)。

旭台貝塚の谷津は隔てた東に位置する旭台貝塚東遺跡(中谷津遺跡)は1996～1997年にかけて茨城県教育財团による発掘調査が実施され、先土器時代・縄文時代・古墳時代の遺構・遺物が確認されている(川村 前掲)。縄文時代後期の遺構では堀之内1期の住居址9軒、堀之内2期の住居址1軒、土坑内貝層4基が確認されている(川村 前掲)。

ところが、旭台貝塚では加曾利B式以降の遺物が多く採集されているのに対し、旭台貝塚東遺跡(中谷津遺跡)は時期的にやや先行する堀之内1～2期の集落が検出されており、微妙な時期差が認められる。

旭台貝塚の貝層形成が堀之内式期から始まっているのか、貝層の下に集落が存在しないのか判然としないが、現状では包蔵地遺跡が貝層形成の主体となる時期と必ず

しも同時期でない可能性を示唆する一例とみることも可能である。

ただし、旭台貝塚東遺跡(中谷津遺跡)の一例のみを以て他の貝塚遺跡と包蔵地遺跡との関係へと普遍化し、前述提言の妥当性を検討するには十分とは言えない。

貝塚遺跡に隣接する包蔵地遺跡に貝層形成の主体となる時期と同時期の集落が存在しているのか否かといった議論を進めてゆくためにもまずは、大正大学考古学研究会が実践してきたような包蔵地遺跡も対象とした詳細な遺跡分布調査の成果を整理する必要がある。

分布調査で遺物が採集された地点の下にどのような遺構が存在するのかを知ることは容易ではない。しかし、一方で同時期の遺跡を体系的に把握することができるという利点も持ち合わせている。

以下では霞ヶ浦町域の遺跡分布調査で確認された縄文時代早期から晩期に至るまでの貝塚遺跡、包蔵地遺跡の共時的分布とその通時的変遷について整理し、さらに採集された遺物の帰属時期の把握を通じて貝塚遺跡と隣接する包蔵地遺跡との間に同時期の共有関係があるのか否かという問題について検討する。

2. 縄文時代の概観(第5図・第7表¹¹⁾)

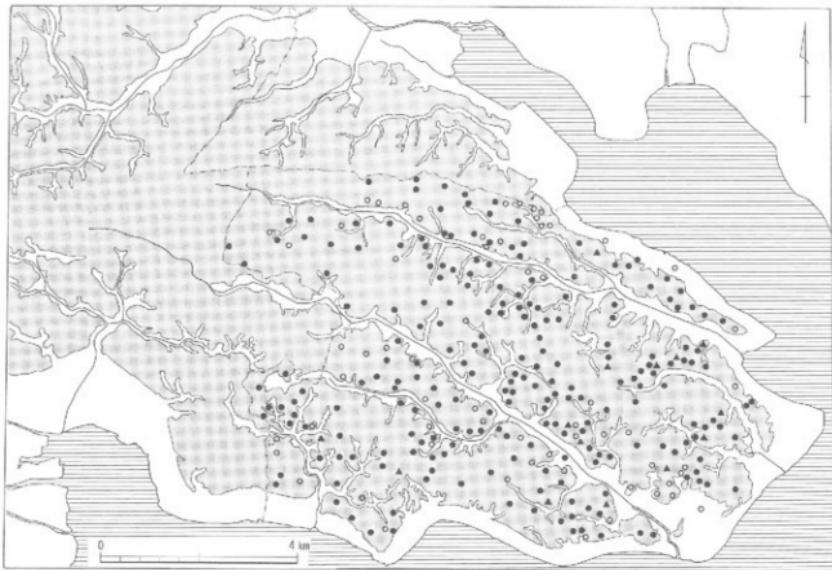
縄文時代の遺跡は既知の6包蔵地と12の貝塚²⁾を含め307遺跡を数え、全遺跡の割近くを占めている。

これらは帰属時期は不明だが縄文時代の遺物の出土が確認あるいは採集されている遺跡が95遺跡、発掘調査で出土が確認あるいは踏査で採集された縄文土器の型式から時期が判別可能な遺跡が242遺跡ある(第5～6表)。第5図に●で示してあるのが出土あるいは採集された縄文土器の型式から時期が判別可能な遺跡であり、○は帰属時期は不明だが縄文時代の遺物の出土が確認あるいは採集されている遺跡、▲は貝塚遺跡である。

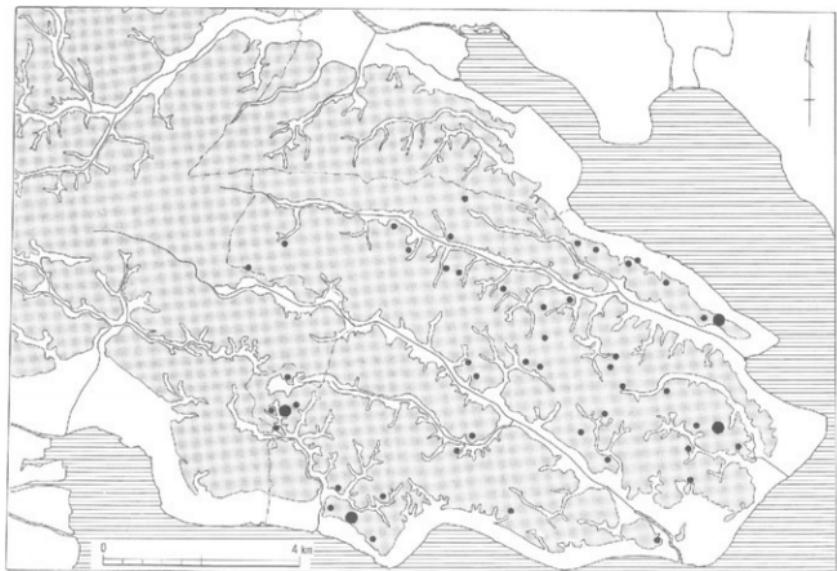
ただし、第5図に示した縄文時代遺跡がすべて同時期に営まれていたわけではない。実際は異なる時期に生活を営んでいた縄文人が様々な目的で土地を利用し、それによって形成された遺跡が累積していった最終的な姿なのである。

また、これらの遺跡には住居址が検出されている集落跡もあれば、数基の土坑や陥穴と遺構に伴わない遺物が確認されている遺跡もあるし、遺物が数点採集されている遺跡もあれば、たくさんの遺物が採集されている遺跡も含まれている。必ずしも均質でないこれらの遺跡から縄文人の生業・居住システムへと接近してゆくための基礎データを提示するためにはどのような基準を設ければよいのだろうか。

そこで着目したのが、遺跡から出土が確認あるいは採集される遺物の量である。遺跡から出土が確認あるいは採集された遺物の量が必ずしも遺跡規模の大小を反映し



第5図 縄文時代の遺跡



第6図 縄文時代早期の遺跡

ているとは限らないが、縄文人が遺跡を繰り返し利用あるいは長期的に占有すれば、遺跡から出土あるいは採集される遺物の量は当然のことながら、増加する。つまり、相対的に長期間あるいは反復的に占有された遺跡と短期的な占有の結果、形成された遺跡との間の遺物量には、隔差が生じてくるのである。

従って、遺物量の多い遺跡は相対的に長期間あるいは反復的に占有された遺跡、遺物量の少ない遺跡は短期的な占有の結果、形成された遺跡とみることができる。

第6~10図は時期別に遺跡の分布と遺物量の相関関係を示したものであるが、大きい●は遺物量の多い遺跡、小さい●は遺物量の少ない遺跡を表している。どの時期も大半を占めているのは遺物量の少ない遺跡であるが、遺跡数や遺物量の多い遺跡の分布は全時期を通じて一様でないことがみてとれる。以下では時期別の遺跡分布と遺物量の多い遺跡について概観してゆこう。

3. 縄文時代早期(第6図)

早期に比定される遺跡は50遺跡ある。これらの遺跡からは撫条文系、沈線文系、条痕文系の土器が発掘調査において出土が確認あるいは踏査において採集されている。

(1)撫条文系

撫条文系上器の出土が確認あるいは採集されている遺跡は7遺跡ある。柳梅台遺跡(441)のように、ノ瀬川右岸の独立丘陵上に立地する遺跡もあるが、その大半は菱木川や川尻川、ノ瀬川の上流のやや奥まったところに立地している。

7遺跡のうち6遺跡が遺物量の少ない遺跡であるが、発掘調査で確認された柳沢1遺跡からは船形台式に帰属する上器が100点以上も検出されており、隣し穴も20基確認されている(小川・大洲・石川 1996)。住居址は確認されておらず、狩り場として利用された空間と思われる。

(2)沈線文系

沈線文系土器の出土が確認あるいは採集されている遺跡は30遺跡ある。前段階に比して、遺跡数は増加しており、町域のいたるところに遺跡が形成されているが、ノ瀬川右岸には何故か分布が認められない。前段階と同様、大半の遺跡は遺物量の少ない遺跡であるが、下ノ原遺跡(270)、加茂山ノ神遺跡(485)、富上見塚古墳群(070)のように遺物量の多い遺跡もある。

下ノ原遺跡は1997年に発掘調査が実施され、当該期の良好な資料が得られている。撫条文系の土器も1点出土しているが、大半は出戸下層式・三戸式に帰属するとと思われる土器である。

また、下ノ原遺跡の近隣に位置する為都南遺跡(274)は1989年から1990年にかけて発掘され、出戸下層式とともに常識地域でも出土例の少ない出戸上層式土器の破片が出土している。この近辺が当該期の居住活動の活発な

地域であったことがうかがえよう。

1989年から1990年にかけて調査された富士見塚古墳群では出戸下層式・三戸式が大量に出土している。正式報告書が未刊行であるため、これまでその内容は知られていないかったが、霞ヶ浦町域においては現在のところ、沈線文系土器の出土量が多い遺跡のひとつに数えられる。

(3)貝殻条痕文系

貝殻条痕文系上器の出土が確認あるいは採集されている遺跡は15遺跡ある。前段階に比して、遺跡数は若干、減少し、その分布は川尻川の左岸地域と一ノ瀬川左岸地域、菱木川左岸地域にみられるが、撫条文系上器や沈線文系土器が出土あるいは採集されている遺跡の分布との間に微妙な差がみられ、前段階のように広域に広がりを見せるというよりはむしろ狭い範囲に偏る傾向がある。

前段階と同様、遺物量の少ない遺跡がその大半を占めているが、1989年~1990年にかけて調査された富士見塚古墳群では霞ヶ島台式に位置付けられる貝殻条痕文系の土器が大量に出土している。霞ヶ浦町域においては現在のところ、貝殻条痕文系土器の出土量が最も多く確認されている遺跡である。

早期の貝塚は霞ヶ浦町域では確認されていないが、出島平島の北西端にはハマグリとマガキを主体とし、アカニシ、ハイガイ、オキシジミガイ、シオフキガイなど内湾奥の潮洞帯に棲息するものから構成される地藏窪貝塚がかつて存在し、隣接する地蔵平遺跡からは大量の貝殻条痕文系の土器とともに12基の摺穴が検出されている(平岡・湯原・荒井 1995)。貝塚遺跡に隣接して居住域が営まれていたことを示す好例として注目される。

4. 縄文時代前期(第7図)

前期に比定される遺跡は155遺跡ある。遺跡数は前段階に比べると飛躍的に増加しており、遺物量の少ない遺跡が多い点は早期と共通しているが、遺物量の多い遺跡は早期に比べると増加している点が特徴である。

(1)花積下層式期

前期初頭の花積下層式の出土が確認あるいは採集されている遺跡は霞ヶ浦町域では現在の所、確認されていないが、1997年~1998年にかけて茨城県教育財団により実施された土浦市の下郷古墳群の発掘調査では花積下層式期の住居址が7軒検出されている(平石 2000)。

(2)闇山式・黒浜式期

霞ヶ浦町域において確認されている縄文時代前期の居住の痕跡は闇山式期からのであるが、採集されている土器の大半が鐵龍土器の小破片であり、闇山式に後続する黒浜式と区別することが難しい。

前期前半の闇山式土器・黒浜式土器・鐵龍土器の出土が確認あるいは採集されている遺跡は108遺跡ある。全遺跡のうち、遺物量の多い遺跡は7遺跡に限られ、遺物



第7図 縄文時代前期の遺跡



第8図 縄文時代中期の遺跡

量の少ない遺跡が圧倒的に多い。遺物量の多い遺跡は下江野貝塚(163)、椎原遺跡(174)、原ノ坊遺跡(177)、白道遺跡(197)、南遺跡(382)、中島遺跡(392)、柳沢I遺跡(451)であり、中でも一ノ瀬川右岸の微高地に位置する中島遺跡⁵⁾は他の台地上の遺跡とは立地が異なっている点⁶⁾で興味深い。

(3)浮島式・興津式・諸葛式期

前期後半の浮島式土器、興津式土器、諸葛式土器の出土が確認あるいは採集されている遺跡は計73遺跡あり、前段階より若干の減少がみられる。全遺跡のうち、遺物量の多い遺跡は7遺跡に限られ、遺物量の少ない遺跡が圧倒的に多い。遺物量の多い遺跡は塚下台2遺跡(026)、権現遺跡(111)、施足遺跡(146)、下江野貝塚5)、白道遺跡、中島遺跡、柳沢I遺跡、小宮遺跡(454)である。

白道遺跡は前期後半の闇山式土器・黒浜式土器、鐵維土器の破片が採集されている遺跡でもあるが、大正大学考古学研究会による踏査では知られていない(大正大 1985)。本遺跡からは大量の土器とともに石皿や磨石などの礫石器、両柄片耳、両柄石核など石器製作の際に生じる割裂物も採集されており、達主の方の話によれば過去に山林であったところを開拓して畑地にした際に相当量の土器とともに焼上が確認されたようであり、炉を持つ住居跡の存在が想起される。

また、本遺跡から当該地域では希少な諸葛式土器も採集されている。

5. 繩文時代中期(第8図)

中期に比定される遺跡は161遺跡ある。遺物量の少ない遺跡が多い点は前期と共通しているが、遺物量の多い遺跡は前期よりさらに増加している。

(1)五領ヶ台式・下小野式期

中期初頭の五領ヶ台式・下小野式の出土が確認あるいは採集されている遺跡は富士見塚古墳群(070)、香取・山下遺跡(098)、八千代台I遺跡(358)、中島遺跡(392)の4遺跡である。いずれも遺物量の少ない遺跡であるが、八千代台遺跡からは五領ヶ台式土器の完形に近い深鉢形土器が出土した1基の土坑が検出されており、幼児埋葬墓底の可能性がある⁷⁾。

香取・山下遺跡のような例外もあるが、当該期の遺跡は後続する阿玉台式土器・加曾利E式土器の出土が確認あるいは採集されている遺跡とは分布が重ならず、遺跡占有が連続しない点に特徴がある。

(2)阿玉台式・勝坂式期

阿玉台式・勝坂式土器の出土が確認あるいは採集されている遺跡は61遺跡あるが、大半は阿E台式の出土が確認あるいは採集されている遺物量の少ない遺跡である。勝坂式は南根本遺跡(193)、千鶴川遺跡(203)、神明台貝塚(276)の3遺跡において採集されている。

遺物量の多い遺跡は小原I遺跡(017)、馬場平I遺跡(034)、香取・山下遺跡、萩平木郷遺跡(112)、稲荷前遺跡(113)、柿根平遺跡(152)、猪之頭遺跡(162)、岩坪新屋敷貝塚(180)、南根本出戸遺跡(191)、南根本遺跡、千鶴川遺跡、下大堤天ノ宮遺跡(226)、田伏中台貝塚(266)、神明台貝塚、大平遺跡(281)、西方貝塚(302)、高谷新田遺跡(389)、貝ケ崎貝塚(405)、平三坊貝塚(436)、柳沢I遺跡(451)、加茂平貝塚(473)、榎後遺跡(476)、榎前遺跡(478)、榎遺跡(490)、加茂八幡貝塚(503)が挙げられる。

これら25遺跡のうち岩坪新屋敷貝塚、田伏中台貝塚、神明台貝塚、西方貝塚、貝ケ崎貝塚、平三坊貝塚、加茂平貝塚、加茂八幡平貝塚は貝塚遺跡であり、後続する加曾利E式期まで占有されるものが多い。

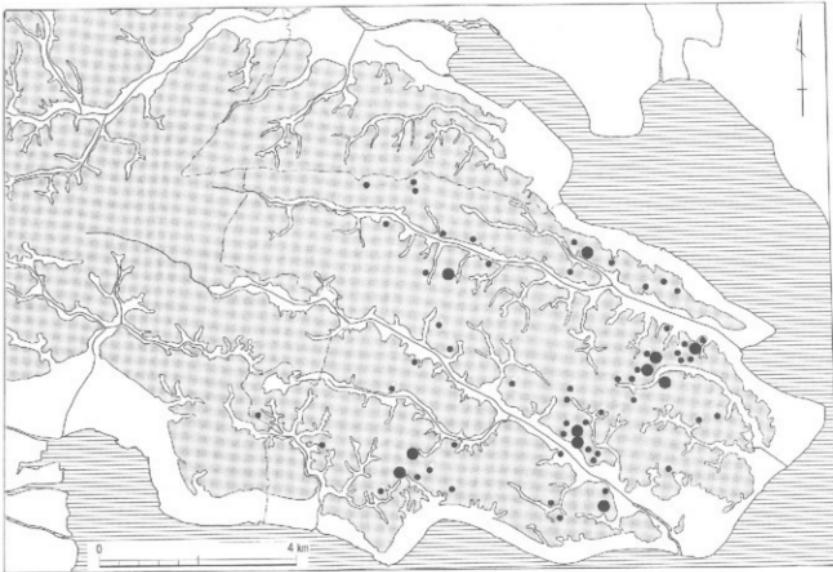
今回の踏査では確認できなかったが、鈴木正博は安食平貝塚(049)において小貝層が阿玉台Ia式期から當まれていることを指摘している(鈴木 前掲)。上述した全ての貝塚遺跡で阿玉台式の古い段階から貝層の形成が始まっているのか否かは今後、解明してゆかなければならぬ課題であるが、貝塚遺跡が確認されていない前期と比べて貝類の採集活動が活発となっていることが想定される。

(3)加曾利E式・曾利式期

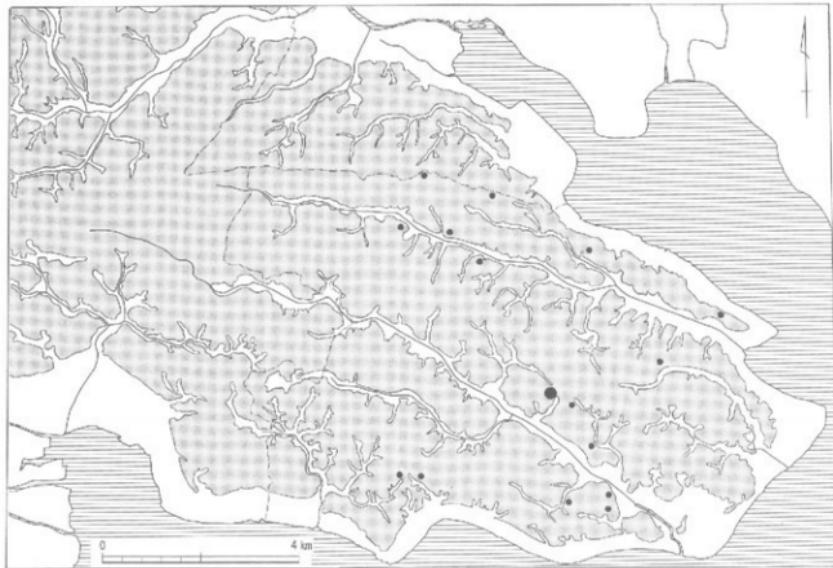
加曾利E式・曾利式土器の出土が確認あるいは採集されている遺跡は121遺跡ある。全時期を通じて最も遺跡数が増加する時期であるが、大半は遺物量の少ない遺跡である。遺物量の多い遺跡は小原I遺跡、馬場平I遺跡、香取・山下遺跡、萩平遺跡(108)、権現遺跡(111)、萩平木郷遺跡(112)、マケシ遺跡(181)、稻荷前遺跡、柿根平遺跡、猪之頭遺跡、岩坪新屋敷貝塚、南根本出戸遺跡、南根本遺跡、南根本原口遺跡(199)、千鶴川遺跡、六枚遺跡(205)、東山台遺跡(215)、下大堤天ノ宮遺跡、大坂上遺跡(234)、稻木山遺跡(235)、田伏中台貝塚、神明台貝塚、人平遺跡、西方貝塚、高谷新田遺跡、小山遺跡(403)、貝ケ崎貝塚、突抜乎遺跡(433)、平三坊貝塚、柳沢I遺跡、加茂平貝塚、榎後遺跡、榎前遺跡、榎遺跡、松本遺跡(502)、加茂八幡貝塚、鶴平遺跡(507)、七曲り遺跡(508)が挙げられる。

大半の遺跡は加曾利E I ~ E III式まで継続して占有される遺跡であるが、加曾利E IV式の出土が確認あるいは採集されている遺跡は少なく、型式設定の契機となつた岩坪平貝塚(173)と加茂地区に位置する榎後遺跡、榎平遺跡が挙げられるのみである。この時期の遺跡は後期まで連続して占有される傾向が指摘できる。

また、当該地域では希少な曾利式土器が小原I遺跡、西入間遺跡(059)、岩坪新屋敷貝塚、南根本出戸遺跡、六枚遺跡、大坂上遺跡、中妻木3遺跡(349)、小山遺跡、加茂平貝塚において採集されている。遺物量の多い88遺跡のうち、8遺跡が貝塚遺跡であるがこのような遺物量の多い貝塚遺跡とは対照的に遺物量の少ない貝塚遺跡もある。



第9図 繩文時代後期の遺跡



第10図 繩文時代晩期の遺跡

牧ノ内貝塚(228)は加曾利E式および後期の堀之内式土器と少量のサルボウ、ヤマトシジミが採集されている貝塚遺跡であるが、大正大学考古学研究会による踏査では知られていなかった(大正人: 1984)。本貝塚の貝層の形成時期が加曾利B式期まで遡るのは今後の資料の増加あるいは発掘調査により検証される必要があるが、今回の踏査で破壊した貝の散布している範囲に地主の方の許可を得てボーリングステッキを押してみたところ、10cmほどの薄い貝層が4m×4m程度の範囲に包囲されていることを確認した。貝の分布範囲を考慮すると住居跡あるいは土坑内貝層の可能性がある。

6. 繩文時代後期(第9回)

後期に比定される遺跡は72遺跡ある。遺物量の少ない遺跡が多い点は中期と共通しているが、遺物量の多い遺跡は中期より減少している。

(1) 称名寺式期

後期初頭に位置付けられる称名寺式の出土が確認あるいは採集されている遺跡は安食平貝塚(049)、荻平遺跡(108)、岩坪平貝塚(173)、男神遺跡(232)、男神貝塚(233)、中島遺跡(392)、平三坊貝塚(436)、加茂平貝塚(473)、松本遺跡(502)、加茂八幡貝塚(500)、加茂八幡原遺跡(506)、鴨平遺跡(507)の12遺跡である。いずれも遺物量の少ない遺跡であるが、加曾利EIV式期から古有が連続するものがある。

なお、注目すべき資料として男神貝塚からは東北地方北部に分布の主体を持つ後期初頭～前葉に位置付けられる門前式の土器片が1点採集されていることを付記しておく。

(2) 堀之内式期

堀之内式の出土が確認あるいは採集されている遺跡は37遺跡ある。前段階に比べると遺跡数は増加しており、それらから独立する形で遺物量の少ない遺跡が内陣に分布する傾向がある。

遺物量の多い遺跡としては安食平貝塚、荻平遺跡、マケシ遺跡(181)、男神遺跡、男神貝塚、柄形遺跡(374)、平三坊貝塚、加茂八幡貝塚の9遺跡が挙げられる。

(3) 加曾利B式期

加曾利B式の出土が確認あるいは採集されている遺跡は31遺跡ある。遺跡数は前段階よりも減少しているが、前段階と同様に遺物量の多い遺跡から独立して遺物量の少ない遺跡が内陣にも分布する。遺物量の多い遺跡としては安食平貝塚、岩坪平貝塚、畠合遺跡(174)、原ノ坊遺跡(177)、男神遺跡、男神貝塚、平三坊貝塚、加茂八幡貝塚の8遺跡が挙げられる。

(4) 菅谷式期

菅谷式の出土が確認あるいは採集されている遺跡は安食平貝塚と加茂八幡貝塚の2遺跡だけであり、いずれも

遺物量が少ない。前段階に比べると遺跡数は大幅に減少しているが、菅谷式は小破片の状態では加曾利B式と安行1式との区別が難しく、そうしたことでも遺跡数・遺物量が少ない理由のひとつに挙げられるかもしれない。

(5) 安行1～2式期

安行1～2式の出土が確認あるいは採集されている遺跡は安食平西遺跡(048)、安食平貝塚、平遺跡(052)、正佛田遺跡(165)、岩坪平貝塚、畠合遺跡、岩坪丸山遺跡(178)、男神遺跡、男神貝塚、大坂上遺跡(231)、中島遺跡(392)、平三坊貝塚(436)、加茂八幡貝塚、鶴平遺跡の計14遺跡が挙げられる。前段階に比べると遺跡数は増加しているが、いずれも遺物量の少ない遺跡ばかりである。

7. 繩文時代晚期(第10回)

晚期に比定される遺跡は16遺跡ある。その大半は晩期前半の安行3式に帰属するものであるが、加茂八幡貝塚(503)からは前浦式と思われる土器片が、後田遺跡(015)や小原3遺跡(024)、富士見塚古墳群(070)、和田台遺跡(213)からは晩期終末に帰属するとと思われる口縁に浮線網状文やB突起が配された土器や胴部に条痕や細い糸条文が施された千綱式・荒海式土器の出土が確認あるいは採集されており、当該地域においてもこの時期まで土地利用がされていたことが明らかとなった。

遺跡から出土あるいは採集される遺物量は極めて少なく、やや奥まったところに立地する傾向がみられるが、和田台遺跡からは繩文時代晩期に帰属するとと思われる数点の土器とともに100点以上の石器とその製作の際に生じた剥片や鋭片、石核、兩極剥片・石核などの副製物が数百点も採集されており、特異な様相を示している。何らかの遺構に伴うもののか否か興味深い資料である。

8. 遺跡分布の変遷(第6～10回・第5・7表)

これまで早期～晩期の時期別の遺跡分布と遺物量の多い遺跡について概観してきたが、ここでは再確認する意味でその変遷を辿ってみよう。

まず、早期であるが、遺物量の多い遺跡は極めて少なく、その周りに遺物量の少ない遺跡が点状に散らばるパターンが見られた。遺物量の多い遺跡は柳沢1遺跡のように内陸にもあるが、他の遺跡は海岸寄りに分布している。逆に遺物量の少ない遺跡は内陸に多くみられた。

採集あるいは出土が確認された土器の時間差により、遺跡の立地に差がみられた。撫糸文系土器が確認されている遺跡の大半が、蓼本川や川尻川、一ノ瀬川の上流のやや奥まったところに立地しているに対し、斎綱文系土器が確認されている遺跡は一ノ瀬川右岸を除く、町域の至る所で確認でき、条痕文系土器の確認されている遺跡は川尻川の左岸地域と、一ノ瀬川左岸地域、蓼本川左岸地域に立地する傾向がみられた。

前期になると、遺跡数は増加し、町域の至る所に遺物量の少ない遺跡が、所々に遺物量の多い遺跡が分布するパターンがみられた。

遺物量の多い遺跡が霞ヶ浦を直接望む台地縁にも形成されていた早期とは異なり、遺物量の多い遺跡はいずれも川尻川の上流部や一ノ瀬川・菱木川に挟まれた台地の支谷が入り組んだ奥部に立地する傾向がみられた。また、遺物量の少ない遺跡は海岸寄りにも分布するが、圧倒的に内陸に多い。この時期に顕著であった海進と無縫の現象ではないだろう。

大正大学考古学研究会の報告では黒浜期の遺跡が支谷沿いの内陸部に多いに対し、それ以降の遺跡は内陸にも形成されるが、河川流域の台地上に多い傾向があることが指摘されている(大正大 1985)。

しかしながら、第7回と第7表からは少なくとも鐵器土器の出土が確認あるいは採集されている遺跡と浮島式・興津式・諸磯式土器の出土が確認あるいは採集されている遺跡との間に有意な分布差は認められない。むしろ、同じような遺地パターンが読みとれる。

中期になると遺跡数はさらに増加し、遺物量の多い遺跡から独立して散らばっていた遺物量の少ない遺跡も遺物量の多い遺跡が増加したことによりその周辺に密集するパターンがみられた。遺物量の多い遺跡は海岸寄りにも分布するが、内陸にもみられた。

五鏡ヶ台・下小野式期の遺跡は、後続する阿玉台式土器・加曾利E式土器の出土が確認あるいは採集されている遺跡とは分布が重ならず、遺跡占有が連続しない。

阿玉台式から加曾利E式期の遺跡は分布がほぼ重なり、貝塚遺跡と遺物量の多い遺跡において阿玉台Ia式期から加曾利EIII式期まで継続的に占有される傾向がある。中期終末の加曾利EIV式期の遺跡は少ないが、後期の遺跡分布を重なる傾向がある。

後期になると、遺跡数は激減し、遺物量の多い遺跡の周辺に遺物量の少ない遺跡が分布するパターンがみられた。前時期に内陸にも多く分布していた遺物量の多い遺跡は萩原遺跡(108)を除きいずれも海岸寄りに分布が移っており、前時期から漸移的に進行していた海退現象と連動していると思われる。

遺物量の少ない遺跡のなかには遺物量の多い遺跡から独立して内陸にも分布するものもあるが、それらはいずれも堀之内式・加曾利B式期に帰属するものであり、称名寺式・曾谷式・安行I~2式期のものは少ない。

遺物量の多い遺跡の大半は貝塚遺跡であり、曾谷式期に断絶が認められるものもあるが、概ね貝塚遺跡と隣接する遺物量の少ない包蔵地遺跡において称名寺式期から安行I~2式期にかけて継続的に占有される傾向がある。

晩期になると遺跡数はさらに激減し、遺物量の少ない遺跡が点状に分布するパターンがみられた¹⁴⁾。これまでの調査では安行3式期までの居住が確認されていたが(大正大 1985、能城 1987)今回の分布調査では晩期終末

第5表 霞ヶ浦町域における縄文時代遺跡数の変遷

時 期	型 式	遺 跡 数
早 期	撫糸文	7
	沈線文	30
	条痕文	15
前 期	関山・黒浜	108
	浮島・興津・諸磯	73
中 期	五鏡ヶ台・下小野	4
	阿玉台・勝坂	61
	加曾利E・曾利	121
後 期	称名寺	12
	堀之内	37
	加曾利B	31
	曾谷	2
	安行I~2	14
晩 期	安行3	11
	前浦	1
	千網・荒海	37

の千網式・荒海式期の遺物が確認され、この時期まで継続して土地利用がされていたことが明らかとなった。

全時期を通じて共通していたのは一ノ瀬川とその支流に挟まれた深谷地区の半島状の台地上に遺物量の多い遺跡が認められなかった点である。また、内陸においても中期の香取・下山遺跡(098)を除けば遺物量の多い遺跡はほとんど見られず、起伏がない平坦な地形に加えて、海岸線からも離れているという立地が居住に適した条件ではなかったのかもしれない。

以上のような遺跡分布・遺跡数の変遷は霞ヶ浦を挟んだ対岸に位置する玉里村内の縄文時代遺跡や陸上遺跡群の動向(玉里村内遺跡分布調査団 1996、1997、小玉

1999、中村 1996)とも共通する点が多く、霞ヶ浦沿岸地域一帯において遺跡群の成り立ちと変化が連動している可能性は極めて高いと思われる。

また、中期~晩期の遺跡分布と遺跡数の変遷について能城秀喜の先行研究の成果(能城 前掲)を概ね追認する結果が得られた。

しかしながら、今回の分布調査により得られた遺跡の分布と遺物量に関するデータが畠地の耕作時期・深度、発掘調査の面積、大別土器型式の時間幅の長短、土器の耐用年数、使用時間などいくつかのバイアスを被っていることも考慮しておく必要がある。

従って、大別土器型式の時間幅や土器の耐用年数、使用時間が異なると予測される、早期~晩期までの遺跡数・遺物量を同じ次元で比較するといったことが必ずしも有

第6表 繩文時代中・後期における貝塚遺跡と隣接包蔵地遺跡の時期的関係

阿玉台・勝坂 加曾利B・曾利	安食平貝塚 平道跡	田伏中台貝塚・山ノ合道跡	神明台貝塚 トウメキ道跡
阿玉台・勝坂 加曾利B・曾利	貝ケ崎貝塚 小山道跡	阿玉台・勝坂 加曾利B・曾利	平三坊貝塚 突抜平道跡
阿玉台・勝坂 加曾利B・曾利	岩坪平貝塚 組合道跡・木ノ下道跡	岩坪新御敷貝塚 前畠道跡	阿玉台・勝坂 加曾利B・曾利
阿玉台・勝坂 加曾利B・曾利	加茂八幡貝塚 松本道跡 帶平道跡	加茂平貝塚 後畠道跡 桜原道跡 桜道跡	阿玉台・勝坂 加曾利B・曾利
岩名寺 堀之内 加曾利B 曾谷 安行1~2	安食平貝塚 安食平西道跡 平道跡	半三坊貝塚 寄田前道跡	岩名寺 堀之内 加曾利B 曾谷 安行1~2
岩名寺 堀之内 加曾利B 曾谷 安行1~2	加茂八幡貝塚 松平道跡 柄形?道跡 桜原道跡 桜道跡	岩坪平貝塚 組合道跡 木ノ下道跡	岩名寺 堀之内 加曾利B 曾谷 安行1~2
岩名寺 堀之内 加曾利B 曾谷 安行1~2	岩坪平貝塚 組合道跡 木ノ下道跡	岩坪平貝塚 組合道跡 木ノ下道跡	岩名寺 堀之内 加曾利B 曾谷 安行1~2

意な作業とはならないかもしれない。

ただし、大別土器型式の時間幅の長短や上器の耐用年数、使用時間に差があったことを差し引いたとしても、大別土器型式レベルでの共時的分布をみた時に遺跡間に遺物量の隔差が生じている現象は土器の耐用年数や使用時間、大別土器型式の時間幅の差という要因では十分に説明することが出来ない。

従って、冒頭でも述べたように大別土器型式レベルでの共時的分布をみた時に遺跡間に遺物量の隔差が生じる背景に縄文人による遺跡の利用頻度の差という要因があつたことも考慮する必要があると考える。

9. 貝塚遺跡と隣接包蔵地遺跡の時期的関係（第6表）

冒頭の研究史抄において言及したが、前田灝は古瀬ヶ浦湾沿岸の貝塚に関する調査報告の成果を総括する中でつくば市の旭台貝塚、嶺ヶ浦町(旧出島村)の男神貝塚、神明台貝塚においてそれぞれ小支谷を介した隣接する台上地上から包蔵地遺跡が発見され、それらが貝塚と時期的にも併行または隣接する関係にあることから、これらの包蔵地に集落址が存在する可能性を提言している(前田前掲)。

ここでは嶺ヶ浦町域の貝塚遺跡と隣接する包蔵地遺跡の例に基づいて、その関係が認められるのか否かについて検討してみたい。

まず、中期の貝塚遺跡であるが、安食平貝塚・田伏中台貝塚・牧ノ内貝塚・貝ケ崎貝塚・平三坊貝塚・加茂八幡貝塚・加茂平貝塚についてはそれぞれ隣接する包蔵地遺跡に時期的共有関係を認めることが出来た(第6表上段)。

ただし、大半の貝塚遺跡が阿玉台・勝坂式期と加曾利B・曾利式期の両時期に渡って占有されているのにに対し、安食平貝塚に隣接する平道跡、田伏中台貝塚に隣接する山ノ合道跡、平三坊貝塚に隣接する突抜平道跡、岩坪平貝塚に隣接する組合道跡と木ノ下道跡には阿玉台・勝坂式期と加曾利B・曾利式期のいずれか片方の時期の占有しか認められない。

また、前田が指摘した神明台貝塚とトウメキ道跡(神明台西遺跡)との関係についてはトウメキ道跡から採集された土器が前期の開山式と浮島式であったことから時期的共有関係を認めることは出来なかった。

後期の貝塚遺跡については岩坪新屋敷貝塚・平三坊貝塚・男神貝塚・安食平貝塚・加茂八幡貝塚・岩坪平貝塚のいずれも隣接する包蔵地遺跡に時期的共有関係を認めることが出来た(第6表下段)。

しかし、寄居前遺跡と畠合遺跡、原ノ坊遺跡では称名式期、安食平西遺跡、半遺跡では堀之内式期と曾谷式期、鶴平遺跡、柄形2号遺跡、加茂八幡原遺跡、松本遺跡では曾谷式期の占有が認められず時期的共有関係が認められない時期もある。

中期～後期に跨まれた貝塚遺跡において占有の痕跡が認められる一方で、隣接する包蔵地遺跡に同時期の占有が認められないこのような現象はその時期に貝塚遺跡において貝層が形成されていないか、あるいは貝塚遺跡にその時期の集落が営まれていることのどちらかを示していると考えられる。

いざれの想定を探るにせよこれらの貝塚遺跡の貝層形成がいつまで遡るのか、貝層形成の主体となる時期がいつなのか、貝層形成がいつ終焉を迎えるのか、貝塚遺跡の下に集落が存在するのか否かといった基礎的な情報を発掘調査により把握することが不可欠であろう。

10.まとめと課題

本稿ではまず出島半島における縄文時代遺跡の調査・研究史をひもといいてゆく中で貝塚遺跡を中心で研究がすすめられてきた問題があることを述べ、貝塚遺跡を残した縄文文化たちがどのような場所に暮らしていたのか、どのような場所で生業活動を展開していたのかといった生業・居住システムに関する問い合わせてゆくためには貝塚遺跡に限らず、今回の分布調査で確認された多くの包蔵地遺跡にも目を向ける必要性を説いた。

そして分布調査で明らかになった多くの包蔵地遺跡を遺物量の多寡に基づいて二分し、縄文時代早期～晩期までの遺跡の共時的分布とその通時の変遷を概観・整理した。その結果、遺物量の少ない遺跡が多いことは通時的に共通するが、遺物量の多い遺跡は時期毎に変化していることが明らかとなった。

また、遺物量の多い遺跡は余時期を経て一ノ瀬川とその支流に挟まれた深谷地区の半島状の台地と内陸には形成されておらず、必ずしも全ての地区に形成されるわけではないことも明らかとなつた。

中期から晩期の遺跡の共時的分布と変遷については概ね能成秀喜の指摘(能成 前稿)を追従することとなつたが、これまで様相が不鮮明であった早期～前期後半までの遺跡の共時的分布と変遷については今回の分布調査によって加えられた新たな見知りと言える。

今回の分布調査で明らかになった307の縄文時代遺跡のうちいくつかが今後、開発行為の対象となることは十分に予測されることであるが、そうした際に発掘調査が実施されるのであれば今回提示した遺物量の多い遺跡は住居址が何軒も存在する居住空間であるのか?遺物量の少ない遺跡は住居址が存在せず、隣し穴や集石、土坑などから構成されるような生業空間であるのか?というような遺物量と空間利用の間に相関関係があるのか否か反

説を立てて検討していくような視点が必要だろう。

霞ヶ浦町においてこれまでに発掘調査が実施されている遺跡をみてみると、田伏地区の為都南遺跡(274)のように出土した遺物量が極めて少ないにもかかわらず、加賀宮EⅢ式期の住居址が1軒検出されている遺跡もあるし、志十郷地区の小原1遺跡(017)のように遺物量が多いにも関わらず、遺構がまったく検出されてない遺跡もある(茂木、1999)。また、深谷地区的八千代台1遺跡(358)のように遺物量が少なく、完形に近い五頭ヶ台式土器が出土した土坑1基が検出されている遺跡もある。

発掘調査の面積にも左右されることから、遺物量が少ない遺跡一住居址が存在しない遺跡という法則は必ずしも成立しないが、今後、大規模な発掘調査の事例が増えてゆけば先に提示したような相関関係があるのか否かを検証することが可能となるし、仮にそうした法則が働き出せるのであれば、発掘調査を実施する前に遺物量と時期の把握を通じて、どのような遺構が検出される可能性があるのかについておおまかな予測を立てることも可能となるのではないだろうか。

また、研究史で取り上げた前田提督に答えるかたちで貝塚遺跡と隣接する包蔵地遺跡との時間的関係について検討した。その結果、神明台貝塚については隣接するトウメキ遺跡との間に時間的共有関係を見いだせなかたが、男神貝塚については男神遺跡と人坂上遺跡・半ノ坊貝塚については寄居前遺跡というそれぞれ時期的共有関係を有する包蔵地遺跡を見いだすことが出来た。

ただし、貝層形成がいつまで遡るのか、貝層形成の主体となる時期がいつなのか、貝層形成がいつ終焉を迎えるのかといった基礎的な情報が発掘調査により詳細に把握されている貝塚遺跡は管見の限り、霞ヶ浦町には存在しない。今後、これらの貝塚遺跡の複数の地点で貝層および遺跡の形成過程を確認するための学術調査も実施される必要があるだろう。

今回の分布調査により霞ヶ浦町における縄文時代の包蔵地遺跡の構造が鮮明となり、縄文時代の遺跡研究も漸く緒につきはじめたと思われるが、生業・居住システムの復元を目指す本格的な研究は今後の霞ヶ浦町における縄文時代遺跡の発掘調査に期するところが大きい。ここに提示した課題のひとつひとつが今後の霞ヶ浦町における縄文時代遺跡の発掘調査と研究を通じて検討されてゆくことを願い、収束とする。

(川口武彦)

註

- 1) 第6回～10回の縄文時代遺跡の分布図、第6表の縄文時代遺跡一覧を作成するにあたっては特に筑波大学人文学類の川高光宏、池野陽一、辻村春香、伊藤洋子、林 真弓、中尾麻由美、近井悠子の助力を頂いた。

また、一部の遺跡の層別時期を決定する際に東京大学文部部の間枝孝太先生、松川山教育委員会社会教育課の大高良太氏、丸村翼氏、浜芦市教育調査会の飯賀勝子氏に縄文土器の型式鑑定をお願いした。本稿が頂いた御協力、御教示に十分お答えできるよう

- な内容であるが甚だ心配ないが、芳秀を記して感謝します。
- 2) 灰塚卑頭跡地には歴史時代の古墳として龜山古墳、柏崎古墳、鶴山古墳の名前も見られるが(茨城県教育委員会 1990)、既述の結果、実底寺古墳と安山古墳については埴溝横穴墓群が掘りこんでいる自然崖縫のカキ船と同一のものであることが確認されたので、遺跡は古墳・古表の対象外とした。
- 3) 中島武蔵跡と同様の遺跡は鬼木村に於いても確認されている。1999年に調査された菅原下追跡は鬼木川右岸の荒廃原に掘った供高地に位置する遺跡であるが、遺構に伴わない歴史時代中期前半の貝一枚灰陶系土器、崩落前半の鏡六式、黑浜式土器が大量に出土している。調査を担当された玉里村立安田鉱小王秀成、本田信之氏の御社による。
- 4) この時間は海岸が著しい時期であり、現在よりも3~5mも海水面が高かったことが知られているが(井手・東藤 1998)、一ノ瀬川や妻木川が造る谷筋とそこから流入込んだ谷筋でも当然の事ながら、海水が入り育てていたことが見え、中島遺跡の立地するような場所は海打ち際であったと想定される。何故にこのような土地に遺物が多い遺跡が形成されたのであろうか。
- 複数清沿岸地帯ではこの時期に海岸の形成が活発となるが、霞ヶ浦周辺において当該の眞跡は現在もなお発見されている。当該流域では片韻の採集活動があつて活発ではなかったのだろうか。あるいは海岸が立地する佐古地帯に近い古江口を意めている「低灘性真跡」(柳原 2000)が形成されているのだろうか。
- 5) 舟形地盤の歴史時代貝塚を集成した千葉盆地は下野(千葉野)貝塚を中心に後期の貝塚として推察し、出土している貝類についてには小判としている(若林 1981)。その後、霞ヶ浦町域の歴史時代貝塚を門調査した千葉課は宋織紋が貝塚として報告し、若林と同様に貝類については不詳なまゝながら、中期後半の貝塚との見対を示している(千葉 1996)。
- 他方、今即の分野審査ではこれまで、純文時代中期(~7世紀)の貝塚として報告されている鹿島の貝塚から大量の撿選土器と浮島式土器が検出されており、これまでの判断とは相反が生じている。本遺跡の下に貝塚がまだ生存するのか、貝層が存在するのならば、いつの時に形成されたのかなどは、問題を解消するために今後も範囲的・精査を実施する必要がある。
- 6) 契約金を預託された千葉野西洋の御測示による。
- 7) 個人蔵の深堀資義であるため、詳細な出土地点については不明な点が残されているものの、平塚地区の浜にある拠高地上からは幾度に亘る土器とともに勾玉(平塚 1997: 47頁の写真10)が、美並地区の南根寺遺跡193号の谷部からは後期の加賀利2式の台付鉢形土器の台付が出土していることを既述の際に詳説している。これらの資料の存在を参考すれば、特に遺物数が急減する後、既述には壁面土器だけではなく、壁高さを低下しても異常に少なくなっていることを想起しなければならない。遺跡時間は不明だが、出土土器が採集された大元ト遺跡(050)や小川遺跡(057)は後、晚晴の遺物が出土し、増加されている安政平塚(029)、西人間窓(06)に隣接しており、このような場所からも当該期の住居の痕跡が見受けられる可能性を指摘しておく。

引用文献

- 井内義郎・森藤文紀 1990 「海賊湖の地史-3 5 菖ヶ浦」「アーバンクボタリ32」
- 伊東直教 1989a 「平仮名遣から 平成元年頃号」『田伏追跡高森園』
- 伊東直教 1989b 「田伏追跡発掘調査の概要(平成元年十二月十九日 説明資料)」「伏追跡高森園」
- 茨城県教育委員会 1990 「茨城県諸跡地図」
- 泣乃 学 2000 「第N章 事務室3章 鬼木地帯の性格と只管探査活動の変化『山手干日塙・イゴ貝塚』『純文時代 佐古性貝塚の調査』」市川市教育委員会
- 人野述人郎 1986 「常陸御賀・霞ヶ浦沿岸研究」「東日本人類学研究誌」11-121・123
- 岡田茂弘・酒井良男・佐藤栄一 1950 「茨城県新治郡安柄村石坪半貝塚」『津波』1
- 小川和博・大河原忠・石川玲 1996 「柳沢遺跡・菅老友遺跡・寿行地北遺跡」上巻・山内村合田遺跡調査会
- 川角吉重 1894 「茨城縣下ノ石世遺跡」「入學學報誌」9-10
- 川村清海 1998 「筑波山中根・鬼木台地紀符定土地区西岸整理事業地内歴史文化財調査報告書」「中谷津遺跡」茨城県、財團法人茨城県教育振興財團
- 清野源次 1923 「霞ヶ浦沿岸の貝塚通り鬼木西紀行、第2回紀行」「社会史研究」9-1
- 慶應義塾高等学校史料史研究会 1951 「茨城県新治郡安柄村安柄平貝塚発掘報告」「Archaeology」24
- 慶應義塾高等学校史料史研究会 1959a 「茨城県新治郡山森村伏井貝塚」「考古学研究報告」25
- 慶應義塾高等学校史料史研究会 1959b 「茨城県新治郡山森村牛頭貝塚発掘報告」「Archaeology」25
- 小三秀哉 1999 「特別展 貝塚入の暮らし・國境」玉里村立史料館
- 小室徹之介 1895 「霧神岡霍々塙沿岸付近に於ける古跡」「東京人類學會論叢」10-106
- 齊藤弘道 1980 「乍居調查捷報」県内貝塚における動物遺存体の研究(3)「茨城県立歴史館」
- 齊藤弘道 1981 「茨城の歴史時代貝塚(1)」「茨城県立歴史館」8
- 齋藤昌治 1982 「茨城の歴史時代貝塚(2)」「茨城県立歴史館」9
- 沼谷伸男・廣瀬榮 1948 「常陸国安治平貝塚」「日本考古学』1-1
- 佐藤 2000 「古吉忍溝における貝塚の形態的特徴」「貝塚研究」5
- 清水潤二 1956 「茨城県新治郡安柄平貝塚」「日本考古学年報」9
- 清水潤二 1961a 「茨城県新治郡安治平貝塚」「日本考古学年報」9
- 清水潤二 1961b 「茨城県新治郡貝塚」「日本考古学年報」11
- 清水潤二 1963 「茨城県新治郡所野台日塙」「日本考古学年報」10
- 清水潤二 1979a 85 「貝類目録」「茨城県史料・考古資料編先史部・縄文時代」茨城県
- 清水潤二 1979b 86 「安治平貝塚」「茨城県史料・考古資料編先史部・縄文時代」茨城県
- 清水潤二 1979c 88 「伏井貝塚目録」「茨城県史料・考古資料編先史部・縄文時代」茨城県
- 杉山莊平 1965 「茨城県新治郡出島村石坪貝塚調査報告」「史蹟」7-2
- 杉山莊平 1968 「茨城県新治郡出島村石坪貝塚」「日本考古学年報」16
- 杉山莊平 1979 「石坪貝塚」「日本考古学年報」18
- 杉山莊平 1979 187 「岩坪貝塚(岩坪平貝塚)」「茨城県史料・考古資料編先史部・縄文時代」茨城県編集委員会
- 鈴木正博 1996 「出島村の縄文式貝塚調査」「茨城県考古学会会報」8
- 大正大学考古学研究会 1985 「櫛田考古」4
- 日中 治 1988 「青銅器3: 平云坊其ノ三」「特定研究 古墳が遺傳する丹波群研究プロジェクト」(通報第No.1)筑波大学歴史・人文学部 古史学・考古学研究室
- 日中 治 1991a 「2.出島貝塚 6.出島貝塚其ノ三」「古墳・縄文・彌生・奈良貝塚の研究」(通報其の四)平成2年文部省特定研究費による調査研究委員会・筑波大学
- 日中 治 1991b 「2.出島貝塚 8.平云坊其ノ三」古墳・縄文・彌生・奈良貝塚の研究(通報其の五)平成3年度文部省特定研究費による調査研究委員会・筑波大学
- 玉里村内疊層分布調査委員会 1996 「玉里村内内疊層分布調査報告書」「茨城県立歴史館」
- 玉里村内疊層分布調査委員会 1997 「玉里村内内疊層分布調査報告書」「茨城県立歴史館」
- 千葉隆司 1996 「出島村縄文時代貝塚研究」茨城県考古学会誌8
- 千葉隆司 1997 「越177号羽張貝塚 純文時代の漁業 貝塚が語る古代漁獲技術」「出島村出土貝塚研究会
- 筑波大学人間環境調査チーム 1995 「茨城県出島村八幡貝塚の測量・分析報告」「筑波大学歴史学・考古学研究」6
- 常松寅人 1997 「古吉忍溝「假塚遺跡」を中心とした実行式墓園の動態」「歴史文化研究」18
- 守門義典・佐野加代子 1997 「茨城県出島村男神遺跡の研究」「森・湖文化」3
- 守邊博司 1992 「常陸御賀・霞ヶ浦50年代の分布調査」「古吉忍溝・追浜貝塚の研究」昭和63年冬・平成2年度文部省特定研究費による調査研究委員会・筑波大学

- 中村哲也 1996 「牛車活動と遺跡群」『季刊考古学』55
- 中森敏晴 1991 「2.出島半島 b.出島村神明台日塚」、「古墳ヶ瀬濱」
沿岸貝塚の研究 昭和63年度～平成2年度文部省特定研究經費による調査研究概要」筑波大学
- 龍城秀喜 1987 「茨城県新治郡出島村若坪平貝塚の土器と若手の考察」『豪良統考古』9
- 日暮晃一 1996 「貝からみた出島村の縄文時代貝塚」『茨城県考古学報告誌』8
- 平石尚和 2000 「一般国道354号道路改築事業地内埋蔵文化財調査報告書 下郷古墳群」茨城県・財團法人茨城県教育財團
- 半岡利夫・湯原勝美・荒井英樹 1995 「茨城県石岡市地蔵平遺跡、
地蔵堂貝塚発掘調査報告書」石岡市教育委員会
- 前田 潤 1991a 「2.出島半島 c.出島村西方貝塚」、「筑波大学先史学・考古学研究調査報告書VI」「古墳ヶ瀬濱」沿岸貝
- 塚の研究 昭和63年度～平成2年度文部省特定研究經費による調査研究概要」筑波大学
- 前田 潤編 1991 「筑波大学先史学・考古学研究調査報告書VI」「古墳ヶ瀬濱」沿岸貝塚の研究 昭和63年度～平成2年度文部省特定研究經費による調査研究概要」筑波大学
- 茂木悦男 1999 「一般国道石岡出伏上浦線道路改修工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 坂道跡・舟戸門遺跡・小原遺跡」茨城県・財團法人茨城県教育財團
- 吉口文俊 1993 「石器時代遺物発見地名表」『東京人類學會雑誌』2
0-217

第7表 繩文時代遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	時期	遺物	採集地より出土遺物		参考	文献
				早	中	後	
004	兜形三角遺跡		○ ○	少	縄文土器		大正大1985
005	北九條遺跡			少	縄文土器		
006	西岡1遺跡			少	縄文土器		大正大1985
008	傳御前1遺跡	○ ○ ○ ○	少	浮島、加賀利B、加賀利A、垂行3、鉢片(チャ・ト)			
009	米沢1櫛墻遺跡		○ ○	少	追之内、加賀利B		
011	坂原1遺跡			少	縄文土器		大正大1985
012	月ノ木遺跡			少	縄文土器		大正大1985
013	上小川遺跡		○ ○	少	縄文土器、石核		
014	船岡1遺跡		○ ○	少	縄文土器		
015	後田1遺跡	○ ○ ○ ○	少	至高、晚期太粗製土器、石器(メノウ)、打製石器			大正大1985
016	西丸山遺跡	○ ○ ○	少	縄文土器			
017	小原1遺跡	○ ○ ○	少	石山上層、阿三台、加賀利A、曾我、追之内、土器片種、有孔土器、門扉、磨製石器、打製石器、云鏡(チャ・ト)、陶石、石器、器心、焼石、鉢片(空巣岩、水晶、珠寶石、馬鹿石)	1907年度に茨城県教育費支給(阿三台、発掘調査)(阿三台、加賀利A主体)	水戸大1985、夜木1989、飯塚1987	
019-001	大池内古群石1号墳		○ ○	少	然覺利A、打製石器		大正大1985
021	馬場11遺跡		○ ○	少	縄之内口十層、打製石器		大正大1985
022	當神前古墳			少	縄文土器		大正大1985
023	小足立遺跡		○ ○	少	追曾利E		大正大1985
024	小那須遺跡		○ ○	少	追曾利E、打製石器製土器		
025	深下12遺跡			少	縄文土器		
026	坂上12遺跡	○ ○	多	多	深植、泥器	人正大1985	
027	古南12遺跡			少	縄文土器	大正大1985	
028	山川12木造陣			少	縄文土器	大正大1985	
029	根ノ木遺跡	○ ○	少	縄文土器			
031	馬場12遺跡			少	縄文土器		
032	馬場121遺跡		○ ○	少	阿三台、断石(片岩(辰岩)、石器)	大正大1985	
033	馬場1211遺跡			多	阿六台、加曾利A	大正大1985	
035	受明院遺跡		○ ○	少	縄文土器		
037	大通12遺跡			少	縄文土器、陶行(チャ・ト)	大正大1985	
038	人瀬遺跡			少	縄文土器	大正大1985	
039	大通13遺跡			少	縄文土器		
040	西田遺跡			少	縄文土器	人正大1985	
042	風之原遺跡			少	縄文土器	大正大1985	
043-038	風之原12群石1号墳	○ ○	少	縄文土器			人正大1985
044	穴食1遺跡	○ ○ ○ ○	少	沈殿文、奈良文、横綱土器、浮島、加曾利E、追之内、追曾利E粗粒土器、陶行(チャ・ト)、メノウ	大正大1985		
048	安東平西遺跡	○ ○ ○ ○	少	沈殿文、堆塚、安行2、焼所(墨端石、チャ・ト)、石扇(墨端石、チャ・ト)		大正大1985	
049	安食平貝塚	○ ○ ○ ○ ○	多	貝殻全表面、浮島、阿玉台、加曾利E、名石寺、追之内、加曾利E、登谷寺、土器(光澤器)、追曾利E、土器片種、利刃(黒原心、チャ・ト)、石器、打製石器、鐘石、公使、有孔器(ヤス・盛器品)、器物	後期土器	小室1985、大野1986、酒井1986、高橋1986、高橋1987、高橋1988、高橋1989、高橋1990、高橋1991、高橋2000	
050	天王12遺跡			少	縄文土器		
052	平瀬遺跡		○ ○	少	加曾利E、加曾利B、安行2		大正大1985
053	貢北遺跡		○ ○	少	出口下層		
054	山ノ下1遺跡			少	出口下層		
056	出手内1遺跡		○ ○	少	加曾利E		大正大1985
057	小塙遺跡			少	西文土器		
059	因ノ田遺跡	○ ○ ○	少	田戸下層、阿玉台、追之内			
061	山ノ原12遺跡	○ ○ ○	少	浮島、追之内		人正大1985	
062	人子ノ山遺跡		○ ○	少	縄綱土器、单底		大正大1985
067	大通遺跡			少	縄文土器		大正大1985
068	鶴見山遺跡	○ ○ ○	少	元気全表面、施縄土器、追曾利E、心形(英東心)		大正大1985	
070	虎子見12遺跡	○ ○ ○ ○	多	田戸下層、3号土、跡?為心、横綱土器、浮島、下野、加曾利E、土器、陶行(チャ・ト)、メノウ、斧行(チャ・ト)、メノウ	縄文土器、沈縄文	大正大1985	
073	瓦刀1清水溝跡			少	縄文土器		
078	鷹沼12遺跡		○ ○	少	浮島、阿玉台、剪製石斧		
079	鷹ノ瀬遺跡	○ ○ ○	少	西文文、阿玉台、剪製石斧		大正大1985	
080	東ノ山12遺跡			少	阿玉台		
081	亮ノ山2遺跡		○ ○	少	縄文土器		
082	田代12遺跡			少	加曾利E		
084	金糞山22遺跡		○ ○	少	縄文土器		
085	佐野新12遺跡			少	縄文土器		
086	田代22遺跡		○ ○	少	阿玉台		
087	南野第32遺跡			少	五箇台Ⅱ、加曾利E		
088	志賀12遺跡			少	阿玉台		
092	穴食里12遺跡			少	縄文土器		
093	孫二2遺跡		○ ○	少	浮島		
094	孫二3遺跡			少	加曾利E		
095	加曾利12遺跡			少	加曾利E		
097	香取・山下12遺跡	○ ○ ○ ○	少	横綱土器		大正大1985	
098	香取・山下2遺跡	○ ○ ○ ○	少	横綱土器、阿玉台	中野毛主	大正大1985	
100	洲112遺跡	○ ○ ○ ○	少	貝殻全表面、横綱土器、阿玉台		大正大1985	
101	泥炭22遺跡	○ ○ ○ ○	少	縄文土器		大正大1985	

地名	沿跡名	特徴	発見地	備考	文献	
102	吉野遺跡	○	少 破壊土器		大正大1985	
103	船形1遺跡	○ ○ ○	少 滋生土器		大正大1985	
104	御所川遺跡	○ ○ ○	少 破壊土器・阿毛土器・加賀利B・岸之内		大正大1985	
105	佐久間1遺跡	○ ○ ○	少 四日下器・逆角・浮舟・加賀利A		大正大1985	
106	船形2遺跡	○ ○ ○	少 加賀利A		大正大1985	
107	船形3遺跡	○ ○ ○	多 出土品・浮舟・加賀利B・阿毛土器・船之内・打製石斧・四日下・逆角・浮舟・阿毛土器	打製石斧	大正大1985・昭和1987	
108	萩手遺跡	○ ○ ○ ○ ○	多 片(鉄礫石)			
110	新津遺跡	○ ○ ○	少 加賀利A		大正大1985	
111	桃源遺跡	○ ○ ○	多 滋生土器・浮舟・加賀利B	寄附主体	大正大1985	
112	長谷平遺跡	○ ○ ○	少 阿毛土器・加賀利A		大正大1985	
113	船形4遺跡	○ ○ ○	多 破壊土器・阿毛土器・加賀利B・表石(チャート)・磨製石斧	半開土器	大正大1985	
114	横浜遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 破壊土器・浮舟		大正大1985	
115	御所遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 滋生土器		西・通志数1997	
117	小丸遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 阿毛土器・加賀利B		大正大1985	
119	猿ノ大遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 阿毛土器		大正大1985	
120	猿ノ入遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 浮舟・加賀利B・刻片		大正大1985	
121	西脇古跡群	○ ○ ○ ○ ○	少 阿毛土器		大正大1985	
122	大深古跡	○ ○ ○ ○ ○	少 宝石・碧玉石		大正大1985	
124	中央・風呂下遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 破壊土器・阿毛土器		大正大1985	
125	人保古跡	○ ○ ○ ○ ○	少 破壊土器・阿毛土器		大正大1985	
126	美里古跡	○ ○ ○ ○ ○	少 破壊土器・阿毛土器		大正大1985	
128	長門古跡	○ ○ ○ ○ ○	少 関東土器		大正大1985	
129	原ノ内遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 逆角・浮舟		大正大1985	
131	平糸遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 葵唐・浮舟		大正大1985	
132	丘合古ノ内遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 磨出・逆角(石)		大正大1985	
134	鹿島神社遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 刻絵青石灰		大正大1985	
135	芦原神社遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 滋生土器		大正大1985	
136	芦原ノ内遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 四日下器・黑浜・浮舟・加賀利A		大正大1985	
142	下室谷遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 真空度灰瓦・釜洗・阿毛土器・加賀利B・表石(鉄鉢石)・弦石片		大正大1985	
144	西成井ノ2号跡	○ ○ ○ ○ ○	少 真空度灰瓦・阿毛土器・加賀利B		大正大1985	
145	河木遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 加賀利B			
146	鹿足2遺跡	○ ○ ○ ○ ○	多 破壊土器・浮舟・其葉利B	浮島主体		
149	元坂口遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 滋生土器・浮舟		大正大1985	
151	神明古跡	○ ○ ○ ○ ○	少 銚子土器・浮舟・加賀利B・密雲石等		大正大1985	
152	柳原平野跡	○ ○ ○ ○ ○	少 阿毛土器・加賀利B		大正大1985	
157	寺前古跡	○ ○ ○ ○ ○	少 関東土器		大正大1985	
160	宮原遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 破壊土器		大正大1985	
161	二ノ又遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 加賀利B			
162	轟ノ頭遺跡	○ ○ ○ ○ ○	多 四日下器・四脚土器・破壊土器・浮舟・阿毛土器・加賀利B・表石(石皿)・弦石片	半開土器	大正大1985	
163	下川野貝塚	○ ○ ○ ○ ○	多 破壊土器・浮舟・(石皿)	遺傳土器・浮島主体	遺傳1981・大正大1985・南開1987・千葉1988・1989・1990・1991・1992	
164	下川野貝塚	○ ○ ○ ○ ○	少 滋生土器・表石(石皿)・浮舟		大正大1985	
165	正熊田遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 滋生土器・表石		大正大1985	
166	葛平遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 破壊土器・盆・薄荷利(チャート)		大正大1985	
168	茂庭遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 破壊土器・表石(チャート)		大正大1985	
169	下森古跡	○ ○ ○ ○ ○	少 破壊土器・加賀利B・薄荷利(メガネ)		大正大1985	
171	西条古跡	○ ○ ○ ○ ○	少 浮舟・浮石・オウツ			
172	下山遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 錆内			
174	桂谷遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 阿毛土器・阿毛土器・加賀利B・阿毛土器・逆角・浮舟・加賀利B・安行2・破壊石器・野原削片(チャート)・表石(メガネ)・ハガク	淡原土器(後之川・荒茎利)	川東1894・小室1955・浅野1923・岡田・酒井・赤坂1959・砂野1965・1968・1975・瀬戸1981・1985・大正大1985・赤坂1985・千葉1986・1997・佐藤2000	
175	木ノ下遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 滋生土器・表石	板井土器・細利D主体	大正大1985	
177	草ノ坊遺跡	○ ○ ○ ○ ○	多 混合土器・薄荷利(チャート)	淡原土器・板井土器	大正大1985	
178	若狭丸ノ1号跡	○ ○ ○ ○ ○	少 安行2・剥片(逆角)	淡原土器・淡原・死之内・加賀利B・剥片(石英)	中期三体	小室1965・淡原1962・大正大1985・藤原1987・千葉1996・1997・赤坂2000
180	若狭御殿谷古墳	○ ○ ○ ○ ○	多 破壊土器・浮舟・阿毛土器・サボリ・カキ・ナミマガシ・フトヘナタ・麻糸・浮舟	淡原土器・板井土器	大正大1985	
181	岩坪中山遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 表石(ア)・加賀利B・壁之内・野原(チャート)		大正大1985	
182	御殿遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 表石(ア)・阿毛土器・加賀利B・野原利		大正大1985	
183	若狭吉盛山塚	○ ○ ○ ○ ○	少 破壊土器			
184	マケン遺跡	○ ○ ○ ○ ○	多 破壊土器・加賀利B・滋之内・土原川盤・石軸石斧・石棒(チャート)・石五石	板井利K・滋之内主	大正大1985	
185	シタダ遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 古伊勢・佐世野・石棒(メガネ)			
186	安乃野跡	○ ○ ○ ○ ○	少 浮舟・加賀利B・砾石片		大正大1985	
187	豆井野跡	○ ○ ○ ○ ○	少 浮舟・浮石		大正大1985	
189	米田屋敷	○ ○ ○ ○ ○	少 滋生土器			
190	二ノ木八幡平遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 表石・阿毛土器・加賀利B・野原利		大正大1985	
191	高木本古墳遺跡	○ ○ ○ ○ ○	多 表石・阿毛土器・加賀利B・野原・逆角・浮舟・阿毛土器・表石	中開土器	大正大1985	
192	高木本古墳遺跡	○ ○ ○ ○ ○	多 破壊土器・表石・阿毛土器・加賀利B・野原・加賀利B・石五石・逆角・浮舟・(チャート)	中開土器	大正大1985・前崎1987	
193	高木本古墳遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 滋生土器		大正大1985	
194	高木本古墳遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 表石・阿毛土器		大正大1985	
195	河口山古墳遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 表石・阿毛土器・浮舟・滋之内・阿毛石器・野原利B・表石・浮舟・逆角	中開土器	大正大1985	
196	高木本古墳遺跡	○ ○ ○ ○ ○	多 破壊土器・表石・阿毛土器・加賀利B・逆角・浮舟・阿毛土器・表石(逆角石)	中開土器	大正大1985	
197	高木本古墳遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 表石・阿毛土器		大正大1985	
198	高木本古墳遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 表石・阿毛土器・浮舟		大正大1985	
199	高木本古墳遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 表石・阿毛土器		大正大1985	
200	二ノ木八幡平遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 表石・阿毛土器・加賀利B・野原利・滋之内・阿毛土器・表石・浮舟	中開土器	大正大1985	
201	高木本古墳遺跡	○ ○ ○ ○ ○	多 表石・阿毛土器・加賀利B・野原利・逆角・浮舟・阿毛土器・表石	中開土器	大正大1985	
202	高木本古墳遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 表石・阿毛土器		大正大1985	
203	高木本古墳遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 表石・阿毛土器		大正大1985	
204	河口山古墳遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 表石・阿毛土器		大正大1985	
205	河口山古墳遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 表石・阿毛土器		大正大1985	
206	河口山古墳遺跡	○ ○ ○ ○ ○	少 表石・阿毛土器		大正大1985	

登録番号	地名	範囲				登録年	登録者	記載および出土物	編号	文獻	
		東	西	南	北						
187	白瀧溝跡	○	○	○	○	多	鶴山、奥高、深谷、浅谷、石壁、砾石、砂質岩層、洞隙石板、 加賀(ナガト)、安田岩)				
189	西木戸屋上遺跡	○	○	○	○	多	沈底土器、破片、浮石、瓦台、加賀利村、阿仁平舟石七軒屋	加賀利村工作			
200	前の内遺跡	○	○	○	○	少	灰質土器				
203	千鳥川遺跡	○	○	○	○	少	鍼墜、石器、阿仁村、梅原、加賀利村、土器片等	小野主作	大正大1905		
204	内山遺跡	○	○	○	○	少	鍼墜、土器、加賀利村、越賀利村		大正大1905		
205	小沢遺跡	○	○	○	○	多	阿玉山、沈底土器、骨器、毛片岩様、石網、砂質石等、砾石、石块	加賀利二七作	大正大1905		
206	摩理藏石跡	○	○	○	○	少	加賀利村、石網(メノウ)		大正大1905		
207	半坂跡	○	○	○	○	少	加賀利村、頭形(頭蓋骨)		大正大1905		
209	卓木森跡	○	○	○	○	少	鍼墜土器、瓦片、阿仁村、梅原、加賀利村		大正大1905		
210	卓木森遺跡	○	○	○	○	少	鍼墜土器、阿仁村、加賀利村		大正大1905		
211	明治内遺跡	○	○	○	○	少	等		大正大1905		
213	和田台遺跡	○	○	○	○	多	浮石、安井36、大河A、石器、石片、石網、神片	御文庫発行報告書			
214	名ノ木遺跡	○	○	○	○	少	鐵礦土器、浮石、加賀利村、移竹		大正大1905		
215	山本遺跡	○	○	○	○	多	浮石、加賀利村	加賀利村工作	大正大1905		
216	大分田大平遺跡	○	○	○	○	少	鐵礦土器、加賀利村、加賀利村、安行		大正大1905		
217	西原遺跡	○	○	○	○	少	浮石、加賀利村、加賀利村、宝行、剥片(チャート)、 内輪刺繡(メノウ)		大正大1905		
218	西内遺跡	○	○	○	○	少	須				
219	弓羽大平跡	○	○	○	○	少	鐵文土器		大正大1905		
220	弓羽大半東遺跡	○	○	○	○	少	浮羅文、施之内				
225	内山遺跡	○	○	○	○	少	浮羅文		大正大1905		
226	人下遺跡 / 当渓跡	○	○	○	○	多	鍼墜土器、阿玉山、加賀利村、舊赤堀、前片(黒曜石)、磨石	中野工作	大正大1905		
227	和田遺跡	○	○	○	○	少	加賀利村		大正大1905		
228	牧ノ内貝塚	○	○	○	○	少	加賀利村、源之内、村木水。ヤマトシジミ				
229	久保山遺跡	○	○	○	○	少	鐵文土器				
230	ジカケ塚	○	○	○	○	少	船石				
231	五石遺跡	○	○	○	○	少	鐵礦土器、加賀利村				
232	勢勢遺跡	○	○	○	○	多	沈底土器、鐵文土器、作石寺、施之内、石磐利村、安行!	長野工作	大正大1905		
						加賀利村、名から、奥之内、西脇、加賀利村、安行～3、柔石、石 網、行新草、薄質有柄石、網(メノウ、チャート、黒曜石)、削 盤(削質石)、石網、アカニ。アゼナ、ハイガイ、ハマグリ、 サザエ等。方木					
233	男守貝塚	○	○	○	○	多	加賀利村、名から、奥之内、西脇、加賀利村、安行～3、柔石、石 網、行新草、薄質有柄石、網(メノウ、チャート、黒曜石)、削 盤(削質石)、石網、アカニ。アゼナ、ハイガイ、ハマグリ、 サザエ等。方木	佐藤半生	小正1905、丹門・佐藤 1977、森綱1982、1982、 大正大1905、田中1995a、 手嶋1995、吉澤1996、 手嶋1996、1997、佐藤 1997、佐藤2000		
234	大渡上河跡	○	○	○	○	多	加賀利村、金谷、城之西、安行、土板凹盤、石盤(セキ)、削片 (チャート、黒曜石)、磨石		大正大1905、庄田1905a、 朝倉1905		
235	若木山遺跡	○	○	○	○	多	加賀利村、若木山、加賀利村、打設柱脚	幸賀主作	大正大1905		
236	立桑遺跡	○	○	○	○	少	鐵礦土器、施之内		大正大1905		
237	馬鹿山遺跡	○	○	○	○	少	鐵文土器、源之内		大正大1905		
238	山口遺跡	○	○	○	○	少	鐵文土器		大正大1905		
239	弓羽ノ背遺跡	○	○	○	○	少	鐵文土器、阿玉山、施之内、石磐利村		大正大1905		
240	大山遺跡	○	○	○	○	少	鐵文土器、源之内、石磐利村		大正大1905		
241	下正神遺跡	○	○	○	○	少	鐵文土器、加賀利村、削片(チャート、黒曜石)、磨石				
244	小治遺跡	○	○	○	○	少	鐵文土器、弓鳥				
247	上根遺跡	○	○	○	○	少	鐵文土器				
251	山伏天ノ背遺跡	○	○	○	○	少	加賀利村				
253-001	小泊古墳群第1号墳	○	○	○	○	少	尚文1-16				
258	日伏中合遺跡	○	○	○	○	多	鐵文土器、阿玉山、加賀利村、上片神、施裂心石、磨石、アカニ シ	日野台、加賀利村 4体	大正大1905、後藤1923、吉 島1981、大正大1905、施 城1905、千葉1996、1997、 佐藤2000		
271	アノ原遺跡	○	○	○	○	多	西奈文、矛根文、城之内、石核(チャート)		1997年に日丰移動 運営のアンコナ設 置に伴う事務室設 置(沈麻文が工 程)		
273	山ノ合遺跡	○	○	○	○	少	浮羅、阿玉山			大正大1905	
274	古都内遺跡	○	○	○	○	少	土石垣、口口ト番、浮石、阿玉山、加賀利村、施之内、加賀利村		大正大1905、伊東1905a、 1890		
275	トクメイ遺跡	○	○	○	○	少	陶器、浮石、燈石			宿原1901、中森1991	
276	伊野田古墳	○	○	○	○	少	鐵文土器、阿玉山、施裂、施裂利村、剥片、鐵製石器、鉄石、瓦片 (瓦川)、貝殻、ヤス、ハナグリ、サンボウ、オシシミ、アカニ シ、ウミガメ、ナマガツシ。アキリ、ツメタサイ、バガガイ、 マガキ、スノゾガキ。カガミガイ	中野工作	施城1905a、1963-19 7c、森綱1981-1982、 大正大1905、施城1905、 中森1991、吉田1991、 日野1996、千葉1996-19 7c、佐藤2000		
277	中合遺跡	○	○	○	○	少	加賀利村				
278	水心遺跡	○	○	○	○	少	沈底文				
281	大山遺跡	○	○	○	○	多	鐵建土器、阿玉山、阿玉台、加賀利村、施之内、加賀利村	中野主作	大正大1905		
286	阿治遺跡	○	○	○	○	少	加賀利村				
288	二城山遺跡	○	○	○	○	少	白兔土器、剥片(黑曜石)				
289	新林遺跡	○	○	○	○	少	田口山、白兔土器				
291	川瀬寺跡	○	○	○	○	少	剥片(白兔)				
295	仁達寺跡	○	○	○	○	少	鐵文土器				
296	新青草遺跡	○	○	○	○	少	新青草土器				

遺跡番号	遺跡名	時期	動物				採集および出土遺物	備考	文献
			前	中	後	鴨			
302	西方貝塚	○ ○ ○ ○					縄文土器、渋浜、浮島、阿三台、加曾利E、塚之内、土器片等。少 多 ルホウ、ハマグリ	中期主体	直轄1980、1981・1982、 大正大1985、前田1991a、 前田編1991、千葉1996、 1997、吉原2000
304	西方1遺跡						少 縄文土器		
305	西方2遺跡						少 縄文土器		
306	西方3遺跡						少 縄文土器		
307	下宮遺跡						少 縄文土器		
308	東1遺跡						少 縄文土器		
309	鬼谷フ遺跡	○ ○					少 田口下唇		
310	東2遺跡	○ ○ ○ ○					少 縄西七器、浮舟		
311	東3遺跡						少 縄文土器		
312	糸ノ下1遺跡	○ ○					少 縄文土器		
320	坂治遺跡	○ ○ ○ ○					少 池島、阿玉台、加曾利E、浮島、磨製石斧、石核(チャート)、黑曜 石		成木1999
322	坂治遺跡						少 縄文土器		
323	上里1遺跡						少 縄文土器		
330	御前森神社付近						少 縄文土器		
331	御前森遺跡	○ ○					少 縄文土器		大正大1985
332	虎藏寺北遺跡						少 銅片(チャート)		
333	津谷下1遺跡	○ ○ ○ ○					少 阿玉台、加曾利E、加曾利E、土偶(阿玉台)、陶片(黒曜石)	加曾利E主体	大正大1985
334	上里1遺跡						少 縄文土器、陶片(メノウ)		
335	八坂神社北遺跡	○ ○					少 縄文土器		大正大1985
336	深谷下原2遺跡	○ ○					少 縄文土器		大正大1985
337	津谷下原3遺跡	○ ○					少 縄文土器		
342	庵原尾跡						少 縄文土器		
345	川崎家屋敷遺跡	○ ○ ○ ○					少 縄文土器、阿玉台、加曾利E		
346	中茅木1遺跡	○ ○ ○ ○					少 縄文土器		大正大1985
347	中茅木2遺跡	○ ○ ○ ○					少 縄文土器		大正大1985
349	中茅木3遺跡	○ ○ ○ ○					少 縄文土器		大正大1985
351	深谷下原4遺跡						少 縄文土器		大正大1985
352	津谷下原5遺跡	○ ○ ○ ○					少 黑浜、加曾利E、陶片(黒曜石、メノウ)、石核(メノウ)		大正大1985
353	堤遺跡	○ ○ ○ ○					少 細文土器、陶片(石英)、石核(メノウ)		人元大1985
356	裏原2遺跡	○ ○ ○ ○					少 縄文土器、阿玉台、陶片(石英)		大正大1985
358	八子代1遺跡	○ ○ ○ ○					少 池島、浮舟、五箇ヶ台、加曾利E		大正大1985
359	八子代2遺跡						少 縄文土器		
360	八子代3遺跡	○ ○ ○ ○					少 縄文土器、浮舟、阿玉台、加曾利E		大正大1985
361	八子代4遺跡						少 細文土器		人元大1985
362	八子代5遺跡						少 阿玉台、加曾利E		大正大1985
367	裏原3遺跡	○ ○ ○ ○					少 細文土器		人元大1985
370	裏原4遺跡	○ ○ ○ ○					少 縄文土器、加曾利E		大正大1985
371	白井川船形墓跡	○ ○ ○ ○					少 加曾利E		大正大1985
372	白井川下原2遺跡	○ ○ ○ ○					少 陶片(チャート)、メノウ		
373	羽列1遺跡	○ ○ ○ ○					少 縄文土器、加曾利E、浮舟		
374	鶴原2遺跡	○ ○ ○ ○					少 池島、加曾利E、塚之内		
375	真珠院上遺跡	○ ○ ○ ○					少 加曾利E、塚之内		
376	真珠院下遺跡						少 細文土器		
377	柏原1遺跡	○ ○ ○ ○					少 細文土器、阿玉台、加曾利E		
378	柏原2遺跡	○ ○ ○ ○					少 錫・鹿角、柳谷寺、塚之内、加曾利E、石核(チャート)		大正大1985
379	柏原3遺跡	○ ○ ○ ○					少 細文土器		人元大1985
382	東1遺跡						少 多		
384	台頭遺跡						少 加曾利E		
385	テシ久保遺跡						少 細文土器		
388	六體遺跡						少 細文土器		
390	高根町田遺跡	○ ○ ○ ○					多 黑浜、浮舟、阿玉台、加曾利E、陶片(黒曜石)、實利鉢片(メノウ)	中期主体	人元大1985
390	津水遺跡						少 石核(メノウ)		
391	松島遺跡						少 細文土器		
392	中島遺跡	○ ○ ○ ○					多 斧山、黒浜、浮島、瓦端ヶ台、称名寺、安行、此樂鉢片(チャート)、	前期主体	
393	牛渡原1遺跡						少 石核(黒曜石)		
394	第六大遺跡						少 加曾利E		
395	清水川1遺跡	○ ○ ○ ○					少 黑浜		
397	正智遺跡						少 細文土器		
398	人魚遺跡						少 風浜		
399	細内遺跡						少 岩谷、加曾利E、黒曜石		
401	セイカツ遺跡	○ ○ ○ ○					少 縄文土器、浮舟、加曾利E、土器片種、有壳土種		大正大1985
403	小山遺跡	○ ○ ○ ○					少 浮舟、阿玉台、加曾利E、富士、土器片種、土器片種、サルガホ	加曾利E主体	大正大1985
405	境前遺跡	○ ○ ○ ○					少 阿玉台、加曾利E、塚之内、石等、蓋石、土器片種、セス、貝殻	中期主体	豊原1980、清水和也1979a、 斎藤1981・1982、大正大1985、前田1987、中島1991、日暮1996、今 堀1996・1997、佐藤2000
419	新宿歌遺跡	○ ○ ○ ○					少 細文土器、加曾利E		人元大1985
420	松原遺跡	○ ○ ○ ○					少 浮舟		
422	カザヤ遺跡	○ ○ ○ ○					少 細文土器、加曾利E、安行3		
423	カザヤ前遺跡	○ ○ ○ ○					少 細文土器		
424	谷ノ跡遺跡	○ ○ ○ ○					少 細文土器、浮舟、加曾利E		大正大1985

遺跡番号	遺跡名	時期	遺物量	採集および出土遺物	図考	文献
		早	中	後		
455	小代田遺跡		少	縄文土器		
458	研磨港跡	○	少	縄文土器		大正大1985
452-402	糸子塚(安曇野)遺跡	○	少	碧玉石斧、碧石		大正大1985
453	安曇平ノ瀬跡	○	多	碧青利E・縄之内・安行2, 刺片(碧麻石), ハマグリ, サルボウ	碧青利E主体	大正大1985
455	春日原遺跡	○	○	碧青利E・縄之内・安行2, 刺片(碧麻石), ハマグリ, サルボウ		大正大1985
436	平三坊貝塚	○	○	碧青利E・縄之内・安行2, 刺片(碧麻石), ハマグリ, サルボウ, アカシ, ハマグリ 碧青利E・縄之内・加賀利E, 安行3, 碧青石斧, 碧石, サルボウ, アカシ, ハマグリ	中・後期土器・中期の遺物集中地点と後・晚晴の遺物集中地點は異なる) 小正1986, 萩原1981, 大正1985, 鹿城1987, 田中1988-1990, 日暮1990, 千葉1990-1997, 松本1997, 佐藤2000	
437	内古内塙	○	少	碧青利E		
439	今ノ内塙跡		少	縄文土器		
440	西高台遺跡	○	少	圓筒・浮島・加賀利E		大正大1985
441	柳沢台遺跡	○	少	西高文・加賀利E		大正大1985
443	柳沢2遺跡	○	少	西高文・春・行2台		大正・出島調査会1996
444	柳沢3遺跡	○	少	道口1層, 圓筒, 黒川		
446	柳沢4遺跡	○	少	加賀利E		
448	豪多田遺跡	○	少	黑2, 碧青利E		大正大1985, 土浦・猪 島調査会1996, 小川、 大正・石川1996
449	六方第2遺跡	○	少	三戸, 浮島, 陶器	土坑I	千浦・出島調査会1996
450	山の神遺跡	○	少	熱奈系。地盤上層, 縄之内		大正大1985
				輪存石, 二郎・商山・黒川・浮島・阿玉台・加賀利E, 六軒内筋, 局部部製石斧, 石器, 新片, 石皿, 碧石, 故石	1996年に発掘調査 井原台(14点), 沼島(37点), 三郎(40点), 阿玉台, 加賀利E(29点), 圓筒(18点), 浮島(13点), 道口(20点)	土浦・出島調査会1996, 小川・大正・石川1996
451	柳沢1遺跡	○	○	多		
452	八反田北遺跡	○	少	鐵頭土器		土浦・出島調査会1996
453	八反田南遺跡	○	少	縄文土器		土浦・出島調査会1996
454	小宮道跡	○	少	浮鳥		土浦・出島調査会1996
455	下小宮遺跡	○	少	浮鳥	土坑I	土浦・出島調査会1996
456	八幡神社東方	○	少	鐵頭土器		大正大1985
458	足木道跡	○	少	鐵頭土器・石版(トロトロ石), 石核(メノウ)		
459	分岐道跡	○	少	縄文土器		
463	前原後谷遺跡	○	少	圓筒土器		
464	戸崎中川遺跡	○	少	圓筒土器		大正大1985
465-801	打越古清野塔1号墳	○	少	鐵頭土器		大正大1985, 出島村教 委員会1971
466	戸崎城跡		少	鐵頭土器		出島村教委員会1971-1978, 灰城村教委員会1985, 大正 1985
468	石松遺跡	○	少	加賀利E		大正大1985
469	女人塚古墳	○	少	鐵頭土器		大正大1985
470	牛久保遺跡	○	少	阿玉台・雄曾利E, 刺片(ホキン・フルス?)		大正大1985
473	加茂平貝塚	○	○	鐵頭土器・石版・阿玉台・雄曾利E, 秋名・糸子・糸之内・加 賀利E, 土片片端, 石版(チャート), 砂岩(チャート), 石英, 黑麻 石, 石核(チャート・メノウ), 碧青石斧, 四石, 打製石斧	中期主体 古80年代, 大正1985, 昭和1987, 中島1991, 千 葉1996-1997, 日暮1996, 邑澤2000	大正大1985, 出島村教 委員会1971
475	御所古山遺跡	○	少	縄文土器		大正大1985
476	稚根遺跡	○	多	鐵頭土器・阿玉台・加賀利E・糸之内, 石核(チャート)	中期主体	大正大1985
478	稚根前遺跡	○	少	阿玉台・加賀利E		大正大1985
481	山崎遺跡	○	少	虎形文・鐵頭土器・浮舟		大正大1985
483	福留町遺跡	○	少	良賀美廣文・糸之内・浮舟・石版(チャート・黒羅石)・刺片・砂片・ 片端片端, 高橋石核(チャート・糸之内・メノウ)・石核(メノウ)		大正大1985
484	馬廻穴遺跡	○	少	縄文土器		大正大1985
485	加茂山・寺遺跡	○	多	田原1層, 山下層, 磯2・馬台・鐵頭土器	沈説文主体	大正大1985
490	樺原遺跡	○	多	阿原2層文・阿原下・加賀利E	中期主体	大正大1985
493	吹上遺跡		少	虎形文・器		
494	吹尻原遺跡	○	少	其松家表文		大正大1985
495	サキハマ古道跡	○	少	虎形文・器		大正大1985
497	万葉寺遺跡	○	少	虎形文・浮舟, 碧石(安山岩)		大正大1985
498	力・山遺跡	○	少	加賀利E		
499	樺原貢台遺跡	○	少	浮舟		大正大1985
501	朝殿道路	○	少	浮舟・阿玉台・地盤利E・石器, サトシジミ		大正大1985
502	松本遺跡	○	○	浮舟・阿玉台・地盤利E・石器, サトシジミ	加賀利E主・伴 属石, サルボウ	大正大1985
503	加茂八幡原遺跡	○	○	阿玉台・地盤利E・石器, 有名・糸之内・加賀利E・香2, 安行1-3, - 4, 碧青石, 有孔土・新井盤, 石版, 刺片(墨透石・チャート), 石核(チャ ート), 石器, 碧石, 有孔, 碧石, 石英, 碧石	中・後期土器・中 期の遺物集中地點と後・晚晴の遺物 集中地點は異なる)	菅原1981, 大正大1985, 鹿城1987, 大島・井原一 郎1996-1997, 日暮1996-1997, 邑澤2000
506	佐野八幡原遺跡	○	○	佐野利E・糸之内・糸之内		大正大1985
507	鴨原遺跡	○	○	阿玉台・地盤利E・有名・糸之内・安行2, 安行3, -4, 碧青利E・ 石版(墨透石), 打製石斧・安山岩, 碧青石(地盤石), 碧石(安山 岩), 碧石(墨透石・メノウ), 石	加賀利E主・伴 属石	大正大1985
508	七面り遺跡	○	○	碧青利E・糸之内・糸之内, 石臼	加賀利E主	大正大1985

III. 弥生時代

1. 出島半島における弥生時代研究史抄

出島半島における弥生時代遺跡の分布調査は大正大学考古学研究会によって初めて行われた(大正大 1985)。その結果明確な中期の遺跡は確認できなかったが、出島半島全域に小規模ながら弥生時代遺跡の分布が認められた。ただし霞ヶ浦町域には大規模な遺跡群はなく、最も多くの遺物が集められた遺跡は石岡市域の下宮遺跡であった。霞ヶ浦沿岸の地理的にはほぼ完結した地域全体における弥生時代遺跡分布が判明した点が重要な成果であった。しかし1980年代から1990年代にかけて、大規模な弥生時代遺跡の発掘が茨城県南部域の内陸部で行われたことにより、大正大学の成果が茨城県南部域の弥生時代研究に反映されることになった。

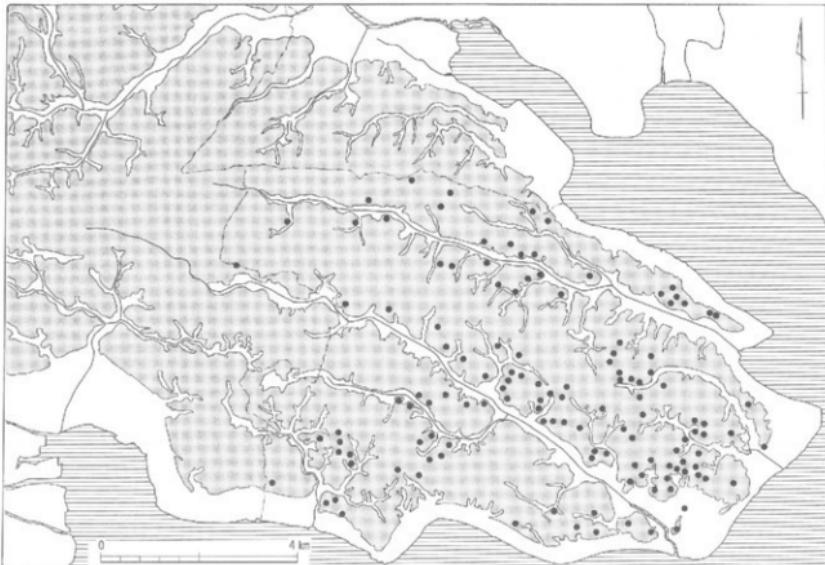
こうした状況下で開催された霞ヶ浦町郷土資料館の弥生時代特別展は、霞ヶ浦沿岸の弥生時代に焦点をあわせた初の試みであった。この特別展の中で千葉隆司により霞ヶ浦町域出土の弥生時代遺物が集成され、大正大的成果を含めた霞ヶ浦町域の弥生時代遺跡の整理が行われた(千葉 1998)。

また出島半島のなかでも下宮遺跡など石岡市域の弥生

時代遺跡群については、高浜入り周辺の弥生時代遺跡群の一つとして小玉秀成によって論じられるなど(小玉 1997)、出島半島の成果は再び注目されている。いずれにせよ霞ヶ浦沿岸の弥生時代研究はまだ端緒についたばかりである。

次に土器に目を転じると、出島半島において学的に著名な弥生時代後期の下大津小学校校庭出土土器がある(豊崎 1971)。なお今回の調査の結果、下大津小学校は篠山遺跡(491)の範囲に含まれられた。この土器と上浦市宍塙古墳群出土土器・千葉県香取郡小見川町阿玉台北遺跡出土土器を指標とし、「口縁部下端にイボ状突起」を特徴とする土器型式である「下大津式」が鈴木正博により提唱された(鈴木 1979)。型式名称は利根川下流域から桜川河口までの当時の海において用いられた土器であるという認識のもとに命名された(鈴木 1999: 47頁)。

その後鈴木自身により「下大津式」の再検討がなされ、下大津小学校校庭出土土器は「下大津式」の一系列表である「下大津式下大津系列」とされた(鈴木 1999)。そしてこの系列表は利根川下流域から霞ヶ浦南岸に沿って伝播してきた「下大津式阿玉台北系列表」と、天の川流域において「二軒屋式」系の進出によって生まれた「下大津式



第11図 弥生時代の遺跡

原田北系列」との境界ラインに成立したと論じた。

鎌木による古霞ヶ浦における「下大津式」の分布と「下大津式下大津系列」の生成についての想定は非常に興味深い。なぜなら、出島半島は、霞ヶ浦を上入りと高浜入りとに南北に二分するという地形的な特徴があり、霞ヶ浦周辺地域における弥生土器型式の分布範囲を検討する上で良好な立地だからである。ただしそのためには、出島半島における弥生時代遺跡の発掘調査が必要になってしまった。

また、土器以外の遺物としては有角石器がある。霞ヶ浦町域における出土例は古くから知られ、またその出土数も多い。だが、いずれも出土状況が未詳であるため型式研究の素材として用いられるのみで、出島半島の弥生時代について踏みこんだ研究はない。

さらに、出島半島対岸の美浦村陣屋敷・根本遺跡の発掘調査も霞ヶ浦周辺における弥生時代後期研究の特筆すべき事項である。台地上を全面発掘したことにより、從来不明だった霞ヶ浦沿岸部の弥生時代集落の一様相が明らかになった。さらにこの両遺跡の土器は土浦市原田遺跡群や竜ヶ崎ニュータウン遺跡群とは異なる独自のものであり、小玉秀成により茨城県南部域の弥生時代後期土器編年における一つの柱とされている(小玉 1998、1999)。現在までに出島半島で発掘調査によって全容が明らかになった弥生時代遺跡はない。今後上記2遺跡との対比が、出島半島の弥生時代研究に必要となるだろう。

(赤坂 亨)

2. 弥生時代の概観(第11図、第8表)

弥生時代遺跡の総数は133遺跡である。そのほか、出土地未詳の弥生時代中・後期の遺物が、霞ヶ浦町郷土資料館に収蔵されている。1998年の時点では37遺跡確認されていたが(千葉 1998)、今回新たに96遺跡が加えられた。

今回の分布調査では、中・後期に帰属する遺跡を確認することができた。茨城県域において、現行の編年案では前期と目される資料は確認されておらず、中期前半の下館市女方遺跡出土の上器などをもって茨城県域における弥生土器の初現としている(佐藤 1991、川井 1991a)。一方、女方遺跡出土土器の一部は前期に帰属するという編年案もあるが(中村 1976: 第1表)、未だ意見の一致をみたとは言い難い。今回の分布調査で、女方遺跡出土土器に近似する上器を探集・確認したが、ひとまず現行の編年に則り、これらの土器を中期の遺物として扱うこととする。

中期の包蔵地は19遺跡を数える。なお既報告の有角石器5例のうち3例、新たに確認した有角石器1例、霞ヶ浦町郷土資料館所蔵上器、町立北中学校所蔵土器などは、出土地未詳のため遺跡としては登録していない。

また後期の包蔵地は79遺跡を数える。うち5遺跡が発

掘されている。その他、霞ヶ浦町郷土資料館所蔵土器、町立北中学校所蔵土器など出土地未詳の資料がある。

全体的な立地の傾向として谷津に面した場所に遺跡が存在し、台地の半盤面には遺跡がみられないということがある。また妻木川・一ノ瀬川の上流域では遺跡の分布が希薄になっていく。(赤坂 亨、齋藤瑞穂)

3. 弥生時代中期(第12図)

弥生時代中期の遺跡は、塚下台2遺跡(026)、宍倉城跡(041)¹¹ 富士見塚古墳群第1号墳・同第2号墳(070-01・002)、白畠遺跡(161)、下江野貝塚(163)、南根本出土遺跡(191)、内岸遺跡(204)、和田台遺跡(213)、男神遺跡(232)、駒木山遺跡(235)、立葉遺跡(236)、天王越遺跡(241)、為都南遺跡(274)、坂大平遺跡(281)、安寄峯遺跡(299)、西方貝塚(302)、坂越遺跡(320)、新南遺跡(428)である。湧水点に近接する谷津最奥部の台地縁に立地する遺跡が多く、川に面した場所に位置する遺跡は少ない。

(1) 土器

茨城県域における所謂「弥生時代中期」の編年は、女方式→野沢式(猪式)→足洗式という案が、ほぼ意見の一致をみている(佐藤・井上・宮田 1978、川井 1991a、鈴木 1991)。霞ヶ浦町を含む出島半島における該期の土器は、霞ヶ浦町郷土資料館所蔵¹²の足洗式土器のみが知られており、足洗式期以前については未詳であった。

今回の分布調査では、主に、女方式上器、足洗式上器と考えられる資料を採集・確認することができた。無論、いずれの型式に該当するか判断しかねる資料も中には存在する。

女方式上器は、和田台遺跡で採集されている。また、町立北中学校所蔵の上器には、女方式と考えられる資料が含まれていることを確認した。下館市女方遺跡出土の上器群(田中 1944)は34号堅穴段階、15号堅穴段階、3号堅穴段階の3期に細別されているが(石川 1985)、今回確認した上器は15号堅穴段階の上器に近似する。これらの土器の文様モチーフは、那珂郡人町小野天神前遺跡出土土器(阿久津ほか 1977)¹³や稲敷郡桜川村般内遺跡出土上器に類似がある。先述したように、女方式土器の帰属時期については諸説あるが(川井 1991a、中村 1976)、小玉秀成は和田台遺跡出土の土器の時期を弥生時代前期としている(小玉 2000)。

今回確認された資料が、資料蓄積の少ない該期の研究に貢献する資料であることは間違いないが、紙幅の関係上、様を改めて論じることとした。

また、塚下台2遺跡、白畠遺跡、下江野貝塚、南根本出土遺跡、和田台遺跡、坂大平遺跡、安寄峯遺跡では足洗式土器が採集されている。また、富士見塚古墳群第1・2号墳が発掘された際、墳丘及び周溝内から足洗式土器が出土している。足洗式土器はこれまでに、鈴木正博や



第12図 弥生時代中期の遺跡



第13図 弥生時代後期の遺跡

海老沢稔によって1～3式に細別され(鈴木 1978、海老沢 1986)、小玉秀成によって各細別型式の内容が整理されてきた(小玉 1995、1998)。霞ヶ浦町郷土資料館所蔵の足洗式土器は、足洗2式と考えられている(小玉前掲)。また、要害峯遺跡採集の上器は、満巻文帯が胴部縦文帯と重複することから、足洗3式に比定できる資料である。他の資料は、足洗2式以降に位置付けられることは確実だが、2式、3式の判別は難しい。

(2) 有角石器について

霞ヶ浦町では、5例の有角石器が既に確認されている(清水 1954、町田 1960、千葉 1998、岡本 1999)。有角石器は、柴田常恵が「奇形石器」という名称で採り上げて以来(柴田 1911)、用途や機能の問題について繰り返し議論されてきたが、未だに意見の一致をみていない。ただし、弥生時代中期後半から後期に帰属すること、茨城県南部や千葉県北部といった霞ヶ浦沿岸域に集中的に分布することは、以前から幾度となく指摘されてきた(清水前掲、川井 1991b、岡本前掲)。

先に挙げた諸報告によると、志士庫荻原、加茂地区内、坂地区、田伏地区、牛渡コイウチで出土したという。志士庫荻原、加茂地区内出土の有角石器の出土地は本詳である。一方、坂地区の有角石器は、旧佐賀村役場(現在の佐賀保育所)で井戸を掘った際に出土したという。佐賀保育所であれば、坂遺跡の出土地となる。また、田伏地区的有角石器は、IIT田伏小学校(現在の田伏公民館)付近で採集されたという。牛渡コイウチの有角石器の出土地には、新南遺跡が該当する¹¹⁾。

今回の分布調査では、新たに志士庫飯岡の資料を確認した。個人蔵の資料である。この有角石器は、柄部、突起部は遺存しているが、刃部はほぼ欠失している。志士庫荻原例とは異なり、柄部は発達している。

なお、霞ヶ浦町内出土の有角石器は、坂遺跡、新南遺跡、志士庫飯岡出土のもの以外は、所在が確認できなくなっていることを付記しておく。

(3)まとめ

以上、霞ヶ浦町の弥生時代中期遺跡・遺物について概観してきた。該期の遺跡や遺物については、発掘調査が実施された例がないため、県内の他の市町村同様、集落の様相や遺物の組成など弥生時代社会を考察していくための基本材料が少なく、あまりにも不明な点が多い。今後の調査の進展をまって再検したい。

(斎藤瑞穂)

4. 弥生時代後期(第13図)

弥生時代後期の遺跡は79遺跡を数える。このうち発掘調査を行った遺跡は坂遺跡(320)、坂有河遺跡(322)¹²⁾、為都南遺跡(274)、富士見塚古墳群第1号墳(070-001)、岡2号墳(070-002)の5遺跡である。発掘された遺跡以外で文様等から確実に後期と判別できるのは、霞ヶ浦町

(191)¹³⁾、塚下台2号墳(026)、風返古墳群第5号墳(043-005)、大島遺跡(067)、香取・山下遺跡(098)、西山遺跡(225)、立葉遺跡(236)、坂大平遺跡(281)、折越遺跡(301)、水2号墳(310)、東3号墳(311)、房中古墳群(410)、新南遺跡(428)、柳梅台遺跡(441)、鍛冶屋魔寺(477)などの十数遺跡である¹⁴⁾。出土地未詳の弥生時代後期の遺物として、霞ヶ浦町郷土資料館所蔵土器の円形浮文を施す小壺(千葉 1998)と霞ヶ浦町立北中学校所蔵土器がある。

また現在までのところ、霞ヶ浦町域において発掘された弥生時代の集落はない。従って、今後の発掘次第では状況が大きく変化する可能性も考えられる。こうした危うい前提の上ではあるが、以下で今回の採集した資料と出島半島における弥生時代後期の遺跡立地の提起する問題について検討する。

(1) 遺物

前述したように採集した遺物は、小片が多く時期を特定できるものが少ない。その中で後期前半から中葉の櫛描文系土器と後期後半の上幅古式土器¹⁵⁾が、また外来系のものとして十王台式土器と後期後半～末の南関東系土器が確認できた。

櫛描文系土器は塚下台2号墳跡、風返古墳群第5号墳、大島遺跡、富士見塚古墳群第1号墳、岡2号墳、西山遺跡、折越遺跡、東2号墳跡、東3号墳跡、房中古墳群において採集された。また発掘調査によって櫛描文系土器が出土した例として坂遺跡がある(茂木 1999)。

上幅古式土器は立葉遺跡、坂大平遺跡において採集された。霞ヶ浦町に含まれる下大津小学校校庭から「下大津式下大津系列」の標準資料となった土器が出土している(鈴木 1999)。

十王台式土器は富士見塚古墳群第2号墳、為都南遺跡、柳梅台遺跡の3遺跡において採集された。

南関東系土器は香取・山下遺跡、坂有河遺跡において採集された。また霞ヶ浦町立北中学校所蔵土器の中にも含まれている。

その他の弥生時代後期の遺物として土製紡錘車がある。新南遺跡と鍛冶屋魔寺の2遺跡で採集された。

後期のうち櫛描文系土器の例が多いが、これは特徴的な文様をもつてゐるためであり、この時期に遺跡数が最も増加したわけではない。霞ヶ浦町全体でみれば、弥生時代後期を通して断絶することなく居住が行われていたといえる。

(2) 遺跡の分布

霞ヶ浦町域における弥生時代遺跡の分布に関して千葉は、1高浜入り・斐木川流域、2・ノ瀬川流域、3加茂地区の3グループに分けている(千葉 1998)。この分布は大筋で変更はないが、今回の調査の結果、これまで弥生時代の遺跡が確認されなかった安食地区、岩岸地区、田伏地区において弥生時代の遺跡が確認された。本節ではこうした新発見の遺跡を含めた霞ヶ浦町域における遺

跡のグループ化を遺跡の継続性という点から行う。

弥生時代中期～後期～古墳時代前期と継続した遺跡は、安食地区の富士見冢古墳群第1号墳・同2号墳、下人堀地区の利田山遺跡、田伏地区の為都南遺跡、中台地区の駒木山遺跡、男神地区の立葉遺跡、坂地区の天王寺遺跡、坂大平遺跡、坂遺跡、牛渡地区的新南遺跡の10遺跡を数える(第13図の●)。坂・田伏地区に6遺跡と集中し、安食地区に2遺跡、一ノ瀬川流域に1遺跡、牛渡地区に1遺跡がそれぞれ所在する。

弥生時代後期～古墳時代前期と継続する遺跡は穴倉地区2遺跡、安食地区2遺跡、西成井地区1遺跡、大和田地区1遺跡、中台地区2遺跡、田伏地区1遺跡、坂遺跡2遺跡、深谷地区2遺跡、牛渡地区1遺跡、戸崎地区1遺跡、加茂地区2遺跡の16遺跡を数える。これらの遺跡は中期から継続した遺跡の周辺に加え、菱木川中流域、川尻川流域にも分布し、一ノ瀬川・菱木川の上流域を除く霞ヶ浦町全域に存在する。

後期のみの遺跡も、前述した継続性のある遺跡周辺に多くが分布する。したがって継続性のある遺跡のまとまりから1牛渡・田伏地区を含めた一ノ瀬川河川周辺、2深谷・加茂地区の一帯を含めた一ノ瀬川中流域、3菱木川中流域、4川尻川流域、5安食台地の5つの遺跡群に霞ヶ浦町域の弥生遺跡を分ける。

これらのうち1～4については河川とそれによって形成された谷津のまとまりに対応する。これは小玉の考察した高浜入りの分布状況とも重なる(小玉 1997)。また河川の本流と支流との合流地点に継続性のある遺跡が存在するという立地は、原田遺跡群と類似している。従ってこのような遺跡群の分布は、霞ヶ浦沿岸だけでなく内陸部も含めた茨城県南部域に共通するといえる。その背景として、谷田川における稻作を生業とした生活様式が弥生時代後期において広範囲に定着していたと考えたい。

こうしたパターンに当てはまらないのが安食台地の遺跡群である。安食台地は東西に細長いため、台地上に谷津がほとんど形成されず、台地上の平坦面も狭い。南は菱木川河口部の氾濫原に面しているが、当時の霞ヶ浦は汽水湖であり塩害のため水田耕作ではなかっただろう。それにもかかわらず弥生時代中期から古墳時代にいたるまで継続する遺跡が存在するのである。

このような地理的条件下では稻作よりも、漁業などの霞ヶ浦に依存する生業の方がより環境に適応した生業といえる。つまり出島半島では、地形により茨城県南部域に共通する谷津に居住し水田稲作を行う集団と、沿岸部に居住し漁業を行う集団とが混在していたと考える。

参考となるのが陣屋敷・根本遺跡における遺跡群研究である。両遺跡は同じ丘陵上に位置するほぼ同時期の遺跡であるが、両遺跡の土器の内容は大きく異なる。黒沢浩はこれを型式差と認識し、隣接する集団が必ずしも同一集団ではないと指摘した(黒沢 1996)。この成果を受けて中村哲也は一つの谷津を水田として維持管理するた

めに、異なる集団が協力関係にあったとし、複数異集団による谷地田經營のモデル化を行った(中村 1996)。

このような異集団の隣接居住については安食台地の事例をふまえると必ずしも各集団の生業が稻作である必然性はない。むしろ異集団=異生業の方が理解しやすく、陣屋敷・根本遺跡も漁撈業集団と稻作集団の隣接居住であった可能性がある。

出島半島においてはその居住地の地理的条件によって漁業に特化する集団(安食台地)と、稲作に特化する集団(菱木川・一ノ瀬川中流域)と、両者が共存する集団(一ノ瀬川河川周辺・川尻川)に分かれていたと考える。そしてこれは霞ヶ浦全城に当てはまる可能性がある。

(3)まとめ

以上分布調査の成果から霞ヶ浦町域の弥生時代後期について考察を行ってきた。最後に弥生時代から古墳時代への移行についての展望を述べてまとめたい。

弥生時代後期から古墳時代前期へ継続した遺跡は坂地区が最も多い。この地区は谷津が多数形成されていることから、水田面積を増加させることができたようだ。また、一ノ瀬川の自然堤防上に弥生時代後期の二ノ宮遺跡が立地するなど氾濫原への居住域の拡大が行われた。これには生産量増加とともに人口増加が背景にあったと考える。これは從来の弥生時代から古墳時代への発展模式に捉えられるものである。

しかし水田面積を拡大できない安食台地において、首長墓は認められないものの弥生時代から古墳時代前期内に継続する遺跡が5遺跡認められる。このことは霞ヶ浦周辺地域において古墳文化の受容に水田耕作が必ずしも必要条件ではないことを示している。

これまで古墳文化の受容については、汎列島的に同じ理由の下に説明されることが主流であった。しかし霞ヶ浦といつては別れ島内の「小地域」内ですら、古墳文化受容の直前である弥生時代後期において同一の生活様式ではなかった。結果としてはどの小地域でも同じように古墳が出現するが、それぞれの地域にはそれぞれの受け入れ理由があったと考える。こうした小地域の詳細な検討が霞ヶ浦からの古墳時代像への貢献につながっていくだろう。

(赤坂 亨)

註

- 1) 弥生上器が採集されたのは、隅崎山塚墓群の境内である。
- 2) この土器は出島村中央公民館所蔵であったが、現在は町部上資料館に移管された。
- 3) 小玉秀次氏の説教示による。
- 4) 指南遺跡は、字コウイケを包含する。
- 5) 千葉隆司により塙壁遺跡として報告されている(千葉1998)。
- 6) 下人津小学校校庭を含む、また、千葉洋介により下大津遺跡として報告されている(千葉 1988)。
- 7) 後期の9号窯のうち窯室内に後期といえる遺跡がL1以下のは、弥生上器の小片を数点採取しただけの遺跡が多いためである。それゆえ時期の対応には付加状欄文や底部木炭質を指標とするを得ず、一部は中期末葉にさかのほる可能性がある。
- 8) 上様式については「二軒屋式」もその内容に含まれるため土器型

- 式として不適当であるという批判がある(鈴木 1999)。しかし分布調査では全体が復原できるような資料は採集できなかった。そこで本稿では奥州文を持つ弥生時代後半後半の土器を指して上釉式土器という用語を用いる。これは小玉秀成による茨城県南部域における弥生時代後半土器編年表の範囲の内に相当する(小玉 1999)。
- 引用文献**
- 阿久津久ほか 1977 「茨城県大宮町小野大神前遺跡」茨城県史研究会刊行部会 1985 「関東地方初期弥生式土器の一系譜」『論集日本考古学』 吉川弘文館
- 酒井沢松 1986 「茨城県における中期後半の弥生土器について」『第7回三島シンポジウム 茨日本における中期後半の弥生土器』北武考古文化研究会・千曲川水系古代文化研究所・群馬県考古学談話会
- 岡木孝之 1990 「尾洗祭石器の研究」『考古学雑誌』84-3
- 川井正一 1991a 「弥生時代の輪車」『茨城県考古・考古史料編集』
- 川井正一 1991b 「茨城における弥生文化の特質」『茨城県史料・考古資料編集』
- 堀沢 浩 1996 「『漢本と陣屋敷』『根木遺跡』美浦村・陸平調査会
- 小玉秀成 1995 「根木上遺跡出土の弥生土器」『玉里村立資料館報』1
- 小玉秀成 1997 「高浜入り周辺の弥生時代遺跡群」『茨城県考古学会誌』9
- 小玉秀成 1998 「常総地域における弥生土器編年の大枠」『霞ヶ浦沿岸の弥生文化—土器から見た弥生社会—』霞ヶ浦町立資料館
- 小玉秀成 2000 「焼文から弥生へ」『玉里村立資料館
- 佐藤次男 1991 「弥生時代研究の回顧と展望」『茨城県史料・考古資料編集』
- 佐藤次男・井上義安・宮田 総 1978 『入門講座弥生土器 東海東北』『考古学ジャーナル』146
- 柴田常惠 1911 「下紀須賀上都是浅見発見の奇形石器」『人猿学録誌』27-5
- 清水就三 1954 「有角石器の諸問題—新資料によせて—」『考古学雑誌』10-2
- 鈴木正博 1978 「『赤浜』覚書。『常総台地』9 常総台地研究会
- 鈴木正博 1979 「特別寄稿高野寺燈籠の弥生式土器について」『高野寺燈籠講演会報告書』茨城県那珂市教育委員会・高野寺燈籠調査会
- 鈴木正博 1991 「『女方式』、研究の途』『茨城県史料付録』26 茨城県立歴史館
- 鈴木正博 1999 「木邦先史考古学における「土器型式」と羅積の「進移の概念」」『古代』106
- 大正大学考古学研究会 1985 「鶴谷考古」4
- 円中国男 1944 「弥生式櫛文式接觸文化の研究」大正工芸社
- 千葉裕司 1998 「霞ヶ浦町の弥生遺跡と遺物」「霞ヶ浦沿岸の弥生文化—土器から見た弥生社会—」霞ヶ浦町立資料館
- 中村五郎 1976 「東北地方南部の弥生式土器編年」『東北考古学の諸問題』東北考古学会
- 中村哲也 1996 「弥生時代の陸平遺跡群」「根木遺跡」美浦村・陸平調査会
- 町田公雄 1960 「有角石斧の一新例」『兵庫』96
- 茂木悦男 1999 「一般道路石碑田伏上源道改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書」坂道跡・船江内遺跡・小原遺跡』茨城県教育財团

第8表 弥生時代遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	弥生 中 後 晩	古墳	遺物		文獻
				中	後	
5	北久保					
8	飯前山		○			
14	御園3					
17	小原1		○			
26	里下台2	○	○	足形式、一本刃特殊文具		人正大1985、千葉1998
32	馬場子2		○	○		
35	愛宕山		○	新潟縣文		
42	風造		○			
043-005	風造古墳群第5号墳		○			人正大1985、千葉1998
44	安賀城	○	○	新潟古墳群古より採集 中期は室町寺墓地にて採集		人正大1985、千葉1998
61	山ノ裏、藤沢		○	○		
62	大子1		○			
66	大子2		○			
67	大高		○	○		
070-001	富士見塚古墳群第1号墳	○	○	足形式、十工台式、輪格子目文		
070-002	富士見塚古墳群第2号墳	○	○	足形式、十工台式、輪格子目文		
79	鶴沼2					
84	穴黄山2		○			
97	今川					
98	名取・山下		○	吉陽東系		
106	齊久保1					
108	春平					
114	磐田		○			
115	仲田					
123	大坂					
126	舟前2		○			
128	及町1		○	○		
142	下深谷		○			
149	玉坂田					
161	白堀		○			
162	野々浦					
163	「江野日原」 ・軒延原山	○		足形式		
164	正昌日					
166	舟坪原		○			
168	洗瀬					
172	下山					
174	湖合					
177	御ノ挂		○			
186	御内					
187	内房		○			
191	御根家遺跡	○	○	足形式		大正大1985、千葉1998
193	庄根本		○			
196	泊ヒダ		○			
200	対合台		○			
201	利馬					
203	才敷川	○	○			
204	内原	○				
205	六代		○			
207	平					
209	象山		○			
210	嵐山遺		○			
213	伊豆食	○	○	足形式、足底式		
214	賀ノ木		○			人正大1985、千葉1998
215	栗山1					人正大1985、千葉1998
216	栗山大字					大正大1985、千葉1998
217	白堀					
219	内山		○			
222	朝神人平塚					
225	西山		○			
226	下木袋天ノ宮					
228	牧ノ内貝塚					
232	明持		○			
235	駒木山		○	○	○	
236	以聖		○	○	○	上原古式
237	駒木山東		○	○		
240	正廣		○	○		
241	大平池	○	○			
253	小池		○	○		
265	水戸脇		○			転写小形費
274	為那市	○	○	○	足形式、十手臼	千葉1998
275	トウメキ					
276	津海古貝塚		○			
277	牛舌					
278	木崎					
281	三ツ平	○	○	○	足底式	
288	地内					
289	跡林		○	○		
291	東池					
293	山崎					
299	那東墓	○	○	足形式		人正大1985、千葉1998
301	皆原		○	○		
302	西力貝塚	○	○			大正大1985、千葉1998
304	西方1		○			
305	西方2		○			
306	西方3		○			
307	下室					大正大1985、千葉1998

番号	遺跡名	発生			遺物	文献
		中	後	前		
308	東1					
309	東2					
310	東3	○			多季御前文	
311	東4	○			多季御前文	大正大1905、千葉1998
312	谷ノ下1					
320	坂	○	○	○	有角石器	清水1954、大正大1905-1906、千葉1998、岡本1999、茂木1999
321	二ノ台	○				
322	成石河	○			埋蔵遺跡として報告	
349	中木3					千葉1998
351	深谷下塚4					大正大1905、千葉1998
352	深谷下塚5					大正大1905、千葉1998
353	堀					
359	八十代台2	○				大正大1905、千葉1998
360	八十代台3					
367	墓91					
370	墓93					大正大1905、千葉1998
373	船形1	○				大正大1905、千葉1998
375	高井戸北					
377	船形3	○				
378	船形4	○				
379	船形5	○	○			
381	台原	○				
310	四谷古墳群	○			単孔須冠石器	
319	新地					
321	弓伏	○				大正大1905
328	新南	○	○	○	有角石器	大正大1905、町田1960、千葉1998、岡本1999
336	平之井貝塚	○				
340	浅見台					
341	細見台					
354	日暮小山					
365-366	三輪人埴輪第2分塲	○	○			大正大1905、千葉1998
373	加賀平具塚					
376	橋後	○	○			
377	高田櫻魔子	○			鈴鐸原	
378	渡前					
383	船形古					
384	馬鹿穴					大正大1905、千葉1998
385	加賀山ノ第					大正大1905、千葉1998
390	樋					
401	雄山	○	○	○	「下大津式下大津系列」出土地点合存	豊崎1971、鈴木1979-1999、大正大1905、南光澤1985-1986、1989-1998、弥生時代猪糞器1994-1995、千葉1998 大正大1905、千葉1998
503	加賀八幡貝塚					
507	鳴子					
	田代公民館付近	○			有角石器	清水1954、大正大1905-1906、千葉1998、岡本1999
	志士摩原平	○			有角石器	清水1954、千葉1998、岡本1999
	旭丘	○			有角石器	清水1954、千葉1998、岡本1999
	志士摩原岡	○			有角石器	
	西ノ前町等土資新館所藏土器	○	○	○	星形2式、円形2式小形器	豊崎1971、南光澤1993、千葉1998、小工1996-1998
	西ノ前町立北中学校所藏土器	○	○	○	女方式、南光澤	大正大1905

IV. 古墳時代

1. 出島半島における古墳時代研究史抄

霞ヶ浦町の古墳時代については、日本大学考古学会の継続的な発掘調査により、古墳について多くの情報が把握された(輕部・平沢 1964、平川 1964、浮田 1968、輕部 1970、竹石・平沢 1970、竹石 1964・1965・1967・1969・1982など)¹⁾。特に、竹石健二・平沢一久が出島村(現霞ヶ浦町)の古墳概要を示した研究は、現在では失われた古墳や古墳群の詳細を知ることのできるものであり、高く評価されるべきものであろう。

また、大正大学考古学研究会の継続的な分布調査の成果は、他の追随を許さない重要な研究成果であり、霞ヶ浦町にとどまらず、出島半島全域を対象としていることに意義がある(大正大 1985)。私どもの分布調査でもその成果を活用させていただくとともに、追検証することで調査の精度を高めることができた。大正大学の成果を最大限活用した田中広明の研究も、霞ヶ浦沿岸全域を視野に入れた地域研究として一つの方向性を示したものといえる(田中 1988)。

文献史学の立場から、この地域の国造制に迫ったものとして佐々木虎一(佐々木 1975)や篠川賛(篠川 1980)の研究がある。佐々木は出島半島周辺の玉里、沖洲、高浜と出島という各地域で、「在地首長制が、それぞれの地域に成立していた」とを認めめた上で、さらにその上位に石岡市舟塚山古墳を位置付け、「在地首長層内部のヒエラルヒーが成立していた」と考えた(佐々木前掲:139頁)。また篠川は、茨城のクニについて、いくつかの小地域で廻して規模の小さい首長墓が認められる前期の段階から、首長墓が連続する地域とそうでない地域が顕在化した後、石岡市舟塚山古墳が築造された段階で「茨城のクニ全域を範囲とするよう一つの政治的集団が形成され」たと考えた。その後の展開は「恋瀬川下流域左岸」の首長を頂点に「一個の政治権力が構成していた」ことを認めた上で、各地域の首長がいざれも「大型古墳を一貫して造営していくだけの権力を有していた」とした。さらに「こうした現象一中略一の示す意味については国造のクニの枠をはずして考えなければならない」という重要な指摘をおこなっている(以上篠川前掲:168~169頁)。

稲村繁は各古墳で採集される埴輪をもとに、霞ヶ浦北西部の首長墓の編年と首長系譜を論じている(稲村 1985)。石岡市舟塚山古墳の築造を契機として、5世紀中葉頃には恋瀬川河口付近・6世紀には園部川・嫌田川河口付近・6世紀後葉~末葉頃には出島地域へと大型古墳の築造場所が移動したとし、「高浜入り周辺の最有力首長権は一地域の首長系列によって保持されたものではな

かった」と考えた(稲村前掲:79頁)。

白石太一郎は、常陸の後期から終末期古墳の分布と「国造國」および律令期の郡(評)との比較検討をおこなっている(白石 1991)。茨城国造の支配領域内で、6世紀代の60m以上の古墳が多いことと、90~100m級の大首長墓の分散化した在り方に対して、それぞれが等質的と評価した。さらに、「有力在地首長層の勢力圏は、国造による地域支配の領域よりはかなり狭い」とし、特に「茨城國」における多数の大型前方後円墳の被葬者を「領域支配者としての「国造」よりも交通上の重要性からこの地に数多く置かれたと推測される名代、子代などの部の地方管掌者」ととらえ、東国における「国造制」そのものについても7世紀初頭に下る可能性を指摘した。

筆者もまた、風流稻荷山古墳の成果をもとに霞ヶ浦周辺の首長墓を検討したことがある(日高 2000a・bなど)。霞ヶ浦高浜入りには、出島半島と対岸の玉里台地周辺にはほぼ同時期の数多くの首長墓が築造されている。特筆すべきは、玉里台地の首長墓から環頭大刀と甲冑類が數多く出土し、出島半島では円頭・頭柄入りで甲冑類が皆無であるという事実である。近接した地域でありながら副葬品の様相が異なることから、玉里台地の首長は町田章のいう軍事権(町田 1987)および、小幡北山埴輪窓跡群を掌握し、出島半島の首長は柏崎窓跡群という私憲兵器を掌握するという役割の相違があったと考えた。

玉里台地周辺の古墳については、「里村内の分布調査が進み、より正確な年代や古墳の詳細が判明してきたことが正確な首長墓の検討を可能とした(小糸 1999)²⁾。出島半島を中心に、霞ヶ浦周辺の首長墓をとりあげた霞ヶ浦町郷土資料館特別展も、現在の研究水準を示す格好的な材料を提供した(千葉 1997)。

以上、霞ヶ浦町の古墳時代を取り上げた諸研究の一环を紹介してきた。諸研究の問題点としては、まず、それぞれの古墳の年代観に齟齬が見られることである。特に舟塚山古墳の築造年代は、各研究者によって最大約50年の開きがある。また、古墳群の提方によって導き出される首長系譜の違いは、描かれる歴史像の違いとして現出してくる。ただし、各古墳の年代観の齟齬については、満州研究の進展によって詳細な年代を導き出せるようになったからこそ齟齬が生じたのであり、今後もより詳細な古墳の年代特定作業をしていかなくてはならない。古墳群の提方とも各古墳の正確なデータが明確になることで、おのずと決定されていくはずである。

最も大きな問題点としては、いずれの諸研究もこの地域の古墳時代像を古墳、特に首長墓墓道の歴史としてしか捉えていないということである。つまり、集落遺跡や生産跡などの要素を汲み取らずに歴史を語ってい

るのである。これは甚だ片手落ちといわざるを得ない。分布調査の利点の一つとして、遺跡の詳細は不明であっても同時期の遺跡を把握できることがあげられる。古墳時代の遺跡に限定して述べるならば、本分布調査の力点の一つには、古墳という構築物だけでなく包蔵地を時期ごとに認識することができた。その概略は後述するが、古墳とそれに関連すると目される遺跡をある程度抽出することができた。次章では、分布調査によって確認できた古墳および、それに関連すると考えられる遺跡についてその概略を説明していきたい。

2. 古墳時代の概観(第14図、第11表)

霞ヶ浦町における古墳時代の遺跡は、古墳群を1遺跡と換算して221遺跡を数える。古墳(横穴を含む)は312基であり、前方後円墳(帆立貝形古墳を含む)は31基、前方後方墳は2基、方墳は10基、円墳(不明を含む)は250基、横穴は19基を数える³¹。包蔵地は130遺跡であるが時期未詳のものも含まれ、今後も継続的に遺物採集をおこなえば時期決定ができるであろう。時期の判明した遺跡についても、その時期とわかる採集品があったということであり、限定された時期のみの遺跡となるかどうかは、今後の調査の進展により変動もありうる。古墳についても、埋滅や未発掘のため時期を限定できないものが存在しているし、記録の残っていない埋滅古墳もあるだろう。

以下、時期ごとの遺跡概観をおこなうことにするが、包蔵地は▲、時期未詳の包蔵地は△、古墳については前方後円墳、前方後方墳、單独古墳はその墳形を表示し、古墳群は範囲を表示した。時期未詳の古墳は白抜き、古墳群は破線で表示した。また、遺物量の多い包蔵地は大きめの▲で表示した。時期未詳の遺跡・古墳は、すべての地図に表示することとした。

3. 古墳時代前期(第15図)

古墳時代前期の遺物量の多い遺跡は、平遺跡(052)、山ノ越・勝見掛遺跡(061)、香取・山下遺跡(098)、南根本遺跡(193)、天王越遺跡(241)、坂大平遺跡(281)、二城内遺跡(288)、西方貝塚(302)、西方2遺跡(305)、坂遺跡(320)、小山遺跡(403)、新南遺跡(428)、榎後遺跡(476)、松本遺跡(502)、加茂八幡原遺跡(506)、鶴平遺跡(507)、七曲り遺跡(508)である。

古墳は出土遺物などの知られるものは少ないが、寺山古墳群第1号墳(429-001)、柳梅台古墳群第1号墳(442-001)、田宿・赤塚古墳群第1号墳(510-001)、同第16号墳(510-016)などがあげられる。その他にも、五箇期の土器類が採集された戸崎古墳群第1・2号墳(465-001・002)や田宿・赤塚古墳群第10号墳(510-010)などがあげられるが、墳丘盛土中に混入していた可能性もあり確実なものではない。



第14図 古墳時代の遺跡



第15図 古墳時代前期の遺跡



第16図 古墳時代中期の遺跡

これらの遺跡相互の関係について、遺構が判明していない現状で言及することは慎重でなくてはならない。しかし、加茂地区において古墳時代前期の遺物量の多い遺跡が集中することは、田宿・赤塚第1号墳および、同第16号墳と不可分な関係であることは指摘できる。

古墳時代前期の首長墓は田宿・赤塚古墳群・寺山古墳群・柳梅台古墳群など一ノ瀬川右岸の出島半島南岸にのみ存在する。一ノ瀬川左岸の坂地区にも遺物量の多い天王越遺跡や坂大平遺跡などが所在しているが、その周囲には前期の首長墓は確認できていない。これらは、一ノ瀬川右岸の河口に位置する寺山古墳群や柳梅台古墳群との関係を考慮したほうがよいかもしれない。

菱木川流域にも遺物量の多い安食地区の平遺跡・山ノ越・見見掛遺跡・宍倉地区的香取・山下遺跡などが存在するが、いずれも遺跡の範囲はそれほど大きくなり、前期古墳の存在も知られていない。

つまり、古墳時代前期においては出島半島南岸に、首長墓およびそれに関連する集落などが営まれた可能性を指摘できよう。

4. 古墳時代中期(第16図)

古墳時代中期の遺物量の多い遺跡は、船橋2遺跡(098)、小山遺跡(403)、鶴平遺跡(507)、七曲り遺跡(508)に限定される。そのほかに古墳時代中期と認識できる遺跡も数少ないのが現状である。時期未詳としたものが、この時期になる可能性もないではないが明確さを欠く。

前期において遺物量の多かった鶴平遺跡と七曲り遺跡が、中期でも遺物量は比較的多いことから、継続して集落が営まれているようである。また、新南遺跡についても中期に継続する。これらは、中期でもその前半代に位置付けられるものが多く、田宿・赤塚古墳群や寺山古墳群において首長墓が継続して築造されている可能性もある。ただし、そのことを裏付けるような端緒は見出されていない。

坂地区において前期に遺物量の多かった遺跡で、中期に継続するものはほとんど確認されていない。菱木川流域においても、前期から中期に継続するものはほとんど存在しない。

古墳については、低地に築かれた中期前半と考えられる牛塚古墳(408)の存在が目を引く。また、田宿・赤塚第11号墳(510-011)も時期未詳ながら、低地の微高地上に立地することから中期である可能性もある。このように、台地突端から低地に築造立地が移動する現象は、霞ヶ浦沿岸において、中期から後期初頭の首長墓の多くが低地に築かれることと連動すると思われる(日高 1998)。その前提からすると、台地上に立地する鏡子塚古墳群第1号墳(432-001)は、中期古墳とすべきではないかもしれない。また、台地のやや奥に所在していることは、前述した前期古墳の立地とも異なる。むしろ、後述する後

期古墳の立地と共通するとも思われる。しかし、鏡子塚古墳群第1号墳についての情報が少ないので現段階においては、墳丘測量の結果から導き出された中期という見解を支持しておきたい(田中1999)。

ここで注目されるのは、遺跡の範囲はそれほど大規模ではないものの、前期から継続して遺物量の比較的多い小山遺跡である。牛渡地区の台地上に所在しているが、霞ヶ浦に向いているというよりは一ノ瀬川へ流れ込む支谷の奥に位置する。牛塚古墳と鏡子塚古墳群第1号墳のちょうど中間の場所に位置しているが、一ノ瀬川へ向いていることを重視すれば、鏡子塚古墳群第1号墳との関係で理解できるかもしれない。

菱木川左岸で前期において遺物量の多い遺跡が確認された安食地区では、中期に目立った遺跡は確認できない。菱木川右岸の宍倉地区でも遺物量の多い遺跡は継続せず、新たに船橋2遺跡が確認されるほか、小規模な遺跡が散在する。

つまり、古墳時代中期は、前期と同様に出島半島南岸において首長墓およびそれに関連する集落が営まれた可能性を指摘できると思われる。ただし、それは一ノ瀬川右岸に限定されることのようである。さらに、他地域では前期から継続する遺跡が激減することを特徴として指摘できよう。

5. 古墳時代後期(第17図)

古墳時代後期の遺物量の多い遺跡は、安食平貝塚(049)、香取・山下遺跡(098)、船橋2遺跡(104)、岩坪平遺跡(173)、南根本遺跡(193)、坂大平遺跡(281)、二城内遺跡(288)、西方貝塚(302)、西方2遺跡(305)、坂遺跡(320)、松本遺跡(502)、鶴平遺跡(507)がある。坂地区において遺物量の多い遺跡が集中して認められる。

古墳については、それまで首長墓が知られていないかった菱木川左岸、一ノ瀬川左岸に新たに築造されるようになることが特徴である。例えば風返古墳群(043)、太子古墳群(063)、富士見塚古墳群(070)、坂稲荷山古墳群(285)、白幡古墳群(294)、折越十日塚古墳(296)などがあげられる。また、田宿・赤塚古墳群でも、第7号墳(510-007)や第14号墳(510-014)などの小型の前方後円墳がこの時期となる可能性を有する。これらの中でも、富上見塚古墳は後期初頭、風返古墳群はそれよりもやや下降した後期前半ころに風返古墳群第2号墳(043-002)が築造される。その後、第3号墳(043-003)、第9号墳(043-009)などの埴輪をもつ円墳が築造され、第1号墳(043-001)、第4号墳(043-004)と継続して築造される。

古墳時代後期でもその後半期(いわゆる終末期)と考えられる首長墓は、風返古墳群第4号墳、笠塚第1号墳(064-001)、富士塚山古墳(354)、車塚古墳(488)などである。また、茨城県南部では施鷹市城と出島半島にのみ確認される横穴群の存在も特筆される。志戸崎横穴群(319)、

崎浜横穴群(495)であり、いずれも時期は未詳である。

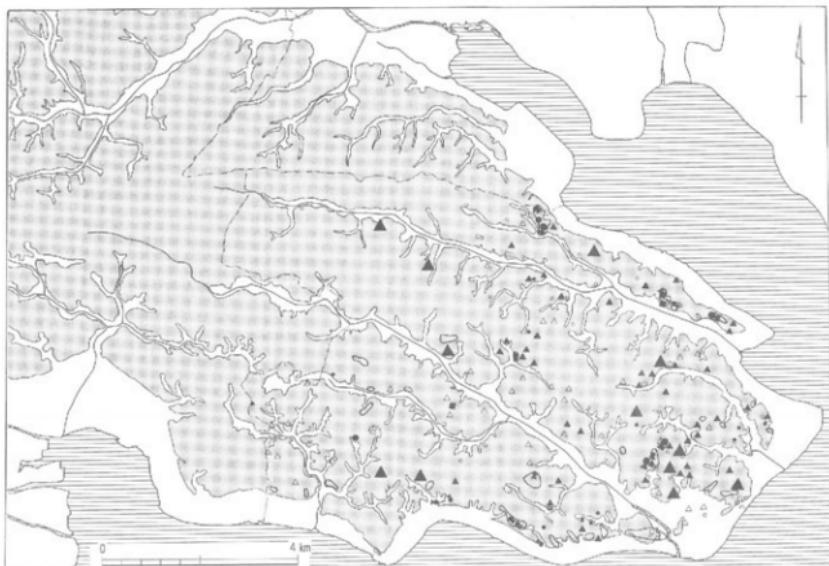
この時期で最も特筆されるのは、菱木川左岸の半島先端に位置する柏崎窯跡群(072)の存在である¹⁾。現在までのところ、6世紀後葉から7世紀前半に操業されていたことが判明している。2000年夏には筑波大学考古学研究室の手によって発掘調査もおこなわれた。本窯跡群は從来から瓦窯として著名であったものだが、古墳時代の須恵器生産遺跡として県内において操業が最も遡る窯の一つである。本窯で生産された須恵器の供給先是、今のところ詳らかではないが、少なくとも霞ヶ浦周辺において出土している古墳時代須恵器の一部に、本窯で生産されたものが含まれると思われる。また、今回の分布調査において採集された須恵器の中に、胎上や焼成が近似する資料も存在するが、これも窯跡群の詳細が判明した後に改めて考究すべき課題である。

古墳時代後期における遺跡相互の関係では、坂地区において遺物量の多い遺跡が集中して確認されたことと、坂船荷山古墳群第1号墳(285-001)や折越十日塚古墳の存在が注目される。坂地区で、古墳時代前期の遺物量の多い遺跡が確認されていることは前述したが、古墳時代後期の遺物量の多い遺跡と同一遺跡であることが多い。中期の様相が必ずしも詳らかでないが、周辺に中期の包蔵地も存在していることから、古墳時代を通して集落が営まれている可能性もある。古墳時代前期の首長墓は、一ノ瀬川対岸の寺山古墳群や柳梅台古墳群などが想定さ

れたが、後期では同じ台地の奥寄りにその墓造場所を移したのかもしれない。

菱木川左岸の風返古墳群に最も近い同時期の遺跡は、遺物量がそれほど多くなく範囲も狭い風返遺跡(042)である。ただし、やや下流の安食平貝塚でも一定量の遺物が採集できることから、ここに風返古墳群との関連を想定することも可能である。また、風返古墳群とは菱木川の支流の小河川を隔てた台地上に時期未詳の椎ノ木遺跡(029)があり、踏査時に住居址状の遺点が確認された。縄文・古墳・奈良・平安時代のいずれの遺構であるか確証を欠くものの、立地の面では風返古墳群と関連付けることも可能である。

同じく菱木川左岸の太子古墳群、富士見塚古墳群の周辺において遺物量の多い遺跡は今までのところ知られていない。特に富士見塚古墳群の周辺では柏崎窯跡群とそれに隣接する遺跡以外は未詳である。富士見塚古墳群第1号墳の墓造は後期初頭(5世紀末ころ)と考えられるのに対して、柏崎窯跡群の操業は前述したように6世紀後葉から7世紀前半ころで時期的に合致しない。また、富士見塚古墳群から西へ伸びる丘陵は、いくつもの支谷で分断された地形を呈しており、古墳を墓造する以外に大規模な集落などを営む余地が残されていない。後世の安食館跡(051)が所在するところまで奥まると、ある程度の平坦地を丘陵上に求めることができる。安食平貝塚や田子内遺跡(056)なども平坦地が確保できる場所に立地



第17図 古墳時代後期の遺跡

しており、富士見塚古墳群や太子古墳群などとの関連を考慮することも可能である。

古墳時代後期は、坂・柏崎・穴倉地区に首長墓およびそれに隣接する集落が形成された可能性を指摘できると思われる。ただし、古墳時代後期でもその後半期では、車塚古墳(加茂)、宮上塚山古墳(深谷)、風返古墳群第1号墳(穴倉)、笹塚古墳群第1号墳(安食)などがあげられる。注目したいのは、前二者の周辺で関連する遺跡を見出すことが困難であること、いずれも台地の奥で築造されていることである。風返古墳群第1号墳や第4号墳も、風返古墳群のなかでは台地の奥に位置する。笹塚第1号墳も霞ヶ浦に面するというより菱木川に面した立地である。また、坂荷山古墳、折越十日塚古墳も内陸部に築造されていることである。

つまり、古墳時代後期後半に近づくにつれて、首長墓の築造立地が内陸へと変化している可能性が高い。前期～後期初頭ころでは霞ヶ浦に面した立地であったことと比較すると、極めて大きな変化といえよう。首長墓から視野もしくは、いざれの場所から首長墓を望むのかという点を重視すると、古墳築造が霞ヶ浦を意識した外向きの立地から霞ヶ浦をそれほど意識しない内向きの立地へと変化していると考えることもできる。

6. 古墳時代の首長支配領域について

(1)出島半島における首長支配領域

出島半島の古墳時代については、1領域として捉える意見(佐々木 1975、橋村 1985)、菱木川流域と一ノ瀬川流域の2領域として捉える意見(篠川 1980)、風返、安食、坂、牛渡、深谷、赤塚の5領域として捉える意見(田中 1988)、田中広明と近似する意見ながら、安食、風返、坂、牛渡、赤塚の5領域として捉える意見(白石 1991)、20ヶ所前後の古墳群ともいえるグループとして捉える意見(竹石・平沢 1970)などがある。

本稿の冒頭にも述べたが、これらの諸研究の問題点は、この地域の古墳時代像を古墳・特に首長墓を基盤の歴史としてしか捉えきれないことである。今回の分布調査で明らかになった、首長墓周辺の遺跡量の多い遺跡を考慮すると、首長墓のみでは語り尽くせない歴史が復原できそうである。調査成果をもとに、出島半島における古墳時代の領域について考察を進めてみたい。

第9表は霞ヶ浦町における主要古墳の一覧である。方墳あるいは円墳は、比較的規模の大きいものを抽出した。前方後円墳(帆立貝形古墳を含む)は31基、前方後方墳は2基、上円下方墳²は1基、方墳は1基、円墳は7基、横穴群は2箇所である。時期別の数は不確定なものも含

第9表 霞ヶ浦町内主要古墳一覧

大系番号	古墳名	時期	遺物	東北・西日本など	判別	文獻
022	出島古墳	?		方円(68.6, 65.5)		竹石・平沢1970、大正大1985
043-001	風返古墳群第1号墳	後	鐵劍、大刀、馬具、鏡など	方円(78.1, 67.0)	風返古墳群山古墳	菱木・平沢1970、竹石1964、浮田1968、大正大1985、菱木川流域改修調査報告書2000
043-002	風返古墳群第2号墳	後	石棺、大刀、馬具、輪轂など	方円(65.6, 63.3)		篠川1970、大正大1985
043-003	風返古墳群第3号墳	後	鐵劍、	方円(55.5, 54.6)		菱木・平沢1970、大正大1985
044-004	風返古墳群第4号墳	後		方円(40.4, 40.0)	風返古墳群山古墳	竹石・平沢1970、大正大1985
065-001	小人丸古墳群第1号墳	後	橫室、刀子など	方円(40.4, 37.3)	小人丸古墳群	小糸1985、人野1989、大正大1985
066-001	小人丸古墳群第2号墳	後		二刀(7.7)(72×23, 66)		浮田1964、鶴谷1967、大正大1985
066-002	小人丸古墳群第3号墳	後	石棺	方円(28.7)	風返古墳	大正大1985、1986
070-001	第七十回見附古墳群第1号墳	後	馬具、鐵劍、鍔鉾、石棺など	方円(28.6, 21.8)	第七十回見附古墳群	早大弓削奈良美1973、大正大1985、田中1992
070-002	第七十回見附古墳群第2号墳	後	鐵劍、馬具など	方円(28.6, 20.2)		大正大1985、1986
141-002	丘上古墳群第2号墳	後		方円(19.2, 19.1, 19.5)	1号便	大正大1985、田中1992
178	中笠古墳	?		方円(48.2, 42.5)		
264	田代古墳群第1号墳	?		方(30, 30.0)		人正大1985
322-002	馬込古墳群第1号墳	後		方円(40, 40.5)		人正大1985
395-001	堤原古墳群第1号墳	後	石棺あり	方円(59.4, 55.5)	西脇山古墳	竹石・平沢1970、西脇山古墳改修調査報告書2000、大正大1985
394-001	堤原古墳群第2号墳	後	石棺、刀子など	方円(55.6, 52.5)	堤原古墳	竹石・平沢1970、人正大1985
296	折越十日塚古墳	後	玉衣(色彩・形)、石棺	方円(40, 34)	行持十日山古墳	大正大1985、西脇山古墳改修調査報告書2000、大正大1985
310	坂口古墳群	後	人骨、鐵劍			竹石・平沢1970
354	高二山古墳	?		方(25×25, 24)		菱型・田中1985、大正大1985
362-002	八幡山古墳群第2号墳	後		铁枕(30.2, 29.5)		大正大1985、森本1987
395-002	八幡山古墳群第3号墳	後		方円(16.4, 16.1)		竹石・平沢1970、人正大1985
408	牛坂古墳	中	弧形埴輪、土師	方(40, 40)		豊能1973、大正大1985、田中・日向1986
410-001	牛坂古墳群第1号墳	後	石棺材あり	方円(24.7, 24.5)		竹石・平沢1970、人正大1985
410-002	牛坂古墳群第2号墳	後		方円(27, 27)		竹石・平沢1970
410-003	牛坂古墳群第3号墳	後		方円(27, 27)		竹石・平沢1970
410-004	牛坂古墳群第4号墳	後		方円(27, 27)		竹石・平沢1970
410-005	牛坂古墳群第5号墳	後		方円(27, 27)		竹石・平沢1970
410-006	牛坂古墳群第6号墳	後		方円(27, 27)		竹石・平沢1970
420-001	寺山古墳群第1号墳	後	森形埴輪、土師	方円(60, 60)		竹石・平沢1970、大正大1985
420-002	寺山古墳群第2号墳	?		方円(29, 29)		竹石・平沢1970
420-003	寺山古墳群第3号墳	?		方円(29, 29)		竹石・平沢1970
420-004	寺山古墳群第4号墳	?		方円(29, 29)		竹石・平沢1970
420-005	寺山古墳群第5号墳	?		方円(29, 29)		竹石・平沢1970
420-006	寺山古墳群第6号墳	?		方円(29, 29)		竹石・平沢1970
432-001	猪子大塚古墳群第1号墳	?		石棺	立(20, 18)	豊能1973、大正大1985、田中1989
432-002	猪子大塚古墳群第2号墳	?		石棺	方円(40, 40, 17)	豊能1973、人正大1985
442-001	御宿古墳群第1号墳	?		石棺	方円(28.6, 25.5)	竹石・平沢1970、大正大1985
442-002	御宿古墳群第2号墳	?		石(20, 19.5)		竹石・平沢1970、大正大1985-1986
442-003	御宿古墳群第3号墳	?		石(20, 19.5)		竹石・平沢1970、大正大1985-1986
442-004	御宿古墳群第4号墳	?		石(20, 19.5)		竹石・平沢1970、大正大1985-1986
478-001	赤堀古墳群第1号墳	?		石(18.8, 17.3)		大正大1985
485-002	猪俣王塚古墳群第1号墳	後		方円(18.8, 17.3)		竹石・平沢1970、大正大1985、美城原改修調査報告書2000
487-001	高二山古墳群第1号墳	?		方(18, 18)		大正大1985
488	光山古墳	?		方(18, 18)		竹石・平沢1970
493	道場古墳	?		石(40, 40)		大正大1985、森本1987
510-002	北之原・柴又古墳群第1号墳	前	(石製)灰土	方円(60, 54.5)	田代大塚古墳	竹石・平沢1970、大正大1985
570-007	北之原・柴又古墳群第2号墳	後	毛髮	方円(40, 34.5)	高山古墳	大正大1985、田中・日向1986
570-010	北之原・柴又古墳群第3号墳	前	土器(五輪)	方円(18.8, 18.7)		大正大1985
570-011	北之原・柴又古墳群第4号墳	?		方(18, 18)		大正大1985
570-014	北之原・柴又古墳群第5号墳	?		方(18, 18)		大正大1985
570-016	北之原・柴又古墳群第6号墳	?		方(18, 18)		大正大1985

め、前期は5基、中期は4基、後期は26基、末詳は9基である。末詳の古墳の年代が今後判明したとしても、後期の主要古墳の圧倒的な数は変わらない。

包囲地については、遺物量の多い遺跡を中心に取り上げたが、概して遺跡面積も広いものが多いことを指摘した。逆に遺物量の少ない遺跡は、概して面積も狭いようである。この違いについては、遺構の情報が欠如している以上は未詳とせざるを得ないが、面積が広いということは、集落としても大規模遺跡であるといえよう。

古墳時代前期の首長墓は出島半島南岸の加茂地区に所在する田宿・赤塚古墳群と、牛渡・有河地区に所在する寺山古墳群、柳梅谷古墳群に限定されていた。関連する遺跡としては、田宿・赤塚古墳群の場合は鴨平遺跡、七曲り遺跡などであり、寺山古墳群や柳梅谷古墳群の場合は一ノ瀬川の対岸に所在する坂地区の天王越遺跡や坂大平遺跡、二城内遺跡などを想定した。安食地区に所在する遺物量の多い遺跡と対応する首長墓は未詳である³⁾。

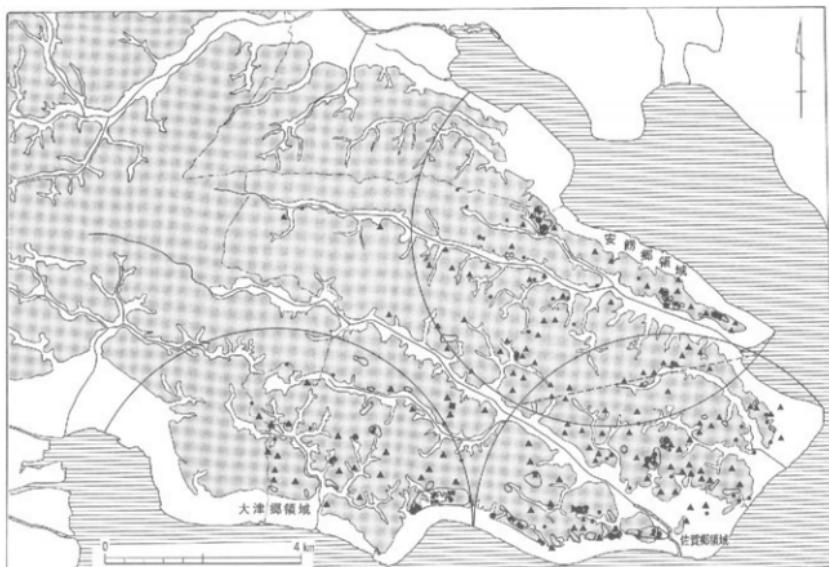
古墳時代中期の首長墓は牛渡地区的牛塚古墳や銚子塚古墳群に限定され、関連する遺跡として小山遺跡が想定された。ただし、中期前半においては加茂地区の鴨平遺跡、七曲り遺跡でも集落が継続していたと思われることから、田宿・赤塚第11号墳という微高地に立地する古墳が対応してくれる可能性もある。宍倉地区に所在する遺物量の多い遺跡と対応する首長墓は未詳である。

古墳時代後期の首長墓は、はじめ柏崎地区に富士見塚

古墳群第1号墳が築造された後、安食・宍倉地区の太子古墳群、風返古墳群へと築造場所が移動している。また、坂地区に坂稲荷山古墳群第1号墳や折越十日塚古墳、白幡古墳群が築造される。柏崎・安食・宍倉地区の首長墓と関連する遺跡としては、安食平貝塚あるいは田子内遺跡が想定された。ただし、風返古墳群については時期未詳ながら小河川を隔てた椎木遺跡も候補として指摘した。坂地区では坂大平遺跡、二城内遺跡、西方貝塚、西方2遺跡、坂遺跡など密集して遺物量の多い遺跡を確認することができた。ただし、加茂地区でも松本遺跡や鴨平遺跡など遺物量の多い遺跡を見出すことができるところから、田宿・赤塚古墳群における小規模前方後円墳(第7号墳・第14号墳)との関連を想定した。

終末期古墳については安食・宍倉地区に風返古墳群第4号墳、安食地区に菅塚古墳群第1号墳、深谷地区に富士塚山古墳、加茂地区に車塚古墳などがある。いずれも発掘調査などを経ていないので時期決定にはなお熟考を要するが、いずれも霞ヶ浦に面しておらず、内向きな立地へと変化したことが指摘できた。

以上をまとめると、前期では加茂地区、牛渡・有河・坂地区、中期では加茂地区、牛渡地区、後期では柏崎・安食地区、宍倉地区、坂地区、加茂地区に、首長墓もしくは大規模遺跡が存在する。終末期の首長墓は、柏崎・安食地区、宍倉地区、深谷地区、加茂地区であった。地区ごとに大規模遺跡が展開する時期や首長墓の築造時期



第18図 古墳時代出島半島の首長支配領域

は異なってはいるが、古墳時代を通じてそれぞれの地域で継続的な領域を認めてよいと判断する。それを、首長支配領域と呼んでおきたい。

出島半島の古墳時代における首長支配領域は、加茂地区周辺・牛渡・坂地区周辺・柏崎・安食・穴倉地区周辺の3ヶ所である。3ヶ所の地区は、まさに『和名類聚抄』(承平年中:931~938年に選定)の常陸國茨城郡十八郷中の大津郷、佐賀郷、安房郷に相当する。特に、佐賀郷の範囲を『新編常陸國誌』(中山 1901)のいう坂・田伏・岩岸・大和田・中台・男神・有河・牛渡の範囲とすることでそれほど離断がないのであれば、一ノ瀬川の両岸を含んだ地域ということになる⁶¹⁾。第10表は3領域の首長墓と大規模遺跡の消長を示したものである。

第10表 首長墓と大規模遺跡の消長

都名	地区名	首長墓			大規模遺跡		
		前	中	後	前	中	後
大津郷	加茂・牛渡	○	△	-	○	○	○
佐賀郷	牛渡・坂	○	○	○	?	○	△
安房郷	柏崎・安食・穴倉	-	-	○	○	○	-

第18図は、設定できると考えられる古墳時代の首長支配領域を模式的に表現したるものである。領域設定に際しては、牛渡・坂地区的ノ瀬川河口付近から田宿・天神塚古墳群の東端までと今の大瀬川大橋が架かる沖ノ内までがほぼ4kmであることを一つの定点として半径4kmの円弧で表した。加茂地区周辺は田宿・天神塚古墳群の東端から半径4kmとし、柏崎・穴倉地区周辺は柏崎の半島状に突出したところから半径4kmとした。

牛渡・坂地区周辺は、ほぼ佐賀郷の範囲に合致する。加茂地区周辺は現在の土浦市田村・沖宿周辺まで円弧が及んでいるが、まさに大津郷の範囲に合致する。柏崎・安食・穴倉地区周辺は現在の石岡市石川まで円弧が及んでいるが、これも安房郷の範囲に合致する。牛渡・坂地区と柏崎・穴倉地区的円弧が交差している部分は、その中に境界線を考えればよかろう。

大規模遺跡の消長をみると、古墳時代前期に3領域が確立していたとしてよい結果を得た。首長墓の消長では、同一時期にすべての領域で出揃う結果は得られていない。ただし、富士塚山古墳のある深谷地区が牛渡・坂地区と同一領域としてよければ、終末期に至りすべての領域に首長墓が築造されたと解することもできるが、これは今後の課題である。いずれにせよ、古墳時代を通じてそのような領域があったからこそ、後世に国都制の郷領域が円滑に設定できたといえるのではなかろうか。

(2)出島半島から「国造制」論へ

前節までに、出島半島において3つの首長支配領域が設定できることを説いた。令制国としての常陸國が成立して以降、出島半島は茨城郡に属していた。それより以前について『常陸國風土記』の記載によれば、分割後の

茨城郡と、信太郡・行方郡の一部とを合わせた範囲を、茨城國造の支配する「茨城のクニ」の領域とする。それでは、出島半島をいわゆる「国造(茨城)のクニ」の中の一地域として理解し、茨城國造の本拠地を別地域に想定することができるのだろうか。

そのことを考える前に、いまひとつ解決しておかなければならぬ問題がある。それは、出島半島内における3領域を束ねる上位概念、すなわち出島半島全城を一つの領域として理解できるかどうかである。前節までの結果から、3領域中に飛び抜けた地域の存在を見出すことは困難である。ただし、柏崎地区で後期初頭に突如として築造された富士見塚古墳群第1号墳の存在は軽視できない⁶²⁾。なぜなら、震ヶ浦を隔てた対岸の玉造町三味塚古墳、玉串村権現山古墳、石岡市府中愛宕山古墳という80~90m級の前方後円墳が、いずれも富士見塚古墳群第1号墳の築造時期と相前後して築造されていると思われるからである(日高 2001)。

後世の国都制の郷に照らせば、三昧塚古墳は立花郷、権現山古墳は田余郷、府中愛宕山古墳は茨城郷の領域ということになる。それぞの領域での首長墓の消長に関しては改めて検討したいが、少なくとも三昧塚古墳の築造された領域は、断続的ではあるが霞ヶ浦沿いに築造場所を変えながら玉造町塚原古墳(瓦吹・黒沢 1991)まで築造が続くと思われる。権現山古墳が築造された領域は、玉串台地を中心に80~90m級の首長墓が継続し、終末期に至り玉里町岡岩屋古墳が築造される。府中愛宕山古墳の築造後の状況は、必ずしも詳らかではない。恋瀬川と山王川に挟まれた高浜周辺で、早くに削平された前方後円墳などもあるようだが、継続して首長墓が築造されているかどうかは未詳である。しかし、府中愛宕山古墳が存在している以上、他とは別の領域として理解できる⁶³⁾。ひとまず、出島半島における3つの首長支配領域を大津郷域、佐賀郷域、安房郷域と呼び、対岸の3つの首長支配領域を立花郷領域、田余郷領域、茨城郷領域と呼んでおきたい。

それぞれの領域で築造された首長墓の墳丘規模に着目すると、若干の差はあるようとも、ことさら序列を導き出せるようなものでもない。それぞれの郷領域で同規模の首長墓が築造されていることは、出島半島において富士見塚古墳群第1号墳が築造された段階でも安房郷領域の内で理解すべきかもしれない。しかし、同古墳が出島半島の古墳時代において最も規模の大きい首長墓であることを最大限評価するならば、この時期に出島半島全体に支配領域を伸ばしたと解することもできる⁶⁴⁾。仮にそうであったとしても、その前・後の時期の出島半島には確実に3領域が存在したことは間違いかろう。

以上の検討で、出島半島における3領域に加え、高浜入りを挟んだ対岸にも3つの首長支配領域が存在していたことが明らかになった⁶⁵⁾。注目されるのが、後期初頭以降に、田余郷領域では継続して80~90mの首長墓が

築造されていることである。また、他の領域では断続的で、なおかつ墳丘形態が帆立貝古墳や円墳になっている。例えば安鶴郷領域の風返古墳群第2号墳、第3号墳、立花郷領域の玉造町大日塚古墳などである。上記の各古墳はおむね6世紀中葉ころの築造と考えて差し支えない。つまり、この時期に至り田余郷領域の首長を頂点に周辺領域との階層差が目に見える形で現出したと考えられる。しかし、その後6世紀から7世紀初頭ころになると、再びそれぞれの領域で同規模の首長墓が築造される。

次に、各領域における首長墓の築造状況を国造制論にひきつけて考えてみたい。国造制については長い研究史があり(新野 1974)、また国造制の成立時期についても4世紀から5世紀初頭頃、5世紀後半、6世紀中葉以降、7世紀後半などの諸説がある。ここでそれぞれの諸説について論述する余裕はないが、古墳以外の要素が少々している現状では、各領域の首長墓築造過程における最も大きな画期にそれを求めるのが妥当と考えている¹⁰⁾。

「茨城のクニ」にひきつけて考えるならば、白石太一郎の東国における国造制の成立が7世紀初頭に下るという見解がある(白石 1986・1991)。確かに、関東各地の首長墓築造の動向を傍観してみると、白石の見解は正鵠を得ているとも考えられる。白石は「常陸の場合も少なくとも6世紀代の大規模前方後円墳のあり方が、『常陸國風土記』などから復元される国造制に対応するとはみえない」(白石 1991: 155頁)と述べている。つまり、常陸においても7世紀であれば国造制の成立を認めてよいというのであろう。しかしながら、7世紀以降の出島半島周辺領域において、他を超越した墳丘規模を有する首長墓は確認できず、現状で茨城国造の墓を探すことは困難である。このことは、ともなおさずこの地域における国造制そのものに対する根本的な疑問をはかる必要性をもの語る。白石の視点を採用するならば、7世紀前葉ころの築造と思われる最後の前方後円墳、7世紀中葉ころに築造されたと思われる終末期古墳をもってしても茨城国造の存在は指摘できないことになる。

『常陸國風土記』をひとくらば、行方郡条における継体朝の谷津開渠伝承で登場するのは箭括氏麻多智であり、孝徳朝の池堤事業に登場するのが行方郡(許)設定を申請した茨城国造の壬生麿であった。この記事をもって茨城国造は継体朝以降、孝徳朝以前には成立していたことになるのであろう(平林 1983)。

筆者に妙案があるわけではないが、二つの可能性を指摘してまとめてみたい。一つは前述した6世紀中葉から6世紀後葉ころの、田余郷領域における首長墓の卓越性である。周辺領域で拮抗する首長墓が存在しないことは前述の通りだが、さらに田余郷領域の首長墓の個体品に着目すると、環頭大刀と甲冑の保有率が卓越していることが知られる(日高 2000b)。環頭大刀が町田章のいう軍事権を象徴しているとするならば(町田 1987)、甲冑の多さと相俟って田余郷領域の特徴が軍事権というこ

となるかもしれない。注目されるのは、「附書」倭国伝の国を指すとされる「軍尼」という表記である。この語をめぐっては「附書」の記者が国造の軍事的性格をつよく感じたため、そのような表記となつたとみる見解もある(本位田 1978: 359頁)。また、国造制が「朝鮮半島をめぐる国際関係の緊迫の中で、軍事体制を整える目的で施行された」(篠川 1996: 135頁)と捉える見解も想起される。つまり、6世紀中葉ころにこの地域の国造制施行を認め、その奥津城を田余郷領域の首長墓群とするのである。しかし、国造名はあくまで茨城国造であり田余国造ではないから、名称についての納得できる説明が必要である。また、6世紀末から7世紀初頭ころになると、それぞれの領域で同規模の首長墓が築造されるようになるから、その時期の田余郷領域の首長墓を茨城国造の墓とすることはできない。

二つめは鎌田元一らが主張する孝徳朝における全面立評(鎌田 1977、園田 1971など)によって、それまでの古墳時代的な論理が払拭され、この時期に至り始めて国造制が施行されたと考える案である。国造制施行を、各領域の首長墓築造過程における最も大きな画期に求めることが許されるならば、他の中小規模古墳との格差をもつていた首長墓の築造終了こそにそれを見出しえると考えるるのである。藤間牛人が、国造制は天皇号とともに7世紀後半四期以降に成立してくるとした想定に共通する(藤間 1970: 95頁)。ただし、これでも国造が7世紀後半の天武朝に初めて認定された公的資格であるとする山尾幸久の見解(山尾 1983: 222頁)との微妙なずれも見逃せない。

また、前川明久は東国のなかでも常陸地域に多い伴造的国造の成立について、その氏姓名の子代・名代が6世紀になってからのもので、それが「常陸地域を南北から北に向かうほど新しくなってゆく」ことを明らかにするとともに、「房総地域が最も早く六量紀中葉に近いころまでに、常陸では六世紀末前後」に成立したとしている(前川1977: 76~79頁)。つまり、茨城国造や那珂国造、筑波国造として登場する千生連(直)などの壬生部は、推古朝(推古15年)において設定されたものなのである(岸 1957、早川 1985など)。壬生部設定の時期は、まさに白石が東国の国造制施行とした年代に合致するかのようである。しかし、「茨城のクニ」の国造の成立を、白石がいうように他地域と同様な7世紀初頭ころとするには、国造の墓を明確にし得ないとへの納得できる説明が必要だろう。

筆者としては、上記の案のいずれにも解決しなければならない問題が内包していると考えている。もちろん上記以外の可能性も存在しよう。今後、考古学からどこまでこの問題に追っていくか、自らに問い合わせ続けていただきたい。

(日高 健)

- 1) 日本大学の発掘調査成果は、残念ながら未刊のものが多い。そのようななかで、風呂福井山古墳の報告書が刊行され、それまで断片的に示されてきた資料の系統的な検討をおこなうことができるようになった(篠崎町出土遺跡調査会、2000)。
- 2) 明治大学考古学研究会が分布調査をおこない詳細な調査地図が刊行されている(山中里教育委員会、2000)。
- 3) 「京城吉古墳群」においては19基の古墳が記録されており(茨城県教育庁社会教育課、1969)、大正大学考古学研究会の分布調査においては19基の古墳が確認されている(大正社、1985)。
- 4) この他の奈良盆地には小字製鉄所(660)がある。從来から、製鉄所として認識してきたものであり、隣の断面に鐵山が3箇所確認された。そのうちの1基から須恵器を採集しており、現在確認できるものが鐵器空(齊富)の断面である可能性もある。採集された須恵器は壺の口部端であり、崩山古墳群で採集されたものと似た特徴をもつてのことから、古墳時代の須恵器である可能性がある。
- 5) 石岡市石川1号墳を壇丘長16mの小型前方後方墳とする意見もある(山中里1988)。距離的にも離れているが、出島半島の高浜入りに前斯古墳がある可能性もでてくる。詳細不明であり、壇面も前方後方墳とする根拠に欠けることから、ひとまず考慮の範囲に属することにする。
- 6) ただし、「大日本地名辞書」第6巻東海(吉田、1903)では出島村に合併する前の半波洋、佐賀村、美並村とする。美並とは深谷地区が含まれることから、「新編常陸国誌」の考證とはやや異なる。深谷地区を大規模とするか審議するかについては、前斯古墳と考えられる土塹山古墳の存在を考えたとき問題となる。第10頁にあるように、現在までのところ半波・坂池区に明確な終末期の巨量墓といえる古墳は未確認である。このことから、深谷地区の富士派の埋葬を半波・坂池区に認めておくもの一案が、なお然考を要する。常陸国衣城郡の地名考證をおこなった久保口吉一は、深谷地区を佐賀郡としている(久保口、1989a)。さらにも、それぞれの地域ごとに古墳などの遺跡を記述する(久保口、1989a~1990)。ただし、著者が古墳時代から後の鶴瓶城をみた視点とは逆の視点から述べたものであることを申し添えておく。穴谷地区のモノ瀬川と木戸川に挟まれた遠隔空白地域については、空谷ゆえ保留しておきたい。
- 7) 同古墳においては報告書で坂井長78mとしている(伊東1992)。しかし、報告書に記載されている測量図を計測する限り、78mという規模は小さすぎるようと思われる。今回の一枚表においても坂井長は80mとしたが、乗算者は坂井を90mと見ている。その根拠は楕円形を論じた拙文を示しておいた(山中里、2000a)。
- 8) 岩塚山古墳群には、かつて90mの前方後方墳であったという8号墳(平尾塚)、やはり90mの前方後方墳であったという1号墳(大日塚)、手子の古墳が知られている(石岡市立教育委員会、1995)。両者とも坂井古墳や年代については未詳だが、伝えられる規模が正確であるとすると、坂井古墳を90mと見ても差はない。しかし、これらの古墳の規模が未詳である以上、貢長丈が既述しているか否かという検討はできない。他方、「新編常陸國誌」では、茨城城の家業を玉里村口木谷などとしている。そうすると、玉里村木船塚古墳や栗又ケ若原古墳などは茨城城の墓窟となる。しかし、「大日本地名辞書」ではこの區域をすべて田余瀬としており紹介がでていない。
- 9) 開川明久は同調説の成立からその論議に関して、「七世紀後半では、東京において国造勢力の消長があった」(萩原、1977:73頁)と捉えている。それは、櫛ヶ淵高浜入り地域を考える際にも参考となる。前述のように、当流域で国造の墓を探すことは困難である。それぞれの領域で突出した存在がないということは、また安定した領地であった可能性もあり、それだけ各領地で貢長丈の消長に把握できるということかもしれない。しかし、出島半島におけるこの領域が内増時代を経て存在していたことは疑う余地がない。
- 10) 本節で述べた古墳時代の百鬼支配城が後世の都の構成と重なり合うという事象は、すべての地域に普遍化できるわけではない。例えば筑紫の行田山古墳群の対象者の支配領域が、後世の堀玉郡埼玉郡のみであったとは想定にくい。「和名抄」によれば、埼玉郡には大田郡、笠原郡、草原郡、餘戸郡(高山寺本にはみえない)と埼玉郡のほかにまだ郡があるが、埼玉古墳群の対象者達の支配領域が埼玉郡のみに留まっていたとも思われる。郡域を超えた支配を想定できるであろう。ただし付け加えると、6世紀末から7世紀前半ころにおいては埼玉古墳群の絶対的・政治的優位性が描らいでいた可能性が高い。なぜなら、このころ埼玉古墳群の貢長丈と肩を並べるようなく墳群の大きな古墳が隣接地で続々と造られているからである。例えば、行田市若丘正子古墳、同名古墳高山古墳、同小見原殿古墳、西園寺御園天王山坂古墳や、終末期の行田市大塚山古墳などである。駒込浅野はこれらの古墳の在り方をして、「互に競争を争うよな対立關係を想定するのは無理がある」とした上で、「埼玉古墳群の最高貴族と、本家家と分家といふような血縁にも近い關係があり、時にはこれを補佐し、あるいは上位に位直し、連合的な政治体制」となっていたと述べている(杉野、1970:84頁)。前述のように、酒ケ瀧高浜入り周辺でも6世紀後半~7世紀前半にそれぞれの郷頭では8世紀頃の首長裏が営まれることと共通する可能性もあるが、その場合は埼玉郷内で幾つもの勢力が台頭してきたことになる。
- (1) 扱う地域は異なるものの、印旛沼の分野と後の卯塚郡と袖生郡、香取郡などを古墳や古代寺院などから読みこむ山口晋作の研究は、文献史料と考古資料をつかない古墳時代諸城研究として高く評価されるものである。その手法は鄭名や文字瓦にも目配りした堅実なものであり、本稿を著すにあたってその多くを学んだ(杉山、1995)。

引用文献

- 石岡市教育委員会 1993 「石岡市の歴史」
伊東直敏 1992 「富士見塚古墳群」出島村教育委員会
稻村 幸 1985 「茨城県霞ヶ浦北西部における前方後円墳の変遷」『史学研究集録』10
茨城県教育委員会 1982 「重要史跡調査報告書」I
茨城県教育委員会 1986 「重要史跡調査報告書」Ⅱ
茨城県教育庁社会教育課 1967 「至城坂古墳群紹介」
茨城県史編纂室原始古代史部会 1974 「茨城県史 考古資料編古墳時代」茨城県
浮田信次郎 1968 「茨城県出島村福岡山前方後円墳発掘調査」『日本人字考古学通報』8
大野紹太郎 1896 「赤牌同義」論沿岸に行役!『東京人種学会誌』121
岡田毅三郎 1894 「赤牌同新治郡牛込村古墳発掘の概況」『東京人種学会誌』96
霞ヶ浦町道篠葉会 2000 「風景説め古墳」霞ヶ浦町教育委員会・日本大学考古学会
輝部恵志郎 1970 「茨城県新治郡風致大日山・羽黒山古墳」『日本考古学年報』18
輝部恵志郎・平沢 久 1964 「茨城県出島村坂込、猪舟坂前方後円墳の祭把調査」『日本考古学協会昭和39年度大会研究発表会要旨』
瓦吹原・黒沢朝哉 1991 「行方郡玉造坂塚古墳出土の鏡について」『倭國考古』13
華 俊男 1957 「光明立石の史的意義」『にトリア』20
久保口吉一 1980a 「古代常陸國茨城郡の都について」『茨城県立歴史文化研究所』16
久保田昌一 1989~1990 「常陸郡風致」『常陸郡風致記』・『和名堅智録』に見える常陸國茨城郡の地名について(一)~(三)『風土記研究』7・9・10
小玉秀成 1999 「跡方王塚の時代」三塙村史料館
小笠原之助 1895 「常陸國霞ヶ浦沿岸附近ニ於ケル古跡」『東京人類學會誌』106
笠ヶ木慶一 1975 「常陸における国造の一考察」『原始古代社会研究』2 収載書序
萩原 賢 1980 「律令制成立期の准文部」『日本古代史論考』
宮川弘文館
難川 賢 1996 「日本古代國造の研究」宮川弘文館
白山一太郎 1986 「後期古墳の改立と變遷」『日本の古代』6 中央公論社

- 白石太一郎 1991 「常陸の後期・終末期古墳と風土記遺跡解説」
『国立歴史民俗博物館研究報告』33
- 移動茂樹 1990 「北武藏における前方後円墳の消滅について」『前
方後円墳の消滅』 新人物往来社
- 移山晋作 1995 「古代田波の分派」『土器の考古学』 雄山閣
- 関出香融 1971 「国際と土著との政治関係」『古代の日本』9 角
川書店
- 人正大学考古学研究会 1985 『物々考古学』4
- 人正大学考古学研究会 1986 『物々考古学』5
- 人正大学考古学研究会 1987 『物々考古学』6
- 竹石健二 1964 「茨城県新治郡出島村所在福井坂古墳発掘調査」
『日本大学史学会研究叢報』8
- 竹石健二 1965 「茨城県新治郡山鼻地方に所する高坂墳場の性格
と今後の問題点」『日本大学史学会研究叢報』9
- 竹石健二 1967 「茨城県新治郡出島村所在崎浜横穴墓群について」
『史叢』11
- 竹石健二 1969 「特異な位置に内部主体を有する古墳について」
『史叢』12・13合併号
- 竹石健二 1982 「茨城県新治郡所在の白幡古墳群について」『史叢』
29
- 竹石健二・平沢一久 1970 「新治郡出島村の古墳概観」(茨城県史
研究)17
- 竹下次作 1961 「茨城県新治郡歩崎町」『日本考古学年報』9
- 田中広明 1968 「震ヶ浦の百民」「姿負城考古」10
- 田中広明・大谷擴 1989 「東国における後・終末期古墳の基礎的研究」(1)『研究紀要』5
- 田中 振 1999 「茨城県霞ヶ浦町牛渡後・深谷古墳の測量調査」『筑
波大学先史学・考古学研究』10
- 田中振・日高慎 1996 「茨城県出島村歩崎天神塚古墳の測量調査」
『筑波大学先史学・考古学研究』7
- 三里町教育委員会 2000 「玉里町道路地図」
- 千葉謙司 1997 「霞ヶ浦の官長」 霞ヶ浦町郷土資料館
- 千葉謙司 1998 「私は神古墳群出土の須恵器」「婆良妹考古」20
- 千葉市・出島町合同道路調査会 1996 「柳沢遺跡、婆良妹遺跡、寺
行遺跡」
- 森間幸大 1970 「「因造制についての一考察」『日本古代史論叢』
- 達原元男博士墓碑記念刊行会
- 豊崎卓敏修 1971 「山島村史」 山島村教育委員会
- 中山信名修(栗田寛雄) 1991 「新編常陸山辺史」(1976年岩谷房刊)
- 新野進吉 1974 「研究史伝造制」 香川弘文館
- 長谷川隆之 1987 「茨城県新治郡山島村太子古墳群の調査」『日本
大學考古学通報』7
- 猪部保・山崎順徳 1965 「新治郡山島村における横穴墓の新例」
『ひたちじ』5
- 早川万年 1985 「雄古朝における壬生御設定について」『古代文化』
37-8
- 日高 健 1998 「『茨城県 前期古墳から中期古墳へ』『前原古墳か
ら中期古墳へ』105-122頁 東北・関東前方後円
墳研究会
- 日高 清 2000a 「風呂橋荷山古墳の墳丘企石と常陸の前方後円墳
の墳丘企石」『風呂橋荷山古墳』 霞ヶ浦町教育委員会・日本大
学考古学会
- 日高 清 2000b 「風呂橋荷山古墳の石丸刀と佩用方法について」
『風呂橋荷山古墳』 霞ヶ浦町教育委員会・日本大
学考古学会
- 日高 健 2001 「妙見山古墳探査の埴輪」『玉里村立史料誌報』5
- 平川泰輔 1964 「茨城県新治郡出島村宇安次の太子占墳群発掘調査
経過報告」『日本大学史学会研究叢報』7
- 平澤一久 1969 「洪底埋葬施設位置の特異な高坂墳についての一
考察」『黒田博士誕辰記念歴史学論叢』 錄田先生
追憶記念会
- 平林忠仁 1983 「『源造制の成立について』『龍谷史稿』88
- 本位田寿士 1978 「国造姓『源』に関する一、二の問題」『日本古
代氏族家形成過程の研究』 名著出版
- 前川久明 1977 「東國の國造」『古代の地方史』5 坂東編 朝倉
書店
- 町田 幸 1987 「環刀の系譜」「古代東アジアの装飾墓」 同朋書
(初出は1976年)
- 茂木悦男 1999 「坂道跡、松戸内遺跡・小原遺跡」茨城県教育財团
- 茂木雅揮 1987 「日本の古代道路38 茨城」 保育社
- 吉田東吾 1901 「大日本坟名辞書」 岩山房(1970年増補版を参照)
- 早稲田大学考古学研究室 1973 「猿田古墳群第9号墳・長崎古墳群
第2号墳・柏原古墳群富士見堀古墳の測量調査報告」
『茨城考古学』5

第11表 古墳時代遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	局別	遺物量	遺物	備考	文献	
						前	中
018	河原塚古墳		少	—	方	大正大1985	
019	人地古墳		少	—	円	大正大1985	
022	當時前古墳		少	—	方円	竹林・平成1970、大正大1985	
026	小木古墳		少	—	方	大正大1985	
030	人木古墳		少	—	方	大正大1985	
033	馬頭山古墳	○	少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
035	馬頭山古墳	○	少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
036	馬頭山古墳	○	少	—	円	大正大1985	
038	今南古墳		少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
042	馬頭古墳	○	少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
043	馬頭古墳	○	少	土印(楕圓)・瓦を参考	円	大正大1985	
047	新島古墳		少	—	方	大正大1985	
049	安良平丘塚	○	多	土印(楕圓)	円	大正大1985	
052	千葉塚	○	少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
056	田子内古墳		少	—	圓底	大正大1985	
060	小津松古墳	○	少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
061	山ノ越(神立)古墳	○	少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
062	女子古墳		少	土印(楕圓)・瓦を参考	円	小倉1985、大野1985、大正大1985	
064	女子古墳		少	土印(楕圓)	円	小倉1984、典谷1987、大正大1985	
067	新村古墳		少	土印(楕圓)	円	大正大1985、人正入1986	
069	新村古墳		少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
070	吉士見(弓削)古墳		少	毛甃(瓦)一起を参考	方円1、円4	弓削1973、大正大1985、伊東1992	
072	加賀麻古墳		少	—	圓底	豐崎1971、大正大1985	
075	瓦元・唐子古墳		少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
083	八幡山(弓削)古墳	○	少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
089	佐伯門古墳		少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
098	香取・山下連塚	○	少	土印(楕圓)・和菴(?)・集金(?)・コウ(?)	円	大正大1985	
104	新見2号墳		少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
105	西久保(宝鏡)		少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
108	新平古墳	○	少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
112	新平(木越)古墳		少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
114	新平古墳		少	土印(楕圓)あり	円	大正大1985	
119	新田古墳		少	—	円	大正大1985	
126	新入(造跡)	○	少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
128	新町2号墳	○	少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
127	新利古墳		少	—	円	大正大1985	
128	新利(造跡)	○	少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
126	芦之古墳		少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
137	人目古墳		少	—	円	大正大1985・1987	
139	須原(須原)古墳		少	須原(須原)あり	円	大正大1985	
141	山古(須原)古墳		少	—	円	大正大1985	
142	下治井連塚		少	土印(楕圓)・風巻(須原あり)	丸11、円4	大正大1985	
143	百枝井下塚(1番塚)		少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
144	西成井下塚(2番塚)		少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
149	五反田(高倉)	○	少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
150	御田古墳		少	—	円	大正大1985	
151	御田看跡		少	—	円	大正大1985	
152	御田平塚		少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
153	上越活立塚		少	—	圓底	大正大1985	
154	足利古墳		少	—	圓底	大正大1985	
155	足利(造跡)		少	—	圓底	大正大1985	
165	三重田古墳		少	石棺、骨壺	円4	大正大1985・1986	
167	三重田古墳	○	少	石棺、骨壺	円4	大正大1985・1986	
168	三重田古墳	○	少	土印(楕圓)・須原(須原あり)	円4	大正大1985・1986	
169	下野原(須原)		少	須原	円4	大正大1985	
173	道原平貝塚		少	土印(楕圓)・須原	円4	大正大1985	
174	合但(須原)		少	須原	円4	大正大1985	
175	木ノ下(須原)		少	須原	円4	大正大1985	
176	中岡古墳		少	—	円	大正大1985	
177	原ノ坊(須原)	○	少	土印(楕圓)・須原(須原あり)	円4	大正大1985	
180	岩坪新城(造跡)		少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
181	野坪中山古墳		少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
186	マケシ古墳		少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
187	佐鹿塚		少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
191	須原森出(須原)	○	少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
193	須原森(須原)		少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
194	須原森(須原)		少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
201	三葉古墳	○	少	土印(楕圓)・鬼高(?)・須原	円4	大正大1985	
203	千葉川古墳	○	少	土印(楕圓)	円4	大正大1985	
206	豊地古墳		少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
209	里山古墳		少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
211	喜明内(須原)		少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
216	和田田(人木)古墳		少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
217	西側古墳		少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
229	喜明大(東)古墳		少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
230	喜明古墳		少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
232	喜明古墳		少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
234	大波止(須原)	○	少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
235	勝山(須原)		少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
236	山葉古墳		少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
237	勝山(東)古墳		少	土印(楕圓)	円	大正大1985	
238	勝山古墳		少	土印(楕圓)	円	大正大1985	

遺跡番号	遺跡名	時期 前・中・後	遺物名	文物	備考	文書
229	大山森跡	○	少	土師		
340	江戸城跡	○	多	上部(古墳)、土師(五個)		太正大1985
341	天主城跡	○	多	土師(五個)		太正大1985
323	中合山環状	○	一	—		竹石、平成1970、太正大1985
344	小山東跡	○	少	土師、漆器		
255	田代大字古墳群	○	少	石棺材(古墳)	円4	太正大1985
256	小山南跡	○	少	土師(五個)	円8	
255	周邊跡	○	少	上部(古墳)		
256	鷺ノ木古墳	○	少	—	円	
257	堀ノ木古墳	○	少	—	円	
258	中合山古墳	○	少	—	円	
260	梅丸山古墳群	○	一	上部(五個)	円7	太正大1985
262	吉島古墳群	○	少	—	円2	竹石、平成1970
264	田代大字古墳群	○	一	—	円	人正人1985
268	小山北跡	○	一	石板	円	太正大1985
269	新潟市古墳群	○	一	—	円2	人正人1985
271	下ノ木古墳	○	少	上部(兔毫)	—	
272	馬高大字古墳	○	少	土師、漆器、陶器(古墳)	方門1、方門2	太正大1985
273	鳥越大字古墳	○	少	土師、漆器	集落、移築後復元	人正人1985
275	トヨタキ古墳跡	○	少	土師		
277	中合山古墳	○	少	土師		
278	小野寺古墳	○	一	石板	?	津威
280	水神古墳	○	—	—	円	
281	坂ノ平古墳	○	多	土師、漆器		太正大1985
282	大字古青	○	—	石棺材	円	
284	人吉大字古墳群	○	—	—	円2	北城町教育委員会1982、太正大1985
285	佐藤大字古墳群	○	—	中里古墳-蛇首巻形	方門1、円10	竹石、平成1970、茨城県教育委員会1982、太正大1985
287	新柳沢跡	○	少	—	円	
288	二城内古墳群	○	多	土師、漆器	—	太正大1985
289	新林浦跡	○	少	土師	—	太正大1985
290	新林浦跡	○	少	土師	—	太正大1985
292	半ノ木古墳	○	少	土師(兔毫)	—	
294	上総ノ木古墳	○	少	—	円37	竹石、太正大1985
295	上原古墳	○	少	—	円	
296	折井・白山古墳	○	少	石室(石室・扉)、石板	方門	人正人1985、茨城県教育委員会1982
298	美濃前山古墳	○	—	—	円	
301	折井古墳	○	少	土師、漆器	—	
302	四方山古墳	○	多	土師、漆器	—	太正大1985
303	西吉井大字社裏古墳	○	—	土師	—	太正大1985
305	西方古墳跡	○	多	土師、奥山(頭廻あり)	円	
306	西方古墳	○	少	土師	—	太正大1985
307	下呂古墳	○	少	石室(石室・扉)、片岩	—	人正人1985
308	山田古墳	○	少	土師(五個・兔毫)	—	太正大1985
309	山田ノ木古墳	○	少	土師(兔毫)	—	人正人1985
310	東山古墳	○	少	土師(兔毫)	—	太正大1985
311	東山古墳	○	少	土師(五個)	—	太正大1985
312	東山古墳	○	少	土師(五個)	—	太正大1985
314	谷ノ木古墳	○	少	—	円4	竹石、平成1970、太正大1985
315	乳所寺古墳群	○	—	—	円4	人正人1985、人吉1985
316	天神寺古墳	○	—	—	円	太正大1985
317	桂久久木古墳	—	—	—	円	
318	良瀬古墳	—	—	—	円	人正人1985
319	西吉井大字古墳	○	—	人正人(封印あり)	横穴2	東邦、昭和1965、太正大1985
320	坂越古墳	○	多	土師、漆器	—	竹石、平成1970、茨城県教育委員会1982、人正人1985、茂木1998
321	一ノ木古墳	○	少	土師	—	太正大1985
322	猪俣古墳	○	少	土師	—	太正大1985
323	猪俣古墳	○	少	土師	—	太正大1985
325	小山古墳	○	—	—	円	
326	細谷大字古墳群	○	—	—	円	
327	坂越古墳	○	—	—	円	
347	深谷寺旁理古塚群	○	—	石室(石室)	—	太正大1985
349	中合山古墳	○	少	土師	—	人正人1985
350	下原ノ木古墳	○	少	—	円2	東邦、昭和1965、太正大1985
351	坂道古墳	○	少	土師	—	竹石、昭和1965、太正大1985
354	富士山古墳	○	少	—	円	太正大1985、茂木1998
355	深谷寺古墳	○	少	—	円	太正大1985
356	坂越古墳	—	—	—	方	太正大1985、茂木1998
360	人吉大字古墳	○	少	—	方	太正大1985、茂木1998
361	坂越古墳	○	少	山王丸り岩らり	円4	太正大1985
379	坂越古墳	○	少	土師	—	人正人1985
379	坂越古墳	○	少	土師(五個)	—	太正大1985
388	金瀬保子古墳	—	—	—	円	人正人1985
390	高畠古墳跡	○	少	土師	—	太正大1985
393	八幡古墳群	○	—	—	円1、側立1、円4	貴石、平成1970、太正大1985
394	人牟須古墳	○	少	須賀(ワツコあり)	—	
405	木ノ口古墳群	○	多	土師	円5	太正大1985
403	小山古墳	○	—	—	円5	太正大1985
405	白ノ木古墳	○	少	土師	—	人正人1985
406	坂越古墳	○	少	土師(兔毫)	円2	
408	坂越古墳	○	—	亞利波輪、土師	円	森崎1973、人正人1985、坂越1996
410	坂ノ木古墳	○	—	土師(六個・蛇首巻形)	円1、丸1、円7	岡田1984、竹石、平成1970、太正大1985
413	坂越古墳	—	—	—	円	
415	八田古墳	○	—	—	円	
416	坂越古墳	○	—	—	円5	貴石、平成1970、太正大1985
418	坂越古墳	○	少	上部(五個)	—	
420	坂越古墳	○	少	土師(古墳)	円1	
421	坂越古墳	○	少	—	円	太正大1985
422	坂越古墳	○	少	毛蟹(古墳?)	—	太正大1985
426	坂ノ木古墳	○	—	—	円5	竹心、平成1970、太正大1985
427	坂山古墳	○	—	—	円5	貴石、平成1970、太正大1985
428	新潟古墳群	○	少	土師(五個・兔毫)	前部主体	太正大1985
429	吉田古墳群	○	—	—	円2、丸1、二重	竹石、平成1970、太正大1985

統計番号	遺跡名	馬群	遺物量	遺物	備考	文献
420	谷ノ古遺跡	○	-	石器、麻縄?	?	鹿波 人正大1985
421	新開古墳	○	-	石棺、瓦刀、人骨など	?	鹿波 鹿波1971、大正大1985、山川1999
422	桂子古墳群	○	-	-	方22	
423	桂子古墳	○	-	-	内	
428	寺ノ古墳群	○	-	-	円4	
442	御陵古墳群	○	-	-	方11、方円2、円8	片石、平沢1970、大正大1985、1986
445	神代古墳	-	-	-	円	大正大1985
446	佐久古墳	-	-	-	少	少
447	佐久日吉遺跡	○	-	-	円	大正大1985
448	東芝古墳群	○	少	土師(五個)、砂覆車		人正大1985、土浦・笠置園事会1996
450	山の古墳群	-	少	土師		人正大1985
455	下小字遺跡	-	少			土浦・出羽調査会1996
456	八幡神社古墳	-	-	-	円	大正大1985
458	若木古墳	-	-	-	土師	
460	松手古墳	多	-	土師		
462	流野古墳	○	多	土師(五個)		大正大1985
464	丹地中山古跡	○	少	土師(和泉)	円4	大正大1985
465	四輪古墳群	○	-	-	円8	大正大1985
466	戸崎古墳群	-	少	土師		大正大1985
467	丹地支石古墳群	○	-	1断114石板	内2	大正大1985
469	女人冢古墳	-	-	-	円 圆8	大正大1985
476	根尾瀬古墳群	○	多	土師(五個)		大正大1985
479	櫛原古墳群	-	-	-	帆立1、円2	人正大1985
480	小字古墳群	○	少	土師(五個、和泉)		大正大1985
482	福澤古墳群	○	-	-	方円1、円8	片石、平沢1970、人正大1985、茨城県考古会1986
483	北山古墳群	○	少	土師(五個)		人正大1985
487	第六号古墳群	-	-	-	方円1、円2	人正大1985
488	藤山古墳	○	少	土師(土師)		大正大1985、茂木1997
491	藤山古墳	○	少	土師(佛)		
493	吹上古墳	-	少	土師(五個)		
495	高畠古墳群	○	-	瓦筒(土師)	横次13	竹石1967、大正大1985
501	阿陀古跡	○	少	土師(五個)		大正大1985
502	松木古墳	○	多	土師(五個)、須恵		大正大1985
506	加灰人燒泥古墳	○	多	土師(五個)		大正大1985
507	松平古跡	○	多	土師(五個、鬼舟)、須恵		人正大1985
508	七曲古塚	○	多	土師(五個、和泉)、須恵	君・後房主体	人正大1985
509	人丸古墳群	○	-	往云立石裡街上	円1、不明	大正大1985
510	白井・赤坂古墳群	○	-	生糞古墳 磐多御	方11、方円4、円15	生糞古墳・磐多御、人正大1985

V. 奈良・平安時代

1. 出島半島における研究史抄

これまでの研究で、出島半島の奈良・平安時代の遺跡を取り上げたものは意外と少ない。それらは庶民遺跡・製鉄遺跡などや、骨蔵器についてなされたものがほとんどであり、当地域の当該期の遺跡分布を取り上げて言及しているものはほとんどない。

試みに、これまで刊行されてきた遺跡地名表・地図類における、霞ヶ浦町内の奈良・平安時代に該当すると推測されるような遺跡の扱われ方を、発行年順に列挙する以下のような。

『茨城県遺跡地名表』(1964・1970・1975)の市町村ごとの一覧表では、その遺跡で採集できた遺物が取り上げられ、それをもとに遺跡の時代を決めている。縄文式土器や弥生式土器は細かい時期にまで区分され、遺跡の性格も集落跡や貝塚などにわけて認識されている。それに対し、奈良・平安時代に該当する遺物としては土器器・須恵器などが挙げられるが、古墳時代との時期区別はなされていない。したがって、奈良・平安時代の集落跡として登録されている遺跡はみられない。一方で種別としては寺跡跡・窯跡があるが、霞ヶ浦町内では1964年の段階で窯跡が¹遺跡登録されているのみである¹⁾。そうしたことから、『茨城県遺跡地名表』から、霞ヶ浦町内における奈良・平安時代の状況は断片的にしか窺い知ることができない。

次に、『茨城県遺跡地図』(1977・1987・1990)では時代という項目が設けられ、その中で、奈良・平安時代が独立した時代区分として登場する。しかし、ここでも奈良・平安時代に該当する遺跡の種別を見てみると、その前の『茨城県遺跡地名表』と大差なく、窯跡と製鉄跡が取り上げられているのみである。包蔵地という種別はあるものの、霞ヶ浦町内で奈良・平安時代のそれに該当する遺跡は存在しない。発行年が進んでも変化していないので、奈良・平安時代の全体像を知ることはできない。

『茨城県遺跡地図』とは別に1980年に文化庁文化財保護部の編集で『全国遺跡地図』が発行されたが、これは1975年の『茨城県遺跡地名表』と1977年の『茨城県遺跡地図』の成果をもとに作成されたものであり、記載内容はこれらの内容を基本的に踏襲したものである。ここでもやはり、霞ヶ浦町内の当該期の遺跡としては窯跡と、製鉄跡が取り上げられているに過ぎない。

その後、これら県単位で行われた遺跡分布調査とは別に大正大学考古学研究会が、出島半島という、現在の行政区区分にとらわれない地域設定をした画期的な分布調査をおこない、その成果を発表した(大正大 1976・1985)。

『鷗台考古』3号(1976)では、奈良・平安時代に關して

では丸山ふみ子が「新治郡出島村の地理—常陸風土記の記載のことを中心に—」で『常陸風土記』内の地理に関する記述を中心に出島半島について記述しているのみであり、考古学的な記述はなされていない。

『鷗台考古』4号(1985)の「遺跡地名表」の項では「時代(期)」の記載があり、採集できた遺物が記載されているが、縄文式土器などは細分した時期区分まで記載がなされているものの、古墳時代以降に関しては土器器・須恵器という記載があるのみである。

ただし、「各時代の概観」では採集できた遺物を中心にして記述が行われており、土器器については奈良時代と平安時代の遺物として記述がある。このことから、調査者は少なくとも土器器に関しては古墳時代のものとそれ以外にわける努力をしており、この報告以前に県がおこなった調査において、土器器・須恵器が各時代別に区分されていなかったことを考えると、遺物の帰属年代の認識に進展があったことがわかる。

須恵器に関しては、今回の筑波大学が行った調査において、大量の奈良・平安時代に該当する須恵器片が採集されていることから、この時の調査においても相当量の当該期須恵器が採集されていると思われるが、残念なことに、主に取り上げられているのは古墳時代の須恵器にに関してだけである。遺跡地名表の中でも、土器器・須恵器を古墳時代とそれ以降の時代とに区別はされていない。

「4.歴史時代の概観」では主として窯跡と製鉄跡について記述が見られ、遺物散布地については特に触れられていない²⁾。土器については奈良・平安時代のものについて一応の認識が見られただけに残念である。大正大学の調査は有志による調査であり、報告には担当者ごとの差異は見られるが、全体としては緻密であり、今回の筑波大学の調査においても基礎資料として最大限活用されている。

以上のように、霞ヶ浦町域も対象に含んだ過去の調査において、奈良・平安時代の遺跡として取り上げられてるのは窯跡と製鉄跡に限られており、散布地も含めた当該期の霞ヶ浦町内の状況について論じたものは存在しない。遺物散布地も含めた議論が、奈良・平安時代に関してはおこなわれてこなかった原因を考えた場合、遺跡の帰属年代を明らかにする際に大きな決定力を持つ、七器の編年研究の進展状況を考慮しなければならないだろう。奈良・平安時代における土器編年は1960年代の後半頃から次第に整備されはじめ、1980年頃までに大略は完成したとみることができる。そのため、編年研究の進展によって、奈良・平安時代の遺跡も認識される様になってきたといえる。また後述するように、現在のところ一部の意見を除き、出島半島を古代の主要官道が通ってい

たとは考えられていないことも、その他の官道沿いの地域に比べて、集落跡を取り上げて議論されることが少なかった原因の一つとして考えられる。

このように、霞ヶ浦町内で当該期の遺跡が取り上げられている場合は生産遺跡が中心である³⁾。その要因として、当地域は他の地域ほど開発に伴う発掘が頻繁におこなわれていない点も挙げられよう⁴⁾。しかし、それにも増して大きな要因は、分布調査の結果による奈良・平安時代遺跡の記述が生産遺跡を除いてなされてこなかったことがある。

この他に霞ヶ浦町内の奈良・平安時代を扱ったものとしては、古代道路や郷についての研究や、骨蔵器を扱った研究があげられるが、これについては後述する。また、出島半島という視点で見た場合、その南西端に位置する田村・沖宿遺跡群は、現在は土浦市域ではあるものの、平安時代を中心とする大規模な集落跡が発見されており注目される⁵⁾。出島半島内においては広範囲に発掘され、群として遺跡の性格を論じられるような当該期の調査例が数少ないため、この遺跡群の発掘調査は様々な情報を提供してくれる貴重なものである。

2. 奈良・平安時代の概観

(1) 遺跡の分布

霞ヶ浦町域において、奈良・平安時代（古代も含む）

の遺跡総数は264遺跡にのぼる（第19図・第12表）。この数は、前時代の古墳時代のそれと比べてかなり増加していると考えられる。古墳時代では包蔵地とは別に、古墳も遺跡として登録されるのに対し、奈良・平安時代においては廃跡や製鉄跡など若干の例外はあるものの、この数のほとんどが包蔵地にあたるということを考えると、集落数という点では前時代に比べてかなり増加しているといえよう⁶⁾。

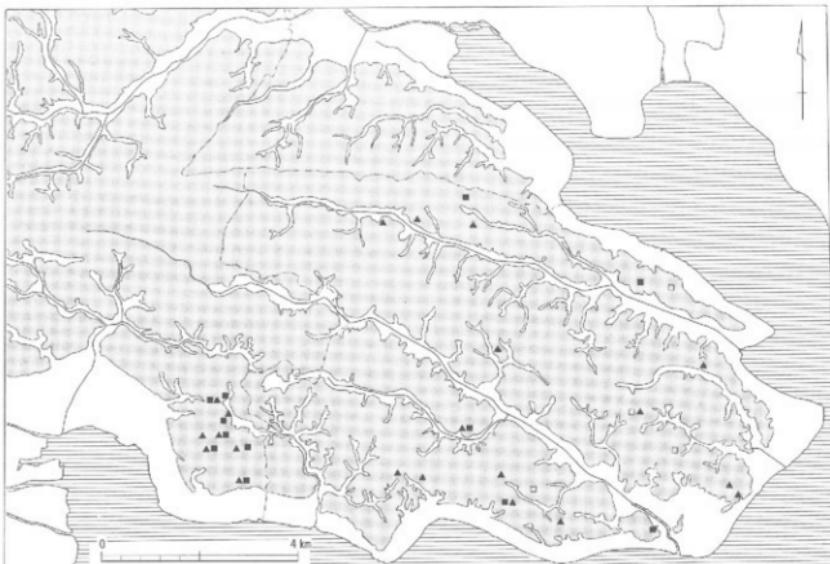
表中で奈良時代・平安時代に明確に区別しているものは、時期決定のできる器形や特徴的な遺物が採集されている場合に限った。そのため、時期を限定している遺跡においても、その前後の時期を含む可能性を否定するものではない。

図中において大きめの●で示したのは遺物量の多い遺跡である。この基準は主観的ではあるものの、相対的に採集できた遺物の量や内容を勘案して決定している。このような遺跡はほとんど偏在することなくほぼ等間隔を保って分布していることが窺える。

これがどのような原因によるものかは遺構の性格が未詳のため明言することはできない。しかし特定の場所に集中せず、等間隔を保っているという状況は、当時の土地開発のあり方などから推測した場合の、いわゆる「拠点的集落」に倣するような性格を持つ遺跡や、郷程度の領域における中心的集落の性格を持つ遺跡などが考えられるだろう。実際に採集できる遺物の量や種類を考えて



第19図 奈良・平安時代の遺跡



第20図 施釉陶器と墨書・刻書土器と陶鏡の採集された遺跡

も、大きめの●で示した遺跡は地表面に濃密に土器片が散布している状況が認められ、採集できる遺物にも、施釉陶器や在地産ではない須恵器などの破片が認められる。そうしたものを日常的に保有していたような人々のいた集落となると、遺跡の性格としては上記のようなものであったと考えられる⁷⁾。

(2) 特徴的な遺跡

次に特徴的な遺物が採集された遺跡について、遺物ごとに概観したい(第20図)。ここでは灰釉陶器に代表される施釉陶器と、墨書・刻書土器、陶鏡を取り上げる。図中において、▲が施釉陶器、■が墨書・刻書土器、□が陶鏡の採集、もしくは過去に出土した遺跡を示している。

施釉陶器は当時の状況を考えた場合、常陸国内では生產されておらず、主として他地域からの輸入品である。また時期によって程度の差はあるものの、在地産の日常什器とは明らかにその使用目的や性格が異なる遺物として捉えることができる。つまり、それが存在することに何らかの意味を付与することができると思われる。また、墨書・刻書土器はその存在から、文字を必要とする生活をしていた人々の存在が推測される遺物であり、それもまた一般集落とは違った性格を付与することができるのではないかと思われる。陶鏡の場合はその場所で文字が書かれていた証拠になるため、更にその傾向が強いといえよう。

灰釉陶器が採集された遺跡は13遺跡を数える。この中

には表面採集された土器片以外に、灰釉陶器を用いた骨蔵器も含んでいる⁸⁾。八千代台1遺跡(358)の発掘調査では縄文陶器が出土しているが、今回の分布調査では認められなかった。今後、灰釉陶器以外の施釉陶器が表面採集で発見される可能性はあるものの、この結果から推測した場合、縄文陶器や二彩・三彩陶器に比べ灰釉陶器の存在比率は高いことができ、前者に比べ、相当量の灰釉陶器がこの地域にもたらされ、消費されていたことが窺える。施釉陶器の出土する遺跡と第19回の奈良・平安時代全体の遺跡分布を重ねると、必ずしも第19回中において大規模遺跡として認識された遺跡から施釉陶器が採集されているわけではないことがわかる。県内の他地域の発掘調査例をみると、当該期の遺跡からは出土量に差はあるものの、かなり高い割合で施釉陶器、特に灰釉陶器が発見される事が多いようである。たしかに、大規模遺跡として認められるような一部の遺跡からは多くの灰釉陶器片が採集されているので、集落ごとの保有数に差があったことは認められるにせよ、この結果を見た場合、当時はどの集落にも普遍的に施釉陶器は存在していたのではなかっただろうか⁹⁾。

墨書・刻書土器など、文字（もしくは記号の可能性もある）の書かれていた土器片が採集されている遺跡は6遺跡ある。このうち注目されるのは田子内遺跡(056)で採集された「貢」の刻書のある土器である。これは須恵器の底部隅に、かなりはっきりとした筆跡で文字が刻

まれているもので、底部の直径を考えるとあと1~2文字ほどあった可能性が考えられる。

今回の採集遺物では遺物が細片のため全体の文字がわかるものは少なかったが、八千代台1遺跡の発掘調査における出土資料の中には文字と認識できるものも存在する¹⁰。墨書・刻畫土器は当地域に限らず、茨城県域において、特に8~10世紀頃に普遍的に認められる資料であるが、一般的の上器とは区別して用いられていることは特別な意味を付加できるであろう。文字という側面から考えれば、その集落は日常的に文字に接していた人々のいた可能性も指摘することができ、当地域における文書行政の浸透も推測することができる。

そのような意味においては、陶硯の存在は墨書・刻畫土器よりも更に文書行政の浸透を推し量る資料として取り上げられるであろう。墨書土器の場合には搬入品である可能性を完全に捨てる事ができないのに対し、陶硯の存在はそこで文字が書かれていた証左となり、それが採集された遺跡の性格に深く関わってくる。

陶硯と思われる破片が採集されている遺跡は4遺跡認められた。採集されたすべての破片は、復原すると円面硯の脚部にある部分と思われ¹¹、いずれも大規模遺跡として把握されている遺跡において採集されている。このことから、文字を扱うような人々はこうした大規模遺跡に在住し、硯を用いた活動(例えば物品の管理など)を行なっていたと想定することができる。また、これらが採集された遺跡の数が少ないとから、こうした活動が限られた場所において行なわれていたと考えられ、そうした集落は、郷に相当するような範囲において1~2ヶ所であっただろう。

以上のような遺物の分布をみると、施釉陶器の分布に比べて墨書・刻畫土器や硯の分布が希薄であるということがわかる。これは、高級陶器である施釉陶器の当地域への流入量の多さや需要の高さを示しているのに対し、硯といった実用的な道具は、施釉陶器ほどその需要がなかったということがいえる。茨城県内において、施釉陶器は旅投宿の禪房における黒窯90号窯跡期頃¹²に大幅に増加すると書かれているが(茨城県教育財团 奈良・平安時代研究班 1995~9)、今回採集された灰釉陶器なども、おおよそその時期に比定できるものと考えられる。施釉陶器のなかでも灰釉陶器は半島内において比較的満遍なく存在していることから、灰釉陶器を手に入れることができた人々が半島内に均等に存在していたことが考えられる。当時の社会的な背景を考えると、こうした性格の人々というのは、土地開発を主体的に推し進めていた開発領主のような人々と推測され、彼らが、出島半島内に発達した谷地を中心として土地開発を行なうために、半島内各地にそのための拠点的な集落を営み、その中で灰釉陶器を使用していたのではないかだろうか。そして、拠点的な集落の中でも限られた集落において、硯を使用した文字などを書く行為が行なわれていたと考えら

れる。

図には記していないが、この時代の特徴的な遺物である、瓦についても触れておく。瓦が採集された遺跡は、瓦窯跡として柏崎窯跡群(072)と、霞ヶ浦町界から石岡市側にわずかに入ったところに風返瓦窯跡¹³がある。また、その他の包蔵地でも瓦が採集されている。しかし包蔵地からの出土の場合は、瓦が生産されていたと考えられる窯跡の周辺地域であることが多く、その遺跡内には窯跡の存在が確認できないところで採集されている。直接的に生産地と考えられない遺跡で瓦が採集できるという現象は、それ自体の意味を掘り下げることもできようが、遺構が未詳であることもあり、ここでは詳しく触れない。ただ、県内の一般の集落と思われるような遺跡での瓦の出土例を見てみると、近隣に瓦を使用したような遺跡物を伴う遺跡が存在し、そのような建物に使用されていた瓦が、堅穴住居の窓枠材に用いられている例などが見られる。今回の調査で窯跡以外の場所から採集された丸の破片についても、その採集量の少なさを考えると、その遺跡への搬入遺物としてみることができ、その遺跡の性格として窯跡を考えることは難しい¹⁴。

ただし、窯跡に関しては常陸国府や国分寺をめぐる生産体系の中で重要な位置を占める遺構であるとともに、地上からでも把握することのできる当該期の数少ない遺跡であるから、ここで少し触れておきたい。

出島半島における、今回の踏査で確認できたものとしては柏崎窯跡群と風返瓦窯跡、小津製鉄跡がある。前者はいわゆる瓦窯であり、常陸国分寺へ供給するための瓦を焼いていたと考えられている(茨城県立歴史館学芸部 1994、黒澤 1998、千葉 2000)。また、柏崎窯跡群の丸窯¹⁵とは別地点において古墳時代の須恵器窯が確認されており、筑波大学によって調査がおこなわれている¹⁶。そして窯体は未確認であるものの、小津製鉄跡(060)においてはドーム状の焼成遺構から突き刺さった状態で須恵器が発見されており、須恵器窯であった可能性が考えられている¹⁷。これら須恵器窯と考えられる遺跡では今のところ古墳時代に測る遺物しか採集されていないが、将来的に奈良・平安時代に下る遺物が採集される可能性もある。特に、柏崎窯跡群は奈良・平安時代の生産物として瓦が確認されているほかに、時期不明ながらも製鉄渣が採集されており、この時代において生産に高温を必要とするような各種製品が作られていたことが寄せられる。

瓦は、主として常陸国分寺に供給されていたと考えられるため、この地における生産活動はおそらく国分寺への供給を念頭においてなされていたものと考えられる。黒沢形容によれば、常陸国府において瓦葺建物が建造されるのが国分寺創建の直前と位置づけられるようであり(黒澤 1987)、国分寺の創建時期を前後するような時期に国府周辺において各種施設が一齊に建設される状況が起こっていたと考えられる。国府の拡充や国分二寺の創

建が当時におこなわれたならば、これらの周辺において各種製品が大量に必要となったことも考えられるだろう。出島半島における生産体制の整備も、こうした動きの中で、前時代に須恵器の生産がおこなわれていた場所を中心に生産体制が内編成されたものと考えられる。先にあげた遺跡はいずれも出島半島の北岸、霞ヶ浦の高浜入りに面した位置に立地しており、國府周辺地域への製品の輸送ということを意識した立地といえよう¹⁶。

今回、取り上げた各々の遺物が、出島半島において相当量認められるということは、当該期において出島半島内で人間活動が活発であったことを窺わせるものであり、当時の人々にとってこの地域が何らかの魅力ある土地であったことを物語っているといえよう。その魅力が何であったのかといえば、水上交通の結節点に近いという点や、當時積極的に開発されたであろう樹枝状の谷地が広範囲に展開しており、水田開発に適していた土地であったという点が考えられる。

3. 古代官道・郷との関係

遺物の散布状況からみた出島半島の状況は以上の様になるが、これらの結果を含めて、当該期の出島半島がどのような状況であったか、古代官道や郷との関係についても言及しておきたい。

常陸国内の奈良・平安時代研究の中で忘れてはならないのが、官衙の一つとしての駅家研究から始まつた古代交通路の研究である。常陸国は七道の一つである東海道の東端に位置し、国内を東海道が通っていたことは間違いない。また当時、東北経営においては陸奥国に接する国として、様々な側面からそれを支える役目を負い、朝廷から重視されていたということが、史料上における駅路の設置・廢止が頻繁におこなわれていたことからも窺える。

古代交通路のルートについては以前から諸説があるが、その研究方法によって大きく2つにわけることができる。一つは、駅家の位置を地名・伝承をもとに想定し、その遺跡地圖を結ぶという方法であり、古くから盛んにおこなわれてきたものである¹⁷。もう一つは航空写真的観察による地形上の痕跡や、地籍図による字界をもとにして、直線的な道路痕跡を探すという方法であり、常陸国に関しては木下良が研究を進めている(木下 1984)。

これらの研究の中で、豊崎は出島半島を横断するルートを提示した(豊崎 1970・1971)。もともとこのルートは中山信が『新編常陸国誌』の付図として掲げた想定ルートを起源としており、豊崎はそのルート上において実際に駅家などの推定を行なって論を進めたといえる。しかし「井関駅家」など、現在確認できる史料にその名が見えないものが用いられていることなどから、その後この意見を進めるような議論はおこなわれていない¹⁸。

その後、木下良らを中心として、古代国家の敷設した

官道は直線的であったという想定のもと、航空写真や直線的な字界を用いて遺跡を探す作業が進められた。その結果、現在でも茨城県内では道路跡と目される痕跡地がかなりの距離にわたって遺存していることが判明し、西茨城郡友部町五万堀遺跡では、その一部と考えられる遺構も見つかっている(長岡・仲村 2000)。また、それをもとに駅家の位置も実際の遺跡として認識されるようになってきている(海老澤・黒澤 2000)。

しかし、出島半島内を通過する直線的に計画された古代官道は、木下良らの研究によると今のところ認められていない。ところが、出島半島が当時の状況として人間活動の活発な地域であったことは、前章において記したとおりである。したがって、古代官道の有無が当時の人間活動を規定する要因であったとは考えにくい¹⁹。むしろ、出島半島においては古代官道の存在よりも、霞ヶ浦に面しているという地理的要因から考えて、水上交通の存在を積極的に取り上げるべきであろう。

霞ヶ浦町は古代において茨城郡に属しており、安筋郷・佐賀郷・大津郷の範囲に該当するものと考えられている。それぞれの郷の境界線については諸説あり、一致はみでないが、おおまかに言って北部が安筋郷、東部が佐賀郷、南部が大津郷に比定される²⁰。

試みに、霞ヶ浦町内における、遺跡分布の偏在性をもとに、領域の復原をおこなってみたものが第21図である。ここでは遺跡の分布が希薄な地域をおよそその境界として領域設定を行なった²¹。

その結果、大きくわけて川尻川流域、一ノ瀬川の河口付近と現在の坂地区、そして菱木川の流域という三つの領域にわかれ結果となった。この想定図は、あくまで先学による古代の郷の復原は一切考慮しないで、遺跡の偏在状況から判断したが、結果的にこれまでの諸研究によって示されている領域設定を追認する結果となったことは注目に値する。考古学的に見た場合でも、細かい異同はある、およそ出島半島は北部・南東部・南西部に領域区分することができ、それが文献上に登場する安筋郷・佐賀郷・大津郷の範囲に重なってくるのである。

また、別の注目すべき点として、偶然にも大規模遺跡がほぼ同数各領域内に存在するという結果を得た。大規模遺跡は霞ヶ浦町内においては26ヶ所存在し、菱木川流域には9ヶ所、一ノ瀬川河口と坂地区には9ヶ所、川尻川流域には8ヶ所である。北部と南東部の領域境界線についてはマケシ遺跡(184)がどちらの領域に入るかによって若干の変動はあるが、上記の結果を重視したい。これにより、古代の郷のような領域内が、複数の大規模集落とその周辺に存在するより小規模な集落によって構成されているという状況を想定することができる。そしてまた、郷(里)は50戸をもって1つの単位となすことが戸令で里条に規定されており、郷(里)というものがほぼ同じ数の集落や人数で構成されていたと考えられ、領域内においてはほぼ同数の大規模遺跡が存在するという状況



第21図 奈良・平安時代の領域想定図

とよく合致するとも思われる所以である。分布調査によって得られた情報からのみではあるが、このような結果は郷の実体を考えるうえで重要な情報を与えてくれるものだといえるだろう。(清野陽一)

註

- 1) この遺跡は瓦谷遺跡(柏崎宮跡群)であり、この他の古瓦田土地として風返遺跡、その他の遺跡(製鉄跡)としてかなくそ山遺跡が登録されている。その後、1970年の時点では1964年と変化は見られないものの、1975年には新たに製鉄跡が種別として独立し、鐵津採鉱遺跡として風返遺跡、小津製鉄跡、洪沢跡製鉄跡、横形製鉄跡が追加として加わる(一方で古瓦採集跡の風返遺跡は登録から外れている)。しかし、これらの遺跡がいずれも廃部や製鉄跡といった生産遺跡のみであり、農落跡は種別としては存在するものの、奈良・平安時代であれば特定することができず、取り上げられていないという点に注目する必要がある。
- 2) ここで廢部として取り上げられているのは柏崎宮跡群と、風返瓦窯跡である。製鉄跡はヶ所取り上げられているが、今回の調査ではそれをすべて追跡できているわけではない。宮跡群はいつの時代に該当するのか記載がなく、また、評価も不明であるとして、詳しくは省略されている。しかし、今回の調査結果を参照すると、奈良・平安時代に比定できるような寺跡と考えられる遺跡は西ヶ原町内では確認されていない。
- 3) 西ヶ原町内の生産遺跡のうち、特に瓦落跡は常陸国分寺の瓦を生産していたと考えられるため、廃部に取り上げられている(茨城県立歴史学芸術館、1994、千葉隆司、1999など)。
- 4) 口内の発掘調査所としては、御田遺跡(渡辺、1997)、波道遺跡(波木、1999)、為基所遺跡、八千代土道跡、等がある。
- 5) 田村・沖浦遺跡群で特筆すべき奈良・平安時代の遺構が発見されている遺跡は、寺淮遺跡、長峰遺跡、前谷遺跡群、金沢遺跡、石橋北遺跡、石橋南遺跡、八幡堀遺跡、瓦落跡等がある(黒澤

1995、小川ほか、1997、黒澤ほか、1997、座間ほか、1997、関口ほか、1998)。

6) ただし、ここでは主として土師器・須恵器などの遺物が採集できた遺跡を取り上げているため、それらの遺物の詳しい帰属時期が不明なもの(明確に古墳時代に帰属させられるもの以外)を「古代」として括りて奈良・平安時代の中に含めているので、細密な意味で当該期に相当する遺跡数としては多少の減少も考えられる。この「古代」に分類された遺跡の中には、土師器・須恵器の破片によって判別したため、古墳時代に該当する遺跡も含まれてくる可能性がある。

7) 以下、これらの遺跡を「大規模遺跡」と呼ぶことにする。

8) 西ヶ原町内で見つかっている灰釉陶器使用の骨壺器は坂地区の歩崎親翁付近出土のもの、宍倉地区の馬場山出土のもの、園中に示してはない出土赤玉鉢の三点がある(竹下、1981、清水、1962、千葉、2000)。骨壺器を用いたものまで含めると、骨壺器は全部で遺跡にのぼる。常陸国はとりわけ火葬墓の集中する地帯として知られているが、西ヶ原町近を含め、茨城県域における骨壺器については吉澤博士の研究に詳しい(吉澤、1995、1996、1997)。

9) ただし、先に挙げた吉澤博士の研究によると、常陸国は全國でも屈指の火葬墓集中地域ということができるようであるとともに(吉澤、1996)、西ヶ原町内で採集された灰釉陶器についても骨壺器に用いられていた可能性も考えられる。実際、私見ではあるが、採集された遺物をみると骨壺器などの壺頭が多いようであり、これらは骨壺器としてよく用いられる器形である。そのような骨壺器として灰釉陶器が用いられていた場合は、骨壺における保有という意味とはまた別の意味を考える必要があるだろう。

10) 八千代土道跡の文字資料は西ヶ原町分割資料編のご好意により実見させていただいたが、文字であることはわかるものの、解説はできなかった。また、発掘調査されたものとは別に、園中には示さなかったが、牛渡塚の八段田において工事中に低地より、「大井口…」と書かれていた内面黒色處理された土師器も偶然発見されている。ノ瀬川の低地から発見されていることを考えると、他の台地より発見されているものに対し、水辺という特殊

- な場所からの発見として貴重な例といえるだろう。
- 11) 坂大平遺跡(261)で採集されたものは既に脚をモチーフとしたような形態で、非常に特徴的な遺物である。これは、切頭歯につく歯脚としては非常に小さく、直面を支えるには不適な作りと思われる。また、つま先にあたる先端の部分に削割痕があるため、その部分が内面側の観察(歯脚)の下部と接合していたものと想定して、円錐形として報告することとした。
- 12) 黒川90号窓式は研究者によって実年代に差があるものの、ここではおおよそ9世紀中頃~10世紀前半頃を想定しておく。
- 13) 風呂ヶ瀬跡は霞ヶ浦町と石岡市の境界線のすぐ前に石岡山側に入りこんだ場所に位置する。そのため、今回の霞ヶ瀬町内の分布調査では異常にならないが、参考までに取り上げておく。遺跡の名称について「茨城県霞ヶ瀬跡」「霞ヶ瀬遺跡」として記述されているが、ここで「茨城県における古代瓦の研究」(茨城県立歴史学芸術会議、1994)の中で使われている「風呂ヶ瀬跡」という名前を用いる。これは、古代瓦の研究史を専論したためである。なお、「茨城県霞ヶ瀬跡」(1990)では霞ヶ瀬町域に存在する三ヶ谷遺跡(041)も同一方面の遺跡として扱っている。現状で現地は築竹が密生しており、通行を確認できる状況ではなかったため、第11表では「瓦塗未確認」としている。
- 14) ただし、こうした性格のほかに、瓦を少量使用した建物跡(例えば~1枚だけ構成されるうなわゆる「廬内寺院」のようなもの)の存在は可能性として充分考えられる。しかしこれに付しては発掘調査などによって追加が把握され廬内寺で説明できることなので、現時点では可能性を締結するにとどめておく。
- 15) 現在、この瓦塗については国士館大学文学部考古学研究室が調査をおこなっており、既記述前半と併せて記述される式古式の平安瓦が確認されている(2003年1月号新聞朝日創刊40周年特集)。
- 16) 「筑波大学 先史学・考古学研究」第12号に調査概報が掲載される予定となっている。
- 17) 今回の調査では、確実に製鉄跡である鐵延が得られなかつたために、種類としては廢跡/製鉄跡として登録した。
- 18) 製鉄遺跡に関しては、山岸遺跡の「ひとつとして取り上げればより具体的な形態を有する生産体制の其像を明らかにすることが可能となるのだが、今回の分布調査で製鉄跡を性格づける遺物としては、鉄津のものであって、これだけで時期を決定することはできない。出島半島に存在する製鉄遺跡も企念においては鐵延は始めたものの、現時点では鐵延だけでは鐵延跡の発展時期を決定することはできない」と記述されるため、現地で初めて中で土手等には取り上げなかった。製鉄跡は廢跡調査などによって追加が確認されたり、共伴する上部から時期がはっきりしない限りは、積極的に議論の中で取り上げることには異議を有する必要があると思われる。
- 19) このような方法によってこれまで古代鉄器の研究は歴史学者によつてまとめられている(藤原、1985)。
- 20) しかし、近年のものとして、石川功『古代瓦・漆事情—常陸國府とその周辺』において、この島嶋の想定ルートを「牛込・牛渡・ルート(想跡)」として取り上げている(石川ほか、2000)。
- 21) ただし、ここで取り上げた古代官道といいのはあくまで古洋によって考証されてきた文献史料に見る官道であり、それ以外に常陸国内にこれよりも規模の小さな官道や私道のようなものがあつた可能性は少分考えられ、そのしたもののが出土品の中にも存在したであろう。逆に、そうしたものの存在は、文献史料としては残っていないとしても、細密な分布調査の結果を利用すれば大まかなるルートを推測することは可能であろうと思われる。今回の分布調査における大庭原遺跡の偏在性はこうした道によって認別できるかもしれない。
- 22) 安倍郷・佐賀郷・大津郷の範囲については以下のようない研究がある。
- 実際には地理上に固化して、郷の境界線を示しているのは「新編常陸国志」(中山、1901)である。それに対して、固化はしていないが、現在(霧島山山頂)の荒巣山の古代の郷の分布に肯定されるかを列記したものが「人日本地名辞書」(吉出、1903)や「日本地名史料」(柳原、1903)である。また近、常陸国内の古代の地名について、こうした研究史をまとめるのが久信田義一である(久信田、1989、1990。上記三冊に關するもの)。
- 現地の霞ヶ瀬町域のみを対象として取り上げると、「日本地名辞書」では安倍郷に安室、上福部、下福部、成井、柏崎の5ヶ村、佐賀郷に田伏、岩坪、太和日、中台、男神、牛渡の6ヶ村、大津郷に根本、三木、深谷、加茂の4ヶ村を北東に定めている。また、「新編常陸国志」では安賀郷に安食、火食、上野郷、下野郷、成井、柏崎等の達村とし、佐賀郷に坂、田伏、岩坪、太和日、中台、男神、牛渡、牛渡等の6ヶ村、大津郷にト人堤、下人堤、根本、三木、深谷、加茂、戸門の7ヶ村を北東に定めている。現在のことこれらのが一般的に採用されている。ただし、「大日本地名辞書」においては深谷を「今大堤、大田出、別神と改め、美並村と改む、四谷の西一里半、加茂の北半里なる開野の地に在り。古郷の系属は明ならざるもの。佐賀、大津の外にはあらじ。(後略)」として、大津郷、佐賀郷のどちらに帰属するかについての明言を避けている。
- 23) 地図上において、遺跡の分布が希薄な地域というのは、場合によつては、調査時に地表面で黒跡が採集できない状況になっていた場合も含んでいる。

引用文献

- 石川功・小玉秀成・千葉謙司 2000 「古代瓦・漆事情—常陸國府とその周辺—」上高津真紀ふるきと歴史の廣場・玉里立史科館・霞ヶ瀬町郷土資料館
- 茨城県教育委員会編 1964 『茨城県遺跡地名表』
- 茨城県教育委員会編 1970 『茨城県遺跡地名表』
- 茨城県教育委員会編 1975 『茨城県遺跡地名表』
- 茨城県教育委員会編 1977 『茨城県遺跡地名表』
- 茨城県教育文化振興課 1987 『茨城県遺跡地図』
- 茨城県教育文化振興課 1990 『茨城県遺跡地図』
- 茨城県立歴史学芸術会議編 1994 『茨城県における古代瓦の研究』茨城県立歴史館
- 海老澤龍・黒澤彰哉 2000 「霞ヶ瀬町東平漁船跡発掘調査報告」「漆瓦貯古占」22
- 大鶴保彦 1978 「第2章地16號「宮隣國」墓葬跡二郎幅「古代日本の交通路」」大羽堂
- 小川和博・人渕淳一・猪谷文博 1997 「六・七塚遺跡」土浦市教育委員会
- 木下 久 1984 「常陸古古代駅路に関する考察—奈良の計画古道跡の検出を中心として—」『選舉院論叢』85-1
- 久信田義一 1989 「古代常陸国茨城郡の駅について—鉄軒・山前・城上・佐賀・石坂・安堵郷を中心に—」『茨城県立歴史館論叢』16
- 久信田義一 1990 「常陸國風土記『和名類聚抄』にみえる常陸国茨城郡の地名について」(三)『風土記研究』10
- 深田憲一・黒田友紀・黒澤春彦 1997 「入・上瀧遺跡」土浦市教育委員会
- 黒澤彰哉 1987 「常陸における分母寺丸の研究II」「豊良岐貯古占」9
- 黒澤彰哉 1998 「常陸古分母寺・湖東古瓦研究会稿」「奈良天皇と分母寺」雄山閣出版
- 黒澤春彦 1996 「茨城県土浦市口村・沖宿遺跡群の開拓・奈良・平安時代を中心として」『茨城地方史研究会報』茨城史林』19
- 黒澤春彦・小松義子・西口満・吉澤信 1997 「石橋南遺跡」土浦市教育委員会
- 黒澤春彦・西口満・賀脇修郎 1997 「三夜原東遺跡・新堀東遺跡・志布清水西遺跡」土浦市教育委員会
- 黒澤春彦・小松義子・福岡礼子・座庄憲一 1997 「長峯遺跡」土浦市教育委員会
- 茨城県教育財團 紫良・平安時代研究会 1996~9 「茨城県域における知能障害の研究(1)~(5)」「研究ノート」4~8 茨城県教育財團
- 藤原 忠 1985 「第2章節13~17項」「茨城県史 原始古代編」茨城県
- 清水潤三 1962 「石岡(常陸)・霞ヶ瀬出土の裁縫器について」「歴史考古」8
- 間口清・福岡礼子・吉澤信・座庄憲一 1998 「霞ヶ瀬跡(東原遺跡・前谷東遺跡・前谷西遺跡)」土浦市教育委員会

- 大正大学考古学研究会 1976 『鶴台考古』3
人正大学考古学研究会 1983 『鶴台考古』4
竹下次作 1961 『茨城県新治郡出島村発見骨蔵器』『日本考古学年報』9
千葉隆司 1999 『古代の瓦』霞ヶ浦町郷土資料館
千葉隆司 2000 『霞ヶ浦町出土の藏谷瓦』『茨久祐考古』22
豊崎 卓 1970 『東洋史上より見た常陸国府・郡家の研究』山川出版社
豊崎卓監修 1971 『出島村史』出島村教育委員会
長岡正雄・仲村清一郎 2000 『仲丸遺跡・久保塚群・五方塚古道・向原遺跡・向原塚群・前原塚・仲丸塚』茨城県教育財團
中山信名修(栗田寛輔) 1901 『新編常陸図志』(1976年新書房刊)
文化庁文化財保護部編 1980 『全国遺跡地図 8茨城県』
都岡良鶴著(渋田教説編) 1993 『古代地名辞書 日本地理史料』
(1996年臨川書店刊)
亥木悦男 1999 『坂遺跡・船戸内沿路・小原遺跡』茨城県教育財团
吉澤 勝 1995 『茨城県における古代火葬墓の地域性―土浦市立博物館保管の骨灰器の資料紹介および県内事例の集成』
から 『土浦市立博物館紀要』6
吉澤 勝 1996 『常陸国における古代火葬墓の分布とその背景』
『考古学報添』西野元先生退官記念会
吉澤 勝 1997 『「關府の海」の背景』『玉里町立史料館報』2
吉田東伍 1903 『大日本地名辞書』第6巻 板東(1970年増補収録)
山房刊)
渡邊久牛 1997 『ヒヘ日遺跡調査報告書』霞ヶ浦町教育委員会

第12表 奈良・平安時代遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	奈良	平安	後平安	古代	遺跡種類	遺物	備考	文献
001	西門口・大待羽道跡	○	少			土器			大正大1984
002	益登寺跡	○	多			土器 (六角)			
003	東門二重道跡	○	少			土器			大正大1984
004	北門二重道跡	○	少			土器			大正大1984
005	北外院跡	○	少			土器	陶器		
006	烟阿木道跡	○	少			土器			天正大1984
007	鷺前山道跡	○	少			土器	陶器		
008	雀前山道跡	○	少			土器	陶器		
009	雀石八幡坂道跡	○	少			土器 (内面)			
010	原町八幡坂道跡	○	少			土器		製鉄炉不鏽部	大正大1984
011	月ノ手道跡	○	少			土器	陶器、灰釉 (浮軋)		大正大1984
012	上小原道跡	○	少			土器	陶器		
013	般舟3号跡	○	少			土器	陶器		大正大1984
014	小原3号跡	○	少			土器	陶器		
015	鶴町東跡	○	多			土器 (内面、豊富あり)、須恵 (新作?)		小原溝跡	大正大1984
016	地場山1号跡	○	少			土器	(内面)		大正大1984
017	地場山2号跡	○	少			土器	(内面)		大正大1984
018	小原2号跡	○	少			土器	陶器		大正大1984
019	小原3号跡	○	少			土器			大正大1984
020	鶴町東跡	○	少			土器			
021	地場山1号跡	○	少			土器			
022	小原2号跡	○	少			土器			
023	小原3号跡	○	少			土器			
024	鶴町東跡	○	少			土器			
025	塚下1号・塚跡	○	少			土器	陶器		大正大1984
026	塚下2号・塚跡	○	少			土器	陶器		大正大1984
027	占吉内道跡	○	少			土器	陶器		大正大1984
028	山代内道跡	○	少			土器	陶器		
029	鶴町東跡	○	多			土器			大正大1984
030	鶴町平1号跡	○	少			土器	陶器 (新作、不明有り)		
031	鶴町平2号跡	○	少			土器	(内面)		大正大1984
032	鶴町平3号跡	○	少			土器	陶器		大正大1984
033	愛宕山道跡	○	少			土器			
034	大瀬北道跡	○	少			土器	瓦 (有目)		大正大1984
035	大瀬南道跡	○	少			土器	瓦 (無目)		大正大1984
036	坂本北道跡	○	少			土器	陶器		
037	内田北道跡	○	少			土器			大正大1984
038	内田東道跡	○	少			土器			
039	内田南道跡	○	少			土器			
040	内田東道跡	○	少			土器			
041	ツツヤ遺跡	○	-			-			五重水槽跡
042	六兵衛跡	○	少			土器	陶器		龜山1971、大正大1984
043	兵庫平1号跡	○	少			土器	陶器		
044	兵庫平2号跡	○	少			土器	陶器		
045	兵庫平3号跡	○	少			土器	陶器		
046	安食平道跡	○	多			土器	陶器 (内面)、須恵		
047	宇摩雅跡	○	少			土器	陶器		大正大1984
048	宇摩雅跡	○	少			土器	陶器		
049	宇摩雅跡	○	少			土器	陶器		
050	宇摩雅跡	○	少			土器	陶器		
051	宇摩雅跡	○	少			土器	陶器		
052	宇摩雅跡	○	少			土器	陶器		
053	入云道跡	○	少			土器	須恵 (新作、鉄鋸削)		大正大1984
054	山ノ越・陰星山道跡	○	多			土器	須恵 (古面版)		大正大1984
055	山ノ越・須恵	○	少			土器	須恵		大正大1984
056	山ノ越・須恵	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
057	山ノ越・須恵	○	少			土器	須恵		大正大1984
058	山ノ越・須恵	○	少			土器	須恵		大正大1984
059	山ノ越・須恵	○	少			土器	須恵		大正大1984
060	山ノ越・須恵	○	少			土器	須恵		大正大1984
061	山ノ越・須恵	○	少			土器	須恵		大正大1984
062	山ノ越・須恵	○	少			土器	須恵		大正大1984
063	山ノ越・須恵	○	少			土器	須恵		大正大1984
064	山ノ越・須恵	○	少			土器	須恵		大正大1984
065	山ノ越・須恵	○	少			土器	須恵		大正大1984
066	山ノ越・須恵	○	少			土器	須恵		大正大1984
067	山ノ越・須恵	○	少			土器	須恵		大正大1984
068	山ノ越・須恵	○	少			土器	須恵		大正大1984
069	山ノ越・須恵	○	少			土器	須恵		大正大1984
070	山ノ越・須恵	○	少			土器	須恵		大正大1984
071	山ノ越・須恵	○	少			土器	須恵		大正大1984
072	柏原御崎跡	○	少			瓦	瓦 (新作)		龜山1971、大正大1984、 茨城県立歴史民俗資料館
073	瓦谷・清水道跡	○	少			土器			
074	柏原丸山跡	○	少			土器			
075	柏原神社経塚	○	少			瓦 (有目)			大正大1984
076	佐佐木糸経塚	○	少			瓦 (無目)			大正大1984
077	久高溝跡	○	少			土器			
078	勤治2号跡	○	少			土器			
079	源ノ山1号跡	○	少			土器			
080	御野原1号跡	○	少			土器			
081	御野原2号跡	○	少			土器			
082	御野原3号跡	○	少			土器			
083	御野原4号跡	○	少			土器			
084	御野原5号跡	○	少			土器			
085	御野原6号跡	○	少			土器			
086	御野原7号跡	○	少			土器			
087	御野原8号跡	○	少			土器			
088	御野原9号跡	○	少			土器			
089	御野原10号跡	○	少			土器			
090	御野原11号跡	○	少			土器			
091	御野原12号跡	○	少			土器			
092	御野原13号跡	○	少			土器			
093	御野原14号跡	○	少			土器			
094	御野原15号跡	○	少			土器			
095	御野原16号跡	○	少			土器			
096	御野原17号跡	○	少			土器			
097	御野原18号跡	○	少			土器			
098	御野原19号跡	○	少			土器			
099	御野原20号跡	○	少			土器			
100	御野原21号跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
101	御野原22号跡	○	少			土器	須恵		大正大1984
102	御野原23号跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
103	御野原24号跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
104	御野原25号跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
105	御野原26号跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
106	御野原27号跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
107	御野原28号跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
108	御野原29号跡	○	少			土器	須恵		大正大1984
109	御野原30号跡	○	少			土器	須恵		大正大1984
110	御野原31号跡	○	少			土器	須恵		大正大1984
111	波洋道跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
112	赤木・牛馬道跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
113	赤木・牛馬道跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
114	柳原鹿跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
115	柳原鹿跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
116	中丸鹿跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
117	中丸鹿跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
118	四ノ入1号跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
119	内ノ入2号跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
120	西寺向道跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
121	城内入道跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
122	城内入道跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
123	大瀬道跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
124	中丸・風呂下道跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
125	大久保溝跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
126	日向溝跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
127	日向溝跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
128	猪ノ西溝跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
129	猪ノ西溝跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
130	松原溝跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
131	青島御跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
132	河原1号跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
133	豆原2号跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
134	豆原3号跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
135	豆原4号跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
136	豆原5号跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
137	下原1号跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
138	下原2号跡	○	少			土器	須恵 (新作)		大正大1984
139	山王寺跡	○	少			土器	須恵		大正大1984

地名番号	路線名	路線「平安」時代名、古代	路線番号	道場	道場	備考	文献
142	下澤谷通跡		少	土師、鬼面、新治		大正大1984	
143	西坂井ノ原1歳跡		少	土師、鬼面、新治		大正大1984	
144	西坂井ノ原2歳跡		少	土師(内裏あり)、鬼面		大正大1984	
145	大木寺跡		少	土師、夙川(新治)		大正大1984	
146	船足通跡		少	土師			
148	入篠通跡		少	土師、鬼面、新治			
149	五反田通跡		少	土師(内裏あり)、鬼面、御賀、御治		大正大1984	
151	堺明治塚		少	土師、鬼面、新治		大正大1984	
152	林原平野跡		多	土師(内裏あり)、塩川(瀬戸内、新治)		大正大1984	
256	寺前2歳跡		少	土師			
357	寺前3歳跡		少	土師、鬼面、新治		大正大1984	
159	官宿通跡		少	土師、鬼面、新治		大正大1984	
160	二ツ塙塚北		少	土師、鬼面、新治		大正大1984	
161	白羽通跡		少	土師、鬼面		大正大1984	
162	鹿ノ坂通跡		少	土師、鬼面		大正大1984	
163	江野瀬塚		少	土師		大正大1984	
164	下野御前山口道跡		少	土師		大正大1984	
165	江佛田通跡		少	土師		大正大1984	
166	別所通跡		少	土師		大正大1984	
167	猪野通跡		少	土師、鬼面、新治		大正大1984	
169	高野山通跡		少	土師		大正大1984	
171	西堀通跡		少	土師		大正大1984	
173	安坪平几坂		少	土師、鬼面		大正大1984	
174	鎌合通跡		少	土師		大正大1984	
175	木本1ト通跡		少	土師		大正大1984	
176	船岡丸山通跡		少	土師		大正大1984	
180	岩井町御前坂		少	土師、鬼面		大正大1984	
181	岩坪牛込通道		少	土師、鬼面		大正大1984	
182	前畠通跡		少	土師、鬼面(波打又あり)、御庭		大正大1984	
183	宮谷寺谷石塚		少	土師、鬼面		大正大1984	
184	マケシ通跡		多	土師、鬼面(新治あり)、丸(籽平あり)		大正大1984	
185	シタダ洪跡		少	土師、鬼面		大正大1984	
190	二ツ木大根手通跡		少	土師(内裏あり)、鬼面		大正大1984	
195	白梅寺通跡		少	土師、鬼面		大正大1984	
197	白道通跡		少	土師		大正大1984	
198	栗ノ山山麓		少	土師		大正大1984	
199	西郷御前坂通跡		少	土師、鬼面		大正大1984	
200	御前寺通跡		少	土師、鬼面		大正大1984	
205	津幡武藏塚		少	土師		大正大1984	
209	葛山里塚		少	土師		大正大1984	
210	尼山越谷通跡		少	土師		大正大1984	
221	西町内溝跡		少	土師、鬼面		大正大1984	
213	和田台溝跡		少	土師、鬼面		大正大1984	
216	人和田1平左路		少	土師、鬼面		大正大1984	
217	西原鬼塚		少	土師、鬼面		大正大1984	
222	男神大平東塚跡		少	土師、鬼面		大正大1984	
227	伊山通塚		少	土師、鬼面		大正大1984	
229	久保山通跡		少	土師		大正大1984	
231	久保山通跡		少	土師		大正大1984	
232	野舟通跡		少	土師		大正大1984	
234	火神上通跡		少	土師		大正大1984	
238	父母連塚		少	土師、鬼面		大正大1984	
237	柳木山東通跡		少	土師、鬼面		大正大1984	
239	大山通塚		少	土師、鬼面		大正大1984	
240	正道通跡		少	土師、鬼面		大正大1984	
241	天子通道塚		多	土師、鬼面(新治)、鬼面		大正大1984	
254	小沼通跡		少	土師		大正大1984	
267	上机通跡		少	土師、鬼面(新治)		大正大1984	
248	瓜丁大路		少	土师、鬼面(新治)		大正大1984	
249	御前寺通跡		少	土師		大正大1984	
250	大人通跡		少	土師		大正大1984	
253	小の通跡		少	土師		大正大1984	
255	御通塚		少	土師、鬼面(新治)		大正大1984	
259	谷戸内通跡		少	土師、鬼面		大正大1984	
266	御松内竹内通		少	土師、鬼面、新治		大正大1984	
274	古都南通跡		少	土師、鬼面		大正大1984	
275	神野町几塚		少	土師、鬼面(新治)		大正大1984	
281	波火平通跡		多	土師(内裏あり)、鬼面(新治)、木下下、酒造、丹波屋、灰箱		大正大1984	
282	新堀通跡		少	土師、鬼面(新治)		大正大1984	
288	一ノ宮通跡		少	土師、鬼面(新治)		大正大1984	
291	御松寺通跡		少	土師、鬼面(新治)		大正大1984	
295	鬼越通跡		少	土師、鬼面(新治)		大正大1984	
296	白幡鬼塚		少	土師、鬼面		大正大1984	
299	鬼空寺通跡		少	土師		大正大1984	
300	鬼無下浜塚		少	土師、鬼面(新治)		大正大1984	
301	折所通跡		少	土師(内裏あり)、鬼面(新治)、鬼面(新治)		大正大1984	
302	西方云塚		少	土師(内裏あり)、鬼面(新治)、鬼面(新治)、源四		大正大1984	
304	因力通塚		少	土師、鬼面(新治)		大正大1984	
305	西方通塚		少	土師(内裏あり)、鬼面(新治)、源四		大正大1984	
306	西方3塚塚		少	土師(内裏あり)		大正大1984	
307	下吉通塚		少	土師、鬼面(新治)、源四		大正大1984	
308	鬼谷3塚塚		少	土師、鬼面(新治)		大正大1984	
309	鬼谷2塚塚		少	土師、鬼面(新治)		大正大1984	
310	谷ノ下2歳跡		少	土師(内裏あり)、鬼面(新治)、源四		大正大1984	
303	坂通跡		少	土師、鬼面(新治)、鬼面、近今其、坂通(新治)		大正大1984、茂木1999	
304	二ノ宮通塚		少	土師(鬼面)		大正大1984	
305	坂有河通塚		少	土師、鬼面		大正大1984	
306	坂出通跡		少	土師、鬼面(新治)		大正大1984	
308	上野公民館通跡		少	土師、鬼面(新治)		大正大1984	
309	市内無印の数社		少	土師		大正大1984	
310	説教院品社通跡		少	土師、鬼面		大正大1984	

高野夢号	宿泊名	時期	宿泊者	宿泊者	宿泊者	宿泊者	文部
325	云中生石館	○	少	土師、瓦器	大正大1904		
334	上原2連路	○	少	瓦			
339	深川下原2連路	○	少	土師、瓦器	大正大1904		
340	深川下原3連路	○	少	瓦			
342	深川4連路	○	少	瓦			
343	深川化粧路	○	少	瓦			
344	下原3連路	○	少	瓦	大正大1904		
346	中華会1連路	○	少	瓦	大正大1904		
348	中華会2連路	○	少	瓦	大正大1904		
349	中華会3連路	○	少	土師、瓦器	大正大1904		
351	深川下原1連路	○	少	瓦	大正大1904		
358	八千代台1連路	○	少	土師(内黒、墨あり)、漆器(刷毛利土器)、灰釉、絞緋、丹波燒(留物)	東洋	大正大1904、右川(はき)2000	
359	八千代台2連路	○	少	瓦			
360	八千代台3連路	○	少	瓦	大正大1904		
361	八千代台4連路	○	少	瓦	大正大1904		
363	八千代台5連路	○	少	土師、灰釉	人正大1904		
365	白山2連路	○	少	瓦	人正大1904		
367	幕川1連路	○	少	瓦	大正大1904		
369	北口2連路	○	少	瓦	大正大1904		
370	新戸3連路	○	少	瓦	大正大1904		
371	白井沢福井街道	○	少	土師、瓦器	大正大1904		
372	白井沢福井街道	○	少	瓦			
373	白井沢1連路	○	少	瓦(内黒あり)、漆器			
374	勝利2連路	○	少	土師(内黒あり)			
375	芦原荒尾連路	○	少	土師(内黒あり)		大正人1904	
377	鶴形3連路	○	少	瓦	大正大1904		
378	鶴形4連路	○	少	瓦(内黒あり)		大正大1904	
379	鶴形5連路	○	少	土師		かひくそ山通路 羽羽御跡路	
381	心通道筋	○	少	瓦			
394	心通道筋	○	少	瓦			
389	鳥谷古庄造跡	○	少	土師、瓦器			
390	廣瀬古庄造跡	○	少	土師、瓦器	大正人1904		
392	中通道筋	○	少	瓦	大正大1904		
394	若木火薙路	○	少	瓦(内黒、灰釉、瓦器)			
395	人桑道筋	○	少	土師、瓦器	人正人1904		
397	鶴の道筋	○	多	土師(原燒、新宿、内黒瓦あり)			
401	マイカチ造跡	○	多	土師(内黒瓦あり)、漆器(新宿)、瓦種	人正大1904		
403	小山道筋	○	少	瓦(内黒瓦あり)、漆器(新宿)	人正大1904		
405	千葉道筋	○	少	土師、瓦器(新宿)	人正大1904		
412	千代田道筋	○	少	土師、瓦器(新宿)	人正大1904		
417	近野・多賀道筋	○	少		乳沫井木耀造	大正大1904	
419	小坂動物路	○	少	(瓦、漆器(新宿)、瓦器)			
422	カチャ造跡	○	少	土師、漆器	大正大1904		
424	千子井造跡	○	少	土師、漆器(新宿)	大正大1904		
428	前森造跡	○	少	土師(内黒瓦あり)、漆器(新宿)	大正大1904		
433	穴吹平塚造跡	○	少	土師、瓦器	大正大1904		
435	美浜前進跡	○	少	土師、漆器			
440	西宮古庄造跡	○	多	土師(内黒瓦あり)、漆器(新宿)	大正人1904		
441	神崎古庄造跡	○	多	土師(内黒瓦あり)、漆器(新宿)	大正大1904		
443	梅川2連路	○	少	土師			
446	安佐田通路	○	多	土師	大正大1904		
457	口端出雲通路	○	少	土師	大正大1904		
462	波曾通路	○	少	土師	大正大1904		
464	芦原中山通路	○	多	土師	大正大1904		
466	芦原被路	○	少	土師			
470	芦原赤志路	○	少	土師、瓦器	大正大1904		
475	池原芋見坂	○	少	土師	大正大1904		
476	物居古庄造跡	○	少	土師、瓦器	大正大1904		
478	猪俣通路	○	多	土師、瓦器	大正大1904		
480	小里内通路	○	少	土師、瓦器	大正大1904		
481	弓削通路	○	少	土師、瓦器	大正大1904		
483	弓削古庄通路	○	少	土師、瓦器	大正人1904		
484	弓削穴谷造跡	○	少	土師、瓦器	大正大1904		
486	加茂山・猪俣通路	○	少	土師、瓦器	大正大1904		
486	足小山東跡	○	少	土師、瓦器	大正大1904		
490	東森跡	○	少	土師、瓦器	大正大1904		
491	森山通路	○	少	土師			
492	仲妻伝説路	○	少	土師			
493	岩上通路	○	少	土師			
494	岩上通路	○	少	土師(内黒瓦あり)、漆器			
495	岩西鬼城跡	○	少	土師(内黒瓦あり)、漆器			
497	方能寺通路	○	少	土師、瓦器	大正大1904		
498	弓ノ山通路	○	少	土師			
499	御前台古庄跡	○	少	土師			
500	御前台通路	○	少	土師			
501	御前寺跡	○	多	土師(内黒瓦あり)、漆器(新宿)	人正大1904		
502	御前寺跡	○	多	土師(内黒瓦あり)、漆器(新宿)	人正大1904		
503	御前八幡通路	○	少	土師(内黒瓦あり)、漆器(新宿)、灰陶	人正大1904		
506	御前八幡古庄跡	○	少	土師(内黒瓦あり)、漆器	人正大1904		
507	聖山通路	○	多	土師、漆器(新宿)、瓦片	人正大1904		
508	七曲り通路	○	少	土師、漆器(新宿)	人正大1904		

Ⅳ. 中世（平安時代末～安土・桃山時代）

霞ヶ浦町内では全部で137ヶ所の中世遺跡が確認されており、内訳は包蔵地・集落跡103ヶ所、塚(古墳の再利用)7ヶ所、城館跡・居館跡18ヶ所、寺院跡4ヶ所、土壘・堀5ヶ所となる。第22図には城館・居館を■、その他の遺跡を●で示した。この図から見えるように、生産基盤となる谷津を擁した台地縦に散布地が多く、河川や湖岸に面し、防衛や眺望に優れた小高く平坦な台地に城館が営まれており、隣接して寺院や宿を伴って一連の空間を形成している。その分布は菱木川中流域、一ノ瀬川中流域、川尻川流域など河川流域の低地を望み、水路と陸路が交差する交通の要衝に集中し、半島の南半部のほうが遺物散布地の密集度が高い採集遺物も多い。

中世における霞ヶ浦町域は、平安末期の康治二年(1141)の官牒に「南野牧」と見え、仁平二年(1176)の八条院領目録には伊太郡とともに南莊が見える。霞ヶ浦町に隣接し、大津郷の領域に位置する土浦市宿舎入ノ上遺跡では、9～10世紀以降の遺構・遺物が検出され、「青毛」墨書きの内黒土器や糸切かわらけを作った馬の埋葬墓などが複数見つかっており、南野牧の関連遺跡と見られる(土浦市遺跡調査会 1997)。隣接する沖谷鹿島社には、承安五年(1175)紀の大般若經が施入されており、六百巻のうち三百九十九巻が沖宿海藏寺に移管されている。霞ヶ浦町域でも下大堤の「牧ノ内」・宍倉の「馬場平」・「馬場山」などの字名は牧闡道地名を含む可能性があり、南野牧が半島の東部までのびていたことが予想される。

南野牧は常陸平氏の懇領で、筑波山南麓から常陸国府にかけて勢力を握っていた大掾多気氏の支配下にあったと考えられるが、多気義幹が建久四年(1193)に小田氏の祖である八田知家に滅ぼされて以降は、当地にも小田氏が進出したようで、安筋郷には小田氏一族の安食氏が、佐賀郷には小田一族の出伏氏が、のちには同郷牛渡八田に小田本宗家の、大津郷加茂にも小田氏一族が、同郷深谷には小田家臣の川島氏が居を構えており、鎌倉中期以降はほぼ小田氏の勢力圏となつたようである。

鎌倉後期には弘安二年(1280)の勘文に「南野牧……九二町九段大」とあり、のち割譲されて嘉元四年(1306)の案文に「南莊六五〇町」と記されている。その範囲は当時の茨城郡の南辺に筑波・河内の二郡を加え、九郷五十四村に及んでいた。

室町時代には「大光揮師語録」に「南野庄高岡郷(新治村高岡)・南野庄善応寺(十浦市真鍋善応寺)とみえるほか、町域では安筋郷内、安食大宮神社の応永十年(1403)銘鉄口に「常州閩南野庄安筋郷大宮」銘があり、この頃には南野庄(南庄)を称したことが判明する。

16世紀後半には小田氏の後退の中で佐竹氏の勢力が及ぶようになり、小田側の有力武将であった宍倉城の菅谷

氏や、戸崎城の戸崎氏は、ついには佐竹氏に降伏する。文禄四年(1596)の「中務大輔當知行日録写」によれば、志々倉・おかみ・大わた・かしは崎・あんぢき・いわつほ・さか・田ふせなど出島半島の大部分が佐竹一族の東義久の知行地となっている(佐竹義秀文書)が、茨城県南部諸地域に残る文書類からみて、文禄年間には太閤検地が実施され、古代～中世の地域単位であった庄・保・郷が解体された可能性が高い。そして佐竹氏の出羽への転封(1602)をもって、当地の中世は終わる。

1. 研究史

霞ヶ浦町域における中世遺跡の認識は、近世の軍記や『新編常陸國誌』・『新治郷上史』等の地誌類に城館や寺院の記述が現れたのを嚆矢とするが、『出島村史』のほかやまとったものでは『日本城郭大系』における阿久津久氏の界下城館の概観で、宍倉城・田伏城・戸崎城が取り上げられ(阿久津 1979)、茨城県教育委員会による『重要遺跡認定調査報告書』Ⅱでも安食館跡・坂寄居山館跡・田伏城跡・宍倉城跡・戸崎城跡の5ヶ所の城館が取り上げられた(茨城県教育委員会 1985)。これらの城郭の城主や沿革についてはもっぱら『新編常陸國誌』や近世軍記に掲っているため史料的な裏付けの乏しいものが多いが、寺島誠斎は手稿中で文書や金石文を用いた批判を行なっている(寺島 1994)。

大正大学による踏査では、中世のかわらけや常滑陶器が報告されている(大正大 1985)。なおこの踏査では、鎌治屋廃寺で完形の中世軒平瓦も採集されていたが、当時は中世瓦研究が進んでいなかったため報告されていない。

橋場君男・桃崎祐輔は、常陸南部の中世瓦の例として加茂の鎌治屋廃寺(477)・深谷の真珠院(376)を挙げ、いずれの中世瓦も鎌倉時代に遡り向流瓦が広域に分布していること、小田氏の菩提所で西大寺流律宗の拠点であったつくば市三村山極楽寺の瓦と強い関係を示すことを指摘した(橋場・桃崎 1995、土浦市立博物館 1996)。さらに霞ヶ浦町域は、中世の埋蔵鏡が数ヶ所で見つかっていた(鷹崎 1971)が、土浦市上高津あるさと歴史の広場の『埋蔵鏡の物語』特別展回録では、内山俊身氏により常陸地域の埋蔵鏡が集成され、霞ヶ浦町域では多聞寺遺跡(511)・柏崎・志戸岬・八田船(414)などが取り上げられた。更にこれらが『常陸国富裕仁等注文』(1435)に見える富裕な居住地と一部対応することも指摘された(土浦市上高津あるさと歴史の広場 1996)。そうした成果をうけて、石川功氏は霞ヶ浦町域で出土した埋蔵鏡の調査を進めている(石川 2000)。

また茨城県立歴史館による町内仏像の調査では、古代



第22図 中世の遺跡

から中世に遡る古仏が見いだされ、深谷法藏寺境内遺跡(338)出土の小金銅仏や懸仏類が紹介されている(黒澤・千葉 1997)。また2000年秋に行われた「折りの金工一中世霞ヶ浦の金工品」特別展では、霞ヶ浦町内をはじめ茨城県各地に造る鰐口、密教法具、器、懸仏などが展示された(霞ヶ浦町郷土資料館 2000)。

さらに筑波大学の調査とはほぼ同時期に進められていた大正大学考古学研究会による町内石造物の調査では、これまで知られていないかった私年号を持つ青石板碑など重要な発見があり(越田 2001)、正式報告が待たれる。

以上のように霞ヶ浦町域は中世考古資料の宝庫であるが正式な発掘調査で出土したものは僅少である。これまで発掘調査された遺跡では八千代台遺跡(070)(千葉 1995・1996)、坂遺跡(320)(茂木 1999)で若干の中世遺構・遺物が発見されているほか、富士見塚古墳群(070)の調査では渡来鏡やかわらけが出土している(伊東 1992)。

2. 遺跡と構造

(1) 中世城館・居館

中世城館は安倍郷の領域に宍倉城跡(044)、安食館跡(051)、西成井館跡(130)、上軽部館跡(133)、軽部前館跡(147)、佐賀郷城の田代城跡(246)、坂寄居山館跡(290)、要害館跡(297)、大津郷城の大和田城跡(208)、八坂神社遺跡(337)、鷹巣館跡(342)、川鶴家屋敷(345)、幕戸川

船家屋敷地(368)、八田館跡(414)、戸崎城跡(466)、平後館跡(472)、台山館跡(474)などがある。これらの多くは戦国城郭とみられるが、城主や沿革等については同時代資料が乏しいため近世軍記の記録に依拠せざるを得ない。しかし、それらは資料的に信頼のおけないものも少なくないため、以下の記述についても、今後確実な資料で検証する必要がある。

宍倉城跡(宍倉小字本丸外)は菱木川とその支流に挟まれた合流点の東西にのびる台地上に位置する。堀と土塁を巡らす搔上げ城で、周囲の低地を堀代わりにする。面積は主要部だけで7016m²に達する(阿久津久 1979)が、城域は馬場・新宿・天王町に及び、城跡に隣接して「宿」空間が形成されている。天王町には「市の神」の石像が祀られている。

伝承によれば永享(1429-41)頃、野口速江守が居城し、のち菅谷氏が城主となり、文亀年間(1501-04)には菅谷隱岐守貞次が城主であった。菅谷氏は小田氏の臣家で、当時、出島半島の約半分を領有していた。『永慶群記』等によれば永正十二年(1569)の手道坂合戦で小田軍が大敗した折、討死した武将の中に鹿児郡少輔が見えるが、宍倉城主の一派であろうか。小田氏の衰退につれて宍倉城も佐竹氏の攻撃をうけるようになり、元亀四年(1573)の佐竹義重書状には、「戸崎・宍倉両地連ニ属手、説人等取之、其外廃所之郷村悉成塙」とあり(佐竹文書)、天正元年(1573)、佐竹義重は土浦の木田余城を攻めようと

して、先ず穴倉城を攻め、城主菅谷氏は七月二十五日に質を入れて降った(『風信筆記』「小山孝裕書状」)(小丸1979)。そして、文禄四年(1595)、佐竹の臣大山田刑部が城主となつたが、文禄四年(1596)の中務大輔・当知行・田嶋等によれば、志・倉・おかみ・大わた・かはし・あんぢき・いわづは・さか・田ふせなどが佐竹一族の東義久の知行地となつてゐる(佐竹義秀文書)。穴倉城は慶長七年(1602)の佐竹氏の出羽秋田への国替によって廢城となつたとされる。城域内からは16世紀の景徳塗染付、祖母懐茶器、おはぐろ壺に用いられた漬戸陶器など伝承する存続期間に対応する遺物が採集されているが、鉄絵志野や初期伊万里の徳利片も採集されており、これらは1610~20年前後以降に出現する陶磁器であることから、慶長七年に完全に廢城されたとは考えにくく、17世紀前半には陣屋等の形で有続した可能性が高い。

安食館跡(安政小字兜之内外)では安食大宮神社とその周辺の北ノ坊集落の一部、堀前集落にまたがる範囲に土塁、濠等が現存している。南は菱木川の流れる低地、北は復ヶ浦岸の低地、西は霞ヶ浦に続く谷津(源渕久保)によって平集落に境し、東は田子内・中道両集落に接している。堀前集落と田子内・中道両集落との境界近くに堀があり、畠中に黒土が深く入り、それが一直線に続く。また「堀之内」という字が堀から第二保育所近くまでの約3ヘクタール範囲に広がつており、本丸とみられる。その西に大宮神社があり、堀之内との境には土堤の残骸が一部残り、土堤の形に沿つて地番も分かれている。この西側に屋号を二城内といふ家があり、二の丸を意味する字名が屋号となったものであろう。「香取応安海大天文」「大宮縁起」などによれば、「此地(安食郷)は小田時知(小田氏四代、1238~1293)が子安食越中守盛知頭にて、其子兵部少輔知房(六代貞知1284~1349の從兄弟)に伝う」とある。また「小田系同」でも小田氏五代宗知(1259~1306)の弟盛知が此地に住んだとする。

安食館より南東の田子内遺跡(056)では竜谷窯系青磁蓮弁紋碗(13世紀)の破片が採集されており、また安食鎌勝寺の阿弥陀如来坐像(県指定文化財)は鎌倉時代中期、納本着色の阿弥陀三尊坐像(県指定文化財)は鎌倉時代末期の仏画であることから、館の形成が鎌倉期に遡る可能性は十分考えられる。

なお安食館の中核部にあたる大宮神社には直徑33cmの銅銅鈔門(昭和44年県指定文化財)が傳世しており、「常州國南野庄安食郷大宮 応永十年癸未(1403)三月廿八日淨超散白」銘より、15世紀初頭には当地を安食郷と称し、南野庄に属していたことが判明する。

安食北ノ坊の櫻口家輝氏(大宮神社宮司)宅も土塁をめぐらす壁敷で、台地縁斜面にはヤマトシジミのみからなる貝塚が形成されており、付近から常滑窯の破片が採集されている。隣接する福蔵寺には元龜元年(1570)の胎内銘を持つ仏像があることとあわせ、貝塚は15~16世紀の形成にかかると推定される。篠ヶ浦の汽水化は15世紀前

後と推定されているが、その正確な時期を探る上で、中世貝塚の分析は重要な課題である。また安食郷便局に近い宮下の磯山氏宅も土塁を廻らす屋敷跡で、現在も17世紀頃の完形の六地蔵宝幢があり、屋敷の形成は中世に遡る可能性がある。すると安食館は、小田一族安食氏の居館として築かれ、中世後期には一族や家臣の館が独立した図画をなして連携した、一揆結合的な構造であったとみられ、近世以降も地域有力層の居住地城として存続したと推測される。

西成井館跡(西成井)近世の諸記録によれば、成井館は坂(佐賀)に本拠を置いていた坂氏一族の居館の一つと考えられる。守島誠彦氏は、「義久筆記」に「宝曆六(1756)丙子年四月廿九日義久御城下浜町坂青五郎方へ參候、此節當陸京新治都成井村大工別当成井山正輪院に對面、右天王神体毘沙門天平ト也、此勤請ハ坂古五郎昌則先祖坂大学ト云也、天平ノ近所ニ古米大学ノ屋敷ト云モノ有之ト也云々」とあり、また「小田屋形家風記」には「坂館主坂大学(一本 一門引渡ニ列ス) 坂新太郎」の名が見え、「天麻記密書」に「坂大学、坂新太郎、坂新左衛門」、文政四(1821)連歌師に「坂昌成 岡昌永」と見え、「安永武藏」(安永1772~1781)に「連歌師 あさ草坂昌周」、「安政武藏」(安政1854~1860)に「連歌師 ねきし坂昌功 父昌功 坂昌元 昌久」などあるのを根拠に、成井館(西成井館跡)は坂大学一連歌坂昌成一昌周昌一昌功一昌元の館であろうと述べている。なお成井の地名は七つの井戸に由来するとされ、この館主は水利管理と密接にかかわっていたと考えられる。

寄居山館跡(坂宇東方)は、田伏横須賀より北西に伸びる谷津に面し、田伏中合より谷津を隔てた南方にあたり現在も山中に濠址を残している。「山島村史」では南北朝時代小田治久の家臣佐賀美濃守の居館とのべている。しかしこれは「新編常陸國誌」に「会津旧事考」二小田宮内大輔治久臣ニ佐賀美濃守ト云フ者アリ、其子孫会津若松ニアリテ、治久ヨリ美濃守宛文書ヲ戴ス」とあるのを引いたもので、守島誠彦はこの記事を検討し、「予『会津風土記』ニ載ル同文書式透ワ抄写セルヲ見ルニ金ク後人ノ偽作ナリ、新穂ガ其文ノ末尾ヲ中断セルハ之ニヨルカ、此偽作者ハ田伏二鈴木芙蓉守ナルアリシコト知リテ坂美濃守ナド偽作セルニヤ、可笑矣」と断じており、これらの文書は後撰に偽作されたものではやはり信ずるにたりないという。すると村史の記事も根拠を失うこととなる。城の所在地や構造からみて15~16世紀代に坂氏の一族によって營まれたと見たほうが妥当であろう。

要害館跡(坂字折越)は、一ノ瀬川下流の北岸に位置し、かつては河口の入り江を望んでいたとみられる。谷津に挟まれ粗削地に突出した舌状台地の先端を掘切りで切断したもので、付近からは15世紀後半~16世紀前半の竜泉窯青磁碗や瀬戸大窯期の菊花スタンプ皿、糸切りかわらけなどが採集されており、戦国時代でもやや早い段階に營まれた居館と考えられる。

なおこの北方の台地全面に展開する天王越遺跡(241)は、要害館の一部およびその城下集落を含むと推定され、中・近世遺物が多量に散布しており、中世遺物には12世紀代の温美焼、14世紀の焼戸灰釉瓶、14~15世紀の常滑窯、15~16世紀の竈瓶窯古磁刻頭文瓶文碗、16世紀の内耳上鍋などがあり、室町~戦国期の平地型居館が存在する可能性も残る。

『佐賀村郷土誌』では「十五、坂皆社」に「坂村字要
吉峰ニアリ、千三百九十六坪、其地勢北ヨリ東ル一丘陵
ヲナシ、西岡ニ堡ヲ構ヘ、西ニ大手口アリ、本村宇折越
ヨリ牛渡村字池鼻ニ達スル里道ニ係ル、南ニ橋手口アリ、
一瀬川支流ヲ帶ビ平田ニ接ス、東北ハ一階低キ平坦ノ民
有小林ニ属ス、元臣下ノ居所ナリ」とあり、更に「古
昔嘗初太郎直時ノ居城タリ、直時ハ常陸大掾基ノ第
三子春寿ノ麾下タリ、當春小田館守氏治二承セラシ
ニ及ビ共ニ滅ス」とのべ「出島村史」もこれを引いて大
株氏の家臣要害氏の居城とする。しかしこれは俗説「南
城高家綱」に「要害太郎時直(イ国時)中台ニ替アリ」「
龍界初太郎景正石川台ニ替アリ」とあるのをふまえ、「要害」を「龍界」の転訛とみて、元亀四年(1573)に三
村城主大掾常春が小田氏治に攻められたとき勇戦した家
臣の龍界初太郎時直と結びつけたものにすぎない。寺島
誠齋氏は「南城高家綱」の内容は矛盾が多く史料として
信頼が置けないと断じ、「小田屋形家風記」に「坂塙主
坂大学(一本、一門院渡二列式) 坂新太郎」の名が見え、
「天祐記密書」に「坂大学、坂新太郎、坂新左衛門」また
「安永武鑑」(安永1772~1781)に「御医師 五百石も
ちの木坂 坂上池院 同鍼科 三十人チフ 坂幽玄法眼
子 春達)、「安政武鑑」(安政1854~1860)に「二十人
チフ 坂 尚安/百儀 坂 春庵」とあるのを根拠に、
「接此ノ城館ハ御医師坂正智院一同上池院(五百石も
ちの木坂)ノ祖ノ居リ専處ナルベシ」と述べている。こ
の坂氏については、「筑紫雜記」に坂氏は手野貞氏の後
胤であると述べ、手野貞氏は小田貞宗の後とされること
から、小田氏の遠縁ということになる。

田伏城跡(田伏字上根)は霞ヶ浦沿岸を望む小高い森に
なっており、自然の崖を巧みに利用した城である。城に
隣接して城主田伏氏の菩提寺である普陀宗實傳寺があり、
裏山墓地からは大関武氏の躋查で常滑大甕が採集されて
いる。

城主の田伏氏は「新編常陸國志」にひく「水口領地理志」に「新治郡田伏村ニアリ、館主ハ藤原姓ニテ、小田
大庵家臣ト云、田伏柏崎藤原白鳥正取」ツ木六本ヲ領セ
リト云」とあり、藤原姓を称し小田氏一族でその家臣で
あつたことが見える。同家の家紋は三鶴左巴で下野宇都
宮氏と同じで、小田氏の支流田中氏もこの紋を用いている。
また上記の記録によれば實傳寺には「実傳道參大居
士池永三年(1396)丙子二月十五日」銘の古碑があつたと
いう。板碑の類と推定されるが現存していない。實傳道
參大居士は田伏氏初代の次郎太夫治定の没後の法号とみ

られ、時代も謎も似ている点から小田治久(1300~1352)
の息子邦と関係があるのではないかという。邦知は後に
岡見氏を継いでいる。以上より田伏城は南北朝時代の築
城と推定される。その後は不明な点が多いが、「土浦城
記」には小田政治(?)~1548)の家臣に「田伏周防守 田
伏城主」とみえる。

小田氏治(1531~1601)代の人物としては田伏次郎太夫
邦邦、田伏道茂(四郎ないし五郎邦昌か)が知られている。
『水慶群記』等によれば永正十二年(1569)に手造坂で小
田氏治と真壁道夢が合戦し、真壁側の鉄砲使用などで小
田軍は大敗、討死した武将の中に田駒(田伏)兵庫の名が
見える。「小田庵記密書」藤沢合戦(1573)条に田伏大和、
岡小伝次の名がみえる。「小田屋形家風記」には田
伏次郎太夫、同主殿がみえ、田伏主殿の辻に稻敷宇都木
とある。田伏次郎太夫は小田氏治に従って、天正元年(1
573)の筑波山君島川の合戦に参加し、一番槍の功名をた
てたことで知られる。

『新編常陸國志』に市村文書を引き、天正十六年(1
588)正月(『筑波郡郷土史』では十一月二十八日とする)
真壁氏幹が藤沢に來攻し、田伏某が附ち死にしたとある。
水戸に行った邦昌の子孫と思われる五左衛門の伝である
『実伝寺記』には「其後天正中ニ田伏次郎大アリ、佐
竹氏ニ誠サル、其子孫田伏五左衛門ト云ヒシガ今ハ絶タ
リ」とあり、系図の第三郎邦信、密書の田伏大和に該当
するとみられている。『実伝寺記』より田伏氏は小田氏
の土浦落城と共に天正十八年(1590)に佐竹氏に滅ぼされた
(阿久津久 1979)とするのが通説となっているが、『東原軍記』等では田伏城主田伏治部右衛門は土浦落城
後田伏城に帰還したとしている。慶長十七年(1612)十月
廿七日に没した田伏道司は『実伝寺記』の五左衛門(治
綱)とみられている。『東国開戦見聞私記』には、土岐の
家人に田伏次郎左衛門があり次郎太夫の弟としており、
安中に田宇都木がありその子孫かと述べる。また田伏
村の宇都木次郎右衛門は田伏氏の末裔と伝えており、ある
いは土浦落城後に帰還した田伏治部右衛門の子孫である
可能性もある。この宇都木姓については、小田の本家
である宇都宮に由来すると見られている。

大和田城跡(大和田)は一ノ瀬川の合流点北岸の台地跡
上に位置する東西に長い城跡で、現在町役場の敷地になっ
ている。現在田伏上浦線の道路によって城郭の西寄りが
分断されているが、道路を隔てて西方に於ける大和田集落
も短冊形地割をよくとどめ、城館に伴う宿空間に由来する
ものと考えられる。南に一の瀬川が流れ、三方が低地で
自然の要害となっている。現在堤と土塁が残っており、
昭和31年役場新築工事の際、「抜穴」とみられる横穴が
発見されており、おそらく地下式櫓が開口したものであ
ろう。人掛氏家臣の居館と伝えられているが明らかではない。
しかし立地からみて小田系の領主の館と見た方が
妥当であろう。文禄四年(1596)の中務入輔當知行目録写
は、志、倉、おかみ、大わた、かしは崎、あんぢき、い

わつは・さか・田ふせなどが東義久の知行地となっており(佐竹義秀文書)、佐竹氏の占領を受けた可能性が高い。また城の東南に谷を隔てて相対する柿ノ内土塁(224)も城郭に関連するものであろう。

なお大和田城より東北の台地平坦面上にある和田台遺跡(213)では灰釉三足壺(15世紀)や景徳鎮染付(16世紀)、梨ノ木遺跡(214)では中国産白磁玉緑口綠碗(12世紀)や常滑窯(14~16世紀)、瀬戸灰釉綠釉碗(15世紀)、景德鎮染付(16世紀)などが採集されている。

平後館跡(加茂宇平後他)加茂集落より北東の道路脇に南北に近い輪をとめて100mほど土塁がのびており、山林中にも屈曲した土塁の痕跡がある。この区画は南は加茂集落の北を画す土塁と堀によって分断され、北方は工場との境界にはほぼ東西に直線状に走る比較的大規模な堀切によって両側でいる。この山林は西側が谷となって大きく落ち込んでいるが、付近には「木戸口」や「木戸台」の地名を遺し、東側の谷戸に至る地域を南北300m、東西400mにわたって囲繞していた可能性さえある。永享七年(1435)の『常陸國富裕人等注文』には賀茂郷に富裕人越四郎の名がみえ、知行主は小田治部少輔となっている。小田氏の系団のうちには小田孝朝の息子で小田治朝の第に「孫四郎・加茂村住」とみえ、加茂地内に小田氏一族が居住していたことは確実であり、加茂香取神社や歎願屋庭寺(477)からほど遠くない位置にその居館が存在する可能性が高いと考えられる。平後館跡は、その居館の候補として今後注目すべき遺跡といえよう。

台山館跡(戸崎字台山)加茂平より南西、川尻川低地から流入する谷津に面した台地縁の山林中に位置する。舌状の台地縁を採取するように土塁をめぐらし、その内部にも若手の区画がみられる。谷を隔てれば戸崎城があり、同じ丘陵縁には「胸形」「根小屋」の地名を遺すため付近には城郭に準ずる性格が考えられる。戸崎城防衛のための出城か、逆に戸崎城攻略のために設けられた仮設的な陣地のいずれかであろう。

戸崎城跡(戸崎字本丸他)は、川尻川低地の東岸台地上に展開する。城は「豪上げ城」であるが城郭としての区域は戸崎台地一帯の東半のほぼ全城を占めている。現在なお「本丸」「二の丸」をはじめ「城中」「外城」「御南屋敷」「鉢下」「根古屋」など城に関する地名と濠跡が明瞭に残っており往時の繩張りの様子をよく伝え、また現在戸崎集落となっている南縁は、戦国以来の宿空間の名残りをとどめている。また本丸より東方の川尻川低地の水田中には、城の姫が落城の際に投げた火鉢の落ちた場所と伝える塚があったが、現在なくなっている。戸崎城の落城は宍倉城の脅迫の降伏とされるが、当時の慣例として、降伏した将兵はただちに攻撃の先鋒に駆使されるため、以来菅谷と戸崎の間には遺恨が生じたようで、今日なお上諸市菅谷と戸崎両集落間は通婚しない習慣が続いているという。

城の範囲内では小字本丸の範囲で16世紀代の糸切かわ

らけ類、内耳土鍋、常滑楽片などともに龍泉窯系佔青磁花生、同安窯系青磁、景德鎮染付などが採集されている。このうち青磁類は、12~14世紀のもので城の存続期間より古い時期に生産されたものだが、茶の湯の盛行と床の間の出現によって美術陶器や茶器として骨董的価値のある陶磁器が収集されるようになる。特に同安窯系青磁は、12世紀~13世紀初めにかけて輸入品の食器として使われていた雑器だったものが、室町時代に茶人の村山珠光によって茶碗として取り上げられたことから、「珠光青磁」と呼ばれるようになった。こうした陶磁器を賞賛する城主一族の姿がうかがえる。また南方の根小屋地内でも16世紀代の糸切りかわらけ・景德鎮青花などが採集された。さらに本丸では、17世紀前半の豊臣期志野の白釉皿の破片が採集されているが、これは伝承する城の廢絶年代(1602)よりも新しい時期のもので、まだも宍倉城と同様、江戸初期にも障壁として存続した可能性が高い。

城の起源は明らかでないが、寺崎誠貞氏がその沿革を検討している。それによれば松学寺位牌に「(表)開基富永樹盡大居士 (裏)永正中菅谷尾張守義則」とあり、永正年中(1504~1521)以前に菅谷尾張守義則が居城したと推定する。ちなみに菅谷氏の本姓は赤松で、弘治三年(1557)黒子に討死したつづく市の千子生城主赤松鉄胤則定、その息で土浦市の木田余城主(のち千子生城主)凝潤斎則定は、偏諱と共通と年代の連続から推定して菅谷義則の子孫と考えられるという。

永禄・天文(1558~1573)間に戸崎道閑齊俊宣・大膳亮俊が居たが、戦国末の小田氏と佐竹氏との抗争には小田氏十五代氏治庵の有力武将として活躍した。

元龟四年(1573)の佐竹義重軍達状文に「此度戸崎地進陣付而、於戸張之仕合奇特之空候」と見え(水府志料所収文書)、同年の佐竹義重書状にも「戸崎・宍倉山地連ニ属手、説手等取之、其外残所之郷村悉成墟」とあり(佐竹文書)、戸崎・宍倉両城が佐竹氏に屬している。

小田城・藤沢城をめぐる激しい攻防が繰り返された天正元年(1573)頃、小田城を占領した太田三柴父子は、小田氏治の勢力挽回の機先を制するため梶原美濃守景国・北条山雲守率いる五百余騎で藤沢城を攻撃した。氏治は戸崎大膳・由良判官則綱以下七百騎で小田と藤沢の中間にある背の台に陣をした(背台の戦)。この戦闘では岡軍死傷者が多く勝敗はつかなかった。四月十一日には小田城を占領する梶原・北条・真壁氏幹が藤沢城攻撃に発向した際、小田氏治・守治は戸崎・菅谷・山良・行方・海上勢一千余騎を率いて田土部川にこれを迎え整備している(出土部合戦)。一方木田余城攻略をめざす佐竹義重は七月二十五日宍倉城を降し、八月二日には戸崎城に拠る戸崎大膳も降したとされる。この間の事情を「佐竹家譜・後」では「…天正元年七月義重将木田余(亂信筆記)廿五日攻宍倉城城主菅谷貞次隠岐守納賀出降、八月二日攻戸崎城戸崎大膳亦降(亂信筆記)」と記している。しかし大膳は新治村の藤沢城に籠城して不在であつ

ため、城が陥落したとする説もある(『松学寺縁起』『天魔記密書』『見聞録』『小田家風記』)。諸記録によれば、戸崎大勝・由良判官則綱は平出伊賀守・足立加賀守、志筑左近・横山彈正、岩崎勘解由・甲崎四郎左衛門とともに藤沢城に籠り、佐竹勢・太田・権原・北条・真壁氏二千の攻撃を防戦した。この時戸崎大勝は寄せ手の大間久米之助を長刀で討ち取ったとする説もある。また十月二十日過ぎ、小田氏治の息守は戸崎・由良・行方・海上ら三百余騎で櫛夜襲を夜襲し、小田城へ襲撃したとする伝もある。しかし諸将の相次ぐ戦死で四敗し十一月十九日に落城した。戸崎・山良は人勢の中に駆け入って生死不明となつたという(『諸土略伝』『東源軍記』)。『常源譜略』では討死とする。また天正五年(1577)戸崎城回復の戦があり大勝ら討死という説もある。天正六年に氏治が土浦城主谷筋政の助けで木田余城を一時回復しておりその可能性も残る。しかし天正十八年(1590)と推定される関東八州諸城覚書には「一、ひたち 藤沢之城 小田武晴(氏治)…… 一、十崎之城」と見え(毛利家文書)、豊臣秀吉の小田原城攻略前後の段階では、小田氏に毎回されていたと思われる。しかし結局、戸崎城は佐竹氏の支配下に入り文禄四年(1595)家臣の飯塚兵部少輔が監理するところとなった。文禄四年(1596)の中務人輔当知行目録写は、志・倉・おか・大わた・かしは崎・あんぢき・いわほ・さか・出ふせなどが佐竹一族の東義久の知行地となっている(佐竹義秀文書)。が、慶長七年(1602)佐竹氏の秋田国替えにより廢城になったといふ。なお「守山公子松平領融」の揮毫になる「淡園先生墓碑銘」に「淡園先生姓源氏、戸崎・諱允明、字哲夫、初名哲、字了明、後更今名、淡園其号也。先世大佐佐者名長俊、仕於小田鹿腹氏守治親執巧最多、小田氏亡居常陸八本邑数至命美、委斂於吾考荅公為、都属吏、先先生於常陸松川云々文化三年丙寅冬十一月十四日卒、享年八十三」とあることから、戸崎氏の子孫は松平大学頭(守山候)に仕え戸崎五郎太夫を称していると判明する。戸崎在住の飯田氏は戸崎氏の家臣の末裔と伝える。文禄四年(1595)佐竹氏は飯岡兵部少輔を城に配したが、慶長七年(1602)佐竹氏移封と共に廢城となつたといふ。

このほか戸崎城本丸より南西、川尻川低地を望む山崎には局地的に大規模な堀と土塁を伴う区画が見られ、下河辺氏関係の城郭とする説もある(『出島村史』 1971)が、位置的に戸崎城の外城とみるのが妥当と考えられる。

戸崎城周辺には數箇所に城郭関連施設と推定される遺構がある。最も大規模なものは松学寺(460)で、寺の周囲に大規模な空堀と上塁を巡らし、特に北方や西方からの防御を意識した構造となっている。牧洞山松学寺(曹洞宗)は、間山伝によれば、「湘州小田原海藏寺末 永正元年(1504)己丑首尾張守義則 横堂水範禪師を請じて開創す 畠來法燈連禪 水平の祖風を傳ふ 舊御印地十石 来寺七ヶ寺 畠山直末常州田伏寅傳寺 牛渡寶昌寺」とある。また永正四年(1507)横堂永範和尚によつ

て創立されたとするものと、明応二年(1493)とするものがあり、永正四年は模堂水範和尚の示寂の年とも言われ、創立年代は確定しがたい。いずれにしても戦国時代に戸崎城主一族の菩提所として創立されたと考えられ、築城時期に示唆を与える。この寺の地蔵菩薩立像(腹帶地蔵)は昭和33年県指定文化財。創立当時より安置されていたもので、一本木彫寄木造りで高さ99cmをばかり、平安末の作とされるが、室町期の倣古仏とみる見解もある。

八田駿跡(牛渡八田)は八田集落を前に霞ヶ浦を一望できる高台に方形の郭が複数連接している。また東側の郭の最高所は前方後円墳を改造したものである。

室町時代の初め小田氏八代孝朝(1337~1414)が構えた居館と伝え、牛渡の地は、小田氏五代宗知(1259~1306)が法名を「牛渡寺殿慶尊覺大居士」とし牛渡寺を菩提寺としている。また古より水陸交通の要地であり、南北朝争乱当時小田氏は行方・稻敷の勢力に対する水上防衛の拠点として重要視していたものであろう。

孝朝は弘和年中(1381~1383)小山義政の乱で活躍し、元中年中(1384~1386)には義政の子若丸を擁し子の五郎と岩間離台山に挺って足利氏に抗した降った。「小田氏系譜」によれば晩年入道し「忠尊」を号したが、応永二十一年(1414)に没し牛渡邑宝昌寺に葬られたとある。宝昌寺には小田孝朝の供養塔と伝える九重塔場が現存し、花崗岩製で塔高3.5mを測り台座に梵字と銘文の痕跡がある。昭和四十四年に県文化財に指定された。

(2)港湾聚落

高賀津・柏崎津・田伏・志戸崎・八田・崎浜は現在も船泊まりがあり、これらは近世以前に遡ると考えられ中世港湾の存在が推定される。

菱川河口の北岸柏崎は霞ヶ浦に突出する岬をなし水運に恵まれた位置にある。富士見塚古墳群(070)や柏崎塚群(072)の麓にあたる瓦屋・清水遺跡(073)や先浜遺跡(077)では、大量の近世陶磁器とともに瀬戸白釉窯跡様式(14世紀末~15世紀前半)の灰釉三足盤・瓶子、瀬戸大窯期の鉄釉小皿、中世瓦質火鉢の破片などが採集され、永楽鉢等の中世鏡貨も出土している。南北朝時代の応安七年(1374)に香取神宮大権宮中臣長房が起草した「海夫注文」には柏崎津が記されており、採集された中世陶器や土器は中世柏崎津に関連する遺物とみられる。

(3)中世寺院(第16表)

廃寺となったものでは加茂の鍛冶屋廢寺(477)・深谷栖形の真珠院跡(376)が鎌倉時代の瓦類が採集される寺院跡として特筆される。

鍛冶屋廢寺(477)は加茂香取神社参道より東方の墓地周辺に位置し、中世~近世前期の五輪塔残骸が密集し、空風輪には高さ40cm程のものがあり、150cm級の中型五輪塔の存在が推定される。墓地の隣には中世陶磁器や土器、多量の鉄滓やワゴン羽口破片とともに鎌倉時代を主体とする大量的中世瓦が集められている。また墓地北西隅には層塔の部材がある。もともと墓地の東側畠地

中にあった古墳上に旧在し、古墳の削平に際して墓地に移築されたという。現在ばらばらになっているが、本来は五重層塔程度とみられ三段分の笠が残る。戸崎城落城(1573~77)当時の城主、戸崎大膳の墓塔と伝承していたが、年代は16世紀後半より遡るとみられ、小田孝朝の四男で15世紀頃加茂村に居住したと伝える孫四郎の墓塔である可能性も考えられる。なお深谷法藏寺の廻門徒にあたる加茂如来寺増福院は鍛冶原庵寺の墓地北側の畠地に位置する小堂であったが、明治期に荒廃し現在は跡形もない。鍛冶屋魔寺は散布地が非常に狭く、小型瓦が多い点から増福院の前身となる小堂であったと考えられるが、13世紀中葉~14世紀初め頃に位置付けられるつくば市三村山極楽寺と同様、同系の中世瓦類を複数型式そなえ、規模に似合わず寺格の高さが推定され、石塔・鍛冶工房を併せ古墳隣接地に占地する点もあわせ、加茂香取神社の神宮寺にあたる律宗寺院址の可能性が強いと考えられる。

深谷真珠院(376)は一の瀬川支流の湧水ある谷地水田に面した台地縁に立地する無住の小堂である。山号を熊野山真珠院長福寺といい深谷法藏寺の門徒で、明利四年(1767)下野郡塙山長福寺の正應上人によって開かれた八十八ヶ所靈場の五十八番札所となる(寺嶋誠齋1994)。明治期に本堂が民家として移築される以前は裏山の竹藪および山林内に位置していたようで、付近には13世紀後半に遡る中世瓦が僅かに散布しているほか、境内周辺には南北朝期以降の石造層塔・大型五輪塔残骸が集中し、北側の坂上には古式の宝印塔部材がある。中世以来堂宇が存在したと推定される。堂内には弘法大師像とともに像高150cm程の木彫彩色の孝養聖帝太子像が祀られ、桜姫の伝説がある。蘇我入鹿の襲撃を受けて山背大兄王一族は自殺し、その御子は東国へと落ち延びた。恋人の桜姫は侍女のお楓を連れてあとを追つた。しかし疲れでこの地に庵を構えてとどまり、姫は聖帝太子像を刻んだ。しかし完成とともに息をひきとり、今際のきわに、「私は達は脚が弱いから御子に逢うことができなかつた。人々が、丈夫な脚で長生きするように、太子の脚の下へおあしお錢を入れて下さい」と言い残し、楓も姫の後を追うように没した。村人たちは二人を庵の西に葬り、墓には桜と楓の木を植え、庵を守り太子像を本尊とし、足の下には錢を入れて、真珠院と名付けたという。また真珠院から谷津を隔てた東側の僧形4遺跡(378)には、部分的に土壘や塚と思われる構築物が遺されており、真珠院に伴う居館跡が存在する可能性も遺る。

鍛冶屋魔寺・真珠院跡の出土瓦については後述する。

今日も法灯を伝える寺院で、中世以来の仏像や什宝を伝え、境内にもその時期の遺構を残すものには深谷法藏寺(338)・加茂南円寺などがある。

深谷の法藏寺(338)は鎌倉中期の木造十一面觀音菩薩座像(県指定文化財)を本尊とし、鎌倉末期の密教法具である銅寶珠杵(県指定文化財)を伝世する。境内には中世

石塔が密集し、中世かわらけや陶磁器などが散布している。隣接する小林家の敷地からは多量の鐵滓が出土するほか、平安末頃の小金銅仏が出土している。

加茂の五智山南円寺は大字加茂にある真言宗の寺で鍛冶屋魔寺の東方に位置し、境内周辺は複数遺跡(490)である。応永元年(1394)祐尊大和尚によって開山され、当初加茂小字田宿台の通称「万歳寺」に旧在したとされる。往時は小田朝常院・真言宗四大寺の一つに数えられ、鐘楼・朱印地十石を有し千手院・延命院・法藏寺・龍円寺など十數カ寺の末寺を有していた(寺嶋誠齋 1994)。什宝には鎌倉中期に遡る秀逸な蓮華孔雀紋唐があるほか、境内には室町~戦国期の筑波山花崗岩製の石塔が集中して見られる。石塔類には多宝塔形塔など特殊なものも含まれており、類例は新治村藤沢城周辺などに見られる。小田氏やその家臣によって造られたものであろう。

(4)中世塚(第14表)

中世に塚として再利用されたと見られる古墳に風源古墳群第5号墳(043-006)、深谷愛宕塚古墳群(047)、巖壁古墳(357)、八幡神社古墳(456)、戸崎古墳群第3号墳(465-003)、車塚古墳(488)と立木山土器(499)などがある。

富士見塚古群第1号墳(070-001)の発掘では、後円墳頂地下から水楽鏡を主体とする古鏡や、戦国期頃の灯明皿、経石が出土している。かつて墳丘上には稻荷社が祀られ、参道も設けられており、縁日には賑わいを見せたのがち柏崎に移転したという(山口 1992)。

戸崎古墳群第3号墳(465-003)は埴輪を伴う6世紀代の古墳だが、墳丘の表面には14世紀代を中心とする古式の花尚岩製五輪塔の部材が集積され、隙間から藏骨器片とおぼしき鎌倉期の常滑片が採取された。付近の畑には火葬骨片も散乱し、古墳の墳丘に寄生する中世墳墓群とを考えられる。土地所有者によれば、この古墳は「塙塚」と呼ばれ、土浦と出島の境界塚であったという。ここ戸崎原は戸崎城の南側に位置する宿から塙・八坂社を隔てた西方にあたり、付近からは鉄滓も採集されることから、所謂「無縁」の空間であったと目される。

立木山土器(499)は、古墳終末期の大型円墳と推定される車塚古墳(498)周辺に巡らされた土壠である。立木瓶音は霞ヶ浦町域の三觀音の一つに数えられ、一本造りの古仏であるが、火災で炭化しているため、室町ないしそれ以前の作と推定されるのみである。水源池をのぞむ境内には室町~戦国期を主体とする膨大な量の筑波山花崗岩製の石塔部材が積み重ねられており、五輪塔・宝篋印塔・六地藏宝幢・層塔・宝塔などからなる。当地は供仰と水源が一体化した空間であり、非常時に人々が逃げ込むための避難所もしくは障地的な性格が推定される。

この立木山から谷津を挟んだ南側の加茂地区も、集落の北側に東西に台地を分断する堀切が連続し、複数の民家が堀を共有して防御的な空間を構成していたと推定される。おそらく有力農民層が一揆結合して集落を形成していたことを示すものであろう。なお茨城県内では下総

域にあたる猿島台地などで近世村落の微小地域単位である「坪」(木村 1994)、これに先行し中世後期から近世初頭に遡る「構」(原田 1999)の存在が指摘されており、当地においても、そうした微小地域単位の解明が進めば、これらの遺構の位置付けもより鮮明なものとなるだろう。

3. 遺 物

(1) 舟載陶磁器

舟載陶磁器とみられるものは、町内の27遺跡で確認されている。内訳は12世紀の白磁玉縁口縁碗(IV 1 a類)、同安窯系青磁瓶(1 b類)、龍泉窯系青磁刻花文碗(1 2 a・4 a類)、13~14世紀の竜泉窯系青磁蓮弁文碗(1 5 b類)、2 2類)・青磁筒花生・青白磁口ハケ皿(皿IV 1 c類)、褐釉陶器壺、15~16世紀の竜泉窯系青磁刻頭蓮弁紋丸碗・殘花皿、16世紀の景德鎮系青花皿などよりなるが、細片が多く全容の窺えるものは少ない。

平安末~鎌倉前期の舟載陶磁器は、坂の坂大宮神社周辺の西方2遺跡(305)で同安窯系青磁が、一ノ瀬川水系では大和田の梨の木遺跡(214)で白磁玉縁II様、深谷下原2遺跡(339)で竜泉窯系青磁刻花文碗・白磁玉縁II縁皿、南岸および川尻川流域では半斗波では八田館北方の小山遺跡(403)で白磁玉縁口鉢碗、戸崎では戸崎城(466)で同安窯系青磁、土浦市にまたがる養老田遺跡(448)で白磁玉縁口縁碗が採集されている。

この時期の舟載陶磁器は、安房郷の領域には未確認だが、佐賀郡1ヶ所、大津郷5ヶ所が確認される。同様な陶磁器類は霞ヶ浦町の西に隣接する十浦市沖宿人ノ上遺跡でもみつかっており、白磁玉縁口縁碗、同安窯系青磁碗、初期の竜泉窯系青磁に加え、同時期の涅美大甕、常滑三筋壺、糸切かわらけなどがアセンブリッジを構成している(上浦市教育委員会 1997)。当遺跡は南野牧大津郷の拠点遺跡とみられ、霞ヶ浦町域の同時期の遺跡の大部分も、その延長上に遡る南野牧関連遺跡と考えられる。なお戸崎城例のみは、本丸で16世紀のかわらけ等と採集された事から、戦国期に「珠光青磁」として茶器に用いられた骨董品の可能性が高い。

鎌倉~南北朝期の舟載陶磁器は、菱木川水系では安食地区的田子内遺跡(056)で竜泉窯青磁蓮弁紋碗、長町1遺跡(128)で竜泉窯青磁蓮弁紋碗、下宿尻2遺跡(139)で青磁筒花生の肩部片、深谷地区では御船鹿島神社遺跡(330)で竜泉窯系青磁・青白磁口ハケ皿、戸崎城(466)で竜泉窯系青磁筒花生が採集されている。この段階は小出氏が南野牧へと進出し、南野庄の開発を進めたとされる時期と一致する。特に安食館に近い田子内遺跡の例は、伝承する13世紀の築城と接近するため注目される。また戸崎城例は前記と同じく戦国期に骨董品として貢献され床の脚を飾っていたと考えられる。

なお深谷下原の鹿島神社、御船の鹿島神社、坂の大宮神社など地域の鎮守社の隣接地でしばしば中世前期の資

易陶磁器が採集されることは、これらの神社の勅請が中世ないしそれ以前に遡ることを示唆する一方、付近に莊園領主居館の存在を暗示する。中世の神社は、土地開発に際して勅請される場合があるほか、土地開発領主の墓が祭壇として祀られ、神社となる例があるためである。

室町期の舟載陶磁器では、一ノ瀬川南岸にあたるナシ久保遺跡(385)で竜泉窯系青磁棱花皿・要害館(297)で竜泉窯系青磁、その北方の大王越遺跡(241)で竜泉窯系青磁劍彫弁文碗、深谷の川島家駄敷地(345)で白磁輪花皿、川尻川流域、戸崎の養老田遺跡(448)で竜泉窯系青磁輪花皿が採集されている。いずれも城館や居館およびその関連遺跡とみられる。

戦国期の舟載陶磁器では、菱木川流域では宍倉城(04)で景徳鎮窯系の青花皿、一ノ瀬川流域では人和田城東方の和田山遺跡(213)で青花皿、南岸の高谷新田遺跡(389)でも中国青花とおもわれるもの(15世紀)、川尻川流域の戸崎城(466)でも青花皿が採集され、やはり城館・居館およびその関連遺跡にみられる。

(2) 国産陶器

中世の国産陶器では12世紀の涅美や常滑の甕・三筋壺、13~14世紀の常滑盤玉形壺、12~16世紀の常滑大甕、こね鉢、13~15世紀の瀬戸灰釉梅瓶、15世紀、古窯戸齊窯後期の縁釉と総称される灰釉三足盤・おろし皿・平碗・小杯、16世紀、瀬戸大窯の鉄釉檜桶・灰釉皿・天目茶碗・鉄釉茶入・根母懐茶壺などがみられる。

平安末~鎌倉はじめの国産陶器は、鹿島神社遺跡(134)で涅美、宮尻1遺跡(135)で常滑・菱木川水系の西成井宮尻2遺跡(136)で、涅美・常滑I b頃頃の巻口縁が採集されている。一ノ瀬川流域では深谷の八坂神社北遺跡(336)で常滑三筋壺、坂大宮神社周辺の西方2遺跡(305)で常滑片甕、南岸および川尻川流域では八幡貝塚(503)でも涅美とおぼしき壺片がみられる。このうち八坂神社北遺跡では、神社北方の藪中に低く細長い土壘・塚が東西2町、南北1町ほどの範囲で残っており、その北東の畑地の貝中に茶樹の生垣・四本忌竹に勧請柵をかけたものを巡らし、柵が廢されているが、その直下の円錐集石に中世陶器片を交えており、中世土地開発領主の集石墓を神域として祀っているのではないかと想像される。

鎌倉~南北朝期の国産陶器は、日常容器のほか、石造五輪塔や集石墓に伴う火葬藏骨器にしばしば用いられており、霞ヶ浦沿岸では上造町・味塚堀の墳丘より常滑壺や瀬戸灰釉瓶、小川町天神中臣墓で常滑甕および在地土器窯(小川町 2000)、石岡市安寄山3号墳(海老沢 1983)や府中城で常滑三筋壺、土浦市般若寺等地土器窯(上浦市教育委員会 1987)が藏骨器に使用されており、霞ヶ浦町域では戸崎3号墳(465-003)で藏骨器とおぼしき13世紀の常滑甕片や14世紀の五輪塔部材・火葬骨片がみられ、加茂の飯沼塚原塚(477)でも鎌倉後期の常滑甕片や須恵器在地土器とおぼしき壺片が採集されており、やはり付近に密集する五輪塔に伴う藏骨器片である可能

性が高い。平三坊貝塚(436)の一角にあたる宝昌寺境内には、小田孝朝(1414没)の墓塔と伝える櫛塔、五輪塔、宝瓶印塔、一石五輪塔が残されており、付近からは14～15世紀頃の常滑瓶片が採取され、中世石塔に伴う火葬骨器と推定される。このほか霞ヶ浦町郷土資料館には、出土土地不詳の常滑・崩壊の算盤玉形蓋の完形品2点が保管されている。同形の壺は岩瀬町門毛経塚やつくば市三村山極樂寺五輪塔で火葬骨器用に用いられていることから、本例も中世の火葬骨器とみてよいだろう。

集落に伴う陶器類には要害船北方の大工跡遺跡で瀬戸灰釉梅瓶、松本遺跡で多量の常滑瓶片や灰釉梅瓶片が採集されている。

このほか注目すべきものとして、一ノ瀬川南岸、牛渡のナシ久保遺跡(385)で船載陶器や14世紀頃の常滑壺とともに採集された須恵系在地器の擂鉢片(14～15世紀)が挙げられる。硬質灰色の焼成で内面は摩耗が進み、武藏や上野城の製品が収入されたと推定される。

さらに八田館(114)の南側から出土した瀬戸灰釉梅瓶は、口縁から肩部にかけてを欠損しているが、表面に椿や藤手唐草紋のスタンプ文を全面に押捺したもので、内部には水差通宝を中心とする梵文が入っていた。この梅瓶は神奈川県鎌倉市多宝寺跡やぐらで出土した鉢形梅瓶や埼玉県入間郡毛呂山町崇徳寺跡の延慶年板碑の根元から出土した灰釉梅瓶の戴骨器と酷似し、13世紀末～14世紀初頭の製品とみられるが、内部に入っていた銅の組成比が示す16世紀前半を前後する年代(石川 2000)とはかなり乖離がある。おそらく数百年にわたって伝世したのち軽用されたものであろう。

室町期の国産陶器では、菱木川流域では宍倉の峯後遺跡(003)で瀬戸窯窯窓後期の灰釉三足盤、柏崎の瓦谷・清水遺跡(073)で瀬戸窯窯窓後期の灰釉綠釉小杯、先浜遺跡(077)で同様の小杯や瓶子、一ノ瀬川流域では深谷の八坂神社北遺跡(336)で瀬戸灰釉綠釉小杯、牛渡の細内遺跡(399)では灰釉卸皿、川尻川流域では加茂の櫻前遺跡で灰釉瓶子が採集されている。14世紀末から15世紀前半にかけての瀬戸窯後期様式の擂鉢・足盤・半碗・綠釉小杯、卸皿、上げ底の瓶子等の陶器は、霞ヶ浦町域の各所から出土しているが、総じて少量であり、この時期の拠点的な遺跡の存在は未確認である。ただ柏崎津に近い瓦谷清水遺跡・先浜遺跡などで採集されているところから、津を介して流入しているとみられる。

戦国期の国産陶器では、安食館(051)内の北ノ坊で常滑瓶片、宍倉城(044)で瀬戸大窯祖母娘茶庵、田代城(246)内の實伝寺裏墓地で常滑大甕、坂の要害館(297)付近ではほぼ完形の瀬戸大甕・崩壊の帶花スタンプ紋皿が採集されているが、出土遺跡・点数とも窯窓後期に比べ減少した感がある。東海地方を襲った明応四年(1496)大津波は紀伊半島から房總半島にかけての太平洋沿岸を襲い、続く永正地震(1510)の津波とあわせ港湾に壊滅的な被害をもたらしたとされている(矢田 1996・1998)。大窓前

期の製品が少ないので、流通網の破壊も一要因として考えられる。

(3) 中世土器

常陸地域の中でも、特に霞ヶ浦西岸から筑波山麓にかけては、12世紀までは古代のロクロ土師器の系譜をひく糸切底の土師皿が用いられており、石岡市外城遺跡(石岡市教育委員会 1986)や土浦市沖宿入ノ上遺跡(土浦市遺跡調査会 1997)で一括出土が見られるが、13世紀に入ると手づくね丸底かわらけが卓越し、関東の諸地域で丸底かわらけが殆どみられなくなった15世紀の前半頃まで遺存する特異な展開を見せる(桃崎 1999)。手づくね丸底かわらけはつくば市小田城、柴崎遺跡、日向磨寺、三村山極樂寺、小泉館、新治村田宮城など小田氏の領域に集中するが、岩瀬町門毛経塚、明野町赤浜遺跡、霞ヶ崎市屋代B遺跡など鎌倉～南北朝期の段階ではある程度の拡がりを見せていている。一方15世紀以降、かわらけ以外の器種が極めて限定されていた土器類に変化が生じ、ロクロ糸切のかわらけが再び主流となり、火鉢のほかにも在地土器類が充実し、擂鉢と内耳土鍋が新たな器種として定着する。この内耳十鉈は金葉母を多量に含む軟質の焼成で、時折×字のペラガキを有するものを交えている(白根 1996)。その供給圏はひたちなか市沢田遺跡から船和町小堤城の範囲に及んでおり、佐土の特徴から真壁町源法寺周辺で生産されたとみられている。16世紀には伝かだか茶釜形上器(比毛 2000)が見られるほか、直立する口縁の十鉈が火消し壺や埋蔵鏡の容器として用いられる(上高津貝塚ふるさと歴史の広場 1997)。また内耳土鍋から浅手の焙烙が派生し、近世の内耳焙烙へとつながっていく(岡角 1996、白田 1996)。

鎌倉～室町期の手づくね丸底かわらけは、平三坊貝塚(436)のある牛渡筑波神社境内で採集されている。この神社は806年の創建を伝え、その年代は信するに足りないが、隣接する宝昌寺の中世石塔の年代からみて、神社境内が中世の居館跡である可能性も考えられる。大正大学の調査時に町域内で丸底かわらけが採集されており、当地に小田氏が進出した時期に造られたものであろう。

確実に15世紀以前に位置付けられる土器類は良好な例がないが、松本遺跡(502)南側の中世五輪塔群や常滑窯・瀬戸瓶子片などと共に採集された外面上に巴文のスタンプがある三脚の瓦質火鉢、銀治屋庵寺で採集されたロクロ糸切かわらけ、内耳上鍋、瓦質火鉢、須恵系在地器壺などはこの時期のものを含んでいるとみられる。

戦国期と考えられる土器では、一ノ瀬川下流北岸の坂の要害館(297)や深谷の法藏寺境内遺跡(338)、川尻川流域の戸崎城(166)本丸でやや歪つなロクロ糸切かわらけが採集されており、要害館では瀬戸大窯窓の灰釉皿、法藏寺では15～16世紀の五輪塔、戸崎城は内耳上鍋片や景徳鎮系の青花皿とともにみいだされていることから、16世紀代のものと考えられる。

また富士見塚古墳(070-001)の発掘調査では、後円部

墳頂地下から永楽鉄一括や経石と共にかわらけが二個合わせ口にした状態で出土している(山口 1992)。共伴遺物や口縁部が玉縁状化しつつあるかわらけの形態から判断して、16世紀後半~17世紀初め頃のものと考えられる。また、ノ瀬川水系にある澤谷八千代遺跡の発掘調査では中世末頃の瓦質火鉢が出土し、調査区内からは菊花スタンプのある常滑窯片や中世の地下式窯も検出されている(千葉 1995・1996)。

(4)中世瓦

中世瓦は加茂銀治屋廃寺と深谷真珠院で採集されており、小田氏の菩提所で鎌倉時代に忍性が止住して西大寺流真言律宗の施主点となったつくば市小田の三村山極楽寺と同范および同系の瓦を含む点が特筆される。

加茂の銀治屋廃寺(477)では小型の軒丸瓦・軒半瓦や鬼瓦・平瓦類が採集されている。

軒丸瓦は小巴文園三巴文、素縁三巴紋、連珠團頭部連続三巴文の3種からなり、このうち小巴文園三巴文は高井分類(高井 1979)の巴文軒丸瓦a類にあたり、つくば市三村山極楽寺(山崎 1993)、つくば市前峯廃寺、栃木県益子町の尾羽寺地蔵院に同范瓦がみられる。前2者は小田氏の勢力圏、益子地蔵院は小田氏の本家である下野宇都宮氏の菩提所である。また僅かに文様構成が異なる同紋瓦は栃木県利市寺の寶光寺にみられ、この軒丸瓦とセットをなす逆巴彫頭紋軒平瓦は凸面に「文永二年(1265)三月日」銘が押しされており、1250~60年代頃に製作されたとみられ、忍性の三村山止住(1252~1261)ならばに正嘉二(1258)年銘平瓦とのセット関係が推定されている。また素縁三巴紋軒丸瓦と三村山極楽寺に同范瓦が存在する可能性が高い。軒平瓦はいずれも小型で連珠文系3種以上、蓮華唐草文系3種よりも、連珠紋は前峯廃寺のものに、蓮華唐草紋のものは三村山の所用瓦と類似するが他の寺院との同范瓦は現在確認されていない。このほか鬼瓦、梵字(毘沙門天種子?)をヘラ彫きした丸瓦がみられるほか、平瓦の一部は小田氏の外護のもと元弘二年(1331)~建武二年(1335)頃創建した新治村法雲寺の平瓦と細かい格子目のパターンが類似するため、鎌倉末頃まで降ると考えられる。銀治屋廃寺は散布地が非常に狭く、小型の瓦が多い点からすれば増福院の前身となる小堂であった可能性が考えられるが、三村山系の蓮華唐草文系軒平瓦を複数型式含むだけでなく、それらが本遺跡にのみ見いだされる型式である点が特異であり、規模に似合わず寺格の高さが推定される。以上より加茂銀治屋廃寺は、13世紀中葉から14世紀前半にかけて、小田氏一門によって作られた真言律宗寺院跡で、規模からみて居館に伴う持仏堂もしくは加茂香取神社の神宮寺の可能性が高いと考えられる。なお勘探する南円寺(1394創建)には鎌倉中期の蓮華唐草文磬が伝世しており、銀治屋廃寺創建時の所用磬であった可能性も考えられる。

銀治屋廃寺の東方2kmに位置する真珠院跡(376)では軒丸瓦、平瓦の破片が採集されている。小巴彫軒丸瓦は

高井分類(高井 1979)の巴文軒丸瓦a'類、文様は珠文・三巴文縁右廻り三巴文で面径13cmを測る。協和町小栗寺山遺跡(瀬谷 1986)・下館市川澄くまんどう遺跡(高井 1979)と同文の手持巴文軒丸瓦である。かなり摩耗した范を用いて造られたことが推測される。また三村山極楽寺では、この軒丸瓦と同じ文様を組み込んだ鬼板が採集されている。さらに類似する文様構成の軒丸瓦が栃木県小山市の長福城跡で出土しており、「長福寺」「弘安二」(1279)銘の平瓦を共伴しており、1270年代を前後する年代が考えられる(大澤ほか 1997)。

真珠院の平瓦は凸面に厚い離れ砂を付着させ格子目叩きを施したもので焼成は脆弱である。下館市川澄くまんどう採集の平瓦と類似する。

なお真珠院は山号を熊野山真珠院長福寺という。下館市川澄くまんどう遺跡は、常陸平氏小栗一族の川澄氏にかかる寺院跡とみられ、「くまんどう」は熊野堂の転訛という。瓦とともに千手観音(熊野那智社本地仏)・阿弥陀如来(熊野本宮本地仏)の懸仏が出土していることからも、熊野三山を祀る堂であったと推定される。小栗寺山遺跡は三村山極楽寺の同范瓦が出土しており、律宗寺院と見られるが、ここ協和町小栗の地は、熊野信仰と密接に結びついた小栗刑官伝承の発祥の地である。また三村山極楽寺・鎌倉極楽寺・金沢称名寺は、境内に熊野社を勧請していたことが推定されている。よってこれらの同范瓦を出土した寺院跡は、いずれも熊野信仰や律宗との関係を示している。霞ヶ浦町では坂権現堂などに熊野本地仏とみられる平安末~鎌倉期の懸仏が3~4体遺されている(霞ヶ浦町郷土資料館 2000)こととあわせ、真珠院も熊野御師の止住する律宗系の堂宇であった可能性が高いと考えられる。

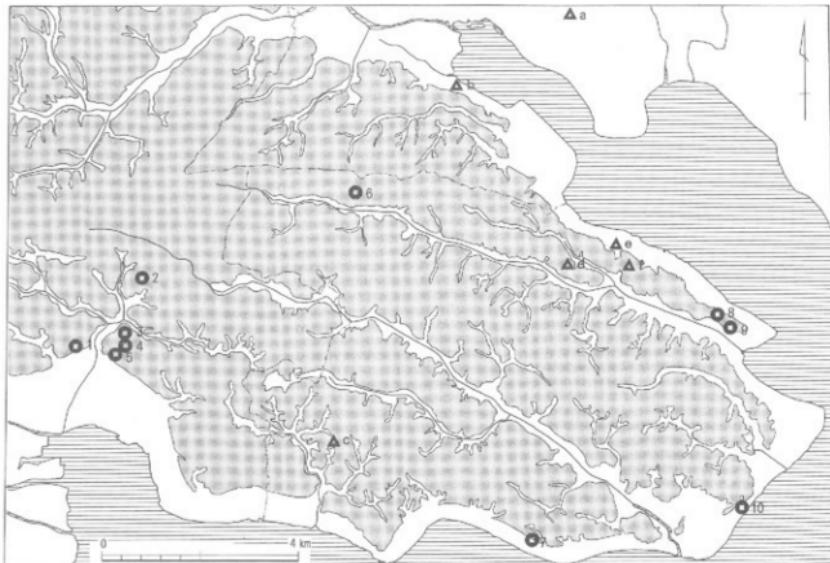
(5)銅鏡

土産人を中心とする茨城県南部地域は、全国的に見ても突出して埋蔵鏡の発見例が多い地域であり、近年注目を集めている。

永享七年(1435)に鎌倉府に提出された『常陸国富裕仁等注文』は、鹿島神宮の造営費捻出に悩んだ鎌倉府が、鹿島郡宮本郷に課税しようとして抵抗にあい、最後には課税可能な富裕人のリストをつくって提出させたものである。図23は出土鏡の分布を●、『富裕仁等注文』に記載された都村を△で示したもので、出土・埋蔵鏡は菱木川流域や土浦入奥に注ぐ境川流域に集中する。一方富裕仁は川尻川、菱木川、恋瀬川流域などに居住している。

霞ヶ浦町域では宍倉郷では聖道一人似名有押知行地の野田達江守、安食郷では梶原五郎知行地の佐次郎、梶原五郎家人知行地の井河掃部助、賀茂郷小田治部少輔知行地の總四郎があげられており、特に菱木川流域は両者がいずれも認められる地域で、宍倉郷と多聞寺道路(511)、安食郷と柏崎および富士見塚古墳群1号墳が対応する。

多聞寺遺跡(511)の所在する宍倉小学校附近は「多聞寺」の地名を残し五輪塔部材が散在することから中世寺



第23図 出島半島周辺の埋蔵鉄●と「常陸國富俗人等注文」(1435)の比定地▲

1. 土浦市木田会、2. 土浦市立会、3. 土浦市手原会、4. 土浦市手原会、5. 土浦市手原会、6. 兜小遣会 (兜美今会)、7. 牛渡八田船頭、8. 富士見塚古墳、
 9. 柏崎鐵道前、10. 赤堀鐵道前、11. 五草村上玉町、12. 石河鐵道前 (石岡市山川)、13. 箕尾鐵道前 (小山治鐵少輔前)、14. 加賀、
 d. 兜貴鐵井次駅名有隸 (野田道江守行, 先會)、e. 安東鐵井岸部駅 (横程五郎人前, 安富)、f. 安貴鐵井次駅 (横程五感知人前, 安富)

院址と考えられ、小学校の西側には谷津頭を塞き止めて構築された多聞寺池があり、中世に遡って築造された可能性も考えられる。昭和44年の造園作業中に地下数十cmから銭サシが発見され、800枚以上が現存しているが、本来は2~3倍あったという。沿どが中国銭で、銭種は唐の「開元通宝」(713~741)から明の洪武(1368~1398)・永樂(1403~1424)にわたっている。北宋銭が大部分で、二十数種あり、次に南宋のものが多い。一つの銭種では明の洪武・永樂兩銭の量が多い。金の「正隆元宝」や遼の「聖宋元宝」も少量である。

富士見塚古墳群1号墳(070-001)では、後円頂墳地下から永樂通宝を主体とする銭50枚ほどが16~17世紀頃のかわらけとともに見つかっている(山口 1992)。また柏崎の道路改修でも永楽銭が出土したとされ、現在の瓦屋・清水遺跡(073)付近とみられる。いずれも柏崎津との関連が想起される。柏崎津は応安七年(1374)頃の「海大注文」に「かしわさきの津 小田兵部少輔入道知行分」とあり、慶長七年(1602)佐竹氏移封後は一時天領となり、慶長十一年(1606)の年貢割付状(田制考証)に「宍倉之内柏崎村牛矢可納御年貢割付之事 一高百九拾三石壱斗弐升 此取米六拾五石六斗六升壱合 此わけ 米四拾壱石壱斗六升五合 永樂四貫九百文 右之米銭霜月廿日を切、可有皆済、如此相定於無沙汰、謹責を以可申付者也、

仍如件(慶長十一年)午 九月廿八日 伊奈備前守(印判花押)名主「百姓巾」とあり、近世初頭においても寛永通宝流布まで永楽銭が盛んに流通していた状況が窺え、富士見塚出土銭の年代に示唆を与える。

田伏からも宋銭が出土しているほか志戸崎の揚水機場付近の水路工事の際地下約1mのところに開元通宝を含む宋銭四種類20~30枚が発見されている(出島村史編纂委員会 1971)。これらも津との関係が考えられよう。

牛渡八田船頭(414)では、南東の崖中腹から13世紀末頃の古瀬戸の瓶子に入れられた約2000~3000枚の銭が発見されている。そのうち246枚が調査されており、永樂通宝が最新銭として確認された。このうち永樂銭は36枚で14.6%を占め、その構成比から埋納は16世紀前半から以降と推定されている(石川 2000)。なお出土地点に隣接する八田地蔵堂には木造弘法大師座像(県指定文化財)があり、檜の寄木造で彩色を施す。座高33cm。脇内の銘文には「(梵字) 良歌當住持 弘法大師御影作者秀資願主 権大僧都良敬 檜那 阿闍梨勝範右天地長久御願圓滿 殊者 當寺繁昌所願 成就悉皆成就也 延徳元年(1489)十二月吉日 敬白 為弟子 勝尊 緣結也」とあり、住持良歌が天地の長久と当寺(寺名不詳)の繁昌を祈願したところまでたく成就したので、阿闍梨勝範が檀那となり秀資が製作に当たり延徳元年(1489)に完成し供養

したことが知られる(昭和四十四年県指定文化財)。すると堀藏鏡や太子像は、八田地蔵堂が中世の牛津津を背景として繁榮していた15世紀末~16世紀初頭に八田館ないし城下の有力者によって残されたと推定される。

(桃崎祐輔)

引用文献

- 阿久津久 1979 「日本城郭大系」
- 石川 功 2000 「茨城県内における水準通寶流済の傾向について」『上浦山立博物館紀要』第10号
- 石岡市教育委員会 1986 「外城灘跡発掘調査報告書」
- 海老沢稔 1983 「愛宕山山古墳群発掘調査報告書(愛宕山山古墳3号墳)」石岡市教育委員会
- 大澤伸悟・森藤千尋・伸山英樹 1997 「小山市長堀城跡出土「弘安二年 銘の瓦」」『鹿澤考古学』16
- 小川町教育委員会 2000 「小川町埋蔵文化財分布地図」
- 黒澤彰哉・千葉隆司 1997 「城ヶ浦の金剛佛と悲仏」『茨城県考古学協会誌』第九号 茨城県考古学協会
- 小丸俊雄 1979 「小出氏十五代~豪族四百年の興亡ー」上・下巻 茨城春秋
- 鈴木公綱 1999 「出土鐵貨の研究」東京大学出版会
- 黒谷昌良ほか 1986 「丘塚古墳群 寺山古墳群 裏山古墳群」茨城県 協和町文化財調査報告書 協和町
- 千葉隆司 1995 「八千代道跡中間報告」
- 寺崎誠彦 1994 「廿一、法藏寺『土浦史論考』第三巻小田氏編 土浦市教育委員会
- 寺崎誠彦 1994 「九、南園寺『土浦史論考』第三巻小田氏編 土浦市教育委員会
- 桃崎祐修 1971 「山島村史」山島村教育委員会
- 大正大学考古学研究会 1985 「一茨城県出島平島における考古学的調査報告」『物語考古』第4号
- 白田正子 1998 「茨城県における中世末から近世にかけての土師質内耳土器について つくば市古墳教遺跡の出土例を中心」『研究ノート』7号 茨城県教育財團
- 桃崎君男・桃崎祐輔 1995 「常陸南部における中世瓦の検討-新資料の紹介を中心として-」『茨城県考古占』第17号
- 比毛君男 2000 「山内遺跡の中世土器-その年代的検討-」『玉里村立史料館報』Vol.5
- 桃崎祐輔・横田石男 1997 「中世の露ヶ浦と律京-よみがえる仏教文化の型地」上浦市立博物館第18回特別展
- 高井禪二郎 1979 「常陸・下総の中世瓦研究」『茨城県史研究』第43号
- 桃崎祐輔 1999 「常陸地域の中世陶磁器と」;都・中世ひとのくらしどうつかわ-「焼き物に見る中世の世界-県内出土の土器・陶磁器を中心にして-」上高津貝冢のあるさと歴史の広場
- 桃崎祐輔 2000 「霞ヶ浦沿岸に遺る金工・仏具・中世常陸の信仰と造形-」『折りの進歩-中世霞ヶ浦の金工品-』霞ヶ浦町郷土資料館
- 両角まり 1996 「内耳器から猪俣へ-近世江戸在地系猪俣の成立-」『考古学研究』第42巻4号
- 矢田俊文 1996 「明治地図と港湾都市」『日本史研究』412号
- 矢田俊文 1998 「明治地図と太平洋導説」『民衆史研究』55号
- 山崎信二 1993 「三村山祇園寺出土の軒瓦の年代」『三村山祇園寺跡調査報告書-雅延閣委報告書-』つくば市教育委員会
- 山口行基 1992 「富士見坂古墳群 発掘調査報告書」出島村教育委員会

第13表 中世遺跡一覧(包囲地・集落部)

遺跡番号	遺跡名	時代・特徴		性別				備考	文献
		平安末～ 鎌倉初	新発	中国系 高麗	朝鮮(?)系 青磁・青花	中国系 高麗	土器 瓦器・鉢輪		
003	半蔵遺跡			○		○			
012	月ノ木遺跡			○					
013	上小原遺跡	○		○		○			
017	小原1号墳			○		●			
032	馬込平1号墳			○					
256	出子内古墳			○					
073	瓦谷・清水遺跡			○					
077	先須遺跡			○					
091	女川遺跡			○					
113	稻荷遺跡			○					
120	西ノ入山遺跡			○					
128	長町1号墳			○					
131	平松遺跡			○					
132	民命1号古墳			○					
134	龍馬井1号古墳			○					
135	曾原1号古墳			○					
136	曾原2号古墳			○					
139	下当尻1号古墳			○					
142	下深谷遺跡			○					
151	神明遺跡			○					
152	神明平塚跡			○					
169	下高野遺跡			○					
171	岩井平塚跡			○					
175	木ノ下遺跡			○					
180	宮泽河原根1号			○					
190	二ツ木1号平塚跡			○					
193	南郷本塚跡			○					
204	内坂遺跡			○					
206	建地城跡			○					
210	荒山遺跡			○					
313	利根谷遺跡			○					
314	船ノ木遺跡	○		○					
219	内山遺跡			○					
225	片桐遺跡			○					
226	丁大代1号遺跡			○					
227	男川遺跡			○					
241	天王城遺跡	○	○	○					
255	曳舟跡			○					
266	江代中野井塚			○					
281	坂大1号塚			○					
291	東原遺跡			○					
301	御越勇跡			○					
305	西方遺跡			○					
307	下石遺跡			○					
330	坂瀬跡			○					
334	想伝遺跡			○					
338	上野公園遺跡			○					
339	岩山林野敷井塚遺跡			○					
350	街懸山植物付遺跡			○					
383	赤崎1号古墳			○					
384	海苔谷1号古墳			○					
386	八幡1号古墳			○					
387	坂口1号古墳			○					
371	白井沢南前原塚			○					
372	白井沢2号古墳			○					
373	坂元1号古墳			○					
378	坂元4号古墳			○					
379	坂元5号古墳			○					
388	前久保遺跡			○					
389	ナシバ佐野跡			○					
390	高谷1号古墳			○					
391	高谷2号古墳			○					
395	細内遺跡			○					
401	サガナチ塚跡			○					
403	小山遺跡	○		○					
405	風ノ崎貝塚			○					
412	丁代2号古墳			○					
415	丘塚跡			○					
419	新川1号古墳			○					
422	分水遺跡			○					
423	ガリバ佐野跡			○					
424	谷ノ木遺跡			○					
479	御井遺跡			○					
433	穴井1号古墳			○					
434	寺子山遺跡			○					
436	平ノ山遺跡			○					
439	寺ノ山遺跡			○					
440	浅間山遺跡			○					
443	極原1号古墳			○					
446	東ノ山遺跡			○					

道跡番号	道跡名	時代・時期						備考	文献			
		平安末～	鎌倉	室町	戦国	中国産	高麗(○)	瀬戸美濃	土器			
	鎌倉初				白磁	青磁	雪花	青磁(●)	灰釉	灰釉	かわらけ	他
451	備北1番跡		○					●				
457	丹波市内通路			○								
459	守山1番跡			○								
464	丹波中山道跡	○		○								
470	京久保通路		○									
473	加茂平貝塚		○				●	○	○			
475	加茂台山通路			○								
478	根香山跡		○									
478	根香山跡		○									
480	小堀内通路		○									
486	立石山通路		○									
490	根香跡		○									
499	横手背台通路		○									
501	羽束通路		○									
502	松木通路	○	○	○	○	○						
503	加茂八幡貝塚		○	○	○	○						
507	鳴尾通路		○	○	○	○						
508	七里り通路		○	○	○	○						
511	多賀寺通路		○	○	○	○						

第14表 中世遺跡一覧（塚ほか）

道跡番号	道跡名	時代・時期						備考	文献			
		平安末～	鎌倉	室町	戦国	中国産	高麗(○)	瀬戸美濃	土器			
	鎌倉初				白磁	青磁	雪花	青磁(●)	灰釉	灰釉	かわらけ	他
943-005	風呂西古墳群5分塚											
970-001	萬代塙古墳群第1分塚		○				●		○		一宇一石鏡	
347-001	浮舟東古墳群2分塚										山口1992	
347-002	浮舟東古墳群3分塚											
357	風呂古墳		○									
456	八幡神社古墳		○					●			宝磐年等	
465-003	口崎古墳群第3分塚	○	○								火葬骨、石塔	

第15表 中世遺跡一覧（城館跡・居館跡）

道跡番号	道跡名	時代・時期						備考	文献			
		平安末～	鎌倉	室町	戦国	中国産	高麗(○)	瀬戸美濃	土器			
	鎌倉初				白磁	青磁	雪花	青磁(●)	灰釉	灰釉	かわらけ	他
144	六食貯蔵跡		○	○	○	○	●	○	○	○		
151	安佐新跡		○				●					
130	西成寺地蔵塚		○									
133	上野新村跡		○									
147	糸井前田跡		○									
208	大和前田跡		○									
346	出伏山跡		○				●					
290	坂井朝日山跡											
297	美濃守跡						●	○				
337	八坂神社通路		○				●	○			ルツボ、鉢達	
342	廣瀬跡		○				●	○				
345	用溝奈屋敷		○				●	○				
368	湯治瀬家屋敷跡		○				○				探査経	
414	八田跡		○	○	○	○						
466	芦輪寺跡	○	○	○	○	○	○	○	○	○	奈良県教委1986、阿久津1979	
472	平狭葉跡		○									
474	台山御跡		○									
504	柏木家屋敷跡		○	○			○					

第16表 中世遺跡一覧（寺院跡・寺駄跡）

道跡番号	道跡名	時代・時期						備考	文献			
		平安末～	鎌倉	室町	戦国	中国産	高麗(○)	瀬戸美濃	土器			
	鎌倉初				白磁	青磁	雪花	青磁(●)	灰釉	灰釉	かわらけ	他
338	法慶寺塙内通路										○ 小金原伝、統澤	
376	真珠院跡		○	○	○		●	○		○	黒澤、土重1997、都場、鈴崎1995	
460	松平寺通路		○	○	○							
477	前田山通路		○	○	○		●	○	○	○	瓦、瓦深、フイゴ三井、都場、鈴崎1996	

第17表 中世遺跡一覧（土器・埴）

道跡番号	道跡名	時代・時期						備考	文献			
		平安末～	鎌倉	室町	戦国	中国産	高麗(○)	瀬戸美濃	土器			
	鎌倉初				白磁	青磁	雪花	青磁(●)	灰釉	灰釉	かわらけ	他
179	神田塙											
224	柿ノ内土器		○									
262	猪谷土器		○	○							田伏城山海庭	
460	松平寺通路		○	○								
489	立赤山土器		○	○								

VII. 近世（江戸時代）

霞ヶ浦町内では合計350カ所の近世遺跡が確認されており、内訳は包蔵地263カ所、塚42カ所、屋敷6カ所、土壘6カ所で古墳や中世居館の再利用等も含まれる。第24図に●で示した遺跡数からも窺えるように、その分布は町域の全城に及び、現在山林となっている場所にも屋敷跡や塚と考えられる遺構が数多く認められるが、陶磁器類の散布は近世石造物の多い旧道沿いや墓地に集中し、それも半島の南岸部に集中して認められる。

霞ヶ浦町域における中世の終局と近世の開始は、地域社会の内的変質に因起する側面は乏しく、列島を覆った政治的変動の波が押し寄せて来るかたちをとる。

天正十八年(1590)、豊臣秀吉は小田原北条氏の討伐に際し、常陸南部の後北条系勢力の討伐を佐竹氏に命じた。佐竹氏は府中石岡の大株式を滅ぼし、流行地域の大株系豪族を一掃、牛堀に大台城を築いた。これに対し、下総を領地化していた徳川家康は霞ヶ浦南岸に臣家を配し佐竹氏への抑えとした。以後十年間、徳川氏と佐竹氏は霞ヶ浦を挟んで対峙したが、佐竹氏が秋田に転封(1602)されると、慶長十四年(1609)に成立した水戸藩が潮来周辺を領有し、沿岸には土浦藩、麻生藩、小見川藩、佐倉藩など諸代藩領が置かれた。

香取神宮・鹿島神宮の支配下にあった霞ヶ浦沿岸の津を拠点とする「海夫」集団は漁業・水運を特権として認められていたが、中世後期に領主の支配権が次第に強化され、寺社の統制が弱まるにつれて、津も次第に自営のため連合組織を形成、水城を津々の入会(共同利用地)として管理するようになった。これが「霞ヶ浦四十八津」で、その呼称は寛永二年(1625)文書を初見とする。

幕府は浮島村付近に専用漁場「筑和田御留川」を設け、また水戸藩も四十八津側の猛反対を押し切り、寛永二年(1625)、高浜入りに「玉里御留川」を設置した。これに倣って、湖畔を領有する上浦藩や麻生藩などにも、支配地から通上を徵収しようとする気運が高まり、四十八津側は危機感を強めた。そうした中で慶安三年(1650)、安中郷山内村(美浦村)の漁民が、領主への運上のため「あぐり網」(大型の地引網)を引いたというので、四十八津は幕府に訴えその禁止を勝ち取ったが、これを契機に從来の漁業慣行を成文化し、霞ヶ浦沿岸四十ヶ村四十八名が連判したのが「霞ヶ浦四十八津掲書」である。この掲書はその後、度々改定され津の数も変わった。内容は鮮魚の期間を冬春に限ること、禁制の網や新種の漁法は舟・網とも没収、懲罰への妨害の禁止、幕府御留川周辺の奪引禁止、津伴の寄合への出席の義務付け等で、条文に違反した時は处罚することになっていた。なおこの掲書はその後、享保十一年(1726)、寛保元年(1741)、文化十二年(1815)の3回にわたり補則され、寛保元年の「津々

寄合相連判之事」では霞ヶ浦で公儀の御城米船・大名の米船・商船が遭難したときは救助の船を出すこと、御留川以外はすべて入会のこと、新規の漁具や漁法の禁止などが記されている。

霞ヶ浦町域では最終的に川尻・平川・崎浜・田宿・赤塚・房中・八田・有賀・志戸崎・田伏・柏崎が四十八津連判に名を連ね(第24図)、漁撈活動は掲書の規制を受けているが、享保開港を境に領主に運上金を納め運上場とする「村極の漁場」が定められ、入会の原則が守られなくなった。土浦藩領であった霞ヶ浦町域では坂村・加茂村・有賀村に「入海交漁票運上場一ヶ所」の記述(酒井泉家文書県方集覽)が見え、村極めの漁場の存在が窺える。

1. 研究史

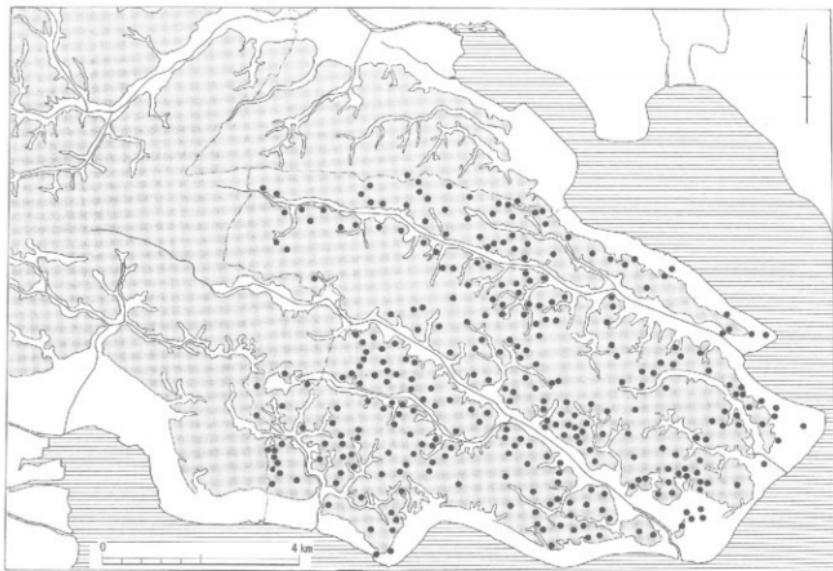
霞ヶ浦町における近世遺跡への着目は、「出島村史」における村内の一字一石経塙の概述や椎名家住宅をはじめとする近世屋敷地、シシ土手、空也念仏堂に伴う塚や近世・里塚への論及があり(豊崎 1971)、大正大学考古学研究会による踏査では近世遺物として経石や泥面子等が報告されたが遺物の概述にとどまり(大正大 1985)、近世遺跡や遺物を通じて歴史叙述を試みた例はほとんど見当たらない。こうした中で越田真太郎・千葉和史氏らによる霞ヶ浦町域の石造物調査ならびにその概要報告(越田・千葉 2001)は、考古資料として数量が多く、金石文資料としても内容が豊富な近世石造物の調査として特筆すべきものでありその全文の報告が得たれる。

一方村内で行なわれた発掘調査に際しては、小原遺跡(017)・坂遺跡(320)(茨城県教育財團 1999)、稗田遺跡(霞ヶ浦町教育委員会 1997)、八千代代遺跡(千葉1995)などで近世遺構・遺物が出土し、井戸やシシ土手の一部が調査されているが僅少である。

2. 遺跡と遺構

(1)近世屋敷(第22表)

霞ヶ浦町域には、深谷地区の地岸羽成氏屋敷(327)、八坂神社遺跡(337)、川島家屋敷(345)、田中屋敷地遺跡(336)、幕戸川島家屋敷地(368)、加茂地区の椎名家屋敷地(504)などが近世名主層の大規模な屋敷地として遺されている。霞ヶ浦町をはじめ土浦市脇谷地区やつくば市谷田部地区など茨城県南地域の各所では、戦国末から近世初頭に帰農した中世土豪層や有力農民層が、6~7軒を単位として本開発地に入植し開拓、地域を代表する近世名主クラスに成長し、現在も有力家系の本家として存続している例がしばしば見受けられる。こうした近世屋敷では、今日なお塙と里を巡らした大規模な邸宅を構え、付属する墓地に古い石塔群を伴うことが多い。それ



第24図 近世の遺跡

らの石塔の型式や散布している土器・陶磁器が示す年代は、17世紀ないしそれ以前への遷上を示しており、屋敷の成立年代を窺うことができる。

これらの代表が、椎名家屋敷地(504)内の椎名家住宅(加茂八幡)である。南北150メートル、東西125メートルの長方形の敷地内に建てられた茅葺寄棟造の民家で、桁行15.3メートル、梁間9.6メートルをはかる。昭和43年4月25日に国指定重要文化財となっている。椎名家は寛永(1620年代)以前からこの地に住み、代々「茂右衛門」を襲名した旧家で、近世には村役も務めた家柄である。住宅は昭和45~6年解体修理され、建立当時の状況に復元したもので、解体の際に、「ひろま」と「ざしき」境の差鶴居のほぞから「延宝元年きのえ延十二月三日此当主椎名茂右衛門三十七年」の墨書きが発見され、延宝2年(1674)12月3日の建立と判明した。この差鶴居は長押を一本から作り出している。形態からみれば直屋で、間取りは「ねま」が「ひろま」の後方へ張り出す変形広間型である。こうした形式は、千葉県北部から茨城県南部にかけて分布する特異な間取りで、椎名家はその典型である。現在のところ建立年代の判明する民家としては東日本最古とされている(豊崎 1971)。この椎名家住宅の東隣に椎名家の墓地があり、室町期の五輪塔の部材を含む中世の墓石が存在する。敷地内では肥前クラウンカ・民窯系焼鉢など18~19世紀の陶磁器が採集されている。周囲には土塁、堀が巡っており、敷地を一周する。

地岸羽成氏屋敷(327)(深谷地岸)は一ノ瀬川南岸の渡河地点に隣接する大規模な屋敷地で、堀と土塁をめぐらし、敷地の一角にある墓地には、17~18世紀の五輪塔や六地蔵宝幢がみられ、敷地内からは17世紀頃の常滑焼片が採集されている。また屋敷の北西には湧水池があり、水利を管理する立場にあったと考えられる。立地からみて一ノ瀬川の水運にも関与していたと推測される。

深谷川島家は小田氏の祖である八田知家に従って近江より移住したと伝える由緒ある家系で、鷹巣萬師堂付近の鷹巣館跡(342)がその元屋敷であると伝えている。元屋敷より谷津を隔てて東方に位置する川島家屋敷(345)は、門前に持仮堂をそなえ、付近に南北朝頭まで遡る大型五輪塔の空風輪や幕末の歌碑が見られる。屋敷地の東方の畠地からは戦国期に遡る天目茶碗や白磁の破片が採集されたこととあわせ、屋敷の形成は中世まで遡る可能性がある。屋敷内は後世の造成で旧状はとどめていないが、周囲の竹藪中に堀と土塁の痕跡をとどめ、門前部分の掘は溝水している。屋敷の東手前には17~18世紀の小型五輪塔が數十基並んだ当家の旧墓地があり、更に門前には寺属の般若屋をそなえ、近年まで水田中に大量の鉄滓が散乱していたという。門前の池はやはり地区的の水利を管理する立場にあったことを示している。

このほかにも深谷地区には幕戸川島家屋敷(368)、田中屋敷地遺跡(366)など、土塁や堀をともなう名主クラスの屋敷地が見られるほか、八坂神社遺跡(337)、加茂

の複数跡(490)などでは藪の中に土塁・堀・井戸が遺されている様子を見ることができる。

(2)シシ土手(第20表)

シシ土手(宍上手)とは「猪鹿土手」とも呼ばれ、猪や鹿などの食害から農作物を防護するために作られた長大な土塁である。現在備前山シシ土手(007)、庄衛門シシ土手(090)、島山シシ土手(091)、向シシ土手(099)、稗田・西ノ入シシ土手(118)、三ツ木シシ土手(188)、下大堤シシ土手(220)など宍倉・西成井・三ツ木・下大堤など蓬木川より南岸の地域に、一部南に向かって張り出すような形に屈曲しながら東西に約10km以上にわたって連なっている。このうち最も遺構の保存が良いのは西成井の西線に位置するもので、高さ2~3mの土手が南北1000mにわたって築かれている。成井のシシ土手は土手の切れ間に穴(=猪落し)が掘られており、猪を大勢で土手に追いつめ、土手側の穴に追い落として丸太や石を投げたりシシ鎌で刺し殺したという。なお稗田・西ノ入シシ土手(118)の一部は、稗田遺跡(115)の発掘に際して調査が行なわれている(霞ヶ浦町教育委員会 1997)。

元文元年(1736)の成井村より黒川辛衛門宛の覚書によると、「土手七百六間」「猪落シ:捨式」をつくるために、坂村・加茂村・成井村など六カ村より人足1291人、他領他村よりの助人足を加え、合計2393人に割り当てて普請に従事させたことが記されている(豊崎 1971)。よって現在のシシ土手の主要部は、18世紀前半に染造されたとみられ、庄衛門シシ土手では土塁から19世紀の瀬戸内染付が採集されている。シシ土手は成井のはかにも、村内各地の山林中に分断された状態で残されている。こうした大規模な土手遺構は、長野県や岩手県などでも類例が知られ、用途こそ猪鹿除け、牧や野馬除け、土地境界線など様々であるが、それらの本格的な構築はいわば17世紀以降のようである。藩の境界の確定や、中世的な郷村の結合が解体され、それまで共有地であった入会地が個別の村落に分割領有されるようになった時期と一致しており、近世的な土地境界の確立が、こうした宍上手や境界塙などの構造を促したと考えられる。

(3)土塁(第22表)

土塁は本来居館や屋敷地、寺・墓地などに伴っていたものが分断されて残ったものと、特にその地域の鳥獣対策などの名目で部分的に構築されたものからなり、安食の西入問土塁(058)、下駄部の長福寺裏土塁(156)、岩坪の棲敷台土塁(170)、加茂の立木山土塁(489)などが知られている。

(4)近世塙(第19表)

近世には大小様々な塙が構築された。これらのうち宍士塙古墳群1号墳(070-001)、權現塙経塙(074)、素戔神社塙(076)、下駄部經塙(158)、二の宮経塙(324)などは經石を伴う近世経塙と考えられるほか、犬神塙(001)、実取塙(010)、雷神前古墳(022)、大工稻荷塙(045)、堂山塙(046)、座王塙(095)、稻荷塙(109)、千駄川塙(202)、

西明内塙(212)、大平塙(223)、コシキ塙(230)、六仏塙群(243)、大工台塙(245)、小池塙(254)、小山古墳(268)、中台塙(270)、太平不動塙(283)、坂橋須賀塙(293)、小沼弁天塙古墳(325)、稲荷塙古墳第4号墳(335-004)、下原古墳群(350)、ゴマタン塙(386)、八幡塙群(387)、三本松塙(400)、小山塙(404)、千代前塙群(411)、八幡神社古墳(456)、戸崎古墳群第2号墳(465-002)、原久保塙(471)、崎浜横穴墓群第17号塙(495-017)、吹久保塙(505)、田宿・赤塙古墳群第1号墳(510-001)、第3号墳(510-003)、第19号墳(510-019)、スキ入塙(512)などは施主もしくは古墳の転用による墳丘を有している。このうち八幡塙群(387)は所謂「十三塙」で、現在12基が確認できるが、他のものは群構成・用途ともはっきりしないものが多い。

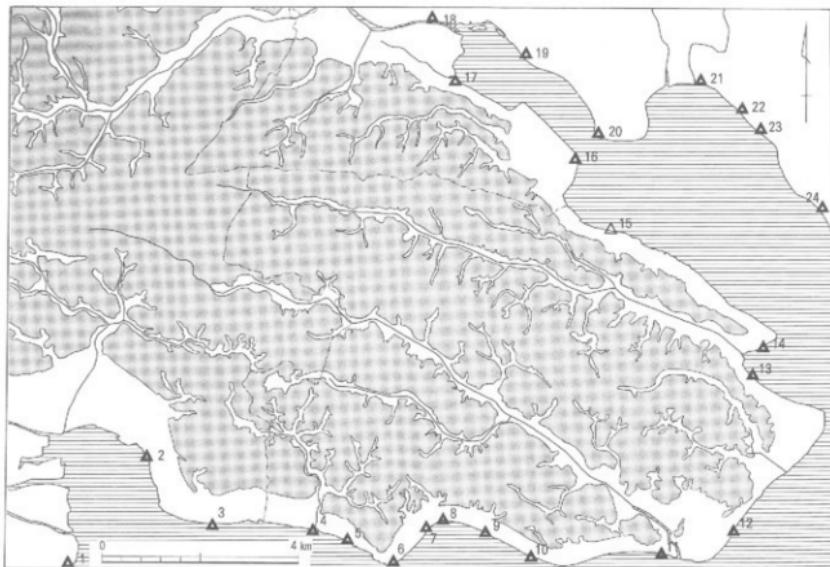
こうした近世塙は、石仏や石祠を祀り信仰の対象となっているとともに、坪・字界や旧道に沿って構築されていることがしばしばで、近世以降に確定した村落の境界標識であることが多く、村落間の境界競争に際し、その犠牲者を埋めたと伝承を持っていたり、墓地の中核をなす例も多い。

また中世に引き継ぎ古墳を塙に再利用する行為が行なわれており、深谷の富士塙古墳(354)は、前方後方形の平面を示すが、主墳の北側に伸びる突出部を幅も狭く傾斜も強いので、方墳の北側に構成に参考が付設されたと見た方が妥当であるかもしれない。

田宿・赤塙古墳群第1号墳(510-001)(=天神塙古墳、田中・日高 1996)や戸崎の八幡神社古墳(456)では、墳丘の上部に南面して蚕母片岩製の石龕が設けられ、内部に花崗岩製で智賀印半結ぶ金剛界大日如来石仏が安置されており、牛渡の兵庫峰第1号墳(416-001)は蚕母片岩の涅槃佛全体部を石龕に組み立て、内部に蟲アカの大日如來を浮き彫りにして板碑を安置し、脇には銘了飯沼妙岩でつられた近世初頭の下絶型五輪塔が立てられている。いずれも湯殿山信仰などの近世修驗道とのかかわりが推測され、17世紀を中心とする年代が考えられる。牛渡のゴマタン塙(386)は本來「護摩壇塙」の意であったと考えられ、やはり修驗道に関連して築造されたとみられる。

志々座校小学校の東方300mに所在する穴倉空塙也室には空也伝、空也上人木像、庭魚、鰐口半片(印鉢)、鉢、金、仏画三幅が伝わる。現在も近くに「供養塙」「お塙」の地名が残り、大正末期まで塙があったが、現在削平され畑地となっている。かつて塙上には周囲約1.8mの老松が立ち、「お墓松」と呼ばれていたが享和三年(1803)雷火に枯れて今は無い。江戸期に開闢した空也念佛信仰の遺蹟の実例として注目されている(背松 1987a-b)

また慶長九年(1604)には江戸幕府が日本橋を基点に、諸街道の両側三十六町毎に一里塙を築き、その上に桟を袖して里程標としたが、水戸街道にも一里塙が築かれたことは土浦市及び石岡市に残るものから明らかである。内閣文庫所蔵の『常陸国絵図』(元禄年間)によると、霞ヶ浦町域内にも南野・西成井・坂の三地内に一里塙がみ



第25図 出島半島周辺における霞ヶ浦四十八津掲書記載の津△

1. 大曾根、2. 間村、3. 沼井、4. 田沼、5. 平川、6. 鶴沼、7. 須田、8. 吉原、9. 萬中、10. 八戸、11. 有賀、12. 戸戸船、13. 犬伏、14. 柏崎、15. (葛賀津)、
16. 八木、17. 石戸、18. 黒浜、19. 高浜、20. 大井戸、21. 城之内、22. 沖瀬(洲)、23. 須生、24. 八木岸

えるが、いずれも前平され現存しない。水戸藩領から宍倉領への巡検路は水戸から小川・玉里を経て大井戸より舟で井関八木に渡り、ここから宍倉・安食を経て柏崎から田伏に至るもので、宍倉や田伏に宿をとったことが文書や口伝に残っている。帰路は往路を引き返すか、柏崎や田伏より玉造へ渡ったようである(豊崎 1971)

(5) 近世港湾(第25図)

津は漁船や貨物運搬船の舟溜りとしての港湾である。既に応安七年(1374)の海田注文にみえる柏崎津は、戦国末に佐竹氏一族の支配を経て慶長七年(1602)佐竹氏移封後は一時天領となり、慶長十一年(1606)の年貢割付状写(田制考証)が遺されている。江戸幕府は元和七年(1621)～承応三年(1654)にいたる一連の改修工事によって、利根川の東遷を行ない、その結果、本流は旧常陸川を経て香取の海へ流れようになったとされる。この時期、仙台藩や津軽藩は潮来に疏屋敷を設置し、銚子河口から海船を運航せたり、那珂湊・洞沼・北浦経由のいわゆる「内川廻し」で年貢米を回送した。東北諸藩の米は、潮来で川船に積み替えられ、利根川筋を経由して江戸へ送られた。この面倒物か、霞ヶ浦沿岸には福島原域で生産された相馬大船焼が大量に流入する。また、水戸藩は小川河岸の運漕業を介して江戸へ年貢米を輸送した。この当時、霞ヶ浦には運送を行う川船が多数存在し、米のは

か酒・醤油・木材・薪炭などの物資輸送も盛んになった。

幕府は関東伊豆駿河の河岸や海濱を調査し、幕府直轄地からの年貢米の公定運賃や代官毎の津出し河岸を設定する。元禄三年(1690)四月に幕府が江戸への年貢米輸送の運賃を定めた「關八州伊豆駿河国廻米津出湊浦々河岸之道法並運賃付」(徳川禁令考)には「柏崎河岸 江戸江川通六拾里 運賃米百石ニ付五石」とある。この時公認された河岸及び河岸問屋が「元禄以来の河岸」として、以後さまざまな特権を主張してゆく。柏崎津はその後水戸藩領となり、「水府志料」には「戸凡九十五……船渡場

浜村へ渡す。湖上三十六町」とあり、対岸の浜村(現玉造町)への渡船場もあった。特に柏崎や小津は風雨の折に難敵し順風を得つ風待ち港として知られ、柏崎の宿通りには宿屋・湯屋・商店が並んでいた。

水運を担った高瀬船は小さなものでも百俵以上の米を積むことができた。高浜から三ツ谷・小津を通じて柏崎を過ぎ、三叉沖を下って牛堀に出、横利根川を経て佐原に至る主要航路のはか、霞ヶ浦や利根川に注ぐ川にも河岸が開かれ、相当上流まで遡った。そして土浦・潮来等の大きな河岸には種々の特権をもつ船問屋ができる。

(6) 近世の漁撈活動と漁港

17世紀に成立した霞ヶ浦四十八津は、津の运营管理や漁業権に関して中世以来の組合連合的な自治組織を維

承つつも、近世領主圖の確定に対応して慣習や組織を成文化したとみることができる。津は津頭の管理のもと、人会権や漁期、運上金などの相互協約を結んで漁業を営んでいたが、絶して慣習や既得権の遵守が重視され、新種の漁法などは忌避されていた。

霞ヶ浦町域に關係する津・津頭を抜粋すると、柏崎村の小左衛門、田伏村の吉右衛門(二郎右衛門)、田宿村の平右衛門、有河村の九右衛門(十右衛門)、小塙村の市右衛門、房中村の仁左衛門、輪浜村の久三郎、河尻村の櫻右衛門、(川尻村のかもへもん)が見える。

津頭は毎年十月二十日に村廻りで寄合いをもち、諸問題を吟味した。寛保元年(1741)の寄合いで主な約定は一、御留用に入らないこと。

一、難とりは霜月二十日より三月まで。

一、寄漁者の網や漁具は没収。

一、地引網・大徳網へ付網をしないこと。

一、漁老とりの漁具は沿岸におく定めであったが、近年沖へ置くようになったので止めること。違反した津は罰金三両。

一、寅年(慶安三)に取り交わした約定は守ること。

一、年賃運搬船はもとより、商船でも難風にあった時は、各津より助け舟を出すこと。

などがあげられている。

接着等によると、この当時の主な漁獲種はこい・うなぎ・ふな・えび・いさぎ(アミ類の1種)等で、漁法は大徳網や地引網、笠浸やおだ・ずなどである。これらは鮮魚または干魚として販売され、わかさぎなども生魚のままか干して肥料とするに過ぎなかったといわれ、のち特産となつた煮干しや干鰯は19世紀に外地から技術が導入されるまで生産されなかつた。

漁撈活動の拠点となった港湾は、江戸期の絵図や明治期の迅速測図などから大丸の位置を知る事が出来、沿岸の旧家には津の管理にかかる鑑札や割印を保管している場合も時折見られるが、沿岸漁業・水運の衰退と湖岸低地の護岸・水田・蓮田化で舟人や浴が破壊され、網元の屋敷や網小屋などの近世建築も次第に失われているため、年々その跡跡をたどることが困難になってきている。

なお復ヶ浦の湖底堆積物のボーリング調査では、15世紀前後のヤマトシジミ殻層が広く見られることが指摘されているほか、ボーリングサンプル中に有機質漁具がそのまま遺されている場合があるという。今後火山灰隕層の比定を含めた湖底堆積物の調査が進めば、陸上遺跡とは異なるかたちでの漁労遺跡が把握される可能性がある。

3. 遺 物

(1) 磁器

中世にはすべて輸入に頼っていた磁器類は、17世紀前葉に肥前の有田窯で国产化され、東日本でも1640年代頃から出土品に加わるようになり、鎮国体制の完成で舶載

磁器の供給が激減するなかで、急速にシェアをのぼしている。生産コストも次第にさがり、江戸前期に整備された廻船ルートや内水系水運とも結びつき、大量に供給されたため、18世紀までの中国磁器が限られた遺跡でしか採集されないことは対照的に、霞ヶ浦町内のほぼ全域からみいだされるようになる。日常磁器として農漁村の漁々まで普及したことがわかる。

17世紀前半～中葉に生産された所謂初期伊万里は、つくば市古墳敷跡(白田 1998)・手子生城(桃崎 1995)、土浦市土浦城(西ヶ谷 1998)など近世城郭や屋敷地で出土例があるが、霞ヶ浦町域では出土遺跡が城郭や津の隣接地に限られ、出土量も少なく、中世以来の捷足的な場所から見いだされる。17世紀前半の肥前磁器は、福島産の青花を意識して中國風絵柄の頭類が多いが、17世紀後半には碗の比率が増大する。器壁も次第に薄くなり、丁寧な彩画を施すものが現れる。牛渡の三平坊貝塚(436)で井桁文の碗、加茂歎治屋魔寺(477)・桜後遺跡(476)ではコンニャク印判の碗、中・近世の柏崎津に隣接する瓦谷・清水遺跡(073)や先浜遺跡(077)では薄手の碗・皿類や角形の型打ち模判の手塩皿など17世紀代に遡る古い肥前磁器が比較的多く採集された。

18世紀には肥前磁器の出土量が激増し、磁胎がぶあつく石質で、表面に粗い絵付けを施した所謂クラフンカ茶碗・皿の生産が増え、松学寺境内遺跡(460)や柳家名屋敷地(504)など霞ヶ浦町域でもいたるところにみいだされる。前期の柏崎周辺や大和田の和田台遺跡(213)、深谷の川中2遺跡(365)などに濃密な散布が見られるほか、加茂平貝塚(473)付近の近世墓地では肥前青磁の三足香炉や長崎県波佐見窯産の白磁蛇の目輪ハギ皿などが採集されている。

19世紀の肥前磁器には粗い絵付けを施した丸皿や輪花皿、高い高台に直線状に体部がたちあがる広東碗、雷文を施した蓋碗、八角手鉢、筆洗など碗皿に加え、菊花文やタコ唐草をあしらった紅皿、タコ唐草文の懶利や香油瓶が加茂の戸崎の守後遺跡(459)などにみられるが、細片が多く良好な資料は少ない。

一方19世紀になると、瀬戸で肥前磁器を模した製品、所謂「新業焼」が創始され、東岡では肥前の流通量を凌駕するまでに成長する。一見すると既別しがたいが、瀬戸はははりとした半透明の具須の使い方やガラス粉を含む溶結した磁胎が特徴である。葡萄文や楓文など粗い絵付けを施した端反りの茶碗に加え、小振りな広東碗、小型の井状の蓋碗、菊文やタコ唐草の紅皿、つぶれた懶利形の香油瓶などが充実をみせる。

更に東北地方では宮崎県宮崎町で肥前や瀬戸の染付を模した切込焼が焼造され、東北諸藩の回米ルートを通じ霞ヶ浦沿岸でも流入しているとみられ、今回の調査でもその可能性があるものが散見されたが、肥前や瀬戸の染付と明確に統別することは出来なかつた。

こうした近世磁器は、コバルトや銅を呈色剤とする近

代の刷判手磁器の出現で終焉を迎える。

(2)陶器

近世陶器を象徴するものとして、朝鮮半島からの影響による唐津を代表とする肥前陶器の生産開始、その影響を受けて瀬戸美濃窯では熱効率が飛躍的に向上した連房式登窯が採用され、長石釉の発明による白色陶器「志野」の盛行など、あらたな窯業生産技術の確立は陶器の生産をも増大させ、至るところで近世陶器の散布を見ることができると、器種や内容が充実した陶器は、柏崎などの津や近世石造物が並ぶ交通路に隣接する遺跡に多い。

唐津系陶器では加茂の鐵治屋廢寺(497)で採集された墓の副葬品と見られる17世紀初頭の鐵絵志野皿が最も古く、また当遺跡をはじめ17世紀後半には長崎県内野山窯の銅を量色剤とする蛇の目釉ハギ青絵釉皿の頗度が高い。また内成井地区の近世寺院跡などで三島手鉢や胴目碗が採集されているほか、僅かだが陶胎染付もみられる。

17世紀には、瀬戸美濃窯の天目茶碗とともに志野や鐵絵志野の粗皿の破片が多く見いだされる。厚手の器に分厚い鉄釉を掛ける天目茶碗は、本来中國福建省の窯窓の製品で、列島に抹茶碗として輸入され、鎌倉期以降瀬戸窯でその模倣品が生産された。町域各地から多量に採集される近世前期の天目茶碗は、17世紀における抹茶消費の拡大を物語っているが、これは文祿前後の太閤検地の実施で庄・保・郷が解体され、今日の大字につながる地域単位への再編に伴い近世名主層のイエが成立した時期と一致している。すなわち新たなる名主層は、武士や僧侶など中世領主層のステータスシンボルであった仏事や会合における喫茶を自らの生活様式にも取り入れ、これに地方での茶栽培の盛衰が結びついたものと推定される。村内の近世墓地で時折見られる茶臼の残骸も、多くは17世紀のものであろう。

一方志野・鐵絵志野に多い法量が規格化されたセットの皿は茶席での供石料理の食器として普及したと考えられているが、それにとどまらず、穴倉城(044)や戸崎城(466)の本丸から採集されたものは、これらの中世城郭が佐竹氏の秋田軒附(1602)とともに廢城となったとする通説に再考を促すもので、17世紀前半でも陣屋等のかたちで存続したこと暗示する資料となる。

17世紀後半~18世紀にかけては瀬戸・美濃系では鉄釉擂鉢・香炉・尾呂茶碗・腰絵茶碗などが普遍的に入られ、大型の志野系灰釉盤や織部水鉢などは、現在も旧家の庭先などに残されている。

このうち茶碗を見ると、17世紀代までの天目茶碗にかかり、18世紀には薄手の尾呂茶碗や腰絵茶碗が主流となり、特に腰絵茶碗は殆どすべての近世遺跡に見られるといっても過言ではない。これは既前のクレワンカ茶碗の普及とともに、喫茶のありかたが抹茶中心から煎茶中心に転換したことを示している。つまり18世紀には、簡単な煎茶法や安価な鉄瓶の普及で茶は一部の階層の飲物から、ひろく一般的な日常飲料へと変化したと考えられる。

19世紀には、滻過・火入技術の発達による全国的な清酒流通や、石岡や霞ヶ浦町域など地方藏本の充実をうけて計り売り用の徳利類が充実し、瀬戸の高田徳利や志戸呂の由石衛門徳利の威信が多く見られ、幕末には燐付けのため染付磁器の鏡子類が増大する。

また江戸後期には從来の菜種油に加え、安価な鰤油が灯明油として普及し、夜間に灯火する習慣が一般化した。このため各地の窯では灯芯を出す片口や油溜めをそなえ、油漏れを防ぐため内面に施釉するなど工夫を施した灯明皿類が生産され、瀬戸・志戸呂などの製品が多い。これらは久慈川流域の山方町で生産するメノウ製の火打ち石、これと組み合わせた鉄製火打金とともに、家庭や村堂などに常備されていたようだ。

また日々をひくものに、大型の近世常滑窯があげられる。埋葬用の堀笛に用いられたものも麻生町など飛行地域では僅かに知られているが、霞ヶ浦町域では民家の水堀や貯蔵窯として今日なお伝世するほか、肥前や東濃などの窯場に用いられたものが目立つ。肥前に用いられたものは内部に屎尿のカルシウムや矯分が皮膜となって固着している。こうした下肥は野菜や鰯など商品作物の栽培には不可欠である。霞ヶ浦沿岸には九十九里浜や鹿島灘沿岸で地引き網によって大量に漁獲された鰯を乾燥した干鰯も金肥として流通していたが、肥前は少しでも肥料を自弁しようとする努力の現れであろう。

そのほかの近世陶器類として、18世紀には、京都で生産された京焼が高級食器として城郭や都市を中心に消費された。京焼は高台の丁寧な削りと刻印、鐵絵や貴乳肌の生地に低温焼付で赤、青、緑などの彩色を施すのが特徴で、谷和原町前田村遺跡の近世墓で白粉入れを副葬していた例が知られている(古原 1997)が、霞ヶ浦町域では、京焼を真似て丁寧に削り出した高台に刻印を施し、全体的に黄色っぽい色調に焼き上げた肥前や瀬戸美濃の京焼風陶器ばかりが見いだされる。通常の丸碗が最も多いほか、源通遺跡(231)で白粉もしくは紅の容器と思われる素文の小型合子が採集されている。主要窯業生産地の製品がいちはやく江戸をはじめとする都市部に商圏を確立しブランド化したのに対し、都市近郊農村や地方には、ブランド品を真似た新興窯の模倣品が流通するとの指摘があり(長吉佐 1994)、有田に対する波佐見、瀬戸に対する志戸呂、初山、京焼に対する肥前や瀬戸美濃の京焼風陶器が町域の各地から見いだされる。無釉陶器では堺・明石系擂鉢の比率が最も高い。備前焼の影響を受けて成立した無釉の焼き物めざり鉢で、特に堺産のものは陶色塗須器と同じ大阪群の粘土で焼成されているため、灰赤色の胎土が特徴である。「備前擂鉢投げても割れぬ」と謡われたように、丈夫で堅牢であるため、軽質の在地土器擂鉢を駆逐してそのままを終焉に追い込み、素地の耐久力で劣る瀬戸美濃の窯窓期鉄釉擂鉢をもシェアで凌駕していたようだ。口縁部の断面形からみて、17世紀代の製品は少なく、18世紀のものが多い。

(3) 民衆系陶器

19世紀には民衆系陶器の比率が非常に高くなる。民衆系陶器には福島県の相馬大塚・茨城県内の笠間・栃木県の益子の製品が見られるが、よく似ているため般別は難しい。いずれも擂鉢・煮壺・徳利など從来の機種に加え、急須・片口鉢類の充実が顕著である。

相馬人焼窯は、福島県浪江町の郷士が元禄三年(1690)頃に相馬市の相馬藩窯で学び、のち帰郷して創始した窯である。宝曆(1751~63)から天明凱鐘(1783~87)にかけて窯場の規模が拡大したが、生産は特權として一部の豪商元に独占されていたため、職人とともに製陶技術が各地に流出し、笠間・宍戸焼・益子焼などの成立を促した。文化四年(1807)頃には相馬藩指導によって新楽焼系の製陶技術が導入され、二彩・三彩の生産が開始されたが、この技術も各地に拡散した(福島県立博物館 1990)。

笠間焼は安永年中(1772~81)に近江信楽の陶工を招いて創始された箱田焼に発し、幕末に笠間藩主牧野氏の保護を受け、明治初年に隣接する宍戸焼とともに笠間焼の名で横浜で販売した。信楽を介して導入した肥前嬉野風の銅鏡袖陶器(青上瓶)も僅かに見られるが、多くは厚手の地に柿釉や黒釉を掛けた壺・擂鉢・壺・徳利・土瓶などからなる。

益子焼は笠間焼の影響で成立したもので、特に19世紀代は所南汽車上瓶も含め、新樂焼系の色鮮やかな三彩土瓶が特産となった。この土瓶は小貝川流域に多いが、霞ヶ浦町域ではさほど採集されていない。おそらく江戸期の内水系水運で当地に接続している笠間や相馬の製品の方が多いものと推測される。

(4) 近世土器

近世在地土器は各地で出土し、その器種には茶壺・井戸杓・瓦質火鉢・内耳始焰など所謂荒物が多い。中世に多かった内耳土鍋や擂鉢はそれぞれ鉄鍋や瀬戸美濃飯碗・堺明石系擂鉢に転向するといわれる。ちなみに鉄鍋は西成井地(今)の廢寺跡で近世陶磁器類とともに「足形」のものが採集されたほか、牛渡の貝ヶ崎貝塚(405)附近の近世墓地でもL縁部片が採集されている。

土器擂鉢の終焉については鈴木裕子氏の検討がある(鈴木 1998a)が、各地の動向はまだ不明な点が多い。

常総地域では龍ヶ崎市南三島遺跡や取手市下高井町で17世紀中葉~後半、つくば市古屋敷遺跡で17世紀末頃の土器擂鉢が出土しているが、以後見られなくなる。おそらく堺・明石系や瀬戸美濃擂鉢の發合に敗れ駆逐されたものであろう。このため各地土器製品は機種組成が転換したようで、撇入陶器がカバーしていく瓦質壺・火鉢・七輪・始焰・火消壺等に特化し、特に耐火度が要求され強度や法量から遠距離輸送に向かないものに傾斜する。

焰格は「茶焰じ」と通称され以前までは日常的に用いられており、煎茶や焙じ茶の加工を中心に、豆や穀物を煎ったり、餅や団子を焼くフライパンのような役目を果たしていた。17世紀~18世紀初めまでは浅い内耳鍋状で

平底だが、18世紀代に七輪が普及すると丸底化する(西角1996・白川 1998)。いずれも熟効率を高めるため底部は極端に薄手で、耐火度を高めるため雲母を含む川砂を付着させた砂目底となっている。茶壺は加工された茶を貯えたり、穀物の防湿にも使われたようである。

また直口縁壺類は火消壺に多く用いられたほか、宍倉地区内の墓地では、藏骨器とおぼしき胎上に雲母微砂を含む完形の近世在地土器壺が採集されている。

また江戸後期から近代にかけては、瓦質の祠が製作され、真壁町やつくば市などの路傍に現在もその製品を見ることが出来るが、宍倉の見取塚(010)では、鶴をヘラ描きした瓦質祠の破片が採集されている。

また径50cm以上で、三脚部に型抜きした獸面を貼付ける瓦質火鉢がみられ、神社や村役の御伊表に据えられていることもある。平三坊貝塚(436)や出雲宿天神塚古墳(510-001)に隣接する神社の社殿近くに被品が放置されているのを見ることができた。

こうした瓦質土器の旋物(茶壺・井戸杓・植木鉢・焰格等)のうち、胎土に多量の金雲母を含むものについては、霞ヶ浦から桜川を遡った筑波北西麓の真壁町源法寺で生産された源法寺焼と目されている。その生産開始は真壁城より全陶器類の90%以上という異常に高い比率で出土した在地土器製品の状況(佐々木 1983)などから、中世後期の16世紀代まで遡ると見られている(阿久津 1998)。なお石岡府中藩松平氏の下屋敷とみられている東京都葛飾区北大塚遺跡では、深いタガ彌部の火鉢が出土しており、江戸産の今戸焼ではなく、常総地域からの搬入品と見られている(鈴木 1998b)。石岡市幸町の地蔵院には、延宝五年(1677)の舟形地蔵に「土器町結業三十人」、貞享五年(1688)の舟形地蔵に「土器町同行廿七人」の銘があり(黒沢 1996)、『府中雜記』に「今幸町ト云フ所(宝永年中改ル)往古土器尼ト云り、其故ハ國府ナル故ニ古ノヘニ事多アリ、其時窯平賀ナド云土器ヲ製セシ所也ト云ヒヒと、今寛政年中ニ至リテモ市助ト云モノ土器ヲ天王祭礼ニ歟ズ、是古礼残レルカ(印地ハ御臺ノ下蔵成ノ近ニ家十八、九軒アリテ残ラズ今ノ幸町ニ移ス)」(石岡市教育委員会 1986)とみえることから、宝永(1704~1711)以前に幸町の古称を土器町と称し、17世紀以前には土器職人が組織的に居住していたとみられ、霞ヶ浦町にも製品の供給が予測される。

また霞ヶ浦町内にも、常総粘土層の抜がりがあり、明治頃、深谷の川崎家家敷(345)の門前では、付近から採掘される粘土で荒物を焼成していたという。糞や製品の探索を試みたが現在埋没しており確認できなかった。

(5) 泥面子

泥面子は、江戸下町の浅草今戸などで軽質の近世土器類とともに生産された子供の玩具で、近年は台東区元浅草1丁目の白鷗遺跡、新宿区住吉町遺跡、墨田区江東橋二丁目遺跡などで泥面子を含む土製品の生産が確かめられている(仲光1998)。享保年間(1716~1736)頃に現れ、当

時は「面焼」「面打」「めんてう」「紋打」などと呼ばれていた(千葉県文化財センター 1994)。町域の採集品には筈・ひょっこ・石灯籠、打出小槌、二朱銀などを象ったものがみられる。このうち二朱銀形のものは、南鎌二朱銀の形態を模したもので、この銀貨は、田沼意次が老中に就任した明和九年(1772)に深川の銀庫で鋳造され、天明八年(1788)以降一時鋳造が停止したが、寛政十二年(1800)六月に鋳造が再開され、文政七年(1824)の停止までに596万3000両分が発行された(栗原 1999)。

霞ヶ浦に連なる印旛沼沿岸では、泥面子を「ドジロク」もしくは「バッカジ」と呼んで子供が玩具としていた。「ドジロクはバッカジとも呼ばれている直径3cmくらいの素焼きのお面で、いまのメンコに似た子供の遊びに使われた。地面に浅い穴を掘り、この中にみんなが出しあつたバッカジを入れ、それにねらいをつけて、かわりばんこに自分の持っているバッカジをたたきつける。そして、うまく穴からとび出したら自分が自分の中に入った。地面に掘る穴は直径が15cm、深さが3~4cmだった。」(芦原 1984)といい、こうした遊び方が一般的であった。

(6) 土鍾

霞ヶ浦町域では、東岸・南岸のほぼ全域で、極めて多数の漁網用土鍾が採集されている。それらは所属年代が明らかでないものが多いため、年代と結びつけた議論が難しいが、最も古いものは古墳時代前期、五領式期に遡ると考えられる。古墳時代から中世にかけては、霞ヶ浦は基本的に内海で鹹水であり、漁獲される魚種も現在とは大きく異なっていたと考えられるが、戦国・近世になると、現在の霞ヶ浦につながるヤマトシジミが繁殖する汽水・淡水環境が成立し、漁獲対象も現在と近いものに変化したと考えられるから、近世漁撈の復元にあたっては、近代の漁撈民俗との比較も有効となる。

地元で「ヤツ玉」と呼ばれている土鍾は、近年まで以下のような手法で沿岸の漁師によって作られていた。

①蘆竹を入れて丸めた土糞をつくり、そのあとで蘆竹を取り除くと原形ができる。

②土鍾を乾燥させる。

③乾燥した土鍾を藁の間に沢山挟み、それを占候につめてよく結び下縄から火をつけて焼く

④3~4時間位かけて赤褐色に焼き上げる。

製作にあたっては原料の粘土をよく叩くことが大切で、その後は塙を少々混和するようになった。粘土は柏崎のものが最も良とされ、また柏崎・田伏などでは多量に作り、「さし」にして商品として販売していた者もあった(豊崎 1971)。原始・古代においても、古墳の使用以外はほぼ同様な製作方法であったと推定される。なお柏崎宿群の東端に位置する分円寺瓦窯付近では、明治期頃、老夫婦が付近の粘土を用いて漁網の土鍾を一手に生産していたが、粘土採掘中に落盤事故にあり、以後柏崎での土鍾生産が断続したことを伝えている。

(7) 銀治関係遺物

深谷の川越家屋敷(345)の門前には、かつて専属の鍛冶屋があり、池の付近には大量の鉄滓が埋没して水田耕作の邪魔になる程だったというが、現在は見られない。

深谷集落の西の外れを画していたと考えられる八坂神社遺跡(337)の参道付近から無縫墓地にかけて近世陶器・土器類とともに大量の碗形鉄滓が散布しており、墓地ではガラス質が溶着し堆積の可能性がある小型土器が見つかっている。隣接して西側には現在公民館となっている堂があり、付近は無縫墓地となって15~17世紀の五輪塔・宝鏡印塔・六地藏宝幢の部材が集中する。煙が発生し火災の危険性もある鍛冶屋は、集落の宿空間から離れた村境の空閑地に営まれたと想像される。

牛渡の谷ツ跡遺跡(424)では墓地の一角で近世のものと思われるほぼ完形のワイゴ羽門が採集されており、一端は溶解してガラス化している。非常に整った円筒形で表面の仕上がりも滑らかであり、型造りであると考えられる。中世に遡るよりも丁寧なつくりである。

(8) 銭貨

江戸幕府は寛永十三(1636)に寛永通宝(古寛永)をはじめで発行し、水楽通宝を基幹としつつも雑多な銭錠を含む渡米銭や模鋳銭にかかる真銭として流通を開始させた。そして古寛永はきわめて短期間に渡米銭を駆逐し、寛文十年(1670)に銭の鋳造が帆瀬に移った段階で渡米銭の流通が禁止され、更に元禄十年(1687)に流通が開始された新寛永は江戸時代を通じて最も多量に鋳造された銭貨であった(鈴木 1999)。霞ヶ浦町域ではほぼ全域から寛永通宝・文久永宝(1863~1865)などが採集されている。多くは近世塚やその上に立てられた近世石塔・石仏への奉納銭もしくは近世土坑墓への副葬品、所謂六道銭であるが、セリエーションに耐え得るような良好な一枚品は殆どない。ただし西ノ入2遺跡では文銭ばかり5枚が確認した状態で採集されており、1670~97年頃後、17世紀後葉の六道銭であった可能性が高い。

(9) 煙管(キセル)

茨城県教育財団の発掘調査では、宍倉の小原1遺跡(017)や坂の坂遺跡(320)でキセルが採集されており、特に小原1遺跡のものは竹管が遺存している(茨城県教育財団 1999)。土浦・出島合同調査会による戸崎の柳沢1遺跡(451)の調査でもキセルが出土している。踏査では戸崎の並木跡(458)や中山遺跡(464)で採集されている。キセルは18~19世紀の土葬墓の副葬品として多く見られ、以上に挙げた例も本来近世墓に伴うものであろう。

(10) 一字一石経

一字一石経は河原石などの表面が滑らかな礫石に一字または数字を書いて経典を書写したもので摩羅石経ともいう。村内では飯岡、坂の二の宮蛭塚(324)、柏崎素霧神社蛭塚(074)、柏崎の権現橋蛭塚(074)で一字・石経の出土が知られ(豊崎 1971)、また宮上見塚古墳1号墳(070-

001)の墳頂部でも、渡来鏡やかわらけなどと共に一字一石経が出土(山口 1992)し、共伴遺物より16世紀後半~17世紀前半頃のものと考えられる。今回の踏査では柏崎素齋神社経塼(074)で長さ2~3cmのチャーチ縁に經字を一字文字づつ墨書きしたものが数点が採集されている。

こうした経石は、平清盛が大輸出泊の経ヶ島の築造にあたって経石を埋められたとする伝承から平安後期には出現していたと見られ、小川町天神中世墓では五輪塔地下に常滑の藏骨器を伴う中世墓から多字一石経が出土している(小川町教育委員会 2000)が、一字一石経の実際の遺品は鎌倉時代末期から江戸時代にかけて全国に分布しており、特に江戸時代のものが圧倒的に多い。こうした経石は、まとめて土中に埋め、その上に納経塔を立てたり、土地を清浄化して勝地とするまじないのために埋められることが多い、寺院や墓地の適当に先だって経石を埋納する例がある。また大正大学の踏査では土浦市田村町内の遺跡で多数の一字一石経が採集されている。(桃崎祐輔)

引用文献

- 阿久津久二 1998 「茨城県考古学20年の歩みと展望」中・近世』『茨城県考古学会誌』第10号 茨城県考古学会
- 吉原修二 1981 『川魚の回想』著青房
- 右岡山教育委員会 1986 『右岡の歴史』
- 石尾和仁 1999 「中世社会と『古墳』『墓穴』第3号 『印旛島県埋蔵文化財センター』
- 小川町教育委員会 2000 『小川町埋蔵文化財分布図』
- 小田敏市 1990 『小田原城とその城下』
- 霞ヶ浦町教育委員会 1997 『ひへ田道跡調査報告書』栗原 治 19
99 『江東歴史紀行 南源二朱銀と町火消』『下町文化』206
- 江東区教育委員会 pp.6-7.
- 本村 龍 1994 『村落生活の歴史研究』八木書店
- 黒沢彰成 1996 『右岡の石仮』
- 佐々木達夫 1983 『真壁城出土の陶磁器』『真壁城跡 中世真壁の生活を探る』真壁城跡発掘調査会
- 菅原季裕 1987 「奈良宮内省倉庫室堂堂と寺也僧~近世空也僧仰についての一考察~」論集『日本文化の時・場』
- 菅根幸裕 1997 「近世空也僧仰の形成と展開~仙霞園伝法籍守史料を中心に~」『傍本史学』第11号 国学院大学傍本短期大學史学会
- 鈴木裕子 1998a 「土器焼跡の終焉」『江戸在地系土器の研究』■
鈴木裕子 1998b 「江戸遺物出土の非在地系の深鉢形土器について~豊島区北大塚遺跡エスカージュ大塚地区出土例から~」『東京考古』第16号
- 吉藤弘 1999 「中世幕における古墳の再利用」『THOMINTDS』Vol.2
千葉県文化財センター 1997 『房能考古学ライブラリー8 歴史時代1』
- 土浦市教育委員会・土浦市遺跡調査会 1988 『茨城県指定文化財土浦城址内櫓門保存修理工事報告書』
- 土浦市教育委員会・土浦市遺跡調査会 1996 『土浦城(外丸御殿跡)発掘調査報告書』
- 土浦市教育委員会・土浦市遺跡調査会 1998 『土浦城二の丸・本丸試掘調査発掘調査報告書』
- 水山正 1994 「ふるさと探訪~湯曲飯川の里から筑波山。霞ヶ浦その自然と歴史を辿って~」霞ヶ浦林
- 土浦市・出島村合同遺跡調査会 1995 『都沢遺跡・妻老田遺跡・寺行地遺跡』
- 豊崎忠監修 1971 『小島村史』出島村教育委員会
- 民依古典也 1994 「江戸の陶磁器消費~何を、どれだけ使ったか~」『第15回貿易陶磁研究会発表要旨』
- 仲光克顕 1998 「墨田区江東牌二丁目遺跡にみる江戸の土製品生産~製作技術の検討を中心に~」『東京考古』10号 東京考古学講演会
- 鳴田浩司 2000 『第3章 出土遺物について』『千葉県文化財センター研究紀要』20
- 白田正子 1998 『二度山道跡 古屋敷遺跡』茨城県教育財团文化財調査研究費第132集
- 白樺正子 1996 『茨城県における中世末から近世にかけての土師質内耳土器について~つくば市吉原遺跡の出土例を中心として~』『研究ノート』7号 茨城県教育財团
- 猪崎繁 1981 『出島の昔ばなし』ふるさと文庫 猪崎書林
- 原田信男 1999 『中世村落の景観と生活~関東平野東部を中心として~』恩文閣出版
- 福島県立博物館 1990 『東北の海道史』
- 茂木悦男 1999 『坂道跡 船内遺跡 小原遺跡』茨城県教育財团文化財調査報告第148集
- 続船祐輔 1995 『つくば市手子生城の中・近世遺物~陶磁器を中心として~』『平成7年度 第17回遺跡研究発表会資料』茨城県考古学協会
- 両角まり 1996 『内耳鍋から越前へ~近世江戸在地系培養の成立』『考古学研究』42-4
- 山口行雄 1992 『霞ヶ浦古墳群』出島村教育委員会
- 古原作平 1997 『高野台遺跡 前田村遺跡D・F区』茨城県教育財团文化財調査報告書第127集
- 渡邊久生 1997 『こへ田道跡調査報告書』霞ヶ浦町教育委員会

第18表 近世遺跡一覧(包蔵地・集落跡)

遺跡番号	遺跡名	鳥居・門牌			築地・島田の迹			堤防			備考	文献	
		17r	18k	19k	築地	島田	堤防	雪舟	明石	民性	土塁		
007	西川口・天神所遺跡	○			○								
009	東山遺跡		○		○								
004	東野三角遺跡		○		○								
005	生光保造跡		○		○								
006	御殿1遺跡		○		○								
008	御殿山遺跡		○		○								
009	赤坂八幡保造跡	○	○		○								
011	豊原2遺跡		○		○								
012	河ノ本遺跡		○		○								
013	北小早瀬		○		○								
014	御殿3遺跡		○		○								
015	御殿遺跡		○		○								
017	小坂1遺跡		○		○								
020	高野遺跡		○		○								
021	馬場川1遺跡		○		○								
023	小坂1遺跡		○		○								
024	小坂2遺跡		○		○								
025	大字11力所		○		○								
026	御殿平2遺跡		○		○								
027	小坂1遺跡		○		○								
028	御殿山遺跡		○		○								
029	新1木森跡		○		○								
031	馬場川1遺跡		○		○								
032	馬場平2遺跡		○		○								
034	長橋手1遺跡		○		○								
035	安元山遺跡		○		○								
036	大瀬市遺跡		○		○								
039	大坂北遺跡		○		○								
040	西ノ山遺跡		○		○								
042	風呂山遺跡		○		○								
043	新吉1遺跡		○		○								
052	宇摩耳		○		○								
053	岩北鬼跡		○		○								
064	山ノ木遺跡		○		○								
065	円子内遺跡		○		○								
066	小字遺跡		○		○								
059	西人間遺跡		○		○								
071	芦崎遺跡		○		○								
073	丸谷・清木遺跡		○		○								
077	鬼頭遺跡		○		○								
081	熊ノ山2遺跡		○		○								
083	宍戸山1・2遺跡		○		○								
084	山ノ原1・2遺跡		○		○								
086	牛久門遺跡		○		○								
092	宍倉白山遺跡		○		○								
097	今川1遺跡		○		○								
098	古坂・山下南遺跡		○		○								
102	舟宿遺跡		○		○								
106	西久保1・2遺跡		○		○								
108	足平道跡		○		○								
112	足平本郷遺跡		○		○								
113	早良出雲跡		○		○								
115	御田遺跡		○		○								
119	内1人1遺跡		○		○								
120	内1人2遺跡		○		○								
121	西寺前遺跡		○		○								
122	城戸1遺跡		○		○								
123	方坂1遺跡		○		○								
124	丸山・馬場下遺跡		○		○								
125	大久保宿遺跡		○		○								
126	長町1遺跡		○		○								
128	長町1遺跡		○		○								
131	平松遺跡		○		○								
132	五条舟立廻跡		○		○								
134	若狭神社廻跡		○		○								
135	若狭1・2遺跡		○		○								
139	下室1・2遺跡		○		○								
140	山田遺跡		○		○								
143	下津谷寺跡		○		○								
145	香芝舟立廻1・自然		○		○								
144	近畿舟立廻1・自然		○		○								
146	舟入里遺跡		○		○								
149	女豆出雲跡		○		○								
151	神乃羽跡		○		○								
152	船原平遺跡		○		○								
155	才野1・2遺跡		○		○								
157	才野1遺跡		○		○								
159	才野1遺跡		○		○								
160	才野1・2遺跡		○		○								
162	鶴ノ頭跡		○		○								
165	三佛田寺跡		○		○								
168	赤瀬遺跡		○		○								
169	才野1遺跡		○		○								
170	岩坪平原跡		○		○								

題名番号	題名	成書										備考	文献
		17c	18c	18c 後編	18c 前編	西行文庫	系譜	著 者	其原	上巻	かわらけ		
174	根古道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
175	木ノ木道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
177	原ノ木道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
180	岩井御園台片原	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
184	マジン道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
187	西伊豆道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
190	三ツ木八幡道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
191	新井水出門道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
193	南伊豆道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
195	日向市道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
200	前の木道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
201	羽衣道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
204	内原道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
205	六代坂道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
206	津久見道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
207	下原道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
209	志摩山道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
211	御所山道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
213	切原山道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
214	茶ノ木山道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
215	東山行道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
216	人見山行道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
217	五里塚道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
219	内山道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
221	男傍大平道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
222	男傍人平坂道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
225	函山道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
226	下伏天ノ木道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
227	柳山道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
228	桜ノ内坂	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
229	八坂山道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
231	津治山道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
232	男傍小坂	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
233	男傍山家	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
234	人見山道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
236	立石山道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
239	人見山道	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
240	立石山道	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
241	天ノ木道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
244	小沢山道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
249	糸佐山道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
251	田代天ノ木道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
255	同奥野	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
257	塙ノ内道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
258	塙ノ外道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
259	舟ノ内坂	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
263	當麻山道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
266	白糸山中古坂	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
267	若狭道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
275	山ノ合道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
276	押野行坂	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
281	坂ノ下道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
286	折松山道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
290	二郎山道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
291	青垣山道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
299	延喜草書	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
300	延喜草書	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
302	延喜草書	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
303	延喜草書	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
304	川原道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
305	西之木道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
306	西之木道	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
307	下只見道	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
308	只見道	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
309	免ノ木道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
310	東之木道	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
311	東之木道	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
312	谷ノ下1丁目	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
313	谷ノ下2丁目	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
320	筑摩山	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
341	二ノ宮道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
342	吹田山道經	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
343	北之木行坂	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
347	中野田坂	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
350	御嶽山行坂	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
353	御嶽山行坂	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
357	北勢化粧坂	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
358	深谷ノ原上坂	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
359	上原上坂	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
366	八咫杵北ノ原坂	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
369	南行原2丁目	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
360	湯行原3丁目	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
361	湯行原4丁目	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
364	芦原3丁目	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
366	牛堀木1道	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
368	牛堀木2道	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
369	牛堀木3道	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
371	牛堀木4道	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		

地番番号	道路名	時代・時期			地質 地盤	構造物	施設	土器 かわらけ 等	備考	文献
		He	18c	18c						
302	南谷下駄 5 番路									
353	堤南駄 1 番路									
355	堤南駄 1 番路									
366	堤北上駄 1 番路									
368	八千代台 1 虎路									
369	八千代台 3 虎路									
361	八千代台 4 虎路									
363	田中 1 道路									
365	田中 2 道路									
367	田中 3 道路									
369	秀延 1 道路									
370	秀延 2 道路									
371	白井川橋梁道路									
372	白井川 1 号道路									
373	白井川 2 号道路									
374	鶴見 2 道路									
376	真鍋山北麓路									
377	真鍋山 1 道路									
378	真鍋山 2 道路									
379	真鍋山 3 道路									
383	西久保道路									
384	西通路									
385	7 丁目北側路									
386	高田町田端路									
387	高木町路									
388	高木町 1 道路									
389	中興通路									
394	第六天神坂									
397	止豆野路									
398	入塚道路									
399	網内道路									
401	サクナハ道路									
403	小山通路									
405	瓦ヶ崎通路									
407	千種寺寺前道路									
412	千代田通路									
418	丸山町通路									
419	丸山町通路									
420	松原通路									
421	カガヤ通路									
423	カガヤ出迎路									
424	登ノ原通路									
425	小代筋通路									
426	新宿通路									
433	向洋町通路									
434	トハ通路									
435	新宿前通路									
436	十三町通路									
439	浅間町通路									
440	御殿台通路									
441	御殿台 2 番路									
443	御殿台 3 番路									
446	柳原 4 番路									
448	糸佐山通路									
451	梅原 1 番路									
457	田舎作 1 号道路									
458	若木北道路									
459	才後通路									
461	細田通路									
462	武曾通路									
465	前草保育園									
464	口吹 1 号道路									
468	石巻通路									
470	猪久保通路									
473	加瀬下平坂									
476	加瀬古山通路									
478	桜庭通路									
479	飛前通路									
480	小酒内通路									
481	山崎通路									
483	松崎台通路									
486	立木山通路									
490	猪通路									
491	猪山通路									
493	筑前通路									
494	筑後通路									
497	万代 1 号道路									
498	力ノ山通路									
499	猪留背子通路									
500	猪留前通路									
501	街路通路									
502	松木通路									
503	加瀬八幡通路									
506	加瀬八幡通路									
507	鶴芋通路									
508	七重り通路									
511	多摩寺通路									
解説あり。未干渉地名										農場107

第19表 近世遺跡一覧（塚ほか）

遺跡名	遺跡名	時代・時期			遺跡			備考	文献
		1c	1s	1k	地形	南北地図	東西地図	南北	東西
001	大神塚							方形	
010	鬼塚							○	方形, 瓦質圓
022	鬼塚古墳								円形, 陶質圓(1m)
045	天王帽古墳							円形	
046	立山塚							円形	
070-001	第一見立貢御塚！サ横								
074	堆積物記録							圓底	
076	志懸神社跡							李, 石持	
093	蛇二塚							円形	
109	鶴有塚							方形	
138	「~鶴有跡塚」								
202	千歳川塚							方形	
212	西河内塚							方形	
223	大手塚							方形	
230	コシキ塚								
343	六佐塚群							方形, 円形	
341-001	六佐塚群1号塚							方形	
341-002	六佐塚群2号塚							円形	
341	天工台塚							円形	
254	小池塚			○	○	○			
268	小谷古墳							○	円頂, 志野系塗器, 青貝瓦
270	中台塚								円頂, 住居内に人骨迎玉室
283	大手不倒塚								方形
291	坂橋須彌塚								3分の1くらい傾かれていて
324	二の貴塚								
326	小舟井塚古墳								
336-001	船形古墳1号塚								圓底, 一文字石絵
336-004	船形古墳2号塚								圓底, 一文字石絵
350-001	下仁上塚古墳1号塚								圓底, 一文字石絵
350-002	下仁上塚古墳2号塚								圓底, 一文字石絵
350-003	下仁上塚古墳3号塚								圓底, 一文字石絵
360	マツタ塚								
387	丸庭瓦塚								
387-001	丸庭瓦塚1号塚								二段
387-002	丸庭瓦塚2号塚								二段
387-003	丸庭瓦塚3号塚								二段
387-004	丸庭瓦塚4号塚								二段
387-005	丸庭瓦塚5号塚								二段
387-006	丸庭瓦塚6号塚								二段
387-021	丸庭瓦塚7号塚								二段
387-008	丸庭瓦塚8号塚								二段
387-009	丸庭瓦塚9号塚								二段
387-010	丸庭瓦塚10号塚								二段
387-011	丸庭瓦塚11号塚								二段
387-012	丸庭瓦塚12号塚								二段
401	二本松塚								
411	小山塚								
415	丁子前坂塚								
416-001	兵庫舟入坂群1号塚								「島のみ塚, その他の洋, 稲屋?」
496	八幡塚古墳								大日伏坂塚, 下忍五輪塔
465-001	戸崎・舟入坂第2号塚								円墳, 在此界隈入坂塚主塚あり
471	原久坂								円墳, 「山王人跡現」額を祀る
495-017	船山根野塚第17号塚								円形
505	秋久坂								楕円あり。安山岩製耳邊築
510-001	田舎・赤坂古墳第1号塚	○							円形, 宮方後門塚(田舎大神塚内側), 菊池城
510-003	田舎・赤坂古墳第3号塚	○							円墳, 一部復元,
510-014	田舎・赤坂古墳第14号塚								方型
512	スキ入塚								

第20表 近世遺跡一覧（シシ土手）

遺跡名	遺跡名	時代・時期			遺跡			備考	文献
		1c	1s	1k	地形	南北地図	東西地図	南北	東西
007	集葉山シシ土手	○						最高81cm	
009	大高馬シシ土手	○						最高170cm	
061	馬止シシ土手	○						最高170cm	
099	向シシ土手	○						最高170cm	
118	鶴田・西ノ入シシ土手	○						最高800cm	
188	ニツ木シシ土手	○						最高90cm, 幅10m	
220	人様シシ土手	○	○						

第21表 近世遺跡一覧（寺院・寺院跡）

番號番号	遺跡名	時代・時期			遺物					備考	文献
		17c	18c	19c	鐵器	陶器	瓦器	漆器	骨器	上器	
388	梵天寺境内遺跡	○	○	○	○	○	○	○	○	○	梵天寺伝説、移築・小金鏡化あり
395	真珠院跡	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
469	松子寺境内	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
477	寂光院境内	○	○	○	○	○	○	○	○	○	寂光院化粧、中世瓦、漆器集中散布

第22表 近世遺跡一覧（居館跡・土塁・堀）

番號番号	遺跡名	時代・時期			遺物					備考	文献
		17c	18c	19c	鐵器	角鉄・鐵器	陶器	瓦器	漆器	上器	
944	六角城跡	○	○	○							本丸可推定宝物、各所に土壇あり
958	西入門土塁										長さ5.5m、シミ土手？
156	長崎守護官邸跡										長さ4.6m
170	長崎守護官邸跡										長さ4.6m
179	神田城										跡面V字形、跡部長評
214	神ノ内土塁										跡幅34.7m、高さ1.0m、幅1.0m
246	田代城										
267	八重垣城北堀跡	○									
333	八重垣城北堀跡	○	○	○	○	○	○	○	○	○	本丸、浜辺櫓跡、竹柵等に土堤、壁、モチ押す 傳承跡跡と元甚少む。○山川御家小回戻。
342	御者宿跡	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
345	川崎官署跡	○	○	○	○	○	○	○	○	○	御者宿、土塁有り
356	田中石城跡跡跡	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
368	新市川傳家遺跡跡										
480	松子寺宮跡跡	○	○	○	○	○	○	○	○	○	本丸廻指定宝物
494	戸輪城跡	○	○	○	○	○	○	○	○	○	上器、塙を伴う塙場
572	千住砦跡										古墳に付没する土堤
699	久人山土塁										土塁あり
890	尾瀬跡	○	○	○	○	○	○	○	○	○	上器、塙を伴う塙場
934	柳家屋敷跡										

第4部 遺跡一覧表

凡　　例

- 1) 一覧表は、遺跡番号、遺跡名、所在地、種別、現況、時代・時期、備考、旧県番号、旧遺跡名、大正大No.を記した。
- 2) 所在地の地番が複数に亘る場合は、代表する地番外とした。
- 3) 種別のうち発掘調査などにより住居跡などが確認されている場合は集落跡とした。
- 4) 備考には古墳・塚の形状と規模、遺跡の別称、発掘調査歴、特記事項などを記載した。古墳群は墳形・基数を記し、前方後円墳は方円、帆立貝形古墳は帆立、前方後方墳は方方、円墳は円、方墳は方と略記した。遺跡の遺存状況は、半壊あるいは湮滅の場合のみ記述することとした。
- 5) 旧県番号は『茨城県遺跡地図』(1990)の通し番号に対応する。
- 6) 遺跡名は小字を基本とし、名称変更した場合は旧遺跡名を記載した。
- 7) 大正大No.は『鶴台考古』4(1985)の遺跡No.に対応する。

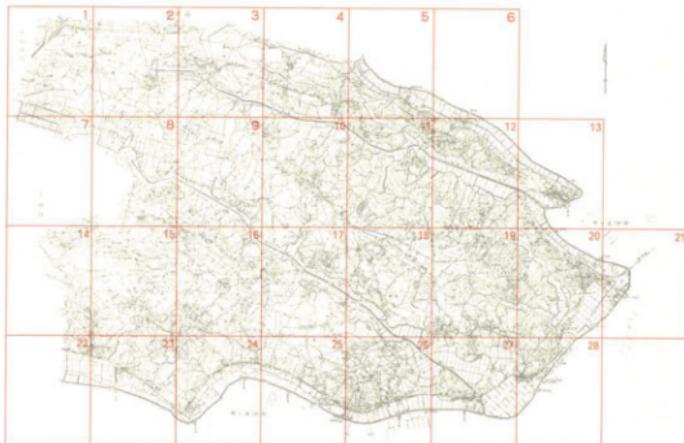
地名	地名	特征	地况	特征		地名	特征	地名	特征	地名	特征
				水田	旱田						
443-007 银海子	银海子村	高水田，有小水田，旱地	水田	旱地	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地
442-009 999	999村	高水田，有小水田，旱地	水田	旱地	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地
443-010 999村	999村	高水田，有小水田，旱地	水田	旱地	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地
442-011 999村	999村	高水田，有小水田，旱地	水田	旱地	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地
443-012 999村	999村	高水田，有小水田，旱地	水田	旱地	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地
444 银井	银井村	高水田，有小水田，旱地	水田	旱地	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地
445											
446	446村										
447	447村										
448	448村										
449	449村										
450	450村										
451	451村										
452	452村										
453	453村										
454 小水田	小水田村	高水田，有小水田，旱地	水田	旱地	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地
455	455村										
456	456村										
457	457村										
458	458村										
459	459村										
460 长字村	长字村	高水田，有小水田，旱地	水田	旱地	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地
461 长字村	长字村	高水田，有小水田，旱地	水田	旱地	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地
462 长字村	长字村	高水田，有小水田，旱地	水田	旱地	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地
463 长字村	长字村	高水田，有小水田，旱地	水田	旱地	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地
464	464村										
465	465村										
466-001 466村	466村	高水田，有小水田，旱地	水田	旱地	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地
467-002 467村	467村	高水田，有小水田，旱地	水田	旱地	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地
468-003 468村	468村	高水田，有小水田，旱地	水田	旱地	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地
469	469村										
470	470村										
471	471村										
472	472村										
473	473村										
474	474村										
475	475村										
476	476村										
477	477村										
478	478村										
479	479村										
480	480村										
481 小水田村	小水田村	高水田，有小水田，旱地	水田	旱地	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地
482											
483-001 483村	483村	高水田，有小水田，旱地	水田	旱地	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地
483-002 483村	483村	高水田，有小水田，旱地	水田	旱地	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地
483-003 483村	483村	高水田，有小水田，旱地	水田	旱地	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地	高水田	旱地
484	484村										
485	485村										
486	486村										

第5部 遺跡地図

凡　例

- 1) 1:10000都市計画図を使用した。
- 2) 地図は下図に示した範囲で作成した。1マスの縦は2.25km、横1.7kmである。
- 3) 地図に示した遺跡番号は第5部の遺跡一覧表に対応する。
- 4) 地図で用いた記号は下記の通りである。

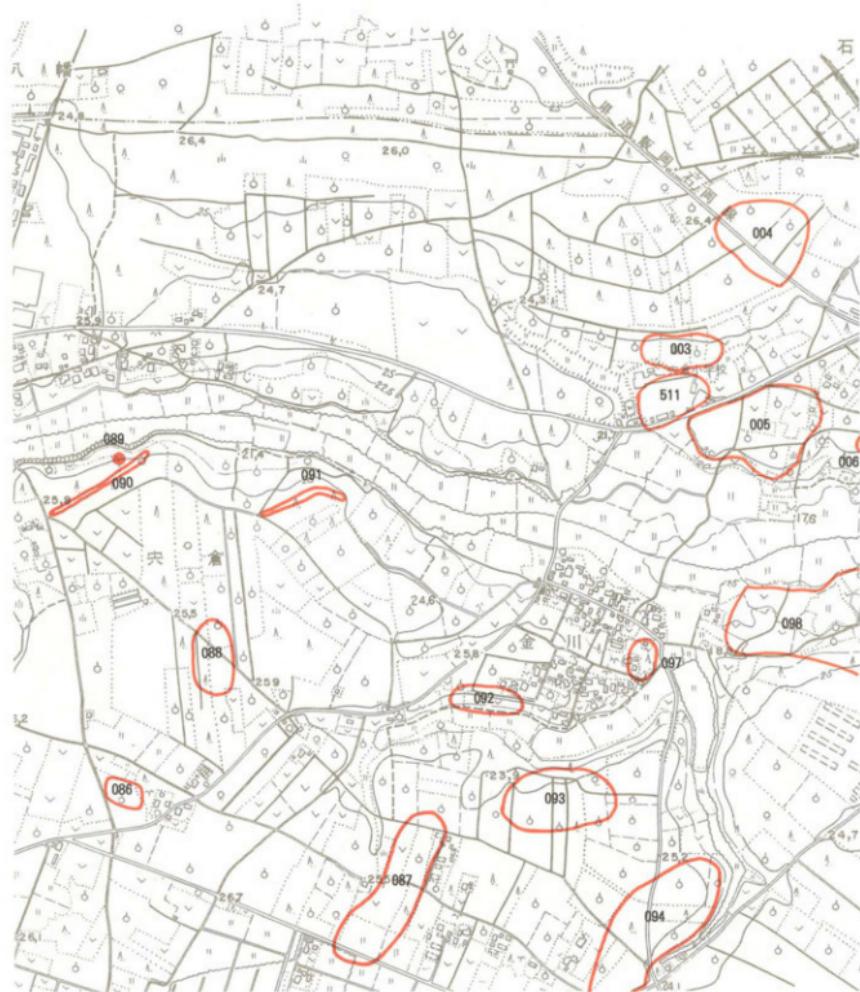
○	集落跡・包蔵地(範囲のみ)	□	横穴
△	貝塚	△	塚
●	前方後円墳・帆立貝形古墳	▲	窯跡・製鉄跡など(生産遺跡)
■	前方後方墳	□	城館跡
●	円墳	□	居館跡・屋敷跡
■	方墳	正	寺院跡

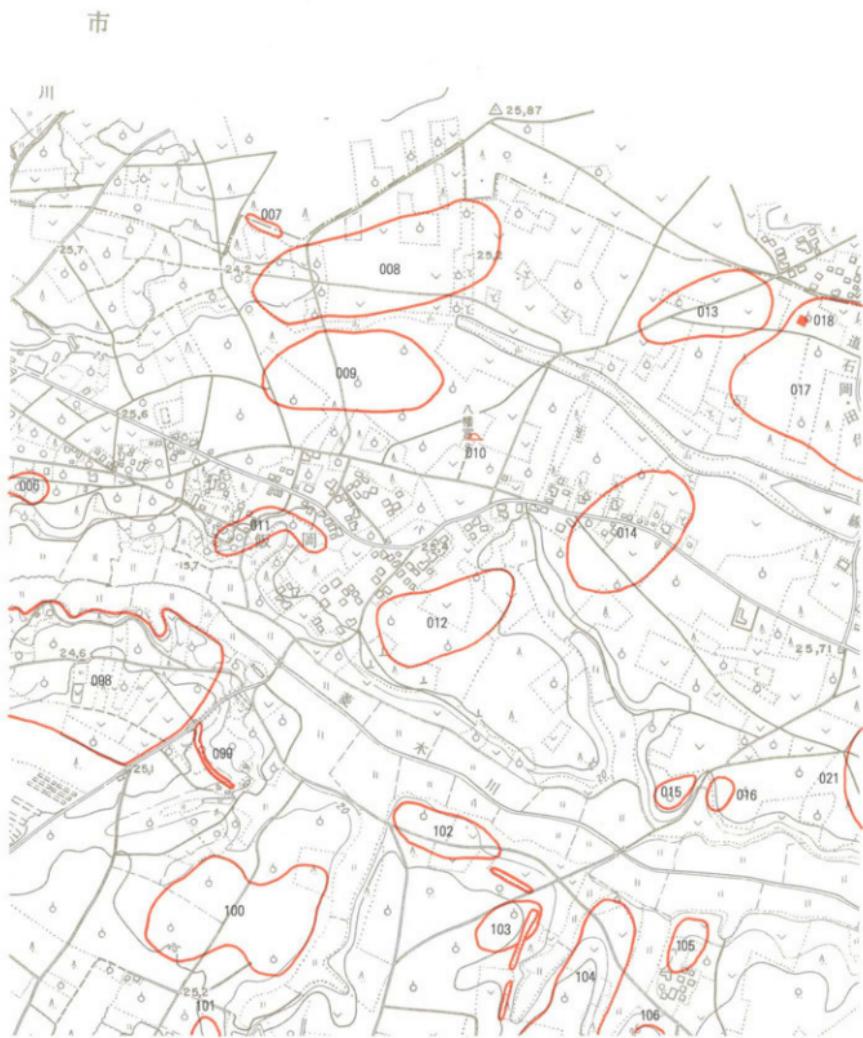


遺跡地図範囲模式図



石 岡













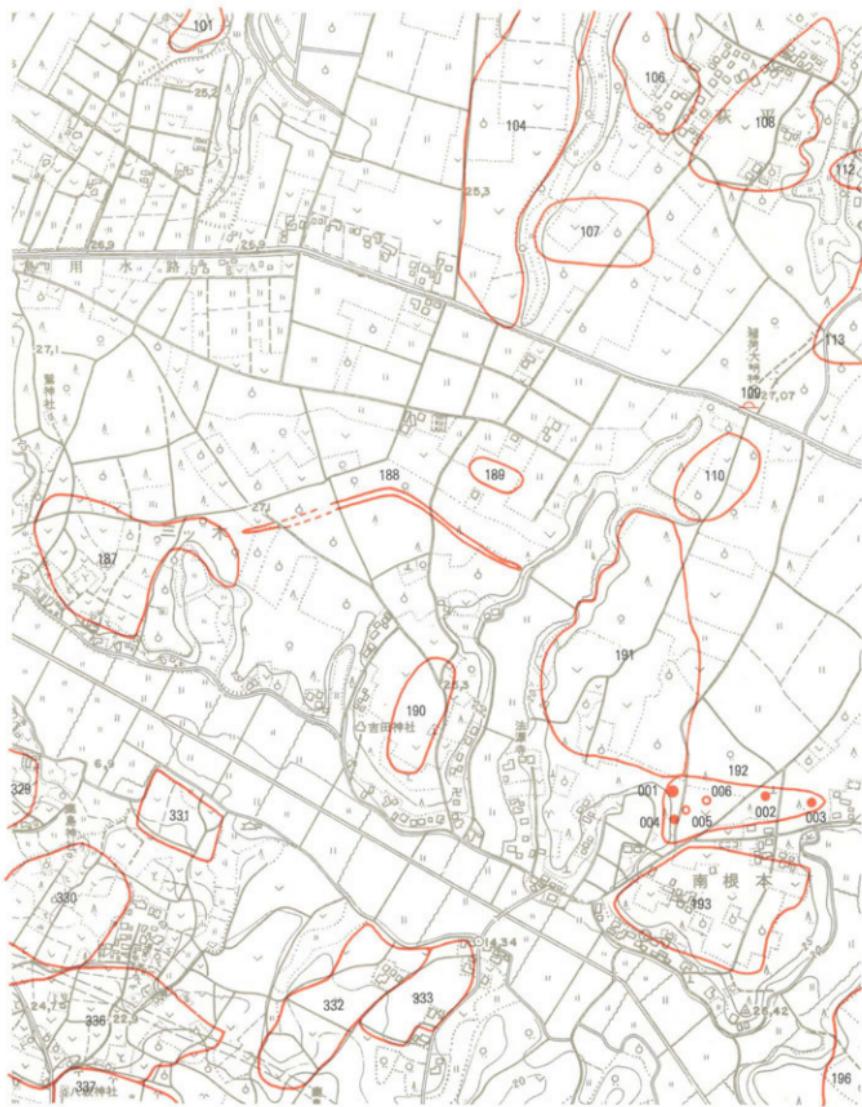
土

浦

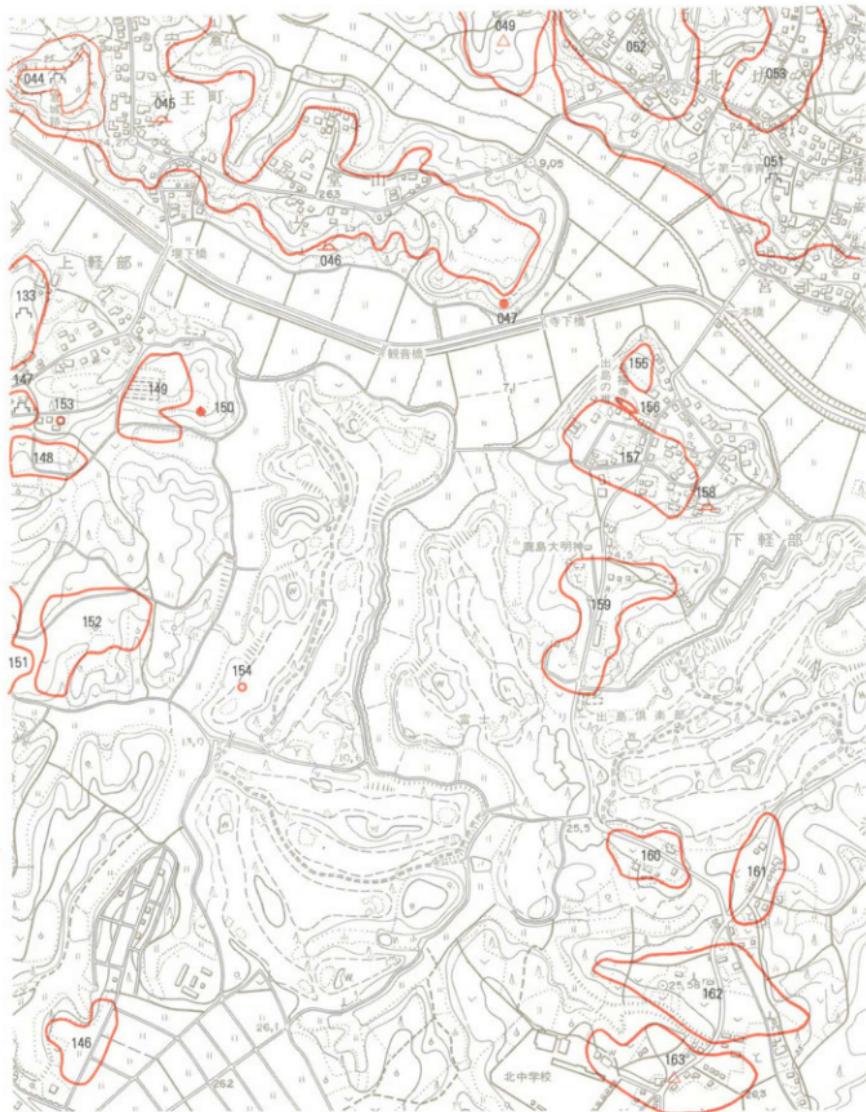
市

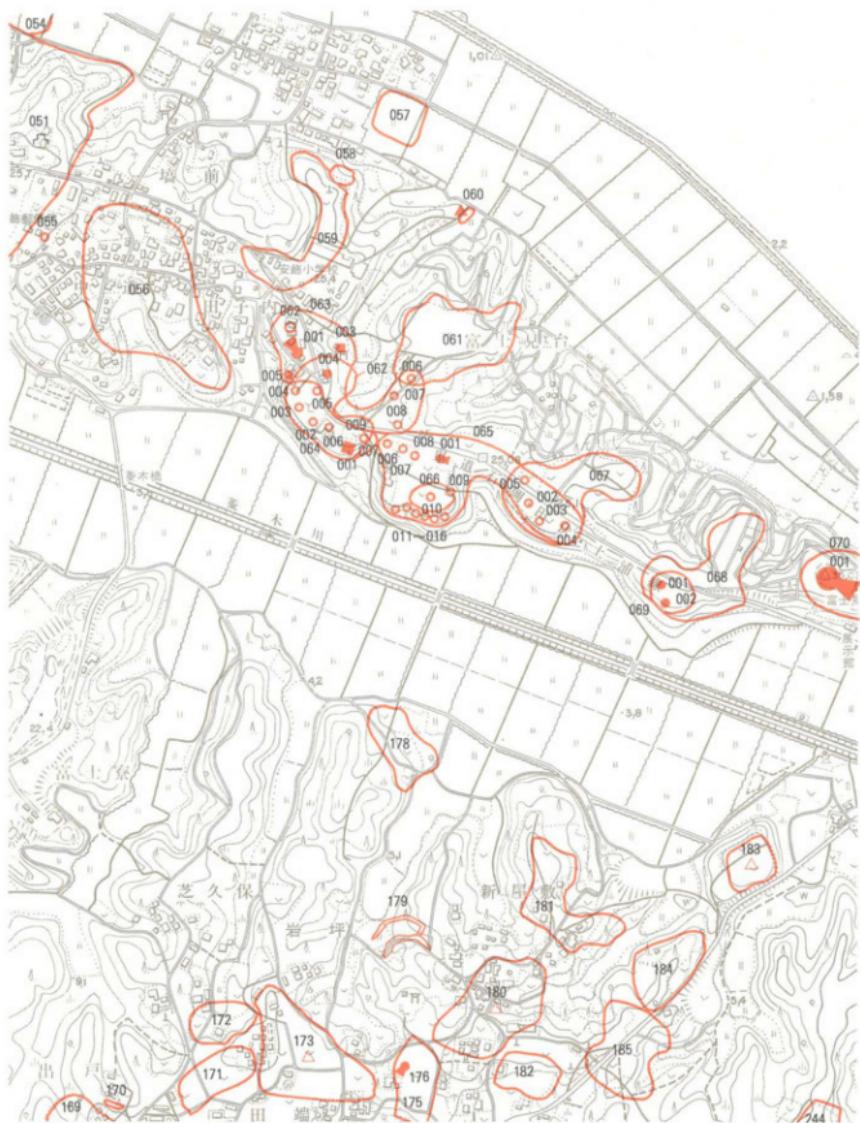




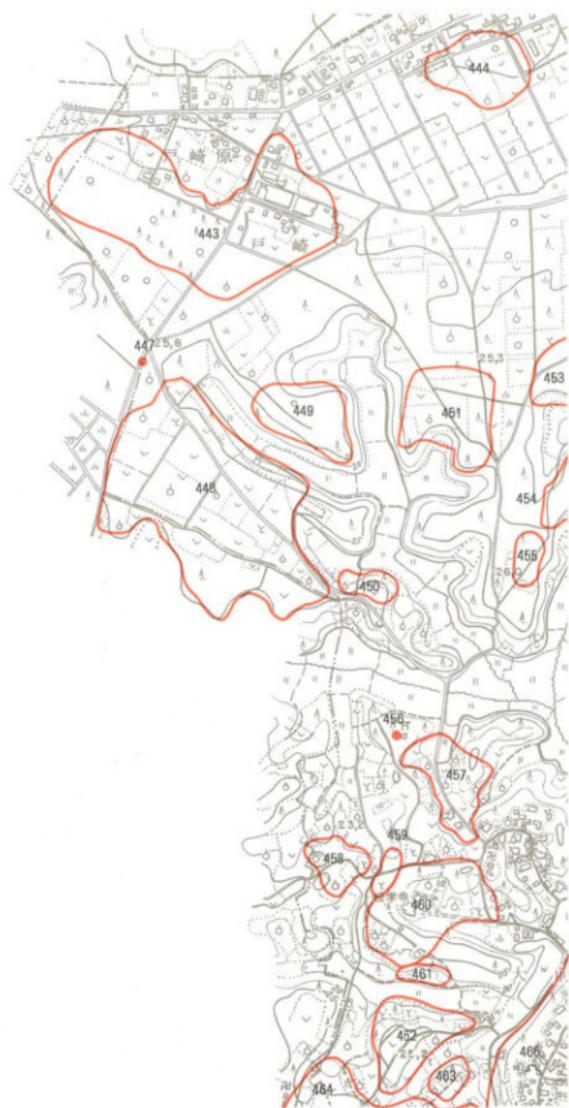


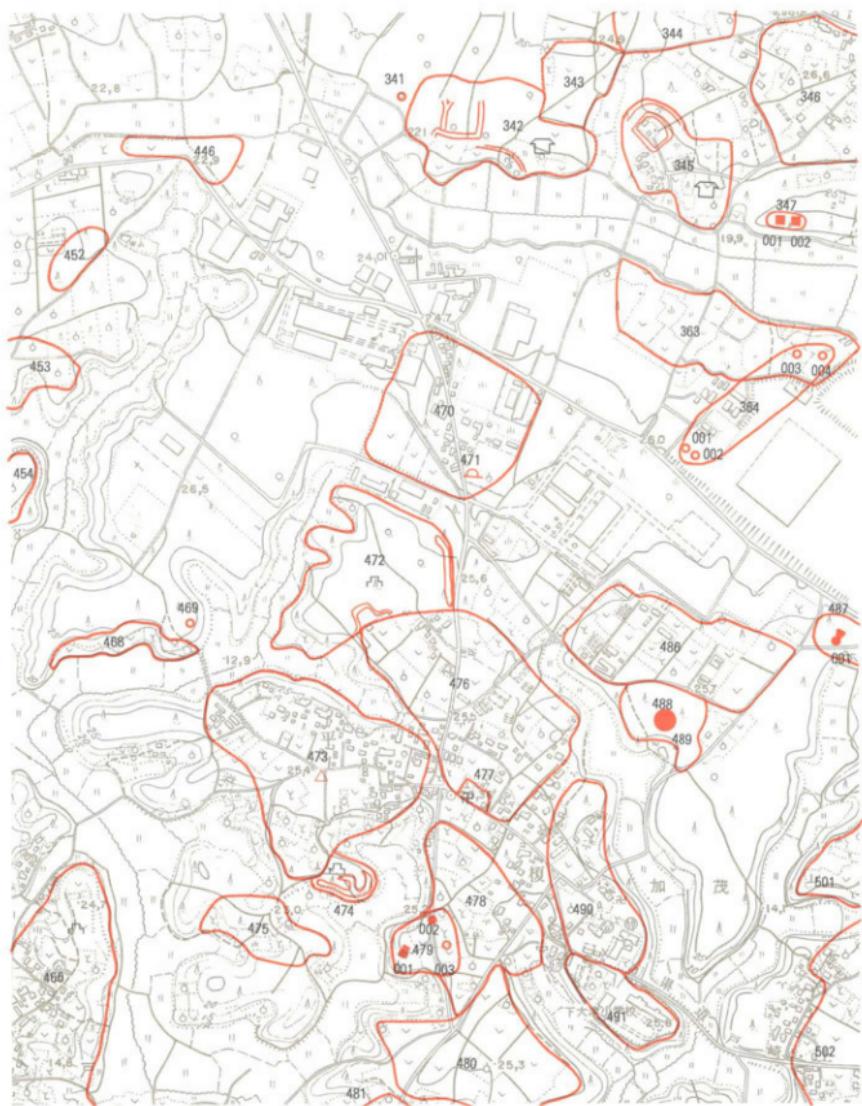






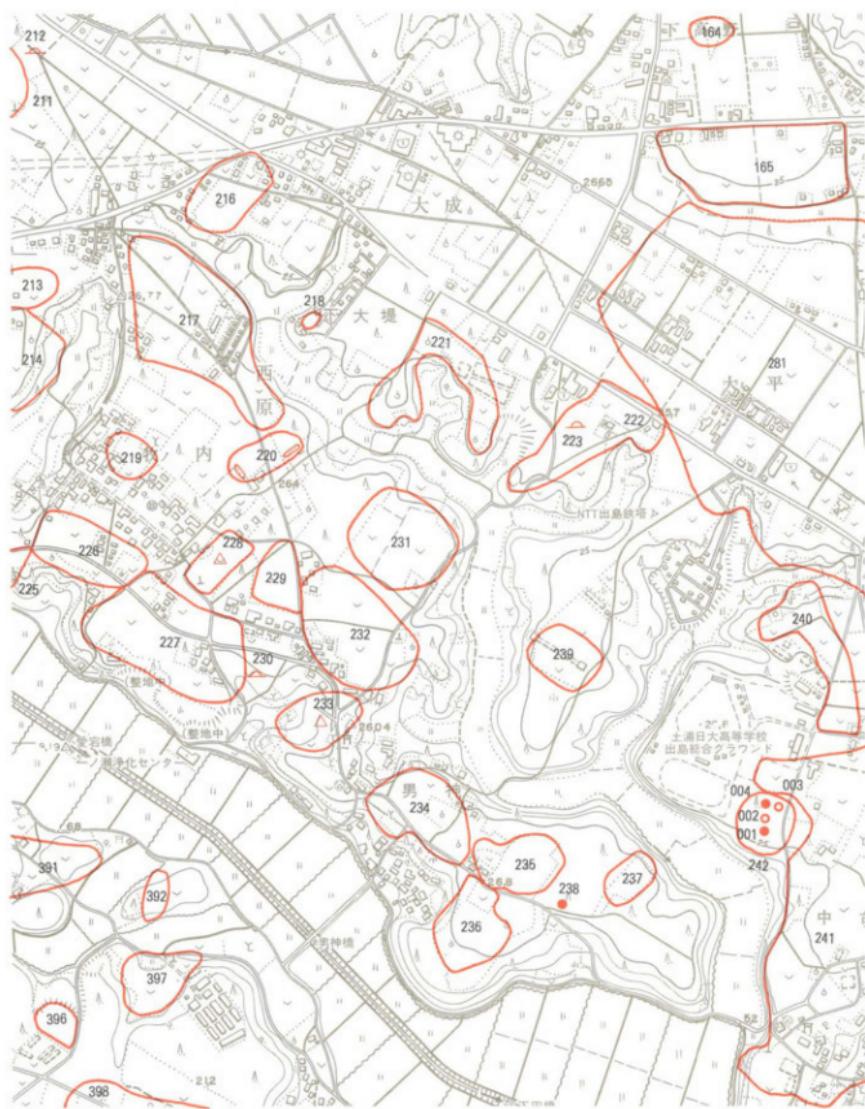


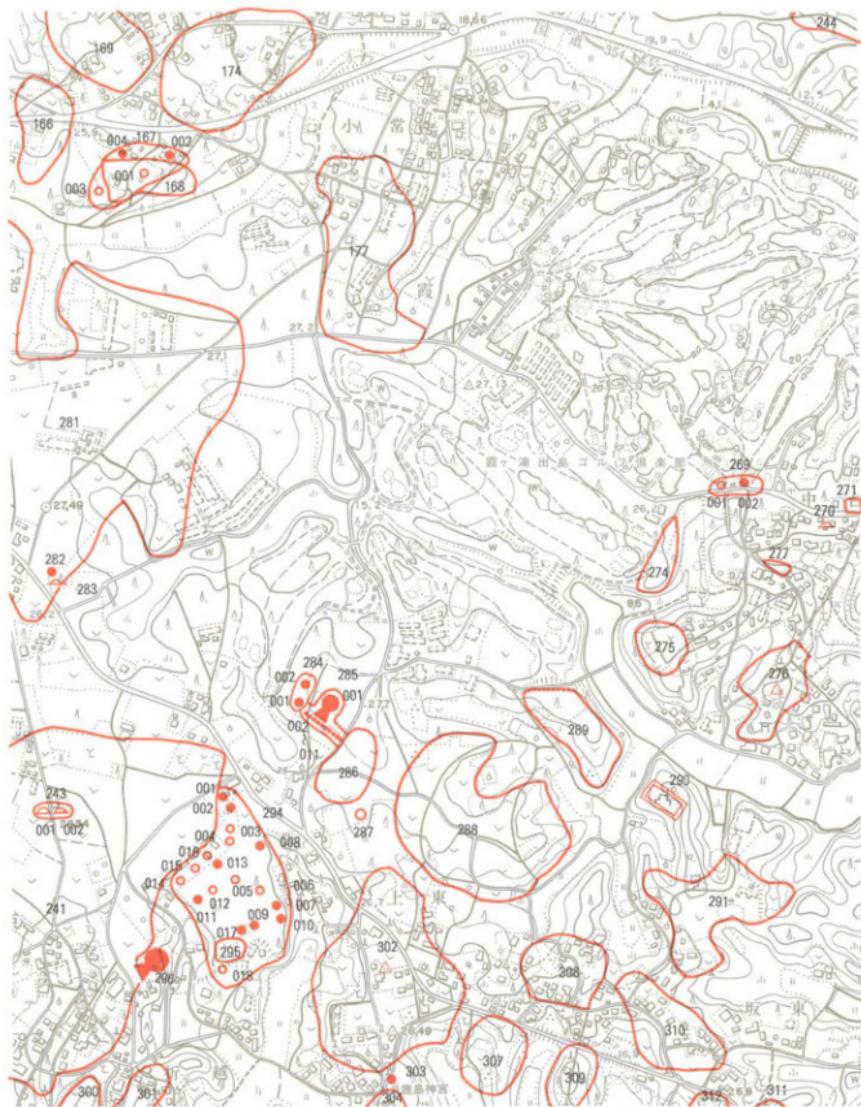


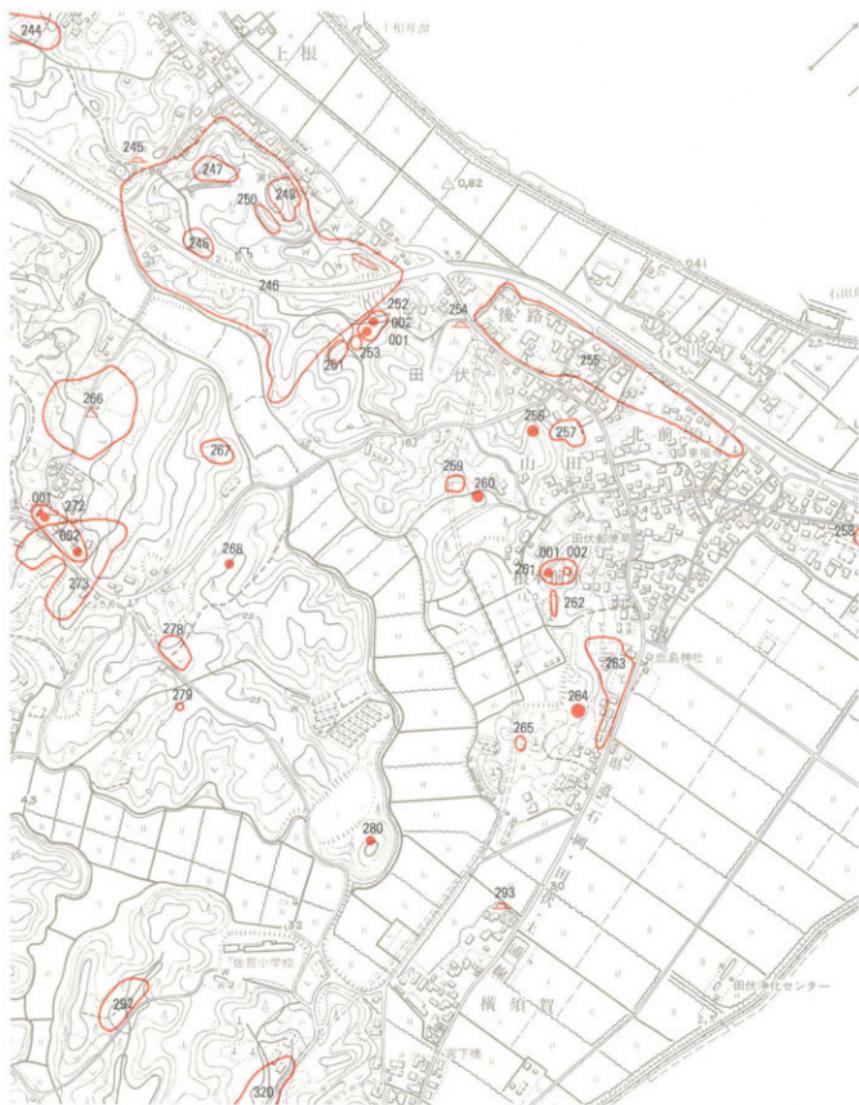












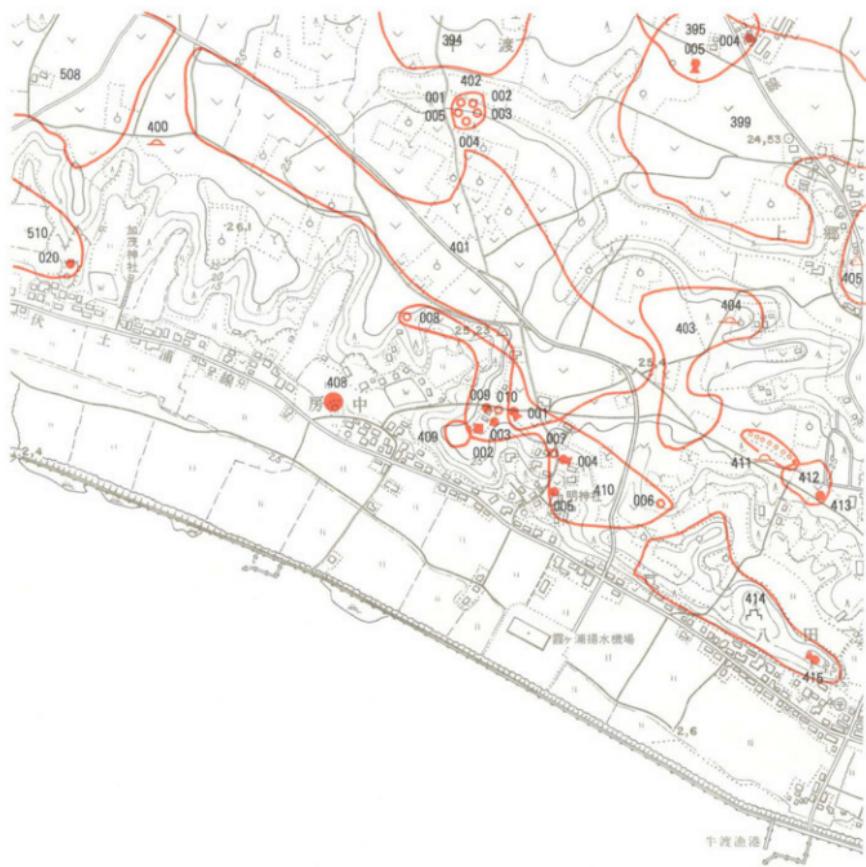


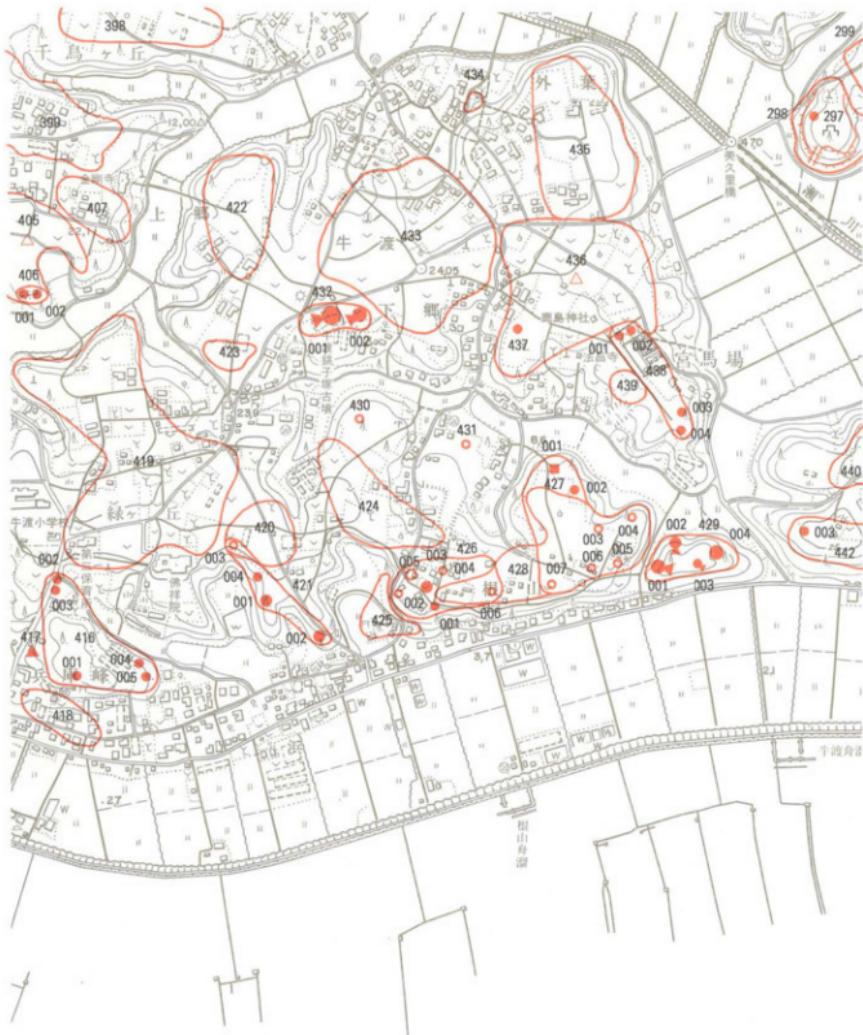




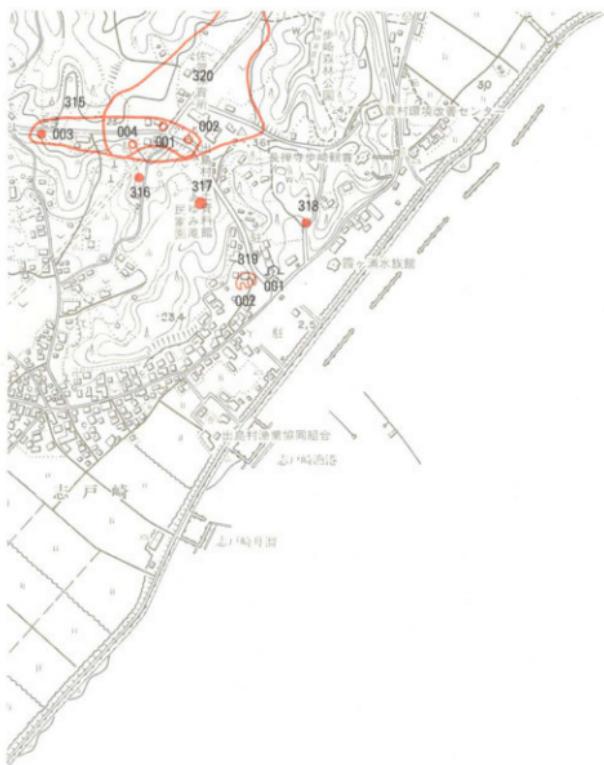


霞ヶ浦（西浦）









霞ヶ浦町調査組織

霞ヶ浦町教育委員会

平成9年度

教育長
教育次長
生涯学習課長
社会教育係長
担当者（主事）

藤岡
斎殿
飯田
小松
宮本

豊積
穂
隆
明
彰

長
委員
員
委員
委員

博三
真邦
業

敬
信

文化財保護審議委員

塙島
大福
久保
宮又

塙島
塙
島
宮
又

長
委員
員
委員
委員

霞ヶ浦町遺跡調査会

平成10年度

会長
副会長
理事
理事
理事
理事
理事
理事
理事
理事
理事
幹事
幹事
幹事

昭博夫
和英
吉行
光貞
静穂
忠俊
吉行
光貞
静良
洋
隆

雄邦
三行
真隆
助雄
男子
男積
隆則
男彰
司

吉行
光貞
静穂
忠俊
吉行
光貞
静良
洋
隆

平成10年度

教育長
教育次長
生涯学習課長
生涯学習課参考事
担当者（主幹）
担当者（主事）

藤岡
斎殿
飯田
初井
宮本

豊積
穂
隆
則
男
彰

長
委員
員
委員
委員

博三
真邦
業

敬
信

平成11年度

教育長
教育次長
生涯学習課長
社会教育係長
担当者（主事）

小松崎
坂田
塙
大福
久保

敬
良
洋
昭哉
二
彰

長
委員
員
委員
委員

博三
真邦
業

敬
信

平成12年度

教育長
教育次長
生涯学習課長
生涯教育係長
担当者（主幹）

小松崎
坂田
塙
大福
久保

敬
良
洋
昭哉
一
彦

長
委員
員
委員
委員

博三
真男
俊

敬
靜
信

平成11年度

会長
副会長

昭博夫
和英
吉行
光貞
静穂
忠俊
吉行
光貞
静良
洋
隆

雄邦
三行
真隆
助雄
男子
男積
隆則
男彰
司

吉行
光貞
静穂
忠俊
吉行
光貞
静良
洋
隆

調査及び整理参加者一覧（1998～2000年度）

川西 宏幸	常木 晃	三宅 裕	桃崎 祐輔	(筑波大学歴史・人類学系教官)	
日高 慎	(日本学術振興会特別研究員)	津本 英利	川口 武彦	松本 建速	
福田 正宏	衣笠 啓史	赤坂 亨	藤井 義範	斎藤 瑞穂	(筑波大学大学院)
渥美 賢吾	石原 玲子	内山 大介	高木 康行	高橋 洋平	知念 正彦
馬籠 亮道	吉木 直哉	安沢 鉄也	池田 奈智	及川 洋	大島 泰文
大森 純	岡崎 健一	絹方 雪絵	小野寿美子	川島 尚宗	栗山 望
小松原宏美	酒井 太郎	渋谷 智子	清野 陽一	辻村 春香	殿岡 理恵
長井 友美	平出 美生	芦田 忠明	阿部 功寛	伊藤 千洋	岡田 圭
川添菜津子	木原 徳子	清水 研志	竹田佳也子	津田 慶弘	中尾麻由実
花野 横史	林 真弓	原木 夕子	増田 洋基	山本 元樹	柏田 五月
鈴木 陽子	高畠 裕美	谷山 杏子	近井 悠子	水口 重政	宮下 聰史
(筑波大学学群生)					
有山 優子	安西 真理	井上沙知子	大口恵美子	恩田 茜	小濱 純乃
小林久美子	小林 智子	酒井 あや	坂上なつ子	重信由美子	末永江梨子
鈴木 純子	田中 敦子	田中美穂子	藤井 真紀	森廣真由美	(聖徳大学学生)
竹中 哲朗	木崎 悠	的野 善行	(茨城大学大学院)		
川上みね子	須川富貴子	永井 三郎	三浦 貴子	青山 桂子	岸本 和樹
小刀祢 文	小林 桃子	柴田ユリコ	十文字 健	山本 吉	(茨城大学学生)
作山 智彦	(専修大学卒業生)				
阿部 有花	(立正大学大学院)				
岩淵 瞳	西川 善之	(早稲田大学学生)			

報告書抄録

フリガナ	カスミガウラマチイセキブンブチヨウサホウコクシヨ					
書名	霞ヶ浦町遺跡分布調査報告書					
副書名	遺跡地図編					
卷次						
シリーズ名						
シリーズ番号						
編著者名	川西安幸 桃崎祐輔 日高慎 川口武彦 赤坂亨 斎藤瑞穂 清野陽一					
編集機関	霞ヶ浦町教育委員会 筑波大学考古学研究室					
所在地	〒300-0134 茨城県新治郡霞ヶ浦町深谷3719-1 〒305-8571 茨城県つくば市大平台1-1-1					
発行年月日	西暦2001年3月31日					

コード	調査期間	主な時代と遺跡数
市町村		
461	第1回 19980702~19980711 第2回 19981126~19981205 第3回 19990306~19990315 第4回 19990701~19990710 第5回 19991126~19991205 第6回 20000108~20000117 第7回 20000309~20000318	先土器(30) 縄文(307) 弥生(133) 古墳(221) 奈良・平安(264) 中世(137) 近世(350)
		合計 512遺跡

霞ヶ浦町遺跡分布調査報告書
— 遺跡地図編 —

2001年3月31日 発行

編集 筑波大学考古学研究室
発行 霞ヶ浦町教育委員会・筑波大学考古学研究室
〒300-0134 茨城県新治郡霞ヶ浦町深谷3719-1
電話 0298-97-0511
〒305-8571 茨城県つくば市天七台1-1-1
電話 0298-53-6404
印刷 株式会社 石崎印刷
〒300-0064 茨城県土浦市東若松3975-5
電話 0298-23-0521

石岡市

千代田町

一区

上浦市

霞ヶ浦(西浦)

霞ヶ浦(西浦)

